



吾輩は猫である

夏目漱石



青空文庫



青空
文庫

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というもののは見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速度で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つてみると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤ、ニヤと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとうまくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなければなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだものから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱

暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の瘡が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいなながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入つてしまつた。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食つた後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂ら

す。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものには実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうである。彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますと最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得

ないようになつた。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言つておらるる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活するには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鯨の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましてゐる。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は教師の家に住んでゐるだけ、こんな事に関する両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がかどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよろう。

我儘わがままで思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元來この主人は何と云つて人に勝すぐれて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書ていしよをしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文を聞いたり、時によると弓に凝こつたり、謡うたいを習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所こゝろで後架先生こうかせんせいと渾名あだなをつけられているにも関せず一向平氣なもので、やはりこれは平の宗盛むねもりにて候さうろうを繰返している。みんながそれから一月ばかり後のちのある月の月給日に、大きな包みを提さげてあわただしく歸つて来た。何を買つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から自分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやつてい

る人が来た時に下しものような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自ら筆をとつて見ると今更いまさらのようにむずかしく感ずる」これは主人の述懐じゆつわいである。なるほど詐いつわりのない処だ。彼の友は金縁めがねじの眼鏡めがね越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画えがかける訳のものではない。昔むかし以太利イタリの大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰せいしんあり。地に露華ろうかあり。飛ぶに

禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚え失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。

もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催うしている。身内みうちの筋肉はむずむずする。最早もはや一分も猶ゆうよ予が出来ぬ仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分ぞんぶんのして、首を低く押し出してあゝあと大だいなる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊こわしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足たそろうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻かき交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴どなつた。この主人は人を罵ののるときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒せんぼうした人の気も知らないで、無暗むやみに馬鹿野郎呼よわりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背せなか中へ乗る時に少しは好い顔でもするならばこの漫罵まんばも甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷ひどい。元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘いじめてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

我儘わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちやえんがある。広くはないが瀟洒さうぱうとした心持ち好く日の当あたる所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折

などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であったが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざるごとく、また心付くも無頓着なるごとく、大きな躰をして長々と体を横へて眠っている。他の庭内に忍び入るたるものがかくまで平気に睡られるものと、吾輩は窃かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出すように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえは一体何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠っているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平気を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全てえどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の

家うちにいるのだ」「どうせそんな事だろうと思った。いやに瘠やせてるじゃねえか」と大王だけに
 気焰きえんを吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその膏切あぶらきつ
 て肥満ひまんしているところを見ると御馳走ごちそうを食つてゐるらしい、豊かに暮くしているらしい。吾輩は
 「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己おれあ車屋くるまやの黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。
 車屋くるまやの黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちつとも
 教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義どうめいけい遠主義の的まとになつてゐる奴だ。吾輩は彼の名
 を聞いて少々尻しつこそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮けいぶの念も生じたのである。
 吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試ためしてみようと思つて左さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極きまつていらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだ
 ぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強だいぶそうだ。車屋にゐると御馳走ごちそうが食くえると見えるね」

「何なにおれなんぞ、どこの国へ行つたつて食くい物ものに不自由ふじゆうはしねえつもりだ。御めえなんか
 も茶晶ちやばたけばかりぐるぐる廻まわつていねえで、ちつと己おれの後あとへくつ付ついて来て見ねえ。一と月とた
 たねえうちに見違まえるように太れるぜ」

「追つてそう願ねがう事にしよう。しかし家うちは教師の方が車屋より大きいのに住んでゐるように
 思おもわれる」

「筥へらぼう棒ぼうめ、うちなんかいくら大きおほくたつて腹はらの足たしになるもんか」

彼は大おほに肝癪かんしゃくに障さわつた様子で、寒竹かんちくをそいだような耳みみをしきりとぴく付つかせてあららかに

立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶晶の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下のごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思つてまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つてゐる長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元來黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて、彼の気焰を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近付になつてから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いつその事に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしに呐喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとつたらう」とは得意気なる彼の答であつた。彼はなのお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちつてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這

い込んだら御めえ、大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ、「ふん」と感心して
 見せる。「いたち、つてけども何鼠の少し大きいくれえのものだ。こん畜生、つて気で追っかけ
 てとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやったね」と喝采してやる。「ところが
 御めえ、いぎつてえ段になると奴め最後つ尻をこきやがった。臭えの臭くねえの、つてそれか
 らつてえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至つてあたかも去年の臭氣を今
 なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがす
 る。ちつと景氣を付けてやろうと思つて「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だろう。君は
 あまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」
 黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は喟然として大息
 していう。「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間ほどふて
 え奴は世の中にいねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあが
 る。交番じゃ誰が捕つたか分らねえからそのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。うちの亭
 主なんか己の御蔭でもう壹円五十錢くらい儲けていやがる癖に、碌なものを食わせた事もあ
 りやしねえ。おい人間でものあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟はわ
 かると思えてすこぶる怒つた容子で背中の毛を逆立てている。吾輩は少々氣味が悪くなつた
 から善い加減にその場を胡魔化して家へ帰つた。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決
 心した。しかし黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獮つてあるく事もしなかつた。御馳走を
 食うよりも寝ていた方が氣楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見え
 る。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩画において望のない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云うがなるほど通人らしい風采をしている。こう云う質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をするべく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あの人妻君は芸者だそうだが、羨ましい事である。元來放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので到底卒業する氣づかいはない。しかるにも関せず、自分だけは通人だと思つて済んでいる。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がましであると同一ように、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論はちよつと首肯しかねる。また芸者の妻君を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく自知の明あるにも関せずその自惚心はなかなか抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いている。

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けてくれた夢を見た。さて額になつたとこを見ると我ながら

急に上手になつた。非常に嬉しい。これなら立派なものだと独りで眺め暮らしていると、夜が明けて眼が覚めてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつてしまつた。主人は夢の裡まで水彩画の未練を背負つてあるいと見える。これでは水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切つた。主人は平気な顔をして「君の忠告に従つて写生を力めてゐるが、なるほど写生をすると今まで気のつかかなかつた物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔時から写生を主張した結果今日のように発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないうで、またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を搔く。「何が」と主人はまだ諷られた事に気がつかない。「何が君のしきりに感服してゐるアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じようとは思わなかつたハハハハ」と大喜悅の体である。吾輩は橡側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる事が記さるであらうかと予め想像せざるを得なかつた。この美学者はこんな好加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の樂にしてゐる男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線にいかなる響を伝えたかを毫も顧慮せざるもののごとく得意になつて下のような事を饒舌つた。「いや時々冗談を言うとなが真に受けるので大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。せんだつてある学生にニコラス・ニツクルペーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文

で出版させたと言ったら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておつた。それからまだ面白い話がある。せんだつて或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーンの話はなが出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉はくびである。ことに女主人公が死ぬところは鬼氣人ききを襲うようだと評したら、僕の向うに坐つてゐる知らんと云つた事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事を知つた。神経胃弱性の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな出鱈目でたらめをいつてもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くあざむのは差支さしつかえない、ただ化の皮かわがあらわれた時は困るじやないかと感じたものごとくである。美学者は少しも動じない。「なにその時ときや別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云つてけら笑つてゐる。この美学者は金縁の眼鏡は掛けてゐるがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙つて日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしてゐる。美学者はそれだから画えをかいても駄目だという目付で「しかし冗談じやうだんは冗談だが画というものは実際むずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠せついんなどに這入はいつて雨の漏る壁を余念なく眺めてゐると、なかなかうまい模様画が自然に出来てゐるぜ。君注意して写生して見給えきつと面白いものが出来るから」「また欺すだまのだらう」「いえこれだけはたしかだよ。実際奇警な語じやないか、ダ・ヴィンチでもいいそんな事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬよ

うだ。

車屋の黒はその後跛ごびつこになつた。彼の光沢ある毛は漸々だんだん色が褪さめて抜けて来る。吾輩が琥珀こはくよりも美しいと評した彼の眼には眼脂めやにが一杯たまつてゐる。ことに著るしく吾輩の注意を惹ひいたのは彼の元氣の消沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶園ちやえんで彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら「いたちの最後屁さいごつぺと肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうには懲々こりこりだ」といつた。赤松の間に二三段の紅こうを綴こつた紅葉こうようは昔むかしの夢のごとく散つてつくばいに近く代る代る花弁はなびらをこぼした紅白こうはくの山茶花さざんかも残りなく落ち尽した。三間半の南向の椽側せはに冬の日脚が早く傾かたいて木枯こがらしの吹かない日はほとんど稀まれになつてから吾輩の昼寝の時間も狭せまめられたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠こもる。人が来ると、教師が厭いやだ厭いやだという。水彩画も滅多にかかない。タカジヤスターゼも功能がないといつてやめてしまった。小供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬まりをついて、時々吾輩を尻尾しつぽでぶら下げる。

吾輩は御馳走ごちそうも食わないから別段肥ふとりもしないが、まずまず健康で跛びつこにもならずその日その日を暮している。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌きらいである。名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯しょうがいこの教師の家うちで無名の猫で終るつもりだ。

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が高く感ぜらるるのはい。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗つて、その真中に一の動物が蹲踞しているところをパステルで書いてある。主人は例の書斎でこの絵を、横から見たり、豎から眺めたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、豎から見たりしている。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来たりして見ている。早くやめてくれないと膝が揺れて噎呑でたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇しくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思いながら、寝ていた眼を上品に半ば開いて、落ちつき払つて見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちゃんと整つて出来ている。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じやない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る

事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断つておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもつて吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の糟から牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあろうが、はたから見てもあまり見つともいい者じゃない。いくら猫だつて、そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会に這入つて見るとなかなか複雑なもので十色という人間界の語はそのままここにも応用が出来るのである。目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。髻の張り具合から耳の立ち安排、尻尾の垂れ加減に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌い、粹無粹の数を悉くして千差万別と云つても差支えないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいつて、空ばかり見ているものだから、吾輩の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔しからある語だそうだがその通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発達したつてこればかりは駄目である。いわんや實際をいうと彼等が自ら信じているごとくえらくも何ともないのだからなおさらむずかしい。またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごと

きは、相互を残りなく解するというが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣のごとく書齋に吸い付いて、かつて外界に向つて口を開いた事がない。それで自分だけはすこぶる達観したような面構をして居るのはちよつとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく今年は征露の第二年目だから大方熊の画だろなどと氣の知れぬことをいつてすまして居るのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながらかく考えていると、やがて下女が第二の絵端書を持って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じや猫じやを躍つて居る。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側に書を読むや躍るや猫の春一日という俳句さえ認められてある。これは主人の旧門下生より来たので誰が見たつて一見して意味がわかるはずであるのに、迂濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻つて、はてな今年は猫の年かなと独言を言つた。吾輩がこれほど有名になつたのを未だ氣が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持つてくる。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らに乍恐縮かの猫へも宜しく御伝声奉願上候とある。いかに迂濶な主人でもこう明らかに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いなから吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違つて多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施こしたのも、全く吾輩の御蔭

だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の格子がチリン、チリン、チリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時のほかは出ない事に極めていたのだから、平気で、もとのごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれほど勇気も無い。いよいよ牡蠣の根性をあらわしている。しばらくすると下女が来て寒月さんがおいでになりましたという。この寒月という男はやはり主人の旧門下生であったそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になつてゐるといふ話である。この男がどういふ訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋つてゐる女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそうな、凄いやうな艶っぽいやうな文句ばかり並べては帰る。主人のやうなしなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話をしに来るのからして合点が行かぬが、あの牡蠣の主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から大に活動してゐるものですから、出よう出ようと思つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見たやうな事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引張る。この羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違つた方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が

一枚欠けている。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸を食いましてね」「何を食ったって?」「その、少し椎茸を食ったんで。椎茸の傘を前歯で噛み切ろうとしたらぼろりと齒が欠けましたよ」「椎茸で前歯がかけるなんざ、何だか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「ああその猫が例のですか、なかなか肥ってるじゃありませんか、それなら車屋の黒にだつて負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大に吾輩を賞める。「近頃大分大きくなったのさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピアノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものですね。二人は女で私わたしがその中へまじりましたが、自分でも善く弾ひけたと思ひました」「ふん、そしてその女わたしというのは何者かね」と主人は羨うらやましそうに問いかける。元来主人は平常枯木寒巖こぼくかんがんのような顔付はしているものの実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちよつと惚ほれる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱れんちやくには恋着れんちやくするという事が諷刺ふうしてき的に書いてあつたのを見て、これは真理だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男が何故牡蠣なげ的生涯を送っているかと云うのは吾輩猫などには到底とうてい分らない。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなくて臆病たぢな性質だからだとも云う。どつちにしたって明治の歴史に關係するほどな人物でもないのだから構わぬ。しかし寒月君の

女連れを羨まし気に尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であった。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方じゃありません」と余所余所しい返事をする。「ナール」と主人は引張ったが「ほど」を略して考えている。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか「どうも好い天気ですな、御閑ならごいっしょに散歩でもしましょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と促がして見る。主人は旅順の陥落より女連の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思い切つて立つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の紀念とかいう二十年来着古るした結城紬の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だつて、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてふらりと出る。ほかに着る物がないからか、有つても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われない。

兩人が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬して寒月君の食い切つた蒲鉾の残りを頂戴した。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偷んだ猫くらい資格は充分あると思う。車屋の黒などは固より眼中にない。蒲鉾の一切くらしい頂戴したつて人からかれこれ云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間食をするという癖は、何も吾等猫族に限つた事ではない。うちの御三などはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。御三ばかりじゃない現に上品な

仕付を受けつつあると細君から吹聴せられている小児ですらこの傾向がある。四五日前のことであったが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に對い合せて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う麵麩の幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちようど砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあった。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少らく兩人は睨み合っていたが、大きいのがまた匙をとって一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわが分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくった。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間に一杯一杯一杯と重なって、ついには兩人の皿には山盛の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も余つておらんようになったとき、主人が寝ぼけ眼を擦りながら寢室を出て来てせっかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優っているかも知れぬが、智慧はかえつて猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めてしまえばいいにと思つたが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、気の毒ながら御櫃の上から黙つて見物していた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩行いたものか、その晩遅く帰つて来て、翌日食卓に就いたのは九時頃であった。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまつて雑煮を食っている。代えては食い、代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも六切か七切食つて、最

後の一切れを椀の中へ残して、もうよそうと箸を置いた。他人がそんな我儘をする、なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻わして得意なる彼は、濁った汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が袋戸の奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」という。「でもあなた澱粉質のものは大変機能があるそうですから、召し上つたらいいでしょう」と飲ませたがる。「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が独言のようという。「厭きつぽいのじゃない薬が利かんのだ」「それだつてせんだつてじゆうは大変によく利くよく利くとおっしゃつて毎日毎日上つたじゃありませんか」「こないだうち利いたのだよ、この頃は利かないのだよ」と対句のような返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちゃ、いくら機能のある薬でも利く氣遣いはありません、もう少し辛防がよくなくつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣たあ違つて直らないわねえ」とお盆を持つて控えた御三を顧みる。「それは本当のところでございます。もう少し召し上つてご覧にならないと、とても善い薬か悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんだから飲まんのだ、女なんか何かわかるものか、黙つていろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカジヤスターゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹を切らせようとする。主人は何にも云わず立って書齋へ這入る。細君と御三は顔を見合せてにやにやと笑う。こんなときに後からくっ付いて行つて膝の上へ乗ると、大変な目に逢わされるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云う人の本を披いて見ておつた。もしそれが平常の通りわかるならちよつとえらいところがある。五六分するとその

本を叩き付けるように机の上へ抛り出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して下のような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様の春着をきて羽根をついていた。衣装は美しいが顔はすこぶるまづい。何となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さえ剃つて貫やあ、そんなに人間と異つたところはありやしない。人間はこう自惚れてゐるから困る。

宝丹の角を曲るとまた一人芸者が来た。これは背のすらりとした撫肩の恰好よく出来上つた女で、着ている薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い歯を出して笑ひながら「源ちゃん昨夕は——つい忙がしかつたもんだから」と云つた。ただしその声は旅鴉のごとく皺枯れておつたので、せつかくの風采も大に下落したように感ぜられたから、いわゆる源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手のまま御成道へ出た。寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解し難いものはない。この主人の今の心は怒つてゐるのだから、浮かれてゐるのだから、または哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癢を起しているのか、物外に超然としてゐるのだからさつぱり見当が付かぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。食いたければ食ひ、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。

第一日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人のよ
うに裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要
があるかも知れないが、我等猫属に至ると行住坐臥、行屎送尿ことごとく真正の日記である
から、別段そんな面倒な手数をして、己れの真面目を保存するには及ばぬと思う。日記をつ
けるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

神田の某亭で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変い
い。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても
駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

無暗にタカジヤスターゼを攻撃する。独りで喧嘩をしているようだ。今朝の肝癩がちよつ
とここへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う辺に存するのもかも知れない。

せんだつて〇〇は朝飯を廃すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが
腹がぐうぐう鳴るばかりで功能はない。△△は是非香の物を断てと忠告した。彼の説に
よるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸らす訳だから本復
は疑なしという論法であつた。それから一週間ばかり香の物に箸を触れなかつたが別段
の験も見えなかつたから近頃はまた食い出した。××に聞くとそれは按腹揉療治に限る。
ただし普通のはゆかぬ。皆川流という古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は
根治出来る。安井息軒も大変この按摩術を愛していた。坂本竜馬のような豪傑でも時々
は治療をうけたと云うから、早速上根岸まで出掛けて揉まして見た。ところが骨を揉ま
なければ癒らぬとか、臓腑の位置を一度顛倒しなければ根治がしにくいとかいつて、そ

れはそれは残酷な揉み方をやる。後で身体が綿のようになって昏睡病にかかったような心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりとどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかった。B氏は横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやつて御覧という。これも多少やつたが何となく腹中が不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かしたからこの頃は廃してしまつた。C先生は蕎麦を食つたらよろうと云うから、早速かけとむりをかわるがわる食つたが、これは腹が下るばかりで何等の功能もなかつた。余は年来の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目がある。これから毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球のように間断なく変化している。何をやつても永持のしない男である。その上日記の上で胃病をこんな心配している癖に、表向は大に瘦我慢をするからおかしい。せんだつてその友人で某という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならないと云う議論をした。大分研究したものと見えて、条理が明晰で秩序が整然として立派な説であつた。氣の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭腦も學問もないのである。しか

し自分が胃病で苦しんでいる際だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名誉であると云つたような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたので主人は黙然としていた。かくのごとく虚栄心に富んでいるものの実際はやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をあんなにたくさん食つたのも昨夜寒月君と正宗をひつくり返した影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする気力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論云える身分でない。従つて存外嫌は少ない方だ。小供の食いこぼした麵麩も食うし、餅菓子の餡もなめる。香の物はすこぶるまずいが経験のため沢庵を二切ばかりやつた事がある。食つて見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌だ、これは嫌だと云うのは贅沢な我儘で到底教師の家にいる猫などの口にすべきところでない。主人の話によると仏蘭西にバルザックという小説家があつたさうだ。この男が大の贅沢屋で——もつともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いてある小説中の人間の名をつけようと思つていろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付ようという考えだから往来へ出ると何もし

ないで店先の看板ばかり見て歩行あいている。ところがやはり気に入った名がない。友人を連れて無暗むやみにあるく。友人は訳がわからずにくっ付いて行く。彼等はずいに朝から晩まで巴理パリを探險した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看板にマーカスという名がかいてある。バルザックは手を拍うつて「これだこれだこれに限る。マーカスは好い名じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分ぶんのない名が出来る。Zでなくてはいかん。Z. Marcus は実にうまい。どうも自分で作った名はうまくつけたつもりでも何となく故意わざとらしいところがあつて面白くない。ようやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理いちんぱりを探險しなくてはならぬようでは随分手数てすうのかかる話だ。贅沢ぜいさくもこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣かき的主人しゅじんを持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもいい、食えさえすれば、という気になるのも境遇のしからしむるところであろう。だから今雑煮ぞうじが食いたくなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食べる時に食つておこうという考から、主人の食あひ剩あました雑煮がもしや台所に残つていはすまいかと思ひ出したからである。……台所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着じょうちやくしている。白状するが餅というものは今まで一辺ぺんも口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、また少しは気味きびがわるくもある。前足で上にかかつている菜さいつ葉えつを搔かき寄せる。爪を見ると餅の上皮うわかわが引き掛つてねばねばする。嗅かいで見ると釜の底の飯を御櫃おほちへ移す時のような香においがする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。御三おさんは暮も春も同じような顔をし

て羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしゃる兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅というものの味を知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫ながら一の真理を感得した。「得難き機会はすべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。否、碗底の様子を熟視すればするほど気味が悪くなつて、食うのが厭になつたのである。この時もし御三でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜気もなく碗を見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかつたろう。ところが誰も来ない、いくら蹣跚していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は碗の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後からだ全体の重量を碗の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸ばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、大抵なものなら噛み切れる訳だが、驚いた！もうよかろうと思つて歯を引こうとすると引けない。もう一辺噛み直そうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと疳づいた時はすでに遅かつた。沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦慮するたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動かなくなる。齒答えはあるが、齒答えがあるだけでどうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどうまい事をいつたものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割ることく尽未来際方のつく期はあるまいと思われた。この煩悶の際吾輩は覺えず第二の真理に逢着

した。「すべての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理はすでに二つまで發明したが、餅がくつ付いているので毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切つて逃げないと御三が来る。小供の唱歌もやんだようだ、きつと台所へ馳け出して来るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐるぐる振つて見たが何等の功能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周囲を撫で廻す。撫でたくらいで割り切れる訳のものではない。今度は左の方を伸して口を中心として急劇に円を劃して見る。そんな呪いで魔は落ちない。辛防が肝心だと思つて左右交る交るに動かしたがやはり依然として齒は餅の中にぶら下つている。ええ面倒だと両足を一度に使う。すると不思議な事にこの時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じがする。猫であろうが、あるまいがこうなつた日にやあ構うものか、何でも餅の魔が落ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中引つ掻き廻す。前足の運動が猛烈なのでややともすると中心を失つて倒れかかる。倒れかかるたびに後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳にも行かないので、台所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんな器用に起つていられたものだと思う。第三の真理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能わざるところのものを為し能う。之を天祐という」幸に天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦つていると、何だか足音がして奥より人が来るような気合である。ここで人に来られては大変だと思つて、いよいよ躍起となつて台所をかけ廻る。足音はだんだん近付い

てくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬ちりめんの紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうになつたら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾きやうらんを既倒きとうに何とかするといふ勢でまた大変笑われた。人間の同情に乏しい実行も大分見聞だいぶんけんもんしたが、この時ほど恨めしく感じた事はなかつた。ついに天祐もどつかへ消え失せて、在来の通り四つ這ばいになつて、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつてやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせようじゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまつている。「取つてやらんと死んでしまふ、早くとつてやれ」と主人は再び下女を顧かえりみる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起された時のように、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君かんげつじゃないが前歯がみんな折れるかと思つた。どうも痛いいたの痛くないのつて、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情なさけ容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入はいつてしまつておつた。

こんな失敗をした時には内うちにいて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。

いつその事気を易えて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようといふ所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦い顔を見たり、御三の險突を食って気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。すると、いつの間にか心が晴々して今までの心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ変わったような心持になる。女性の影響というものは実に莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側に坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよいちよい振る景色なども到底形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鷲毛を欺くほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。吾輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、吾輩の傍に来て「あら先生、おめでとう」と尾を左りへ振る。吾等猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断つた通りまだ名はないのであるが、教師の家にいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云われて満更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。「やあおめでとう、大

層立派に御化粧が出来ましたね」「ええ去年の暮御師匠さんに買って頂いたの、宜いでしよう」とちやらちやら鳴らして見せる。「なるほど善い音ですな、吾輩などは生れてから、そんな立派なものを見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちやらちやら鳴らす。「いい音でしょう、あたし嬉しいわ」とちやらちやらちやら続け様に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がっていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪気なものである「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だつて笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものが無いように思っているのは間違ひである。吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なね。御師匠さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知っていますかね。その御身分は何なんです。いずれ昔は立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾き出す。「宜い声でしょう」と三毛子は自慢する。「宜いようだが、吾輩にはよくわからん。全体何というのですか」「あれ？ あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きていくくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間が抜けたようだが別に名答も出て来なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かつたんだつて。いつでもそうおつしやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも

天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて?」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「なるほど。少し待つて下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました天璋院様でしょう」「ええ」「御祐筆でしょう」「そうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「そうそう間違つた。妹の御嫁に入つた先きの」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分つたでしょう」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰るところ天璋院様の何になるんですか」「あなたもよつぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて、先つきつから言つてるんじゃないやせんか」「それはすつかり分つてはいるんですがね」「それが分りさえすればいいんでしよう」「ええ」と仕方がないから降参をした。吾々は時とする」と理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱつたりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらつしやるから、私し帰るわ、よくつて?」「わるいと云つたつて仕方がない。「それじゃまた遊びにいらつしやい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くつてよ。どうかしやしくなつて」と心配そうに問いかける。まさか雑煮を食つて踊りを踊つたとも云われないから「何別段の事もありませんが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話してもしたら直るだろうと思つて実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元氣もさつぱりと回復した。いい心持

になつた。帰りに例の茶園ちやえんを通り抜けようと思つて霜柱しもばしらの融けかかつたのを踏みつけながら建仁寺けんんにんじの崩れくずれから顔を出すとまた車屋の黒が枯菊の上に背せを山にして欠伸あくびをしている。近頃は黒を見て恐怖するような吾輩ではないが、話をされると面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質として他ひとが己おのれを輕侮けいぶしたと認むるや否や決して黙つていない。「おい、名なしの権兵衛ごんべえ、近頃じゃ乙おつう高く留つてるじゃあねえか。いくら教師の飯を食つたつて、そんな高慢ごうまんちぎな面つらあするねえ。人ひとつけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到底とうてい分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして出来得る限り早く御免蒙ごめんこうむるに若くしはないと決心した。「いや黒君おめでとう。不相変あいかわらず元氣がいいね」と尻尾しつぽを立てて左へくると廻まわす。黒は尻尾を立てたぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？ 正月でおめでたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方だろう。氣をつけろい、この吹ふい子の向むう面づらめ」吹い子の向うづらという句は罵詈ばりの言語であるようだが、吾輩には了解が出来なかつた。「ちよつと伺うかがうが吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」「へん、手めえが悪体あくたいをつかれてる癖に、その訳わけを聞きや世話あねえ、だから正月野郎だつて事よ」正月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のためちよつと聞いておきたいが、聞いたつて明瞭な答弁は得られぬに極きまつているから、面めんと対むかつたまま無言で立つておつた。いささか手持無沙汰ていの体である。すると突然黒のうちの神かみさんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた鮭しゃげがない。大変だ。またあの黒の畜生ちしきしやうが取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやあしな

い。今に帰つて来たら、どうするか見ていやがれ」と怒鳴どなる。初春はつはるの長閑のどかな空気を無遠慮に

震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大に俗了してしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだけ怒鳴っていると云わぬばかりに横着な顔をして、四角な顔を前へ出しながら、あれを聞いたかと合図をする。今までは黒との応対で気がつかなくかつたが、見ると彼の足の下には一切れ二銭三厘に相当する鮭の骨が泥だらけになつて転がつている。「君不相変やつてるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、この野郎。し、やけの一切や二切で相変らずたあ何だ。人を見縊びつた事をいうねえ。憚りながら車屋の黒だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の辺まで搔き上げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知つてるさ」「知つてるのに、相変らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間なら胸倉をとられて小突き廻されるところである。少々辟易して内心困つた事になつたなと思つてみると、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人あ。牛肉を一斤すぐ持つて来るんだよ。いいかい、分つたかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文の音が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂えるところやに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ阿魔だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏張る。吾輩は挨拶のしようもないから黙つて見ている。「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取つときや、今に食つてやらあ」と自分のために誂えたもののごとくいう。「今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を帰そうとする。「御めつちの知つた事じゃねえ。黙つていろ。うるせえや」と云いながら突然後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚ろいて、

からだの泥を払っている間に黒は垣根を潜つて、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛を覘に行つたものであろう。

家へ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽側から上つて主人の傍へ寄つて見ると見馴れぬ客が来ている。頭を奇麗に分けて、木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着けて至極真面目そうな書生体の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。主客の対話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いつしよに来いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。「何ですか、その西洋料理へ行つて午飯を食うのについて趣向があるのですか」と主人は茶を續ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「いつしよに行きましたか、なるほど」ところが驚いたのです」主人はそれ見たかと云わぬばかりに、膝の上に乗つた吾輩の頭をぼかと叩く。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事なんでしょう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思ひ出す。「へへー。君何か変つたものを食おうじゃないかとおっしゃるので」「何を食いました」「まず献立を見ながらいろいろ料理についての御話がありました」「誂らえない前にですか」「ええ」「それから」「それから首を捻つてボーイの方を御覧になって、どうも変つたものもないよう

だなどおっしゃるとボーイは負けぬ気で鴨のロースか小牛のチャップなどは如何ですと云うと、先生は、そんな月並を食いにわざわざここまで来やしないとおっしゃるんで、ボーイは月並という意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていましたよ」「そうでしょう」「それから私の方を御向きになつて、君仏蘭西や英吉利へ行くと随分天明調や万葉調が食えるんだが、日本じやどこへ行つたつて版で圧したようで、どうも西洋料理へ這入る気がしないと云うような大気燄で——全体あの方は洋行なすつた事があるのですかな」「何迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落なんでしょう」と主人は自分ながらうまい事を言つたつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですね、私はまたいつの間に洋行なさつたかと思つて、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や蛙のシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでしょう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花瓶の水仙を眺める。少しく残念の気色にも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんです」と主人が念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからののです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を挟む。「それから、とてもなめくじや蛙は食おうつても食えやしなから、まあトクメン、ポーくらいなところで負けとく事にしようじやないか君と御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、といつてしまったので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面目だものですか、つい気がつきませんでした」とあたかも主人に向つて麁忽を詫びているように見える。

「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表しておらん。「それからボーにおいト、チメン、ボーを二人前持ににんまえつて来いというト、ボーがメン、チボーですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目まじめな貌かおでメン、チボーじゃないト、チメン、ボーだと訂正されました」なある。そのト、チメン、ボーという料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらつしやるし、ことにその時は洋行なすつたものと信じ切つていたものですから、私も口を添えてト、チメン、ボーだとト、チメン、ボーだとボーに教えてやりました」「ボーはどうしました」「ボーがね、今考えると実に滑稽こっけいなんですがね、しばらく思案してはなはだ御気の毒様ですが今日はト、チメン、ボーは御生憎おあいにくさま様でメン、チボーなら御二人前おふたりまえすぐに出来ますと云うと、先生は非常に残念な様子で、それじゃせつかくここまで来た甲斐かひがない。どうかト、チメン、ボーを都合つごうして食わせてもらう訳わけには行くまいかと、ボーに二十錢銀貨をやられると、ボーはそれではともかくも料理番と相談して参りましょうと奥へ行きましたよ」「大麥ト、チメン、ボーが食いたかつたと見えますね」「しばらくしてボーが出て来て真まことに御生憎おあつらえで、御誂おあつらえならこしらえますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待つて食つて行こうじゃないかと云いながらポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹かし始められたので、私も仕方がないから、懐ふところから日本新聞を出して読み出しました、するとボーはまた奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数てすうが掛りますな」と主人は戦争の通信を読むくらいの意気込で席を前すめる。「するとボーがまた出て来て、近頃はト、チメン、ボーの材料が払底で亀屋へ行つても横浜の十五番へ行つても買われませんか

ら当分の間は御生憎様でと気の毒そうに云うと、先生はそりや困ったな、せつかく来たのになあと私の方を御覧になつてしきりに繰り返さるので、私も黙っている訳にも参りませんから、どうも遺憾いひかんですな、遺憾きわま極るですなと調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人が賛成する。何がごもつともだか吾輩にはわからん。「するとボイも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますつてんでしよう。先生が材料は何を使うかねと問われるとボイはへへへと笑つて返事をしなひんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえさようで、それだものだから近頃は横浜へ行つても買われませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」「アハハハそれが落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。膝ひざが揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着とんじやくなく笑う。アンドレア・デル・サルトに雇かかつたのは自分一人でないと言ふ事を知つたので急に愉快になつたものと見える。「それから二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたらう、橡面坊とらめんぼうを種に使つたところが面白からうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れしたよなもののは実は午飯ひるめしの時刻が延びたので大変空腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表する。これには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れ吾輩の咽喉のどを鳴らす音が主客しゅかくの耳に入る。

東風君は冷めなくなつた茶をぐつと飲み干して「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに済すます。「御承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」と油あぶらを注す。「同志だけがよりましてせんだつてから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから

続けたつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります。「ちよつと伺つておきますが、朗読会と云うと何か節奏ふしでも附けて、詩歌文章しいかの類るいを読よむように聞えますが、一体どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々おひおひは同人の創作なんかやるつもりです」「古人の作というはくらくてんと白楽天の琵琶行びわこうのようなものでもあるんですか」「いいえ」「蕪村ぶそんの春風馬堤曲しゅんふうばていきまぐの種類ですか」「いいえ」「それじゃ、どんなものをやつたんです」「せんだつては近松の心中物をやりました」「近松？ ああ浄瑠璃じようるりの近松ですか」近松に二人はな
 い。近松といえは戯曲家の近松に極きまつてゐる。それを聞き直す主人はよほど愚ぐだと思つてい
 ると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀ていねいに撫なでてゐる。藪やぶ眺のぞみから惚ほれられたと自認し
 ている人間もある世の中だからこのくらいの誤謬ごびやうは決して驚おどろくに足らんと撫なでらるるがま
 にすましていた。「ええ」と答こたえて東風子とうふうしは主人の顔色うかがを窺うかがう。「それじゃ一人で朗読するの
 ですか、または役割を極きまめてやるんですか」「役を極きまめて懸合かけあいでやつて見ました。その主意は
 なるべく作中の人物に同情を持つてその性格を發揮するのを第一として、それに手真似てまねや身
 振りを添そえます。白せりふはなるべくその時代の人を写し出すのが主で、御嬢お嬢さんでも丁稚てつちでも、
 その人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃありませんか」
 「ええ衣装いしやうと書割かきわりがないくらいなものですか」「失礼ながらうまく行きますか」「まあ第一回と
 しては成功した方だと思ひます」「それでこの前やつたとおつしやる心中物しんじゆうものという」と「その、
 船頭ふねづかが御客おんきやくを乗せて芳原よしむらへ行く所ところなんで」「大変な幕をやりましたな」と教師だけにちよつと
 首かたむを傾かたむける。鼻から吹き出した日の出の煙けむりりが耳みみを掠かすめて顔の横手よこてへ廻まわる。「なあに、そんな
 に大変な事もないんです。登場の人物は御客と、船頭と、花魁おいらんと仲居なかいと遣手やりてと見番けんばんだけです

から」と東風子は平気なものである。主人は花魁という名をきいてちよつと苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番という術語について明瞭の智識がなかつたと見えてまず質問を呈出した。「仲居というのは娼家の下婢にあたるものですか」「まだよく研究はして見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手というのが女部屋の助役見たようなものだろうと思います」「東風子はさつき、その人物が出て来るように仮色を使うと云つた癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほど仲居は茶屋に隷属するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云うのは人間ですかまたは一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司どつてゐるのですか」「さあそこまではまだ調べが届いておりません。その内調べて見ましよう」これで懸合をやつた日には頓珍漢なものが出来るだろうと吾輩は主人の顔をちよつと見上げた。主人は存外真面目である。「それで朗読家は君のほかにとんな人が加わつたんですか」「いろいろおりました。花魁が法学士のK君でしたが、口髯を生やして、女の甘つたるいせりふを使かうのですからちよつと妙でした。それにその花魁が癩を起すところがあるので……」「朗読でも癩を起さなくつちや、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」と東風子はどこまでも文芸家の氣でいる。「うまく癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩だけは第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。「私は船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるものなら僕にも見番くらいはやれると云つたような語氣を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癩に障つた様子もない。やはり沈着な口調で

「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾に終わりました。実は会場の隣りに女学生が四五人下宿してしまっていてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるという事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたものと見えます。私しが船頭の仮色を使つて、ようやく調子づいてこれなら大丈夫と思つて得意にやつてみると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐らえていた女学生が一度にわつと笑いだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極りが悪るい事も悪るいし、それで腰を折られてから、どうしても後がつづけられないので、とうとうそれ限りで散会しました」第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。覚えず咽喉仏がごろごろ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭を撫でてくれる。人を笑つて可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞を述べている。「第二回からは、もつと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起せませんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癪などは起していただくんでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小菊版の帳面を出す。「これへどうか御署名の上御捺印を願いたいのので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢揃をしてゐる。「はあ賛成員にならん事もありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の体に見える。「義務と申して別段是非願う事もないくらいで、ただ御名前だけを御記入下さつて賛成の意さえ御表し被下ればそれで結構です」「そんなら這入ります」と義務のかか

らぬ事を知るや否や主人は急に気軽になる。責任さえないと云う事が分つておれば謀叛むほんの連判状へでも名を書き入れますと云う顔付をする。加之のみならずこう知名の学者が名前を列ねつらている中に姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出合つた事のない主人にとつては無上の光栄であるから返事の勢のあるのも無理はない。「ちよつと失敬」と主人は書斎へ印をとりに入る。吾輩はぼたりと畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る。モゴモゴしばらくは苦しそうである。吾輩は今朝の雑煮ぞうに事件をちよつと思ひ出す。主人が書斎から印形いんぎょうを持って出て来た時は、東風子の胃の中にカステラが落ちついた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切ひとぎれ足りなくなつた事には気が着かぬらしい。もし気がつくとすれば第一に疑われるものは吾輩であらう。

東風子が帰つてから、主人が書斎に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が来ている。

「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生の手紙に真面目なのはほとんどないので、この間などは「其そのこ後別に恋着れんちやくせる婦人も無之これなく、いず方かたより艶書えんしょも参らず、先まず先まず無事に消光しょうこう罷まかり在り候間、乍はばかりながら憚はば御休心可被下候」と云うのが来たくらいである。それに較くらべるとこの年始状は例外にも世間的である。

「二寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反して、出来得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有みぞうの新年を迎うる計画故、毎日毎目の廻る程の多忙、御推察願上候……」なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙がしいに違いないと、主人は腹の中で迷

「昨日は一刻のひまを偷み、東風子にト、チメンボトの御馳走を致さんと存じ候処、生憎材料払底の為め其意を果さず、遺憾千万に存候。……」

そろそろ例の通りになつて来たたと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は……」

うるさいなと、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候為め、不得已賀状を以て拝趨の礼に易え候段不悪御宥恕被下度候。

……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候えども、せめてはト、チメンボトでもと只今より心掛居候。……」

まだト、チメンボトを振り廻している。失敬なと主人はちよつとむつとする。

「然しト、チメンボトは近頃材料払底の為め、ことに依ると間に合い兼ね候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

両天秤をかけたなと主人は、あとが読みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃囊を充たす為には……」

うそをつけと主人は打ち遣つたようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可らずと存候。然る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちらほら見受け候えども、普通の鳥屋杯には一向見当り不申、苦心此事に御座候。……」

独りで勝手に苦心しているのじやないかと主人は毫も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第御諒察可被下候。……」

何が御諒察だ、馬鹿など主人はすこぶる冷淡である。

「降つて十六七世紀の頃迄は全歐を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候様記憶致候。有名なるレンブラントが画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘卓上に横わり居り候……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三度も方丈の食饌に就き候えば如何なる健胃の人にて消化機能に不調を醸すべく、従つて自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋味を食ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候……」
 はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嘔下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候。かくの如くすれば好物は貪ほり次第貪り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を可申かと愚考致候……」
 なるほど一挙兩得に相違ない。主人は羨ましそうな顔をする。

「廿世紀の今日交通の頻繁、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄、吾人戦勝国の国民は、是非共羅馬人に倣つて此入浴嘔吐の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事と自信致候。左もなくば切角の大国民も近き将来に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃かに心痛罷りあり候……」

また大兄のごとくか、癩に障る男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致し候わば所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立ち可申と存候……」

何だか妙だなと首を捻る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を涉猟致し居候えども未だに

発見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思い立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候えば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右は発見次第御報道可仕候につき、左様御承知可被下候。就てはさきに申上候ト、チメンボ、及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右発見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かと存候草々不備」

何だとうとう担がれたのか、あまり書き方が真面目だからつい仕舞まで本気にして読んでいた。新年勿々こんな悪戯をやる迷亭はよつぽどひま人だなあと主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白磁の水仙がだんだん凋んで、青軸の梅が瓶ながらだんだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつまらんと思つて、一両度三毛子を訪問して見たが逢われない。最初は留守だと思つたが、二返目には病気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢の葉蘭の影に隠れて聞いているところであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ何にも食べません、あつたかにして御火燵に寝かしておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛している猫がかくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体が疲れるばかりだからね」「そうでございますとも、

私共でさえ一日御饈をいただくかないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。実際この家では下女より猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行ったのかい」「ええ、あの御医者はよつほど妙でございますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかつて私の脈をとろうとするんでしよう。いえ病人は私ではございませぬ。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にやにや笑いながら、猫の病気はわしにも分らん、抛つておいたら今に癒るだろうつてんですもの、あんまり苛いじゃございませぬか。腹が立つたから、それじゃ見ていただかなくつてもようございますこれでも大事の猫なんですつて、三毛を懐へ入れてさつさと帰つて参りました」「ほんにねえ」「ほんにねえ」は到底吾輩のうちなどで聞かれる言葉ではない。やはり天璋院様の何とかの何とかでなくては使えない、はなはだ雅であると感じた。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと風邪を引いて咽喉が痛むんでございますよ。風邪を引くと、どなたでも御咳が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿丁寧な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのつて新しい病気ばかり殖えた日にや油断も隙もなりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気をつけなといかんよ」「そうでございませうかねえ」

下女は大に感動している。

「風邪を引くといつてもあまり出あるきもしないようだったに……」「いえね、あなた、それが近頃は悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達?」「ええあの表通りの教師の所にいる薄ぎたない雄猫でございますよ」「教師と云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗うたんびに鵝鳥が絞め殺されるような声を出す人でござんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な声を無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにがががやる、機嫌の好い時は元氣づいてなおがががやる。つまり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくがががやる。細君の話しではここへ引越す前まではこんな癖はなかつたそうだが、ある時ふとやり出してから今日まで一日もやめた事がないという。ちよつと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などには到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を立ててあとを聞く。「あんな声を出して何の呪いになるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかつたよ」「そうでございましょうともねえ」

下女は無暗に感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つている猫だから、どうせ野良猫さ、今度来たら少し叩いておやり」「叩いてやりますとも、三毛の病気になつたのも全くあいつの御蔭に相違ございませぬもの、きつと

鬢をとつてやりませう」

飛んだ冤罪を蒙ったものだ。こいつは滅多に近か寄れないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

帰つて見ると主人は書齋の中で何か沈吟の体で筆を執っている。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云つて、わざわざ年始状をよこした迷亭君が飄然とやつて来る。「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよつとうまい文章だと思つたから今翻訳して見ようと思つてね」と主人は重たそうに口を開く。「文章？ 誰れの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分善いがあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあつたのか」と問う。「第二読本」と主人は落ちつきはらつて答える。「第二読本？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文と云うのは第二読本の中にあると云う事さ」「冗談じやない。孔雀の舌の鬢を際どいところで討とうと云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹きとは違うさ」と口髯を捻る。泰然たるものだ。「昔しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといつたら、山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近来の名文はまずこれでしょうと云つたという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の自家のような事を云う。主人は禅坊主が大燈国師の遺誠を読むような声を出して読み始める。「巨人、引力」「何だいその巨人引力と云うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な

題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持つている巨人というつもりさ」「少し無理なつもりだが表題だからまず負けておくとしよう。それから早々本文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「雑ぜかえしてはいかんよ」と予じめ念を押してまた読み始める。ケートは窓から外面を眺める。小児が球を投げて遊んでいる。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとこのぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとこのみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事があるう。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、甘いじゃないか」「いやこれは恐れ入った。飛んだところでトチメンボ一の御返礼に預った」「御返礼でもなんでもないさ、実際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君にしてこの伎倆あらんとは、全く此度という今度は担がれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降参させる考えはないさ。ただ面白い文章だと思つたから訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なくっちゃ本ものでない。凄いいものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめたから、その代りに文章でもやろうと思つてね」「どうして遠近無差別黒白平等の水彩画の比じゃない。感服の至りだよ」「そ

うほめてくれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも疍違かんちがひいをしている。

ところへ寒月君かんげつが先日せんじつは失礼しつれいしましたと這入はいつて来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴してト、チメンボ一の亡魂たいじんを退治たいじられたところで」と迷亭先生は訳のわからぬ事をほのめかす。「はあ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左さのみ浮かれた気色けしきもない。「先日は君の紹介おちとうふうで越智東風おちとうふうと云う人が来たよ」「ああ上あがりましたか、あの越智東風おちとうふうと云う男は至いたつて正直な男ですが少し変へつているところがあるので、あるいは御迷惑ごめいわくかと思おもいました。是非紹介せひしょうかいしてくれというものですから……」「別に迷惑めいわくの事もないがね……」「こちらへ上あがつても自分の姓名せいせいのことについて何か弁わじて行きやしませんか」「いいえ、そんな話もなかつたようだ」「そうですか、どこへ行いつても初対面しつたいめんの人には自分の名前の講釈こうしゃくをするのが癖くせでしてね」「どんな講釈こうしゃくをするんだい」と事あれかしと待ち構くわえた迷亭君は口を入れる。「あの東風こちと云うのを音おんで読よまれると大変たいへん気きにするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮きんからかわの煙草たばこ入いれから煙草たばこをつまみ出す。「私わたくしの名は越智東風おちとうふうではありません、越智おちこちですと必ず断ことわりますよ」「妙めづだね」と雲井くもいを腹はらの底そこまで呑のみ込む。「それが全く文学熱ぶんがくねつから来たので、こちと読よむと遠近えんじんと云う成語せいごになる、のみならずその姓名せいせいが韻いんを踏ふんでいると云うのが得意ていぎなんです。それだから東風こちを音おんで読よむと僕おれがせつかくの苦心くしんを人が買かひつけてくれないといつて不平ふへいを云うのです」「こりやなるほど変へつてる」と迷亭先生は図ずに乗のつて腹はらの底そこから雲井くもいを鼻はなの孔あなまで吐はき返かへす。途中で煙たばこが戸迷とまじいをして咽喉のどの出口でぐちへ引きかかる。先生は煙管きせるを握にぎつてごほんごほんごほんと咽むせび返かへる。「先日せんじつ来た時は朗誦らうじゆん会で船頭せんとうになつて女学生にょがくせいに笑わらわれたといつていたよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管きせるで膝頭ひざがしらを叩たたく。吾輩われらは陰香かげのんになつたか

少し傍そばを離れる。「その朗読会さ。せんだつてトチメンボを御馳走した時にね。その話が出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を願っていたって。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次はずつと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしゃにしましたと云うから、君にや何の役が当たてるかと聞いたら私は御宮おみやですといったのさ。東風とうふうの御宮は面白からう。僕は是非出席して喝采かつさいしようと思つてるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところが無いから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀くじやくの舌とトチメンボの復讐かたきを一度にとる。迷亭君は気にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳ぎやうとくの俎なまいたと云う格だからなあ」と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と云う語を主人は解かいさないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化ごまかしつけているものだから、こんな時には教場の経験けいけんを社交上にも応用するのである。「行徳の俎なまいたというのは何の事ですか」と寒月が真率しんそつに聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の帰りがけに買って来て挿さしたのだが、よく持つじやないか」と行徳の俎なまいたを無理にねじ伏せる。「暮といえは、去年の暮に僕は実に不思議な経験けいけんをしたよ」と迷亭が煙管きせるを大神楽だいかぐらのごとく指の尖さきで廻まわす。「どんな経験か、聞かし玉たまえ」と主人は行徳の俎なまいたを遠く後うしろに見捨てた気で、ほつと息をつく。迷亭先生の不思議な経験けいけんというのを聞くと左ひだりのごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風とうふうから参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから御在宿を願うと云う先さき触ふれがあったので、朝から心待ちに待つていと先生な

かなか来ないやね。昼飯を食つてストーブの前でバリー・ペーンの滑稽物こっけいものを読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思つてね。寒中は夜間外出をするなどか、冷水浴もいいがストーブを焚たいて室へやを煖あたかにしてやらないと風邪かぜを引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいかないと、呑気のんきな僕もその時だけは大おおに感動した。それにつけても、こんなにくらしては勿体もったいない。何か大著述だいちゆでもして家名を揚げなくてはならん。母の生きていううちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云う氣になつた。それからなお読んで行くと御前みまへなんぞは実に仕合せ者だ。露西亞ロシアと戦争が始まつて若い人達は大変な辛苦しんくをして御国みくにのために働らいているのに節季せつき師走しわすでもお正月のように氣楽きらくに遊んでいと書いてある。——僕はこれでも母の思つてるように遊んじやいやね——そのあとへ以もつて来て、僕の小学校時代の朋友ともゆうで今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が列挙してあるのさ。その名前を一一讀んだ時には何だか世の中が味あじなくなくなつて人間もつまらないと云う氣が起つたよ。一番仕舞しまいにね。私も取る年に候はつはるえば初春おぞうの御雜煮おぞうを祝い候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、なおのこと氣がくさくさしてしまつて早く東風とうふうが来れば好いと思つたが、先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯になつたから、母へ返事でも書こうと思つてちよいと十二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免蒙ごうむる事に極きめてあるのさ。すると一日動うかずにおつたものだから、胃の具合が妙で苦しい。東風が来たら待たせておくと云う氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつになく富士見町の方へは足が

向かないで土手三番町の方へ我れ知らず出てしまった。ちようどその晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。神楽坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大変淋しい感じがする。暮、戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる馳け廻る。よく人が首を縊ると云うがこんな時にふと誘われて死ぬ気になるのじやないかと思ひ出す。ちよいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間にか例の松の真下に來ているのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句を投げ入れる。

「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

「首懸の松は鴻の台でしょう」寒月が波紋をひろげる。

「鴻の台のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜかう云う名が付いたかと云うと、昔しからの言い伝えで誰でもこの松の下へ來ると首が縊りたくなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら首縊りだと來て見ると必ずこの松へぶら下がっている。年に二三返はきつとぶら下がっている。どうしても他の松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具合に枝が往來の方へ横に出ている。ああ好い枝振りだ。あのままにしておくのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か來ないかしらと、四辺を見渡すと生憎誰も來ない。仕方がない、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下がっては命がない、危ないからよそう。しかし昔の希臘人は宴会の席で首縊りの真似をして余興を添えたと云う話がある。一人が台の上へ登つて繩の結び目へ首を入れる途端に他のものが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に繩をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれ

が事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思つたと杖へ手を懸けて見ると好い具合に撓る。撓り按排が実に美的である。首がかかつてふわふわするところを想像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が来て待つていると気の毒だと考え出した。それではまず東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直そうと云う氣になつてついにうちへ帰つたのさ」

「それで市が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ帰つて見ると東風は来ていない。しかし今日は無抛処差支えがあつて出られぬ、いづれ永日御面晤を期すという端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たつた一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考えると何でもその時は死神に取り着かれたんだね。ゼームスなどに云わせると副意識下の幽冥界と僕が存在している現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすまり返っている。

主人はまたやられたと思ひながら何も云わずに空也餅を頬張つて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧ていねいに掻き馴ならして、俯向うつむいてにやにや笑つていたが、やがて口を開く。極めて静かな調子である。

「なるほど伺つて見ると不思議な事であつと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう氣になりません」

「おや君も首を縊くりたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちやうど明けければ昨年の暮の事でも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家うちで忘年会兼合奏会けんけんがありまして、私もそれへヴァイオリンを携たずえに行きました。十五六人令嬢れいじやうやら令夫人れいふじんが集つてなかなか盛会で、近來の快事くわいじと思うくらいに万事が整つていました。晚餐ばんさんもすみ合奏もすんで四方よもの話わしが出て時刻も大分遅だいぶんくなつたから、もう暇いとま乞こいをして帰ろうかと思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは○○子さんの御病氣を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその両三日りやうさん前に逢つた時は平常の通りどころも悪いようには見受けませんでしたから、私も驚ろいて精くわしく様子を聞いて見ますと、私わたくしの逢つたその晩から急に発熱して、いろいろな謔語うわごとを絶間なく口走くちばしるそうで、それだけなら宜いいですがその謔語のうちに私の名が時々出て来るといふのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安おやすくないね」などという月並つきなみは云わず、静肅に謹聴きんしやうしている。「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわからんが、何しろ熱あつが劇はげしいので脳を犯なしているから、もし睡眠剤すいみんざいが思うように功を奏しないと危険であると云う診断だそうで私はそれを

聞くや否や一種いやな感じが起つたのです。ちょうど夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体になつて四方から吾が身をしめつけるごとく思われました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な〇〇子さんが……」

「ちよつと失敬だが待つてくれ給え。さつきから伺つていると〇〇子さんと云うのが二返ばかり聞えるようだが、もし差支えがなければ承わりたいね、君」と主人を顧みると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんが、廃しませう」

「すべて暖々然として味々然たるかたで行くつもりかね」

「冷笑なさつてはいけません、極真面目な話しなんですから……とにかくあの婦人が急にそんな病氣になつた事を考えると、実に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、総身の活氣が一度にストライキを起したように元氣がにわか滅入つてしまいました、ただ蹠々として踉々という形ちで吾妻橋へきかかつたのです。欄干に倚つて下を見ると満潮か干潮か分りませんが、黒い水がかたまつてただ動いてるように見えます。花川戸の方から人力車が一台馳けて来て橋の上を通りました。その提灯の火を見送つてみると、だんだん小さくなつて札幌ビールの処で消えました。私はまた水を見る。すると遙かの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見ましたが暗くて何にも分りません。氣のせいに違いない早々帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、また微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留つて耳を立てて聞きました。三度

目に呼ばれた時には欄干に捕まっつていながら膝頭ががくがく悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底から出るようですが紛れもない○○子の声なんでしょう。私は覚ええず「はい」と返事をしたのです。その返事が大きかったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はつと周囲を見渡しました。人も犬も何にも見えません。その時に私はこの「夜」の中に巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起つたのです。○○子の声がまた苦しそうに、訴えるように、救を求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「今直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪の下から無理に洩れて来るように思われましてね。この水の下だなど思いながら私はとうとう欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめてみるとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思つて力を込めて一反飛び上がつておいて、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭をちよいとつまむ。

「飛び込んだ後は気が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何も無い、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違だけであの声の出る所へ行く事が出来なかつたのです」寒月にはやにや笑いながら例のごとく羽織の紐を荷厄介にしている。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその〇〇子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内を下女と羽根を突いていましたから病気は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑う。欠けた前歯のうちに空也餅が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに撰津大掾を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたたら、細君が新聞を参考して鰻谷だと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持って来て今日は堀川だからいいでしょうと云う。堀川は三味線もので賑やかなばかりで実がないからよそうと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂です、私は是非撰津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いかわからないが、私に聞かせるのだからいっしょに

行つて下すつても宜いでしょうと手詰の談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜ろしい、しかし一世二代と云うので大変な大入だから到底突懸けに行つたつて這入れる氣遣いはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在つてそれと交渉して相当の席を予約するのが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめようと云うと、細君は凄惨な眼付をして、私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木の子代さんも正当の手続きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いくらあなたが教師だからつて、そう手数のかかる見物をしないで済ませよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくつちやいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行つて場所をとらなくつちや這入れないからですと鈴木の子代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですとものと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はびんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に萎縮する感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困つた事になつた。細君が年に一度の願だから是非叶えてやりたい。平生叱りつけた

り、口を聞かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日は幸い時間もある、囊中には四五枚の堵物もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだろう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやりたいがこう悪寒がして眼がくらんでは電車へ乗るどころか、靴脱へ降りる事も出来ない。ああ氣の毒だ氣の毒だと思ふとなお悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者に見てもらつて服薬でもしたら四時前には全快するだろうと、それから細君と相談をして甘木医学士を迎いにやると生憎昨夜が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰りになりますから、帰り次第すぐ上げますと云う返事である。困つたなあ、今杏仁水でも飲めば四時前にはきつと癒るに極つているんだが、運の悪い時には何事も思ふように行かんもので、たまさか妻君の喜ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、がらりと外れそうになつて来る。細君は恨めしい顔付をして、到底いらつしやれませんかと聞く。行くよ必ず行くよ。四時までにはきつと直つて見せるから安心しているがいい。早く顔でも洗つて着物でも着換えて待つているがいい、と口では云つたようなものの胸中は無限の感慨である。悪寒はますます劇しくなる、眼はいよいよよぐらぐらする。もしや四時まで全快して約束を履行する事が出来なかつたら、氣の狭い女の事だから何をすることも知れない。情けない仕儀になつて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考えると今の内に有為轉變の理、生者必滅の道を説き聞かして、もしもの変が起つた時取り乱さないくらいの覚悟をさせるのも、夫の妻に対する義務ではあるまいかと考え出した。僕は速かに細君を書齋へ呼んだよ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云う西洋の諺くらいは心得ているだろうと聞くと、そん

な横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使って人にからかうのだから、宜しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから、そんなに英語が御好きなら、なぜ耶蘇学校の卒業生なんかをお貰いなさらなかったんです。あなたくらい冷酷な人はありはしないと非常な権幕なんで、僕もせっかくの計画の腰を折られてしまった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意で使った訳じゃない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬がない。それにさつきからの悪寒と眩暈で少し脳が乱れていたところへもつて来て、早く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急ぎ込んだものだから、つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるとこれは僕が悪、全く手落ちであった。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両肌を脱いで御化粧をして、箆筒から着物を出して着換える。もういつでも出掛けられますと云う風情で待ち構えている。僕は気が気でない。早く甘木君が来てくれれば善いがと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書齋の開き戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒めるのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脱いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黒縮緬の羽織と反映している。その顔が石鹼と撰津大掾を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させて出掛けてやろうと云う気になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ぶくふかしているとようやく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなす

と、甘木先生は僕の舌を眺めて、手を握って、胸を敲いて背を撫でて、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすって、しばらく考え込んでいる。「どうも少し險呑のような気がしまして」と僕が云うと、先生は落ちついて、「いえ格別の事もございませぬ」と云う。「あのちよつとくらい外出致しても差支えはございませぬね」と細君が聞く。「さよう」と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなければ……」「気分は悪いですよ」と僕がいう。「じゃともかくも頓服と水薬を上げますから」「へえどうか、何だかちと、危ないようになりそうですな」「いや決して御心配になるほどの事じゃございませぬ、神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。三時は三十分過ぎた。下女を薬取りにやる。細君の嚴命で馳け出して行って、馳け出して返ってくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から今まで何とも無かつたのに、急に嘔気を催おして来た。細君は水薬を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲むとすると、胃の中からげーと云う者が呐喊して出てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。細君は「早く御飲みになったら宜いでしよう」と逼る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切つて飲んでしまおうとまた茶碗を唇へつけるとまたゲーが執念深く妨害をする。飲むうとしては茶碗を置き、飲むうとしては茶碗を置いてみると茶の間の柱時計がチンチンチンと四時を打った。さあ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろう、四時の音と共に吐き気がすっかり留まつて水薬が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出来まいと思つた病気が

たちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。「行きたかつたが四時を過ぎちゃ、這入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つし、妻も満足したろうに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだつたと今でも思うのさ」

語り了つた主人はようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫を持つた妻君は実に仕合せだな」と独り言のようにいう。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていたがおかしくも悲しくもなかつた。人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしくもない事を笑つたり、面白くもない事を嬉しがつたりするほかに能もない者だと思つた。吾輩の主人の我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと云う感じもあつたが、今の話を聞いてから急に軽蔑したくなつた。かれはなぜ兩人の話しを沈黙して聞いていられないのだろう。負けぬ気になつて愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしると書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜

のごとく風に吹かれて超然と澄し切っているようなものの、その実はやはり娑婆気もあり、慾気もある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が平常罵倒している俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言語動作が普通の半可通のごとく、文切り形の厭味を帯びてないのはいささかの取り得でもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなつたので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りはすでに取り払われて正月も早や十日となつたが、うらかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮かな活気を呈している。椽側に座蒲団が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜い方か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もしないから、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転んで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦勞だつた。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかつたのだ。

「はい遅くなりましたして、仏師屋へ参りましたらちようど出来上つたところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念を押ししましたら上等を使つたからこれなら人間の位牌よりも持つと申しとおりました。……それから猫誉信女の誉の字は崩した方が恰好がいいから少し劃を易えた

と申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変だと蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声をする。

「御前も回向えこうをしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声をする。吾輩は急に動悸どうきがして来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫きぼりの猫のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪かぜを引いたんでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかったかも知れないよ」「一体あの甘木さんが悪うございませよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませえね」「そう人様ひとさまの事を悪く云うものではない。これも寿命じゆまうだから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫のらねこが無暗むやみに誘い出したからだ、わたしは思うよ」「ええあの畜生ちきしやうが三毛のかたきでございますよ」

少し弁解べんげしたかったが、ここが我慢のしどころと唾つばを呑んで聞いている。話しはしばし途切とぎれる。

「世の中は自由にならん者での方。三毛のような器量よしは早死はやじにをするし。不器量な野良猫は達者でいたずらをしているし……」「その通りでございますよ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたって、二人ふたりとはおりませんからね」

二匹と云う代りに二ふたりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思つている

らしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属ねこぞくとはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の野良のらが死ぬと御誂おまつらえ通りに参つたんでございませがねえ」

御誂おまつらえ通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きとも嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺ひけしつぼの中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも知らんで上から蓋ふたをした事があつた。その時の苦しさは考えても恐しくなるほどであつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそうだ。三毛子の身代りみがわになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらつたり、戒名かいみょうをこしらえてもらつたのだから心残りはあるまい」「そうでございませすとも、全く果報者かほうものでございませすよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があまり軽少だつたようでございませすね」「少し短か過ぎたようだつたから、大変御早うございませすねと御尋ねをしたら、月桂寺げっけいじさんは、ええ利目ききめのあるところをちよいとやつておきました、なに猫だからあのくらいで充分浄土へ行かれますとおつしやつたよ」「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断つておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれる事はございませせんよ」

吾輩はその後野良ごが何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で聞

き棄てて、布団をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震いをした。その後二絃琴の御師匠さんの近所へは寄りついた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な御回向を受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵うく感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫となった。主人が書齋にのみ閉じ籠っているのを人が失恋だ失恋だと評するのも無理はないと思うようになった。

鼠はまだ取った事がないので、一時は御三から放逐論さえ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知っているものだから吾輩はやはりのらくらしてこの家に起臥している。この点については深く主人の恩を感謝すると同時にその活眼に対して敬服の意を表するに躊躇しないつもりである。御三が吾輩を知らずして虐待するのは別に腹も立たない。今に左甚五郎が出て来て、吾輩の肖像を楼門の柱に刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描くようになったら、彼等鈍騷漢は始めて自己の不明を恥ずるのであらう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞せきばくの感はあるが、幸い人間に知己ちぎが出来たのでさほど退屈とも思わぬ。せんだつては主人の許もとへ吾輩の写真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間は岡山の名産吉備団子きびだんごをわざわざ吾輩の名宛で届けてくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従つて、己おのれが猫である事はようやく忘却してくる。猫よりはいつの間まにか人間の方へ接近して来たような心持になつて、同族を糾合きうごうして二本足の先生と雌雄しゆうを決しようなどと云う量見は昨今のところ毛頭もうとうない。それのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたのもしい。あえて同族を輕蔑けいべつする次第ではない。ただ性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢いきおいのしからしむるところで、これを変心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を弄そつして人を罵詈ばりするものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介びやくしにしている訳には行かん。やはり人間同等の氣位きぐわいで彼等の思想、言行を評隲ひやうしつしたくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫兎びやくしの毛の生えたものくらいに思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備団子きびだんごをわが物顔に喰い尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮とつて送らぬ容子ようすだ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際を

せぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙る事に致そう。

今日は上天氣の日曜なので、主人はそのそ書齋から出て来て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて腹這になつて、しきりに何か唸つている。大方草稿を書き出す序開きとして妙な声を発するのだろうと注目していると、ややしばらくして筆太に「香一炷」とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一炷とは、主人にしては少し洒落過ぎているがと思う間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかこうと考えている」と筆を走らせた。筆はそれだけではたと留つたぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻つたが別段名案もないものと見えて筆の穂を管めだした。唇が真黒になつたと見ていると、今度はその下へちよいと丸をかいた。丸の中へ点を二つうって眼をつける。真中へ小鼻の開いた鼻をかいて、真一文字に口を横へ引張つた、これでは文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想が尽きたと見えて、そこそこに顔を塗り消してしまった。主人はまた行を改める。彼の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録か何かになるだろうとただ宛もなく考えているらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致体で一気呵成に書き流した、何となくごたごたした文章である。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハハ面白い」と笑つたが「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消そう」とその句だけへ棒を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な併行線を描く、線がほかの行まで食み出しても構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭を捻つて見る。文章を髭から捻り

出して御覽に入れますと云う見幕で猛烈に捻つてはねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、茶の間から妻君が出て来て来てびたりと主人の鼻の先へ坐わる。「あなたちよつと」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼を叩くような声を出す。返事が気に入らないと見えて妻君はまた「あなたちよつと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「今月はちよつと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも葉札はしましたし、本屋へも先月払つたじやないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取つた鼻毛を天下の奇観のごとく眺めている。「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵麩を御食べになつたり、ジャムを御舐めになるものですから」「元来ジャムは幾缶舐めたのかい」「今月は八つ入りしましたよ」「八つ？ そんなに舐めた覚えはない」「あなたばかりじやありません、子供も舐めます」「いくら舐めたつて五六円くらいなものだ」と主人は平氣な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴんと針を立てたごとくに立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入つた体で、ふつと吹いて見る。粘着力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャムばかりじやないんです、ほかに買わなけりや、ならない物もあります」と妻君は大に不平な氣色を両頬に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人はまた指を突つ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、黒いのや、種々の色が交る中に一本真白なのがある。大に驚いた様子で穴の開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手を突き戻す。「ちよつと見ろ、鼻毛の白髪だ」と主人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這入る。經濟問題は断念したらしい。主人はまた天然居士に取り懸

る。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかくとうと焦る体であるがなかなか筆は動かない。「焼芋を食うも蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺する。「香一、炷もあまり唐突だから已めろ」と惜気もなく筆誅する。余す所は「天然居士は空間を研究し論語を読む人である」と云う一句になつてしまつた。主人はこれでは何だか簡單過ぎるようだと考えていたが、ええ面倒臭い、文章は御廃しにして、銘だけにしろと、筆を十文字に揮つて原稿紙の上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せつかくの苦心も一字残らず落第となつた。それから裏を返して「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫」と意味不明な語を連ねているところへ例のごとく迷亭が這入つて来る。迷亭は人の家も自分の家も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ずかずか上つてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞い込む事もある、心配、遠慮、気兼、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立つたまま主人に聞く。「そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらんさ。天然居士の墓銘を撰しているところなんだ」と大袈裟な事を云う。「天然居士と云うなあやはり偶然童子のような戒名かね」と迷亭は不相変出鱈目を云う。「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有りやしないがまずその見当だろうと思つていらあね」「偶然童子と云うのは僕の知つたものじゃないようだが天然居士と云うのは、君の知つてる男だぜ」「一体だれが入つて空間論と云う題目で研究していたが、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまつた。

曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の所作だい」「僕さ、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名ほど俗なものはないからな」と天然居士はよほど雅な名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあその墓碑銘と云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫」と大きな声で読み上げる。「なるほどこりやあ善い、天然居士相当のところだ」主人は嬉しそうに「善いだらう」と云う。「この墓銘を沢庵石へ彫り付けて本堂の裏手へ力石のように抛り出して置くんだね。雅でいいや、天然居士も浮かばれる訳だ」「僕もそうしようと思っっているのさ」と主人は至極真面目に答えたが「僕あちよつと失敬するよ、じき帰るから猫にでもからかつていてくれ給え」と迷亭の返事も待たず風然と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顔もしていられないから、ニヤーニヤーと愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這い上つて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥つたな、どれ」と無作法にも吾輩の襟髪を攫んで宙へ釣るす。「あと足をこうぶら下げては、鼠は取れそうもない、……どうです奥さんこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣りの室の妻君に話しかける。「鼠どころじゃございませぬ。御雑煮を食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところで旧悪を暴く。吾輩は宙乗りをしながらも少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩を叩してくれない。「なるほど踊りでもおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のならない相好ですぜ。昔しの草双紙にある猫又に似ていますよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君に話しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷

へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注ぎ易えて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ参るにも断わつて行つた事の無い男ですから分りかねますが、大方御医者へでも行つたんでしょう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に捕まつちや災難ですな」「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一向頓着しない。「近頃はどうです、少しは胃の加減が能いんですか」「能いか悪いか頓と分りません、いくら甘木さんにかかつたつて、あんなにジャムばかり嘗めては胃病の直る訳がないと思います」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを嘗めるんですかまるで小供のようですね」「ジャムばかりじゃやないんで、この頃は胃病の薬だとか云つて大根卸しを無暗に嘗めますので……」「驚ろいたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸の中にはジャスターゼが有るとか云う話しを新聞で読んでからです」「なるほどそれでジャムの損害を償おうと云う趣向ですな。なかなか考えていらあハハハハ」と迷亭は細君の訴を聞いて大に愉快な気色である。「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまして……」「ジャムをですか」「いいえ大根卸を……あなた。坊や御父様がうまいものをやるからおいでつて、——たまに小供を可愛がつてくれるかと思つたとそんな馬鹿な事ばかりするんです。二三日前には中の娘を抱いて箆筒の上へあげましてね……」「どう云う趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釈する。「なに趣向も何も有りやしません、ただその上から飛び下りて見ると云うんですわ、三つや四つの子の女ですもの、そんな御転婆な事が出来るはずがないです」「なるほどこりや趣向が無さ過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、

辛防しんぼうは出来ませんわ」と細君おおいは大に気焰きえんを揚げる。「まあそんなに不平を云わんでも善いできあ。こうやって不足なくその日その日が暮らして行かれれば上の分ぶんですよ。苦沙弥君くしゃみくんなどは道楽はせず、服装にも構わず、地味に世帯向きしよたいむに出来上った人でさあ」と迷亭は柄がらにない説教を陽気な調子でやっている。「ところがあなた大違いで……」「何か内々でやりますかね。油断のならない世の中だからね」と飄然ひょうぜんとふわふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、無暗むやみに読みもしない本ばかり買いましたね。それも善い加減に見計みはからって買ってくれると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何冊でも取って来て、月末になると知らん顔をしてるんですもの、去年の暮なんか、月々の溜たまって大変困りました」「なあに書物なんか取って来るだけ取って来て構わんですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云つていりや帰ってしまいまさあ」「それでも、そういつまでも引張る訳にも参りませんから」と妻君は無然むぜんとしている。「それじゃ、訳を話して書籍費を削減させるさ」「どうして、そんな言ことを云つたって、なかなか聞くものですか、この間などは貴様は学者の妻さいにも似合わん、毫ごうも書籍の価値を解しておらん、昔むかし羅馬ローマにこう云う話しがある。後学のため聞いておくと云うんです」「そりや面白い、どんな話ですか」迷亭は乗気になる。細君に同情を表していると、いうよりむしろ好奇心に駆かられていく。「何んでも昔し羅馬ローマに樽金たるきんとか云う王様があつて……」「樽金たるきん? 樽金たるきんはちと妙ですよ」「私は唐人とうじんの名なんかむずかしくて覚えられませんわ。何でも七代目なんだそうです」「なるほど七代目樽金たるきんは妙ですな。ふんその七代目樽金たるきんがどうかしましたかい」「あら、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知っていらつしやるなら教えて下さればいいじゃありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食つて掛る。「何冷

かすなんて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は振ふるつてると思つてね……ええお待ちなさいよ羅馬ローマの七代目の王様ですね、こうつとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・プラウドの事でしょう。まあ誰でもいい、その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持つて来て買つてくれないかと云つたんだそうです」「なるほど」「王様がいくらなら売るといつて聞いたら大変な高い事を云うんですつて、あまり高いもんだから少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚やいてしまつたそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かで見られない事が書いてあるんですつて」「へえー」「王様は九冊が六冊になつたから少しは価ねも減つたらうと思つて六冊でいくらだと聞くと、やはり元の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとつて火にくべたそうです。王様はまだ未練があつたと見えて、余つた三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても代価は、元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、残つてる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はどうとう高い御金を出して焚やけ余あまりの三冊を買つたんですつて……どうだこの話で少しは書物のありがた味みが分つたらう、どうだと力味りきむのですけれど、私にや何なにがありがたいんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促うながす。さすがの迷亭も少々窮きつしたと見えて、袂たもとからハシケチを出して吾輩をじゃらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考かんえつたように大きな声を出す。「あんなに本を買つて矢鱈やたらに詰つめ込むものだから人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学雑誌を見たら苦沙弥君くしゃみくんの評ひょうが出ていましたよ」「ほんと

に？」と細君は向き直る。主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行ばかりですがね。苦沙弥君の文は行雲流水のごとしとありましたよ」細君は少しにこにこして「それぎりですか」「その次にね——出ずるかと思えば忽ち消え、逝ゆいては長とこしなえに帰るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞ほめたんでしようか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でしような」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もございますまいが、よつぽど偏屈へんくつでしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだつてなどは学校から帰つてすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒めんどうなものですから、あなた外套がいたうも脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳おぜんを火燵ひたひたの上へ乗せまして——私は御櫃おほちを抱かかえて坐つておりましたがおかしくつて……」「何だかハイカラの首実検のようですね。しかしそんなところが苦沙弥君の苦沙弥君たるところで——とにかく月並つきなみでない」と切せつない褒ほめ方をする。「月並か月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あまり乱暴ですわ」「しかし月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体月並月並と皆さんが、よくおつしやいますか、どんなのが月並なんです」と開き直つて月並の定義を質問する、「月並ですか、月並と云うと——さようちと説明しにくいのですが……」「そんな曖昧あいまいなものなら月並だつて好きさうなものじゃありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分つています、ただ説明しにくいだけの事ことでさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしよう」と細君は我知われらず穿うがつた事

を云う。迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二、八か二、九からぬと言わず語らず物思いの間に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ連中を云うんです」「そんな連中があるでしょうか」と細君は分らんものだから好加減な挨拶をする。「何だかごたごたして私には分りませんわ」とついに我を折る。「それじゃ馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニス首をつけて一二年欧州の空気で包んでおくんですね」「そうすると月並が出来るでしょうか」「迷亭は返事をしないで笑っている。「何そんな手数のかかる事をしないで出来ませう。中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうでしょうか」と細君は首を捻つたまま納得し兼ねたと云う風情に見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間やら帰つて来て迷亭の傍へ坐わる。「まだいるのかはちと酷だな、すぐ帰るから待ってい給えと言つたじゃないか」「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧みる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまったぜ」「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫くらい沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を撫でてくれる。

「君は赤ん坊に大根卸しを管めさしたそうだな」「ふむ」と主人は笑つたが「赤ん坊でも近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や辛いのはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「まるで犬に芸を仕込む気であるから残酷だ。時に寒月はもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時までに苦沙弥の家へ来いと端書を出しておいたから」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに今日のはこつちの趣向じゃない寒月先生自身の要求さ。先生何でも理学協会で演

説をするとか云うのでね。その稽古をやるから僕に聴いてくれと云うから、そりやちようどいい苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にしておいたのさ——なあに君はひま人だからちようどいいやね——差支えなんぞある男じやない、聞くがいいさ」と迷亭は独りで呑み込んでいる。「物理学の演説なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の専断を憤ったものごとくに云う。「ところがその問題がマグネ付けられたノツズルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないんだ。首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題なのだから傾聴する価値があるさ」「君は首を縊り損くなつた男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞伎座で悪寒がするくらいの人間だから聞かれないと云う結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩く。妻君はホホと笑つて主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫でる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌をするといふので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての白襟を聳やかして、男振りを二割方上げて、「少し後れまして」と落ちつき払つて、挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つたところなんだ。早速願おう、なあ君」と主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しましょう」と云う。「いよー本式にやるのか次には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠しから草稿を取り出して徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌の御浚いを始める。

「罪人を絞罪の刑に処すると云う事は重にアングロサクソン民族間に行われた方法でありま

して、それより古代に溯つて考えますと首縊りは重に自殺の方法として行われた者であります。猶太人中に在つては罪人を石を抛げつけて殺す習慣であつたそうでございます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獸または肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタスの説に従つて見ますと猶太人はエジプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つたように思われます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴だけを十字架に釘付けにして夜中曝し物にしたそうで御座います。波斯人は……。「寒月君首縊りと縁がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「これから本論に這入るところですから、少々御辛防を願います。……さて波斯人はどうかと申しますとこれもやはり処刑には磔を用いたようでございます。但し生きているうちに張付けに致したもののか、死んでから釘を打つたものかその辺はちと分りかねます……。「そんな事は分らんでもいいさ」と主人は退屈そうに欠伸をする。「まだいろいろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であらつしやいませうから……。「あらつしやいませうより、いらつしやいませうの方が聞きいいよ、ねえ苦沙弥君」とまた迷亭が咎め立をすると主人は「どつちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。「さていよいよ本題に入りまして弁じます」「弁じます、なんか講釈師の云い草だ。演舌家はもつと上品な詞を使つて貰いたいね」と迷亭先生また交ぜ返す。「弁じます、が下品なら何と云つたらいいでしょう」と寒月君は少々むつとした調子で問いかける。「迷亭のは聴いているのか、交ぜ返しているのか判然しない。寒月君そんな弥次馬に構わず、さつさとやるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むつとして弁じましたる柳かな、かね」と迷亭はあいかわらず飄然たる事を云う。寒

月は思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いましたのは、私の調べました結果によりま
 すると、オデイセーの二十二巻目に出ております。即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二
 人の侍女を絞殺するという条りでございます。希臘語で本文を朗読しても宜しゅうございま
 すが、ちと銜うような気味にもなりますからやめに致します。四百六十五行から、四百七十
 三行を御覧になると分ります」「希臘語云々はよした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わ
 んばかりだ、ねえ苦沙弥君」「それは僕も賛成だ、そんな物欲しそうな事は言わん方が奥床し
 くて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。両人は毫も希臘語が読めないのであ
 る。「それではこの両三句は今晩抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、
 彼のテレマカスがユーミアス及びフヒリーシャスの援を藉りて繩の一端を柱へ括りつけます。
 そしてその繩の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の
 端をぐいと引張つて釣し上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツのように女が
 ぶら下つたと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は繩の一端を前のごとく柱へ
 括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そしてその高い繩から何本か別の繩
 を下げて、それに結び目の輪になつたのを付けて女の頸を入れておいて、いざと云う時に女
 の足台を取りはずすと云う趣向なのです」「たとえて云うと縄暖簾の先へ提灯玉を釣したよう
 な景色と思えば間違はあるまい」「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申されませんが、
 もしあるとすればその辺のところかと思ひます。——それでこれから力学的に第一の場合は
 到底成立すべきものでないと云う事を証拠立てて御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云う

と「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を繋いでいる縄はホリゾンタルと仮定します。そこで $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_6$ を縄が地平線と形づくる角度とし、 T_1, T_2, \dots, T_6 を縄の各部が受ける力と見做し、 $T_7 \parallel X$ は縄のもつとも低い部分の受ける力とします。W は勿論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりますと、下のごとく十二の方程式が立ちます。 $T_1 \cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2$
 $\dots \dots (1) T_2 \cos \alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3 \dots \dots (2) \dots \dots$ 」方程式はそのくらいで沢山だろう」と主人は乱暴な事を云う。「実はこの式が演説の首脳なんです」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐つて伺う事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の体に見受けられる。「この式を略してしまおうとせつかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」と主人は平気で云う。「それでは仰せに従つて、無理ですが略しましょう」「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われます。ブラクストーンの説によるともし絞罪に処せられる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は再度同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には仮令兇漢でも二度

絞める法はないと云う句があるのです。まあどつちが本当か知りませんが、悪くすると一度死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。またやり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたのでやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見物人が手伝つて往生おちよさしたと云う話です。「やれやれ」と迷亭はこんなところへくると急に元氣が出る。「本当に死に損そしないだな」と主人まで浮かれ出す。「まだ面白い事があります首を縊くると背せいが一いっすん寸ばかり延びるそうです。これはたしかに医者いしやが計つて見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだい苦沙弥くしゃみなどはちと釣つて貫つちやあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背せいが延びて生き返る事があるだろうか」と聞く。「それは駄目きまに極きまつています。釣られて脊髓せきずいが延びるからなんで、早く云うと背が延びると云うより壊こわれるんですからね」「それじゃ、まあ止めよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでしたが、迷亭が無暗ふやうに風来坊ふうらいぼうのような珍語を挟はさむのと、主人が時々遠慮なく欠伸あくびをするので、ついに途中でやめて帰つてしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、いかなる雄弁ぶべんを振ふるつたか遠方で起つた出来事の事だから吾輩には知れよう訳がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃また迷亭先生は例のごとく空々くうくうとして偶然童子のごとく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、越智東風おちとうふうの高輪事件たかなわじけんを聞いたかい」と旅順陥落の号外を知らせに来たほどの勢を示す。「知らん、近頃あは合あわんから」と主人

は平生の通り陰気である。「きようはその東風子の失策物語を御報道に及ぼうと思つて忙しいところをわざわざ来たんだよ」「またそんな仰山な事を云う、君は全体不埒な男だ」「ハハハハハ不埒と云わんよりむしろ無埒の方だろう。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと名誉に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いている。純然たる天然居士の再来だ。

「この前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行つたんだそうさ。この寒いのによせばいいのに——第一今時泉岳寺などへ参るのはさも東京を知らない、田舎者のようじゃないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める権利はない」「なるほど権利は正にない。権利はどうでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知つてるか」「うんにゃ」「知らない？ だつて泉岳寺へ行つた事はあるだろう」「いいや」「ない？ こりや驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思つた。江戸つ子が泉岳寺を知らないのは情けない」「知らなくても教師は務まるからな」と主人はいよいよ天然居士になる。「そりや好いが、その展覽場へ東風が這入つて見物していると、そこへ独逸人が夫婦連で来たんだつて。それが最初は日本語で東風に何か質問したそうさ。ところが先生例の通り独逸語が使つて見たくてたまらん男だろう。そら二口三口べらべらやつて見たとき。すると存外うまく出来たんだ——あとで考える」とそれが災の本さね「それからどうした」と主人はついに釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾の蒔絵の印籠を見て、これを買いたいのが売つてくれるだろうかと聞くんだそうさ。その時東風の返事が面白いじゃないか、日本人は清廉の君子ばかりだから到底駄目だと云つたんだとさ。その辺は大分景気がよかつたが、それから独逸人の方では恰好な通弁を得たつもりでしきりに聞くそうさ」「何を？」「それがさ、何だか分るくらいなら心配はないんだが、早口で

無暗むやみに問い掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思うと鳶口とびぐちや掛矢かやの事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか習った事が無いんだから弱わらあね「もつともだ」と主人は教師の身の上に引き較べて同情を表する。「ところへ閑人ひまじんが物珍しそうにぼつぼつ集つてくる。仕舞しまいには東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易かえて先生大弱りの体ていさ」「結局どうなつたんだい」「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見えてさいならと日本語で云つてぐんぐん帰つて来たそうだ、さいならは少し変だ君の国ではさいならをさいならと云うかつて聞いて見たら何やつぱりさいならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだつて、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいいが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに取られて茫然ぼうぜんと見ていたそうだハハハ面白いやないか」「別段面白い事もないようだ。それをわざわざ報知しらせに来る君の方がよつほど面白いぜ」と主人は巻煙草まきたばこの灰を火桶ひおけの中へはたき落す。折柄おひがら格子戸のベルが飛び上るほど鳴つて「御免なさい」と鋭とい女の声こゑがする。迷亭と主人は思わず顔を見合せて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有けうだなど見ていると、かの鋭とい声の所有主は縮緬ちりめんの二枚重ねを畳へ擦り付けながら這入はいつて来る。年は四十の上を少し超こしたくらいだろう。抜け上つた生え際ぎわから前髪が堤防工事のように高く聳そびえて、少なくとも顔の長さの二分の一だけ天に向つてせり出している。眼が切り通しの坂くらいな勾配こうばいで、直線に釣るし上げられて左右に対立する。直線とは鯨くじらより細いという形容である。鼻だけは無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据え付けたように見える。三坪ほどの小庭へ招魂社しょうこんしゃの石灯笼いしどうろうを移した時のごとく、

独りで幅を利かしているが、何となく落ちつかない。その鼻はいわゆる鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、これではあんまりだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある唇を覗き込んでゐる。かく著るしい鼻だから、この女が物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口をきいてゐるとしか思われない。吾輩はこの偉大なる鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称して鼻子鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は先ず初対面の挨拶を終つて、「どうも結構な御住居ですこと」と座敷中を睨め廻す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言つたまま、ぶかぶか煙草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君ありや雨洩りか、板の木目か、妙な模様が出てゐるぜ」と暗に主人を促がす。「無論雨の洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭がすまして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で憤る。しばらくは三人鼎坐のまま無言である。

「ちと伺いたい事があつて、参つたんですが」と鼻子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私はつい御近所で——あの向う横丁の角屋敷なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理ですここには金田と云う標札が出ていますな」と主人はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したようだが金田夫人に対する尊敬の度合は前と同様である。「実は宿が çı 出まして、御話を伺うんですが会社の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利いたらうという眼付をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣いが初対面の女としてはあまり存在過ぎるのですでに不平なのである。「会社でも一つじゃ無いんです、二つも三つも兼ねてゐるんです。それにどの会社でも重役なんです——多分御存知でしょうが」これでも恐れ入らぬかと云う顔付をする。元

来この主人は博士とか大学教授とかいうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じておらんでも、融通の利かぬ性質として、到底実業家、金満家の恩顧を蒙る事は覚束ないと諦らめてゐる。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込のないと思ひ切つた人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には極めて迂濶で、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫も起らるのである。鼻子の方では天が下の一隅にこんな変人がやはり日光に照らされて生活していようとは夢にも知らない。今まで世の中の人間にも大分接して見たが、金田の妻ですと名乗つて、急に取扱いの変らない場合はない、どこの会へ出て、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる、いわんやこんな燻り返つた老書生においてをやで、私の家は向う横丁の角屋敷ですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚くだろうと予期していたのである。

「金田つて人を知つてるか」と主人は無雑作に迷亭に聞く。「知つてるとも、金田さんは僕の伯父の友達だ。この間なんざ園遊会へおいでになつた」と迷亭は真面目な返事をする。「へえ、君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵さ」と迷亭はいよいよ真面目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬に古渡更紗か何か重ねてすましている。「おや、あなたが牧山様の——何でいらつしゃいますか、ちつとも存じませんで、はなはだ失礼を致しました。牧山様には始終御世話になると、宿で毎々御尊を致しております」と急に叮嚀な言葉使をして、おまけに御辞儀までする、迷亭は「へええ何、

ハハハハ」と笑っている。主人はあつ氣けに取られて無言で二人を見ている。「たしか娘の縁辺えんぺんの事につきましてもいろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……」「へえー、そうですねか」とこればかりは迷亭にもちと唐突過とつとつぎたと見えてちよつと魂消たまげたような声を出す。「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでございますから、滅多めつたな所ところへも片付けられませんので……」「ごもつともで」と迷亭はようやく安心する。「それについて、あなたに伺おうと思つて上がつたんですがね」と鼻子は主人の方を見て急に存在ぞんざいな言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月みずしまんげつという男が度々上がるそうですが、あの人は全体どんな風な人でしょう」「寒月の事を聞いて、何にするんです」と主人は苦々にがにがしく云う。「やはり御令嬢の御婚儀上の関係で、寒月君の性行せいこうの一斑いっぺんを御承知になりたいという訳でしょう」と迷亭が氣転きを利かす。「それが伺えれば大變都合が宜よろしいのでございますが……」「それじゃ、御令嬢を寒月におやりになりたいとおつしやるんで」「やりたいなんてえんじや無いんです」と鼻子は急に主人を参らせる。「ほかにもだんだん口が有るんですから、無理に貰つていただくかないだつて困りやしません」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好いでしょう」と主人も躍起やつきとなる。「しかし御隠しなさる訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷亭は双方の間に坐つて、銀煙管ぎんぎせるを軍配團扇ぐんぱいうちわのように持つて、心の裡うちで八卦はっけよいやよいやと怒鳴つてゐる。「じゃあ寒月の方では非貰ひいたいとでも云つたのですか」と主人が正面から鉄砲を喰くわせる。「貰ひいたいと云つたんじゃないんですけれども……」「貰ひいたいだらうと思つていらつしやるんですか」と主人はこの婦人鉄砲に限ると覺おぼつたらしい。「話しはそんなに運んでるんじゃないませんが——寒月さんだつて満更まんざら嬉うれしくない事もないでしょう」と土俵際で持ち直

す。「寒月が何かその御令嬢に恋着したというような事でもありませんか」あるなら云つて見ろと云う榎幕で主人は反り返る。「まあ、そんな見当でしょうね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。今まで面白氣取りで行司氣取りで見物していた迷亭も鼻子の一言に好奇心を挑撥されたものと見えて、煙管を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付け文でもしたんですか、こりや愉快だ、新年になつて逸話がまた一つ殖えて話しの好材料になる」と一人で喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もつと烈しいんですさあ、御二人とも御承知じゃありませんか」と鼻子は乙にからまつて来る。「君知つてるか」と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿げた調子で「僕は知らん、知つていりや君だ」とつまらんとところで謙遜する。「いえ御兩人共御存じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」と御兩人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私しから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けたじやありませんか、その晩帰りに吾妻橋で何かあつたでしょう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑になるかも知れませんから——あれだけの証拠がありや充分だと思ひますが、どんなものでしょう」と金剛石入りの指環の嵌つた指を、膝の上へ併べて、つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃には胆を抜かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘡の落ちた病人のように坐つていたが、驚愕の箍がゆるんでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云う感じが一度に呐喊してくる。兩人は申し合せたごとく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失礼だと兩人を

睨みつける。「あれが御嬢さんですか、なるほどこりやいい、おっしゃる通りだ、ねえ苦沙弥君、全く寒月はお嬢さんを恋つてるに相違ないね……もう隠したつてしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云つたままである。「本当に御隠しなさつてもいけませんよ、ちゃんと種は上つてるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやにや笑つていては埒があかんじやないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見するからな。——しかし不思議と云えば不思議です、金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になつたんです、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌る。「私しの方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになつたんです」「じきこの裏にいる車屋の神さんからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「ええ、寒月さんの事じゃ、よつぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰うんです」「そりや苛い」と主人は大きな声を出す。「なあに、あなたは何をなさろうとおっしゃろうと、それに構つてるんじゃないんです。寒月さんの事だけです」「寒月の事だつて、誰の事だつて——全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一人怒り出す。「しかしあなたの垣根のそとへ来て立つているのは向うの勝手じゃありませんか、話しが聞えてわるけりやもつと小さい声でなさるか、もつと大きなうちへ御這入んなさるがいいでしょう」と鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじゃありません。新道の二絃琴の師匠からも大分いろいろな事を聞いています」「寒月

の事をですか」「寒月さんばかりの事じゃありません」と少し凄(すど)い事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分だけ人間らしい顔をしている、馬鹿野郎です」「憚(はば)り様、女ですよ。野郎は御門(おかど)違いです」と鼻子の言葉使いはますます御里(おきと)をあらわして来る。これではまるで喧嘩(けんか)をしに来たようなものであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。鉄拐(てつがい)仙人が軍鶏(しやも)の蹴(け)合いを見るような顔をして平気で聞いている。

悪口(あくぐち)の交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおっしゃるが、私(わたし)の聞いたんじや、少し違いますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじゃ御嬢さんの方が、始め病気になつて——何(なに)だか譚話(うわごと)をいったように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに○○博士の夫人から聞いたと云っていましたぜ」「それがこつちの手なんでさあ、○○博士の奥さんを頼んで寒月さんの気を引いて見たんでさあね」「○○の奥さんは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ。引き受けて貰うたつて、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろいろ物を使つているんですから」「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなくつちや御帰りにならないと云う決心ですかね」と迷亭も少し気持を悪くしたと見えて、いつになく手障(てざわ)りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したつて損の行く事じやなし、話そうじやないか苦沙弥君——奥さん、私(わたし)でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で差支(さしつか)えのない事は、みんな話しますからね、——そう、順を立ててだんだん聞い

て下さると都合がいいですね」

鼻子はようやく納得なつしやくしてそろそろ質問を呈出する。一時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたものごとく叮嚀ていれいになる。「寒月さんも理学士だそうですが、全体どんな事を専門にしているのをごさいます」「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから「へえー」とは云つたが怪訝けげんな顔をしている。「それを勉強すると博士になれましょうか」と聞く。「博士にならなければやれないとおつしやるんですか」と主人は不愉快そうに尋ねる。「ええ。ただの学士じゃね、いくらでもありますからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見ていよいよやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞いていただく事でしょう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でもその地球の——何かを勉強しているのをごさいますようか」「二三日前は首縊にさんちまえりの力学と云う研究の結果を理学協会で演説しました」と主人は何の気も付かずに云う。「おやいやだ、首縊くりだなんて、よつぽど変人ですなえ。そんな首縊くりや何かやつてたんじゃ、とても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊くつちやあむずかしいですが、首縊くりの力学なら成れないとも限らんです」「そうでしょうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺うかがう。悲しい事に力学と云う意味がわからんので落ちつきかねている。しかしこれしきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で八卦はっけを立てて見る。主人の顔は渋い。「そのほかになにか、分り易やすいものを勉強しておりますまいか」「そうですね、せんだつて団栗どんぐりのスタビリチを論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を書いた事があります」「団栗どんぐりなんぞでも大学校で勉強するものでしょうか」「さあ僕も

素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する価値があると見えませぬ」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが——この御正月に椎茸を食べて前歯を二枚折ったそうじゃございませんか」「ええその欠けたところに空也餅がくっ付いていましてね」と迷亭はこの質問こそ吾繩張内だと急に浮かれ出す。「色気のない人じゃございませんか、何だつて楊子を使わないんでしょう」「今度逢つたら注意しておきましょう」と主人がくすくす笑う。「椎茸で歯がかけるくらいじゃ、よほど歯の性が悪いと思われませんが、如何なものでしょう」「善いとは言われますまいな——ねえ迷亭」「善い事はないがちよつと愛嬌があるよあれぎり、まだ填めないところが妙だ。今だに空也餅引掛所になつてるなあ奇観だぜ」「歯を填める小遣がないので欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんでしょうか」「何も永く前歯欠成を名乗る訳でもないでしょうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちよつと拝見したいもんでございますが」「端書なら沢山あります、御覧なさい」と主人は書齋から三四十枚持つて来る。「そんなに沢山拝見しないでも——その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰つてやろう」と迷亭先生は「これなざあ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、狸だよ。何だつて撰りに撰つて狸なんぞかくんでしょうね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み

出す。「旧曆としの歳との夜よ、山の狸とが園遊会とをやつて盛さかんに舞踏まします。その歌うたに曰いく、来こいさ、としの夜よで、御山おやま婦美まも来くまいぞ。スツポコポンノポン」「何なにですこりや、人を馬鹿ばかにしているじゃございませんか」と鼻子はなは不平へいの体ていである。「この天女てんによは御氣ごきに入りませんか」と迷亭めいていがまた一枚まいまい出す。見ると天女てんによが羽衣はごろもを着て琵琶ひわを弾ひいている。「この天女てんによの鼻はなが少し小き過ぎるようですが」「何なに、それが人並ひとならですよ、鼻はなより文句ぶんくを読んで御覽ごらんなさい」文句ぶんくにはこうある。「昔むかしある所に一人の天文学者てんぶつがくしやがありました。ある夜よいつものように高い台たいに登のぼつて、一心いっしんに星ほしを見ていますと、空そらに美しい天女てんによが現あらわれ、この世よでは聞きかれぬほどの微妙めいぼうな音楽おんがくを奏そうし出したので、天文学者てんぶつがくしやは身に沁しむ寒ささも忘れて聞きき惚ぼれてしまいました。朝あ見るとその天文学者てんぶつがくしやの死骸しかいに霜しもが真白ましろに降ふつていました。これは本当ほんとうの噺はなしだと、あのうそつきの爺じいやが申しました」「何なにの事ことですこりや、意味いみも何なにもないじゃありませんか、これでも理学士りがくしで通とるんですかね。ちつと文芸俱楽部ぶんげいぐらくぶでも読よんだらよさそうなものですかねえ」と寒月君さつきみさんごんにやられる。迷亭めいていは面白おもしろ半分に「こりやどうです」と三枚目さんまいめを出す。今度は活版かっぺんで帆懸舟ほかけぶねが印刷しんぷつしてあつて、例れいのごとくその下に何か書き散ちらしてある。「よべの泊とまりの十六小女郎じゅうろくこじよう、親おやがないとて、荒磯あらいその千鳥ちどり、さよの寢覚ねざめの千鳥ちどりに泣ないた、親おやは船乗ふね乗りり波なみの底そこ」「うまいのねえ、感心かんしんだ事こと、話わせるじゃありませんか」「話わせますかな」「ええこれなら三味線さんまいせんに乗りますよ」「三味線さんまいせんに乗りや本物ほんぶつだ。こりや如何いかです」と迷亭めいていは無暗むやみに出です。「いえ、もうこれだけ拝見はいけんすれば、ほかのは沢山たくさんで、そんなに野暮やぼでないんだと云いう事は分わりましたから」と一人で合点ごてんしている。鼻子はなはこれで寒月さつきに関する大抵おほの質問しつもんを卒おえたものと見みえて、「これははなはだ失礼しつれいを致いたしました。どうか私の参まつた事は寒月さつきさんへは内々うちうちに願ねがいます」と得手勝手えてかつてな要求ようきうをす

る。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をする。「いづれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君が怵え切れなかつたと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあのくらいになるとなかなか振つていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口氣で「第一氣に喰わん顔だ」と悪らしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔の中央に陣取つて乙」に構えているなあ」とあとを付ける。「しかも曲つていらあ」「少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇抜過ぎる」と面白そうに笑う。「夫を剋する顔だ」と主人はなお口惜しそうである。「十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝しに逢うと云う相だ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところへ妻君が奥の間から出て来て、女だけに「あんまり悪口をおつしやると、また車屋の神さんにいつけられますよ」と注意する。「少しいつける方が薬ですよ、奥さん」「しかし顔の讒訴などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる訳でもありませんから——それに相手か婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻子の鼻を弁護すると、同時に自分の容貌も間接に弁護しておく。「何ひどいものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者だ、大分引き搔かれたじゃないか」「全体教師を何と心得ているんだらう」「裏の車屋くらいに心得ているのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに限るよ、一体博士になつておかんのが君

の不了見^{ふりょうけん}さ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いながら細君^{かみり}を顧みる。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君にまで見離される。「これでも今になるかも知れん、軽蔑^{けいべつ}するな。貴様などは知るまいが昔^{むか}しアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。ソフオクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだつて……」「馬鹿馬鹿しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。「失敬な、——甘木さんへ行つて聞いて見ろ——元来御前がこんな皺苦茶^{しわくちや}な黒木綿^{くろもめん}の羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけて、あんな立派な御召^{おめし}はごぜんせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀^{ていれい}になったのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎^{とが}じやございません」と細君うまく責任を逃^のがれる。

主人は伯父さんと云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、今日始めて聞いた。今までついに噂^{うわさ}をした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に頑物^{がんぶつ}でねえ——やはりその十九世紀から連綿と今日^{こんにち}まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホホホ面白い事ばかりおっしゃつて、どこに生きていらつしやるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじゃないです。頭にちよん鬘^{まげ}を頂いて生きてるんだから恐縮^{おそく}しまさあ。帽子を被^{かぶ}れつてえと、おれはこの年になるが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張^{おご}つてるんです——寒いから、もつと寝^ねていらつしやいと云うと、

人間は四時間寝れば充分だ。四時間以上寝るのは贅沢ぜいたくの沙汰だつて朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちはどうしても眠ねむたくていかなんだが、近頃に至つて始めて随処任意しよきようの庶境いに入つてはなはだ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ当り前でさあ。修業も糸瓜へちまも入いつたものじゃないのに当人は全く克己こつきの力で成功したと思つてるんですからね。それで外出する時には、きつと鉄扇てつせんをもつて出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持つて出るんだね。まあステッキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。ところがせんだつて妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合あいのない返事をする。「此年ことしの春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートに至急送れと云うんです。ちよつと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会しゆくじょうかいがあるからそれまでに間に合あうように、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかしいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な大きさを買つてくれ、洋服も寸法を見計らつて大丸だいまるへ注文してくれ……」「近頃は丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋しろぎやと間違えたんだあね」「寸法を見計つてくれたつて無理じゃないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どうした?」「仕方がないから見計らつて送つてやった」「君も乱暴らんぼうだな。それで間に合つたのかい」「まあ、どうにか、こうにかおつついたんだらう。国の新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートにて、例の鉄扇てつせんを持ち……」「鉄扇だけは離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは入れてやろうと思つてゐるよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かつ

た」「ところが大間違き。僕も無事に行つてありがたいと思つてると、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、手紙が添えてあつてね、せっかく御求め被下候えども少々大きく候間、帽子屋へ御遣わしの上、御縮め被下度候。縮め賃は小為替にて此方より御送可申上候とあるのさ」「なるほど迂濶だな」と主人は己れより迂濶なものの天下にある事を発見して大に満足の体に見える。やがて「それから、どうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴して被つていらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやにや笑う。「その方が男爵でいらつしやるんですか」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」「その鉄扇の伯父さまが」「なめに漢学者でさあ、若い時聖堂で朱子学か、何かにこり固まつたものだから、電気灯の下で恭しくちよん鬚を頂いているんです。仕方がありません」とやたらに頤を撫で廻す。「それでも君は、さつきの女に牧山男爵と云つたようだぜ」「そうおつしやいましたよ、私も茶の間で聞いておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同意する。「そうでしたかなアハハハハ」と迷亭は訳もなく笑う。「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長くらいになつていませあ」と平気なものである。「何だか変だと思つた」と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であるな嘘が付けますねえ。あなたもよつほど法螺が御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上わ手でさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣いはありません」「しかし奥さん、僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰く付きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿智慧から割り出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディの神様も活眼の士なきを嘆げざるを得ざる訳に立ち至

りますすからな」主人は俯目になつて「どうだか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。聞いた事さえ今が始めてである。主人の家で実業家が話頭に上つた事は一返もないので、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻図らずも鼻子の訪問を受けて、余所ながらその談話を拝聴し、その令嬢の艶美を想像し、またその富貴、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側に寝転んでいられなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方では博士の奥さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院まで買収して知らぬ間に、前齒の欠けたのさえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つて、ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置している女の事だから、滅多な者では寄り付ける訳の者ではない。こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに銭がなさ過ぎる。迷亭は銭に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを与える便宜は尠かるう。して見ると可哀相なのは首縊りの力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エピックテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の家に寄寓する猫で、世間一般の痴猫、愚猫とは少しく撰を殊にしている。この冒険をあえてするくらい義侠心は固より尻尾の先に畳み込んである。何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが、これはただ

に個人のためにする血氣躁狂の沙汰ではない。大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現実にする天晴な美挙だ。人の許諾を経ずして吾妻橋事件などを至る処に振り廻わす以上は、人の軒下に犬を忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴する以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至るまでを使用して国家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は——猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解は少々閉口するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、椽側へ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ御三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されない。翌日とも云わずこれから出掛けようと勇猛精進の大決心を起して台所まで飛んで出たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達しているのみならず、脳力の発達においてはあえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな咽喉の構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、肝心の寒月君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、せつかくの智識も無用の長物となる。これは愚だ、やめようかしらんと上り口で佇んで見た。

しかし一度思い立った事を途中でやめるのは、白雨が来るかと待っている時黒雲共隣国へ通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のためなら、たとい無駄死をやるまでも進むのが、義務を知る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を汚すくらいは猫として適當のところである。猫と生れた因果で寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はないが、猫だ

けに忍びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を成就するのはそれ自身において愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られているなと云う自覚を彼等に与うるだけが愉快である。こんなに愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋館のごとく傲慢に構えているんだらうと、門を這入ってその建築を眺めて見たがただ人を威圧しようとして、二階作りが無意味に突つ立っているほかに何等の能もない構造であつた。迷亭のいわゆる月並とはこれであろうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜けて勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所の十倍はたしかにある。せんだつて日本新聞に詳しく書いてあつた大隈伯の勝手にも劣るまいと思ふくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪ほどの土間に、例の車屋の神さんが立ちながら、御飯焚きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こいつは劍呑だと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云う。「知らねえ事があるもんか、この界限で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供の歳さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐変木だ。構あ事あねえ、みんな威嚇かしてやろうじやねえか」「それが好いよ。奥様の鼻が大き過ぎるの、顔が気に喰わないのつて——そりゃあ酷い事を云うんだよ。

自分の面つらあ今戸焼いまどやきの狸たぬき見たような癖くせに——あれで一人前いちにんまえだと思おもっているんだからやれ切れないじゃないか」「顔かほばかりじゃない、手拭てぬぐいを提さげて湯ゆに行くところからして、いやに高慢たかまんちぎじゃないか。自分おれくらいえらい者は無ないつもりでいるんだよ」と苦沙弥先生くさみせんせいは飯焚いひにも大に不人望おんぼうである。「何でも大勢おほ勢であいつの垣根かきの傍そばへ行いつて悪口あくぐちをさんざんいつてやるんだね」「そうしたらきつと恐れ入おそるよ」「しかしこつちの姿すがたを見せちゃ面白おもしろくねえから、声こゑだけ聞きかして、勉強べんきやうの邪魔じゃまをした上に、出来るだけじらしてやれつて、さつき奥様おくさまが言い付けておいでなすつたぜ」「そりゃ分わつているよ」と神かみさんは悪口あくぐちの三分さんぶんの一いちを引き受うけると云いう意味いみを示しす。なるほどこの手合てあひが苦沙弥先生くさみせんせいを冷ひややかに来るなと三人さんにんの横よこを、そつと通り抜ぬけて奥おくへ這入はいる。

猫ねこの足あしはあれども無なきがごとし、どこを歩いて歩いても不器用ぶきような音ねのした試ししがない。空そらを踏ふむがごとく、雲うみを行いくがごとく、水中すいじゆうに磬けいを打うつがごとく、洞裏どうりに瑟せきを鼓こするがごとく、醍醐だいごの妙味めいみを嘗なめて言詮ごんせんのほかに冷暖れいだんを自知じちするがごとし。月つき並なな西洋館せいやうくわんもなく、模範勝手もはんしょうてもなく、車屋くるまやの神かみさんも、権助ごんすけも、飯焚いひも、御嬢おんなさまさまも、仲働なかばたらきも、鼻子夫人なびしりふじんも、夫人ふじんの旦那様だんなさまもない。行いきたいところへ行いつて聞ききたい話を聞きいて、舌したを出だし尻尾しつぽを掉ふつて、髭ひげをぴんと立てて悠々ゆうゆうと帰かへるのみである。ことに吾輩わが輩はこの道みちに掛かけては日本にっぽん一の堪能かんのうである。草双紙くさそうしにある猫又ねこまたの血脈けつみやくを受けておりはせぬかと自ら疑なげうくらいである。墓がまの額ひたいには夜光やこうの明珠めいしゆがあると云いうが、吾輩わが輩の尻尾しつぽには神祇釈教しんぎしゃくきやう恣し常じょうは無な論ろんの事こと、満天下まんてんかの人間にんげんを馬鹿ばかにする一家相伝いつかそうでんの妙薬めうやくが詰つめ込んである。金田家きんたけの廊下らうかを人の知らぬ間まに横行よこぎするくらいは、仁王様におうさまが心太しんたを踏ふみ潰つぶすよりも容易りよういである。この時吾輩わが輩は我われながら、わが力量りきやうに感服かんぷくして、これも普段大事ふだんだいじ

にする尻尾の御蔭だなど気が付いて見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝してニヤン運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見たが、どうも少し見当が違うようである。なるべく尻尾の方を見て三拝しなければならん。尻尾の方を見ようと身体を廻すと尻尾も自然と廻る。追付こうと思つて首をねじると、尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳け出す。なるほど天地玄黄を三寸裏に収めるほどの靈物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を環る事七度び半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこにいるのだからちよつと方角が分らなくなる。構うものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障子の裏で鼻子の声がある。ここだと立ち留まつて、左右の耳をはすに切つて、息を凝らす。「貧乏教師の癖に生意氣じゃありませんか」と例の金切り声を振り立てる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲らしめのためにいじめてやろう。あの学校にや国のものもいるからな」「誰がいるの?」「津木ピン助や福地キシヤゴがいるから、頼んでからかわしてやろう」吾輩は金田君の生国は分らんが、妙な名前の人間ばかり揃つた所だと少々驚いた。金田君はなお語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだつて云います」「どうせ碌な教師じゃあるめえ」あるめえにも尠なからず感心した。「この間ピン助に遇つたら、私の学校にや妙な奴がおります。生徒から先生番茶は英語で何と云いますと聞かれて、番茶は Savage tea であると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなつています、どうもあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑になつて困りますと云つたが、大方あいつの事だぜ」「あいつに極つていまさあ、そんな事を云いそうな面構えですよ、いやに髭なんか生やして」「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは一疋だつて怪しかり

ようがない。「それにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返りなんでしょう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんぞ、有るはずがないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんもの言う事を真に受けるのも悪い」「悪いつて、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大変残念そうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句も出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が極つて念頭にないものか、その辺は懸念もあるが仕方がない。しばらく佇んでいると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬ先に、とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独りで何か大声で話している。その声が鼻子とよく似ているところをもつて推すと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂入水をあえてせしめたる代物だろう。惜哉障子越しで玉の御姿を拝する事が出来ない。従つて顔の真中に大きな鼻を祭り込んであるか、どうだか受合えない。しかし談話の模様から鼻息の荒いところなどを綜合して考えて見ると、満更人の注意を惹かぬ獅鼻とも思われない。女はしきりに喋舌つているが相手の声が少しも聞えないのは、噂にきく電話というものである。「御前は大和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取つておいておくれ、いいかえ——分つたかい——なに分らない？ おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。——なんだつて、——取れない？ 取れないはずはない、とるんだよ——へへへへ御冗談をだつて——何が御冗談なんだよ——いやに人をおひやかすよ。全体御前は誰だい。長吉だ？ 長吉なんぞじゃ訳が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云いな——なに？ 私しで何でも弁じます？——お前は失敬だよ。妾しを誰だか

知ってるのかい。金田だよ。——へへへへ善く存じておりますだつて。ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だつてえげさ。——なに？——毎度御鼻^{ごびな}に^きあずかりましてありますがとうございます？——何がありがたいんだね。御礼なんか聞きたかあないやね——おやまた笑つてるよ。お前はよつぽど愚物^{ぐぶつ}だね。——仰せの通りだつて？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切つてしまふよ。いいのかい。困らないのかよ——黙つてちや分らないじやないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。令嬢は癩癩^{かんしゃく}を起してやけにべルをジャラジャラと廻す。足元で狎^{ぢん}が驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶^{うかつ}に出来ないと、急に飛び下りて椽^{えん}の下へもぐり込む。

折柄^{おりな}廊下^{ちかづ}を近く足音がして障子を開ける音がする。誰か来たたと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらつしやいます」と小間使らしい声がある。「知らないよ」と令嬢は剣突^{けんつ}を食わせる。「ちよつと用があるから嬢^{じよう}を呼んで来いとおつしやいました」「うるさいね、知らないでば」と令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんだそうでございます」と小間使は氣を利^きかして機嫌を直そうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、糸瓜^{へちま}が戸迷^{とまど}いをしたような顔をして」「第三の剣突は、隣れなる寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髮^{そくはつ}に結^いつたの」「小間使はほつと一息ついて「今日^{こんにち}」となるべく単簡^{たんかん}な挨拶をする。「生意氣だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。「そうして新しい半襟^{はんえり}を掛けたじやないか」「へえ、せんだつて御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体^{もったい}ないと思つて行李^{こりり}の中へしまつておきましたか、今までのがあまり汚^{よご}れましたからかけ易^かえました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「こ

の御正月、白木屋へいらつしやいまして、御求め遊ばしたので——鶯茶へ相撲の番附を染め出したのでございます。妾しには地味過ぎていやだから御前に上げようとおつしやつた、あれでございます」「あらいやだ。善く似合うのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんじやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合うものをなぜだまつて貰つたんだい」「へえ」「御前にさえ、そのくらい似合うなら、妾しにだつておかしい事あないだらうじやないか」「きつとよく御似合い遊ばします」「似あうのが分つてる癖になぜ黙つているんだい。そうしてすまして掛けているんだよ、人の悪い」剣突は留めどもなく連発される。このさき、事局はどう発展するかと謹聴している時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狎が顔の中心に眼と口を引き集めたような面をして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績である。

帰つて見ると、奇麗な家から急に汚ない所へ移つたので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだような心持ちがする。探険中は、ほかの事に気を奪われて部屋の裝飾、襖、障子の具合などには眼も留らなかつたが、わが住居の下等なるを感ずると同時に彼のいわゆる月並が恋しくなる。教師よりもやはり実業家がえらいように思われる。吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾に伺いを立てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宣があつた。座敷へ這入つて見ると驚いたのは迷亭先生まだ帰らない、巻煙草の吸い殻を蜂の巣のごとく火鉢の中へ突き立てて、大胡坐で何か話し立てている。いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして天井の雨洩を余念もなく眺めている。あいかわらず太平

の逸民の会合である。

「寒月君、君の事を譚語にまで言った婦人の名は、当時秘密であつたようだが、もう話しても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけに関する事なら差支えないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに〇〇博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他言をしないと云う約束かね」「ええ」と寒月君は例のごとく羽織の紐をひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などには無頓着である。「そうさ、到底日露戦争時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の付いたぶつ割き羽織でも着なくつちや納まりの付かない紐だ。織田信長が髻入をするとき頭の髪を茶筌に結つたと云うがその節用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「実際これは爺が長州征伐の時に用いたので」と寒月君は真面目である。「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあろうものが、売れ残りの旗本のような出で立をするのはちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云つてくれる人もありますので——」「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで——」「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」「去る女性なんです」「ハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄仏を極め込んじやどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んではおりません。ここから乾の方角にあたる清浄な世界で……」「あんまり清浄でもなさそう

だ、毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、ここへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻って誰の事です」「君の親愛なる久遠くおんの女性にょしよの御母堂様だ」「へえー」「金田の妻さいという女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺うかがって見ると別段の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰もらってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねくる。「ところが大違ちがひ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有ぬし主ぬしでね……」迷亭が半ばなか言ない懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻について俳体詩はいたいしを考えているんだがね」と木に竹を接ついだような事を云う。隣の室へやで妻君がくすくす笑い出す。「随分君も呑気のんきだなあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこの顔に、鼻祭りはなまつりと云うのだ」「それから？」「次がこの鼻に、神酒かみ供たまえというのさ」「次の句は？」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑う。「次へ穴あな二つ、幽ゆかなりと付けちやどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月が「奥深く、毛も見えず、はいけますまいか」と各々出鱈目おのおのでたらめを並べていると、垣根かきねに近く、往来で「今戸焼いまどやきの狸たぬき今戸焼いまどやきの狸」と四五人わいわい云う声こゑがする。主人も迷亭もちよつと驚ろいて表の方を、垣かきの隙すきからすかして見ると「ワハハハハハ」と笑う声こゑがして遠くへ散る足の音がする。「今戸焼いまどやきの狸たぬきというな何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答える。「なかなか振ふるつていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上あつて「吾輩わが輩は年来美学上の見地けんちからこの鼻について研究した事がございますから、その一斑いっぱんを披瀝ひれきして、御両君ごりょうきんの清聴せいちょうを煩わづらわしたいと思おもいます」と演舌えんぜつの真似まねをやる。主人は

あまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是非承りたいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたくさんである。何もこんなに横風に真中から突き出して見る必用がないのである。ところがどうしてだんだん御覧のごとく斯様にせり出して参ったか」と自分の鼻を掴んで見せる。「あんまりせり出してもおらんじやないか」と主人は御世辞のないところを云う。「とにかく引つ込んではおりませんからな。ただ二個の孔が併んでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも知れませんから、予め御注意をしておきます。——で愚見によりますと鼻の発達は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したものでございます」「佯りのない愚見だ」とまた主人が寸評を挿入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を掴みます、鼻を掴んで、ことにこの局部だけに刺激を与えますと、進化論の大原則によつて、この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬くなります。ついに凝つて骨となります」「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ませんまい」と理学士だけあつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳べ続ける。「いや御不審はごもつともですが論より証拠この通り骨があるから仕方がありません。すでに骨が出来る。骨は出来ても鼻汁は出ますな。出ればかまらずにはいられません。この作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と変化して参ります——実に恐ろしい作用です。点滴の石を穿つがごとく、賓頭顱の頭が自から光明を放つがごとく、不思議薰不思議臭の喩のごとく、斯様に鼻筋が通つて堅くなります」「それでも君のなんぞ、

ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部は回護かいついの恐れがありますから、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、もつとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思ひます」寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達しますと偉観には相違おそろございませんが何となく怖おそろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁びりょうなどは素晴らしいには違いございませんが、少々峻嶮しゅんけん過ぎるかと思われます。古人のうちにもソクラチス、ゴールドスミスもしくはサツカレーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございましてようがその申し分のあるところに愛嬌あいきょうがございまして。鼻高きが故に貴たつとからず、奇きなるがために貴しとはこの故でもございましてようか。下世話げせわにも鼻より団子と申しますれば美的価値から申しますとまず迷亭くらいところが適当かと存じます」寒月と主人は「フフフフ」と笑い出す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ今いままで弁じましたのは——」「先生弁じましたは少し講釈師のようで下品ですから、よしていただきましよう」と寒月君は先日ふくしゅうの復讐ふくしゅうをやる。「さようしからば顔を洗つて出直しましようかな。——ええ——これから鼻と顔の権衡けんこうに一言論いちごん及いつたいと思ひます。他に関係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂などはどこへ出しても恥ちずかしからぬ鼻——鞍馬山くらまやまで展覧会があつても恐らく一等賞だろうと思われくるくらいな鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来上つた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したもの相違ちがひございません。しかしシーザーの鼻はなみを缺ひたでちよん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんな者でございましてようか。喩たとえにも猫の額ひたいと云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱ちゆうちゆうが突兀とつとつとして聳そびえたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据すえ付けたようなもので、少しく比例を

失するの極、その美的価値を落す事だろうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれのごとく、正しく英姿颯爽たる隆起に相違ございませぬ。しかしその周囲を圍繞する顔面的条件は如何な者でありませう。無論当家の猫のごとく劣等ではない。しかし癩癩病みの御かめのごとく眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話しをしているんだよ。何てえ剛突く張だろ」と云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたって、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに宛転たる嬌音をもつて、乾燥なる講筵に一点の艶味を添えられたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する訳であります。ですからこれは少々力学上の問題に立ち入りますので、勢御婦人方には御分りにくいかも知れませぬ、どうか御辛防を願ひます」寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにやする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツアイシングの黄金律を失している」と云う事なんで、それを嚴格に力学上の公式から演繹して御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。Rは鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」

「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困つたな。苦沙弥はとにかく、君は理学士だから分るだろうと思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略し

て結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これから結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪して起る心意的状況は、たとい後天性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長いものでありますから、いつ何時氣候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、咄嗟の間に膨脹するかも知れませんが、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になつた方が安全かと思われます、これには当家の御主人は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人はようよう起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大変熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表するためにやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく、「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを気にして病気にでもなつたら罪ですから——」「ハハハハハハ艶罪と云う訳だ」主人だけは大にむきになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極つてらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込めに掛つた奴だ。傲慢な奴だ」と独りでぶんぶんする。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハ」と云う声がする。一人が「高

慢ちきな唐変木だ」と云うと一人が「もつと大きな家へ這入りてえだろう」と云う。また一人が「御気の毒だが、いくら威張つたつて蔭弁慶だ」と大きな声をする。主人は椽側へ出て負けないような声で「やかましい、何だわざわざそんな堀の下へ来て」と怒鳴る。「ワハハハハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大に逆鱗の体で突然起つてステッキを持つて、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍つて「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を擦つてにやにやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立っている。人通りは一人もない、ちよつと狐に抓まれた体である。

四

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまさら解釈する必要もない。しばしばを自乗じじようしたほどの度合を示す語ことばである。一度やつた事は二度やりたいもので、二度試みた事は三度試みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必要と進化するのまた人間と相違はない。何のために、かくまで足繁あししげく金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちよつと人間に反問したい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の足たしにも血の道の薬にもならないものを、恥はずかし気もなく吐吞とどんして憚はばからざる以上は、吾輩が金田に出入しゅつにゅうするのを、あまり大きな声で咎とがめ立てをして貰いたくない。金田邸は吾輩の煙草たばこである。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男まおとこのようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、招待こそ受けないが、決して鯉かつおの切身きりみをちよろまかしたり、眼鼻が顔の中心に癢けいれんてき癢てき的に密着している狎君おんなどと密談するためではない。——何探偵？——もつてのほかの事である。およそ世の中に何が賤いやしい家業かぎようだと云つて探偵と高利貸ほど下等な職はないと思つている。なるほど寒月君のために猫にあるまじきほどの義侠心ぎぎやくしんを起して、一度は金田家の動静を余所よそながら窺うかがつた事はあるが、それはただの一遍で、その後は決して猫の良心に恥

ずるような陋劣な振舞を致した事はない。——そんなら、なぜ忍び込むと云うような胡乱な文字を使用した？——さあ、それがすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考によると大空は万物を覆うため大地は万物を載せるために出来ている——いかに執拗な議論を好む人間でもこの事実を否定する訳には行くまい。さてこの大空大地を製造するために彼等人類はどのくらいの労力を費やしているかと云うと尺寸の手伝もしておらぬではないか。自分が製造しておらぬものを自分の所有と極める法はなからう。自分の所有と極めても差し支えないが他の出入を禁ずる理由はあるまい。この茫茫たる大地を、小賢しくも垣を囲らし棒杭を立てて某々所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼天に繩張して、この部分は我の天、あの部分は彼の天と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買するならば我等が呼吸する空気を一尺立方に割つて切売をしても善い訳である。空気の切売が出来ず、空の繩張が不当なら地面の私有も不合理ではないか。如是観によりて、如是法を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入って行く。もつとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平気な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳がない。——しかし猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶わない。強勢は権利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこつちに道理があつても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に肴屋の天秤棒を喰う恐れがある。理はこつちにあるが権力は向うにあると云う場合に、理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の目を掠めて我理を貫くかと云えば、吾輩は無論後者を択ぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故に、忍ばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで差支えなき故に

まざるを得ず。この故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はないが自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩の眼に映じて覚えたくもない吾輩の脳裏に印象を留むるに至るのはやむを得ない。鼻子夫人が顔を洗うたんびに念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が阿倍川餅を無暗に召し上がるる事や、それから金田君自身が——金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である。単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧嘩をして、餓鬼大将のために頸筋を掴まえられて、うんと精一杯に土塀へ押し付けられた時の顔が四十年後の今日まで、因果をなしておりはせぬかと怪まるるくらい平坦な顔である。至極穩かで危険のない顔には相違ないが、何となく変化に乏しい。いくら怒つても平かな顔である。——その金田君が鮪の刺身を食つて自分で自分の禿頭をぴちやぴちや叩く事や、それから顔が低いばかりでなく背が低いので、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、それを車夫がおかしがつて書生に話す事や、書生がなるほど君の観察は機敏だと感心する事や、——一々数え切れない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築山の陰から向うを見渡して障子が立て切つて物静かであるなど見極めがつくと、徐々上り込む。もし人声が賑かであるか、座敷から見透かさるる恐れがあると思えば池を東へ廻つて雪隠の横から知らぬ間に椽の下へ出る。悪い事をした覚はないから何も隠れる事も、恐れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者に逢つては不運と諦めるより仕方がないので、もし世間が熊坂長範ばかりになつたらいかなる盛徳の君子もやはり吾輩のような態度に出ずるであらう。金田君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範のように五尺三寸を振り廻す氣遣はあるまいが、承る処によれば人と思わ

ぬ病気があるそうである。人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。して見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳である。しかしその油断の出来ぬところが吾輩にはちよつと面白いので、吾輩がかくまでに金田家の門を出入するのにも、ただこの危険が冒して見たいばかりかも知れぬ。それは追つて篤と考えた上、猫の脳裏を残りなく解剖し得た時改めて御吹聴仕ろう。

今日はどんな模様だなと、例の築山の芝生の上に顎を押しつけて前面を見渡すと十五畳の客間を弥生の春に明け放つて、中には金田夫婦と一人の来客との御話最中である。生憎鼻子夫人の鼻がこつちを向いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨め付けている。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。金田君は幸い横顔を向けて客と相對しているから例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り鼻の在所が判然しない。ただ胡麻塩色の口髯が好い加減な所から乱雑に茂生しているので、あの上に孔が二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春風もああ云う滑かな顔ばかり吹いていたら定めて楽だろうと、ついでながら想像を逞しゆうして見た。御客さんは三人の中で一番普通な容貌を有している。ただし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介するに足るような雑作は一つもない。普通と云うと結構なようだが、普通の極平凡の堂に上り、庸俗の室に入ったのはむしろ憫然の至りだ。かかる無意味な面構を有すべき宿命を帯びて明治の昭代に生れて来たのは誰だろう。例のごとく椽の下まで行つてその談話を承わらなくては分らぬ。

「……それで妻がわざわざあの男の所まで出掛けて行つて容子を聞いたんだがね……」と金田君は例のごとく横風な言葉使である。横風ではあるが毫も峻嶮なところがない。言語も彼

の顔面のごとく平板彪大である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございませぬので——なるほど、よい御思い付きで——なるほど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得んので」

「ええ苦沙弥じゃ要領を得ない訳で——あの男は私がいつしよに下宿をしている時分から実に煮え切らない——そりゃ御困りでございましたろう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのつてあなた、私しやこの年になるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱を受けた事はありやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔しから頑固な性分で——何しろ十年一日のごとくりードル専門の教師をしているのでも大体御分りになりましよう」と御客さんは体よく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻が何か聞くともまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪しからん訳で——一体少し学問をしているととかく慢心が萌すもので、その上貧乏をすると負け惜しみが出ますから——いえ世の中には随分無法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が付かないで、無暗に財産のあるものに喰つて掛るなんてえのが——まるで彼等の財産でも捲き上げたような気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さんは大恐悦の体である。

「いや、まことに言語同断で、ああ云うのは必竟世間見ずの我儘から起るのだから、ちつと懲らしめのためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つてやつたよ」

「なるほどそれでは大分答えましたろう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる当り方か承らぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出ても福地さんや、津木さんには口も利かないんだそうです。恐れ入って黙っているのかと思つたらこの間は罪もない、宅の書生をステッキを持つて追つ懸けたつてんです——三十面さげて、よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじゃありませんか、全くやけで少し気が変になつてゐるんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやつたんで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つたんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持つて跣足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ちつとやそつと、何か云つたつて小供じゃありませんか、髻面の大僧の癖にしかも教師じゃありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、金田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はいかなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくしておらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した論点と見える。

「それに、あの迷亭つて男はよつほどな酔興人ですね。役にも立たない嘘八百を並べ立てて。私しやあんな変挺な人にや初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺を吹くと見えますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになつたんですか。あれに掛つちやたまりません。あれも昔し自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですから能く喧嘩をしましたよ」

「誰だつて怒りまさあね、あんなじゃ。そりや嘘をつくのも宜うござんしょうさ、ね、義理が悪るいとか、ばつを合せなくつちやあならないとか——そんな時には誰しも心でない事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐かなくなつてすむのに矢鱈に吐くんだから始末に了えないじゃありませんか。何が欲しくつて、あんな出鱈目を——よくまあ、しらじらしく云えると思ひますよ」

「もつともで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せっかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も滅茶滅茶になつてしまいました。私や剛腹で忌々しくつて——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持つて帰れつて云うんだそうで。いえ御礼だから、どうか御取り下さいつて車夫が云つたら——悪くいじゃありませんか、俺はジャムは毎日舐めるがビールのような苦い者は飲んだ事がないつて、ふいと奥へ這入つてしまつたつて——言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じゃありませんか」

「そりや、ひどい」と御客さんも今度は本気に苛いと感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかつてさえいればすむようなものの、少々それでも困る事があるじゃや……」と鮪の刺身を食う時のごとく禿頭をぴちやぴちや叩く。もつとも吾輩は椽の下にいるから實際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近來大分聞馴れている。比丘尼が木魚の音を聞き分けるごとく、椽の下からでも音さえたしかであればすぐ

禿頭しゅつしよだなど出所しゅつしよを鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君きみを煩わづらわしたいと思つてな……」

「私わたしに出来できます事ことなら何でも御遠慮ごえんりよなくどうか——今度東京勤務とうきやうきんむと云う事ことになりましたのも全くいろいろ御心配ごしんぱいを掛けた結果けつこにほかならん訳わけでありますから」と御客ごきゃくさんは快よく金田君の依頼いぱんを承諾ちやくかくする。この口調くちやうで見るとこの御客ごきゃくさんはやはり金田君の世話せわになる人と見える。いやだんだん事件じけんが面白く発展はつぜんしてくるな、今日はあまり天氣てんきが宜いいので、来る気きもなしに来たのであるが、こう云う好材料こうざうりやうを得えようとは全く思い掛がけなんだ。御彼岸おひがんにお寺詣てらまいりをして偶然ごうぜん方丈ほうじやうで牡丹餅ぼたんもちの御馳走ごちそうになるような者ものだ。金田君はどんな事を客人きやくじんに依頼いぱんするかなど、椽せんの下から耳みみを澄すして聞きいている。

「あの苦沙弥くさみと云う変物へんぶつが、どう云う訳わけか水島みづしまに入れ智慧ぢえをするので、あの金田の娘むすめを貰もらつては行いかんなどとほのめかすそうだ——なあ鼻子びしそうだな」

「ほのめかすどころじゃありません。あんな奴やつの娘むすめを貰もらう馬鹿ばかがどこの国くににあるものか、寒月君せつぎん決して貰もらつちやいかんよつて云うんです」

「あんな奴やつとは何なにだ失敬しつげいな、そんな乱暴らんぼうな事を云いつたのか」

「云いつたどころじゃありません、ちゃんと車屋くるまやの神かみさんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君すずきどうだい、御聞ごきこの通りの次第しだいさ、随分厄介やくかいだろうが？」

「困こまりますね、ほかの事ことと違ちがつて、こう云う事ことには他人たにんが妄みだりに容喙ようけいするべきはずの者ものではありませんからな。そのくらいな事ことはいかな苦沙弥くさみでも心得こころえているはずですが。一体いったいどうした訳わけなんでしょう」

「それでの、君きみは学生時代がくせいじだいから苦沙弥くさみと同宿どうしゆくをしていて、今はとにかく、昔むかしは親密しんみつな間柄まがらで

あつたそうだから御依頼するのだが、君当人に逢つてな、よく利害を論^{さと}して見てくれんか。何か怒^{おこ}つているかも知れんが、怒るのは向^{むこう}が悪^{わる}いからで、先方がおとなしくしてさえいれば一身上の便宜も充分計つてやるし、氣に障^さわるような事もやめてやる。しかし向^{むこう}が向ならこつちもこつちと云う氣になるからな——つまりそんな我^がを張るのは当人の損だからな」

「ええ全くおつしやる通り愚^ぐな抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましよう」

「それから娘はいろいと申し込もある事だから、必ず水島にやると極^きめる訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなつたらあるいはもう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構^くわん」

「そう云つてやつたら当人も励^{はげ}みになつて勉強する事でしょう。宜^{よろ}しゅうございませす」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合^{へんあ}わん事だと思^{おも}うが、あの変^{へん}物の苦沙弥を先生先生と云つて苦沙弥の云う事は大抵聞^きく様子だから困る。なにそりや何も水島に限る訳では無^な論^{ろん}ないのだから苦沙弥が何と云つて邪魔をしよう^さと、わしの方は別^{べつ}に差^さ支^しえ^{つか}もせんが……」

「水島さんが可哀^{あは}れ^れそうですからね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢^あつた事もございませんが、とにかくこちらと御縁組が出来れば生涯^{しやうが}の幸福^{しあふ}で、本人は無^な論^{ろん}異^い存^{ぞん}はないのでしよう」

「ええ水島さんは貫^{くわん}いたがつていてるんですが、苦沙弥だの迷亭だのつて変^{へん}り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん所作しよさですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましよう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳しいのだがせんだつて妻さいが行つた時は今の始末で碌々ろくろく聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻つたら、もう帰つておりましたよ。近頃はどこに住んでおりますか知らん」

「この前を右へ突き当つて、左へ一丁ばかり行くと崩れかかつた黒塀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。帰りにちよつと寄つて見ましよう。なあに、大体分りましよう標札ひょうさつを見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を御饌粒ごぜんつぶで門へ貼り付けるのでしよう。雨がふると剥はがれてしまひましよう。すると御天氣の日にまた貼り付けるのです。だから標札は当あてにやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札きふだでも懸けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこまでも氣の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしよう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、好い事がある。何でも屋根に草はが生えたくちを探して行けば間違つこありませんよ」

「よほど特色のある家ですなアハハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。椽の下を伝わって雪隠を西へ廻って築山の陰から往来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ帰つて来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布を敷いて、腹這になつて麗かな春日に甲羅を干している。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋でも、金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、気の毒な事には毛布だけが春らしくない。製造元では白のつもりで織り出して、唐物屋でも白の気で売り捌いたのみならず、主人も白と云う注文で買って来たのであるが——何しろ十二三年以前の事だから白の時代はとくに通り越してただ今は濃灰色なる変色の時期に遭遇しつつかある。この時期を経過して他の暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、疑問である。今でもすでに万遍なく擦り切れて、豎横の筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称するのはもはや僭上の沙汰であつて、毛の字は省いて単にツトとでも申すのが適當である。しかし主人の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った以上は生涯持たねばならぬと思つていろいろらしい。随分呑気な事である。さてその因縁のある毛布の上へ前申す通り腹這になつて何をしているかと思つて出張つた顎を支えて、右手の指の股に巻煙草を挟んでいる。ただそれだけである。もつとも彼がフケだらけの頭の裏には宇宙の大真理が火の車のごとく廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ逼つて、一寸ばかり燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上

に落つるのも構わず主人は一生懸命に煙草から立ち上る煙の行末を見詰めている。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を幾重にも描いて、紫深き細君の洗髪あらいがみの根本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話しておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻しりを向けて——なに失礼な細君だ？ 別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のところへ頬杖ほおづえを突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊嚴そうげんなる尻しりを据すえたまでの事で無礼も糸瓜へちまもないのである。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間に礼儀作法などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。——さてかくのごとく主人に尻しりを向けた細君はどう云う了見りようけんか、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒髪を、麩海苔ふのりと生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけて、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。実はその洗髪を乾かすために唐縮細とうちりめいの布団ふとんと針箱を椽側えんがわへ出して、恭しく主人に尻しりを向けたのである。あるいは主人の方で尻しりのある見当けんとうへ顔を持って来たのかも知れない。そこで先刻御話ごわをした煙草たばこの煙りが、豊かに靡なびく黒髪くろがみの間に流れ流れて、時ならぬ陽炎かげろうの燃えるところを主人は余念もなく眺めている。しかしながら煙は固もとより一所いっしょに停とどまるものではない、その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の眼もこの煙りの髪毛かみげと纏もつれ合う奇観きかんを落ちなく見ようとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。主人はまず腰の辺から觀察を始めて徐々じょじょと背中を伝つたつて、肩から頸筋くびすじに掛かつたが、それを通り過ぎてようよう脳天のうてんに達した時、覚えずあつと驚いた。——主人が偕老同穴かいろうどうけつを契ちぎつた夫人の脳天の真中には真丸まんなまるな大きな禿はげがある。しかもその禿はげが暖かい日光を反射して、今や時を得顔とくがほに輝いている。思わざる辺へんにこの不思議な大発見

をなした時の主人の眼は眩まぼしい中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔どうこうの開くのも構わず一心不乱に見つめている。主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏のうりに浮んだのはかの家伝来の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿わらみよぎらである。彼の一家いっけは真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の倉の中に、薄暗く飾り付けられたる金箔厚きんぱくき厨子ずしがあつて、その厨子の中にはいつでも真鍮しんちゆうの灯明皿がぶら下つて、その灯明皿には昼でもぼんやりした灯ひがついていた事を記憶している。周囲が暗い中にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やいていたので小供心にこの灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿かんのんさまに喚よび起されて突然飛び出したものであろう。灯明皿は一分立たぬ間に消えた。この度は観音様の鳩かんのんさまの事を思い出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の關係もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必ず鳩に豆を買つてやつた。豆は一皿が文久ぶんきゆう二つで、赤い土器かわらけへ這入はいつていた。その土器かわらけが、色と云い大さと云いこの禿によく似ている。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だつて、御前の頭かみにや大きな禿があるぜ。知つてるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿かみげているなら欺だまされたのであると口へは出さないが心うちの中で思う。

「いつ出来ただか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだつて宜いじゃありませんか」と大に悟ったものである。

「どうだつて宜いって、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだつて宜いんだわ」と云つたが、さすが少しは気になると見えて、右の手を頭に乗せて、くるくる禿を撫でて見る。「おや大分大きくなつた事、こんなじゃ無いと思つていた」と言つたところをもつて見ると、年に合わして禿があまり大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は髻に結うと、ここが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から薬缶ばかり出来なければならん。そりゃ病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫で廻して見る。

「そんなに人の事をおっしゃるが、あなただつて鼻の孔へ白髪が生えてるじゃありませんか。禿が伝染するなら白髪だつて伝染しますわ」と細君少々ぶりぶりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が——ことに若い女の脳天がそんなに禿げちや見苦しい。不具だ」

「不具なら、なぜ御貫いになつたのです。御自分が好きで貰つておいて不具だなんて……」

「知らなかつたからさ。全く今日まで知らなかつたんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見せなかつたんだ」

「馬鹿な事を！ どの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんで

すか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は背せいが人並外はずれて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背せいは見ればすぐ分るじやありませんか、背せの低いのは最初から承知で御貫ぬきいになつたんじやありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延のびるかと思つたから貫ぬきつたのさ」

「甘はたらにもなつて背せいが延のびるなんて——あなたもよつぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖そでなしを抛ほうり出して主人の方に振ねじ向く。返答次第ではその分にはすまさんと云う権幕けんまくである。

「甘はたらになつたつて背せいが延のびてならんと云う法はあるまい。嫁に来てから滋養分でも食わしたら、少しは延のびる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔をして妙りくつな理窟りくつを述べていると門口かどぐちのベルが勢いきおいよく鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。いよいよ鈴木君がペンペン草めあてを目的めあてに苦沙弥くしやみ先生の臥がり竜窟りゆうくつを尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩けんかを後日に譲つて、倉皇そうじう針箱と袖そでなしを抱かかえて茶の間へ逃にげ込む。主人は鼠色の毛布けつとを丸めて書齋しよさいへ投げ込む。やがて下女が持つて来た名刺を見て、主人はちよつと驚おどろろいたような顔付であつたが、こちらへ御通し申してと言いい棄すてて、名刺を握にぎつたまま後架ごうかへ這入はいつた。何のために後架へ急に這入はいつたか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君の名刺めいしを後架まで持つて行つたのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭くさい所へ随行ずいぎんを命いのちぜられた名刺君である。

下女さげが更紗さらさの座布団ざふとんを床とこの前へ直して、どうぞこれへと引き下がった、跡あとで、鈴木君は一

応室内を見廻わす。床に掛けた花開万国春とある木菴の贗物や、京製の安青磁に活けた
 彼岸桜などを一々順番に点検したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るといつの間にか
 一疋の猫がすまして坐っている。申すまでもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君
 の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君
 のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断り
 もなく妙な動物が平然と蹲踞している。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。
 もしこの布団が勧められたまま、主なくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君はわざ
 と謙遜の意を表して、主人がさあどうぞと云うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れな
 い。しかし早晚自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗つたものは誰であろう。人間なら
 譲る事もあるうが猫とは怪しからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じしめ
 る。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもつとも癩に
 障る。少しは気の毒そうにでもしている事か、乗る権利もない布団の上に、傲然と構えて、
 丸い無愛嬌な眼をばちつかせて、御前は誰だいと云わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。
 これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平があるなら、吾輩の頸根っこを捉え
 て引きずり卸したら宜さそうなものだが、鈴木君はだまって見ている。堂々たる人間が猫に
 恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平
 を洩らさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重
 心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るで
 あるうが、体面を重んずる点より考えるといかに金田君の股肱たる鈴木藤十郎その人もこの

二尺四方の真中に鎮座まします猫大明神を如何ともする事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをしたとあつてはいささか人間の威厳に關する。真面目に猫を相手にして曲直を争うのはいかにも大人気ない。滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不便は忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪の念は増す訳であるから、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は衣紋をつくろつて後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもつて見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思う間もなく、主人はこの野郎と吾輩の襟がみを攫んでえいとばかりに椽側へ擲きつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかつたが、実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになつてね……」

「それは結構だ、大分長く逢わなかつたな。君が田舎へ行つてから、始めてじゃないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪るく思つてくれたもうな。会社の方は君の職業とは違つて随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違うもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は頭を美麗きれいに分けて、英国仕立のトウイードを着て、派手な襟飾えりかざりをして、胸に金鎖りさえピカつかせている体裁、どうしても苦沙弥君くしゃみやの旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんようになってね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気にして見せる。

「そりゃ本ものかい」と主人は無作法ぶさほうな質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはずだったか一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人いくにん出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云ってるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよつぽどだろう」
「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は呑気のんきでいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なつて見る、三日で嫌いやになるから」

「そうかな、何だか上品で、気楽で、閑暇ひまがあつて、すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になるならずと上にならなくつ

ちやいかん。下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒いたり、好かん猪口をいただきに出たり随分愚なもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば素町人だからな」と実業家を前に控えて太平楽を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく金と情死をする覚悟でなければやり通せないから——ところがその金と云う奴が曲者で、——今もある実業家の所へ行つて聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなくちやいけないと云うのさ——義理をかく、人情をかく、恥をかく、これで三角になるそうだ面白いじやないかアハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちよつと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何んだあんな奴」

「大変怒ってるね。なあに、そりや、ほんの冗談だろうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云う喩さ。君のようにそう真面目に解釈しちや困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行つたんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけたんだ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云ってるんだ。せんだって僕はあの鼻について俳体詩を作ったが

ね

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目さ。それに以前からあまり数奇でない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好を知ってるか」

「アハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名をつけられていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじゃないか鼻なんか丸くても尖んがってても」

「決してそうでない。君パスカル的事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大変化を来したろうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雑作に鼻を馬鹿にしてはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりやそうとして、今日来たのは、少し君に用事があつて来たんだがね——あの元君の教えたとか云う、水島——ええ水島ええちよつと思ひ出

せない。——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

「寒月か」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよつと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行つたら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだつて、細君もそう云つていたよ。苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上つたら、生憎迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分らなくしてしまつたつて」

「あんな鼻をつけて来るから悪いや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がおつたもんだから、そう立ち入つた事を聞く訳にも行かなかつたので残念だつたから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれないかつて頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士が嫌やでないなら中へ立つて纏めるのも、決して悪い事はないからね——それでやつて来たのさ」

「御苦労様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士と云う語を聞いて、どう云う訳か分らんが、ちよつと心を動かしたのである。蒸し熱い夏の夜に一縷の冷風が袖口を潜つたよ
うな気分になる。元来この主人はぶつ切ら棒の、頑固光沢消しを旨として製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情な文明の産物とは自からその撰を異にしている。彼が何ぞと云うと、むかつ腹をたててぶんぶんするのも這裏の消息は会得できる。先日鼻と喧嘩を

したのは鼻が気に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない話である。実業家は嫌いだから、実業家の片割れなる金田某も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨みもなく、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生である。もし鈴木君の云うごとく、当人同志が好いた仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき所作でない。——苦沙弥先生はこれでも自分を君子と思つている。——もし当人同志が好んでいるなら——しかしそれが問題である。この事件に対して自己の態度を改めるには、まずその真相から確かめなければならぬ。

「君その娘は寒月の所へ来たがつてるのか。金田や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりや、その——何だね——何でも——え、来たがつてるんだろうじゃないか」鈴木君の挨拶は少々曖昧である。実は寒月君の事だけ聞いて復命さえすればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて来なかつたのである。従つて円転滑脱の鈴木君もちよつと狼狽の気味に見える。

「だろ、うた判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわるかつた。令嬢の方でもたしかに意があるんだよ。いえ全くだよ——え？——細君が僕にそう云つたよ。何でも時々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじゃ寒月に意がないんじゃないか」

「そこがき、世の中は妙なもので、自分の好いている人の悪口などは殊更ことごとく云つて見る事もあるからね」

「そんな愚な奴がどこの国にいるものか」と主人は斯様な人情の機微かきに立ち入った事を云われても頓とんと感じがなない。

「その愚な奴が随分世の中にああるから仕方がない。現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑とまどいをした糸瓜へちまのようだなんて、時々寒月さんの悪口を云いますから、よつぽど心の中では思つてるに相違ありませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者だういしやくのように睨にらと見つめている。鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと疝かんづいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじやないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相應の家うちへやれるだろうじやないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云つちや失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だれが見たつて釣り合はんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が氣を揉もでるのは本人が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにもまごまごしてい

るとまた吶喊とつかんを喰う危険があるから、早く話しはなの歩を進めて、一刻も早く使命を完まうする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になったらやってもいいなんて威張おごつてる次第じゃない——誤解しちやいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も君の事を御世辞のない正直ない方かただと賞ほめていたよ。全く迷亭君がわるかつたんだろう。——それでさ本人が博士にでもなつてくれれば先方も世間へ対して肩身けんみが広い、面目めんぼくがあると云うんだがね、どうだろう、近々きんきんの内水島君は博士論文でも呈出して、博士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあに——金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ世間と云う者があるうとね、そう手軽にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りいにしてやりたくなる。主人を活いかすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうだか、それからまず問たい正ただして見なくちやいかんからな」

「問たい正ただすなんて、君そんな角張かどばつた事をして物が纏まとまるものじゃない。やつぱり普通の談話の際きにそれとなく氣を引いて見るのが一番近道だよ」

「氣を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん。——なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊わすのは善くないと思う。仮令勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはすのものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え。——いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかるのと到底助かりつこないんだから」と主人の代理に迷亭の悪口をきいてみると、噂をすれば陰の喩に洩れず迷亭先生例のごとく勝手口から飄然と春風に乗じて舞い込んで来る。

「いやー珍客だね。僕のような狎客になると苦沙弥はとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥のうちへは十年に一遍くらいくるに限る。この菓子はいつもより上等じゃないか」と藤村の羊羹を無雑作に頬張る。鈴木君はもじもじしている。主人はにやにやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾輩はこの瞬時の光景を椽側から拝見して無言劇と云うものは優に成立し得ると思つた。禪家で無言の問答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭どい幕である。

「君は一生旅鳥かと思つてたら、いつの間にか舞い戻つたね。長生はしたいもんだな。どんな僥倖に廻り合わんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対しても主人に対しても主人に対しても遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何となく気のおけるものだが迷亭君に限つて、そんな素振も見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見当が

つかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は当らず障らずの返事はしたが、何となく落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を発する。

「今日は諸君からひやかされに来たようなものだ。なんぼ田舎者だつて——これでも街鉄を六十株持つてるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持つていたが、惜しい事に大方虫が喰つてしまつて、今じゃ半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりやるところだつたが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、ああ云う株は持つてて損はないよ、年々高くなるばかりだから」

「そうだ仮令半株だつて千年も持つてるうちにや倉が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考えているんだから」とまた羊羹をつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の食い気が伝染して自ずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎に一度でいいから電車へ乗らしてやりたかつた」と主人は喰い欠けた羊羹の齒痕を撫然として眺める。

「曾呂崎が電車へ乗つたら、乗るたんびに品川まで行つてしまふは、それよりやつぱり

天然居士で沢庵石へ彫り付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、いい頭の男だったが惜しい事をした」と鈴木君が云うと、迷亭は直ちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を焚く事は一番下手だったぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎麦で凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくつて心があつて僕も弱った。御負けに御菜に必ず豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚び起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で每晚いつしよに汁粉を食いに出たが、その祟りで今じゃ慢性胃弱になつて苦しんでいるんだ。実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食つてるから曾呂崎より先へ死んで宜い訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、每晚竹刀を持って裏の卵塔婆へ出て、石塔を叩いてるところを坊主に見つかつて剣突を食つたじゃないか」と主人も負けぬ気になつて迷亭の旧悪を曝く。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれつて言つたつけ。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴だぜ。石塔と相撲をとつて大小三個ばかり転がしてしまつたんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元のように起せと云うから人足を傭うまで待つてくれと云つたら人足じゃいかん懺悔の意を表するためあなた自身が起きなくては

仏の意に背くと云うんだからね」

「その時の君の風采はなかつたぜ、金中のしゃつに越中禪で雨上りの水溜りの中でうんうん唸つて……」

「それを君がすました顔で写生するんだから苛い。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時ばかりは失敬だと心から思ったよ。あの時の君の言草をまだ覚えているが君は知ってるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えているものか、しかしあの石塔に帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰正月と彫つてあつただけはいまだに記憶している。あの石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行きたかつたくらいだ。実に美学上の原理に叶つて、ゴシック趣味な石塔だった」と迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりやいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩は美学を専攻するつもりだから天地間の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならん、気の毒だの、可哀相だのと云う私情は学問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきところでない」と平気で云うのだろう。僕もあんまりな不人情な男だと思つたから泥だらけの手で君の写生帖を引き裂いてしまった」

「僕の有望な画才が頓挫して一向振わなくなつたのも全くあの時からだ。君に機鋒を折られたのだね。僕は君に恨がある」

「馬鹿にしちゃいけない。こつちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から法螺吹だったな」と主人は羊羹を食ひ了つて再び二人の話の中に割り

込んで来る。

「約束なんか履行した事がない。それで詰問を受けると決して詫びた事がない何とか蚊とか云う。あの寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云う著述をすると云うから、駄目だ、到底出来る気遣はないと云ったのさ。すると迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑うなら賭をしようと言うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢りっこかなにかに極めた。きつと書物なんか書く気遣はないと思つたから賭をしたようなものの内心は少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだからな。ところが先生一向稿を起す景色がない。七日立つても二十日立つても一枚も書かない。いよいよ百日紅が散つて一輪の花もなくなつても当人平気であるから、いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行を逼ると迷亭すまして取り合わない」

「また何とか理窟をつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云つたぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて何人にも一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あつたのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを

奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がつている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒つていっている様子である。

「それは御氣の毒様、それだからその埋合せうめあわせをするために孔雀くわんぐの舌なんかを金と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒おこらずに待つていさ。しかし著書と云えば君、今日は一大珍報もたを齎もたらして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎もたらす男だから油断が出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起したのを知っているか。寒月はあんな妙に見識張つた男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思つたら、あれでやつぱり色気があるからおかしいじゃないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃は団栗博士どんぐりはかせの夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬと願あじと眼で主人に合図する。主人には一向意味いっこうが通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受けた時は金田の娘の事ばかりが氣の毒になつたが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は悪にくらしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの御見おみやげで、こればかりは迷亭先生自賛のごとくまずまず近來の珍報である。啻ただに珍報のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分のように出来損いの木像は

仏師屋の隅で虫が喰うまで白木のまま燻くすぶつていても遺憾いひかんはないが、これは旨うまく仕上がったと思おもう彫刻には一日も早く箔はくを塗ぬつてやりたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図はそつち除のけにして、熱心に聞く。「よく人の云う事を疑うぐる男だ。——もつとも問題は団栗どんぐりだか首縊くびくりの力学だか確しかと分らんかね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違ちがいない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞きくたんびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリストラム・シャンデーの中に鼻論はなろんがあるのを発見した。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料になつたろうに残念な事だ。鼻名びめいを千載せんざいに垂れる資格は充分ありながら、あのままで朽くち果つるとは不憫ふびん千万だ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写生してやろう」と相変らず口から出で任まかせに喋しゃべり立てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに主人に目くばせをするが、主人は不導体のごとく一向いっとう電気に感染しない。

「ちよつと乙おつだな、あんな者の子でも恋をするところが、しかし大した恋じゃなからう、大方鼻恋はなこいくらいなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰もらえばいいが」

「貰もらえばいいがって、君は先日大反対だったじゃないか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどうかしたんだろう。ねえ鈴木、君も実業家の末席を汚す一人だから参考のために言つて聞かせるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉るのは、少々提灯と釣鐘と云う次第で、我々朋友たる者が冷々黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、たとい実業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容子が少しも變つていないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡麻化そうとする。

「えらいと褒めるなら、もう少し博学なところを御目にかけるがね。昔しの希臘人は非常に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事には学者の智識に対してのみは何等の褒美も与えたと云う記録がなかつたので、今日まで実は大に怪しんでいたところさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ兩三日前に至つて、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑團は一度に氷解。漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歡天喜地の至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山なので、さすが御上手者の鈴木君も、こりや手に合わないと云う顔付をする。主人はまた始まったなと云わぬばかりに、象牙の箸で菓子皿の縁をかんかん叩いて俯つ向いている。迷亭だけは大得意で弁じつつける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒の淵から吾人の疑を千載の下に救い出してくれた者は誰だと思ふ。学問あつて以来の学者と称せらるる彼の希臘の哲人、逍遙派の元祖アリストトルその人である。彼の説明に曰くさ——おい菓子皿などを叩かんで謹聴して

いなくちやいかん。——彼等希臘人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美にもなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至つてはどうである。もし智識に対する報酬として何物をか与えんとするならば智識以上の価値あるものを与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の中にあるか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識に対して千両箱をオリムパスの山ほど積み、クリーサスの富を傾け尽しても相当の報酬を与えんとしたのであるが、いかに考えても到底釣り合はずがなと云う事を観破して、それより以来と云うものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまった。黄白青銭が智識の匹敵でない事はこれで十分理解出来るだろう。さてこの原理を服膺した上で時事問題に臨んで見るがいい。金田某は何だいな紙幣に眼鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語をもつて形容するならば彼は一個の活動紙幣に過ぎないのである。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところだろう。翻つて寒月君は如何と見ればどうだ。辱けなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫も倦怠の念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜団栗のスタビリチーを研究し、それでもなお満足する様子もなく、近々の中ロード・ケルヴィンを圧倒するほどな大論文を発表しようとしつつあるではないか。たまたま吾妻橋を通り掛つて身投げの芸を仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りがちの発作的所為で毫も彼が智識の間屋たるに煩いを及ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の喩をもつて寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識をもつて捏ね上げた二十八珊の弾丸である。この弾丸が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭はここに至つ

て迷亭一流と自称する形容詞が思うように出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾の感に多少ひるんで見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あつたつて粉な微塵になつてしまふさ。それだから寒月には、あんな釣り合わない女性は駄目だ。僕が不承知だ、百獣の中でもつとも聡明なる大象と、もつとも貪婪なる小豚と結婚するようなものだ。そうだろう苦沙弥君」と云つて退けると、主人はまた黙つて菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹んだ気味で

「そんな事も無かろう」と術なげに答える。さつきまで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗な事を云うと、主人のような無法者はどんな事を素つ破抜くか知れない。なるべくここは好加減に迷亭の鋭鋒をあしらつて無事に切り抜けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得ている。人生の目的は口舌ではない実行にある。自己の思い通りに着々事件が進捗すれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は極楽流に達せられるのである。鈴木君は卒業後この極楽主義によつて成功し、この極楽主義によつて金時計をぶら下げ、この極楽主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極楽主義でまんまと首尾よく苦沙弥君を説き落して当該事件が十中八九まで成就したところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風来坊が飛び込んで来たので少々その突然なるに面喰つて居るところである。極楽主義を發明したものは明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義で困却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからさうでもなからうなどと澄し返つて、例になく言葉寡なに上品に控

え込むが、せんだつてあの鼻の主が来た時の容子を見たらいかに実業家鼻負の尊公でも辟易するに極つてるよ、ねえ苦沙弥君、君大に奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちやいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに凶太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言つたつて何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家であるが巴里大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に応ずるため外出の際必ず七首を袖の下に持つて防禦の具となした事がある。ブルヌチエルがやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は……」

「だつて君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑魚が鯨をもつて自ら諭えるようなもんだ、そんな事を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだつて俺だつて同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもつて歩行くだけはあぶないから真似ない方がいいよ。大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあ小刀くらいなところだな。しかしそれにしても刃物は剣呑だから仲見世へ行つておもちゃの空気銃を買つて来て背負つてあるくがよかろう。

愛嬌があつていい。ねえ鈴木君」と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほつと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振り始めて君等に逢つたんで何だか窮屈な路次ろじから広い野原へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がならなくてね。何を云うにも気をおかなくちやならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくていい。ああ今日は凶ほからず迷亭君に遇あつて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸かけると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸えんげい矯風会きょうふうかいに行かなくつちやならんから、そこまでいつしよに行こう」「そりやちようどいい久し振りでいつしよに散歩しよう」と両君は手を携たずさえて帰る。

五

二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら写生文を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従つていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇行を弄するにも関らず逐一これを読者に報知するの能力と根気のないのはなはだ遺憾である。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要である。鈴木君と迷亭君の帰つたあとは木枯しのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜のごとく静かになつた。主人は例のごとく書齋へ引き籠る。小供は六畳の間へ枕をならべて寝る。一間半の襖を隔てて南向の室には細君が数え年三つになる、めん子さんと添乳して横になる。花曇りに暮れを急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取るように茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり続いたりして眠い耳底に折々鈍い刺激を与える。外面は大方朧であろう。晚餐に半ぺんの煮汁で鮑貝をからにした腹ではどうしても休養が必要である。

ほのかに承われれば世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮かれ歩く夜もあるとか云うが、吾輩はまだかかる心的変化に遭逢した事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓、おけらに至るまでこの道にかけて浮身を窠すのが万物の習いであるから、吾輩どもが朧うれしと、物騒な風流気を出すのも無理のない話である。回顧すればかく云う吾輩

も三毛子に思い焦がれた事もある。三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂である。それだから千金の春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと軽蔑する念は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も出来ぬ。そのそと小供の布団の裾へ廻つて心地快く眠る。……

ふと眼を開いて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ来て細君の隣に延べてある布団の中にいつの間にか潜り込んでゐる。主人の癖として寝る時は必ず横文字の小本を書齋から携えて来る。しかし横になつてこの本を二頁と続けて読んだ事はない。ある時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ提げてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つて三四冊も抱えて来る。せんだつてじゆうは毎晩ウエブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病気で贅沢な人が竜文堂に鳴る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して見ると主人に取つては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髻の先につかえるくらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の拇指が本の間に挟まったままであるところから推すと奇特にも今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニツケルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

細君は乳呑児を一尺ばかり先へ放り出して口を開いていびきをかいて枕を外している。およそ人間において何が見苦しいと云つて口を開けて寝るほどの不体裁はあるまいと思う。猫などは生涯しやうがいこんな恥をかいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を吐吞とどんするための道具である。もつとも北の方へ行くと人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を閉塞へいそくして口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーズーよりも見ともないと思う。第一天井から鼠ねずみの糞ふんでも落ちた時危険である。

小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体ていたらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利はこんなものだと言わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐ふくしゅうに姉の腹の上に片足をあげて踏反ふんぞり返っている。双方共寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転くわんてんしている。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ兩人とも不平も云わずおとなしく熟睡じくすいしている。

さすがに春の灯火ともしびは格別である。天真爛漫らんまんながら無風流極まるこの光景の裏うちに良夜を惜しめとばかり床ゆかしげに輝やいて見える。もう何時なんじだろうと室へやの中を見廻すと四隣はしんとしてただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋はざしりをする音のみである。この下女は人から齒軋はざしりをすると言われるといつでもこれを否定する女である。私は生れてから今日こんにちに至るまで齒軋はざしりをした覚おぼえはございませんと強情を張つて決して直しましようにとも御氣の毒でございませとも云わず、ただそんな覚おぼえはございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚おぼえはないに違ちがない。しかし事実は覚おぼえがなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこまでも善人だと考えているものがある。これ

は自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事実はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。——夜は大分更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中つた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の鼠だろう、鼠なら捕らん事に極めていから勝手にあばれるが宜しい。——またトントンと中る。どうも鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、憫然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せんだつてなどは主人の寝室にまで闖入して高からぬ主人の鼻の頭を嚙んで凱歌を奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わず戸締を外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに極まっている。御高名だけはおかねて承わっている泥棒陰士ではないか知らん。いよいよ陰士とすれば早く尊顔を拝したものだ。陰士は今や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ばかり進んだ模様である。三足目と思う頃揚板に蹶いてか、ガタリと夜に響くような音を立てた。吾輩の背中の毛が靴刷毛で逆に擦すられたような心持がする。しばらくは足音もしない。細君を見ると未だ口をあいて太平の空気を夢中に吐吞している。主人は赤い本に拇指を挟まれた夢でも見ているのだから。やがて台所でマチを擦る音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利かぬと見える。勝

手がわるくて定めし不都合だろう。

この時吾輩は蹲踞まりながら考えた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであろうか、または左へ折れ玄関を通過して書斎へと抜けるであらうか。——足音は襖の音と共に椽側へ出た。陰士はいよいよ書斎へ這入った。それぎり音も沙汰もない。

吾輩はこの間に早く主人夫婦を起してやりたいものだともうやく気が付いたが、さてどうしたら起きるやら、一向要領を得ん考のみが頭の中に水車の勢で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団の裾を啣えて振って見たらと思つて、二三度やつて見たが少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦り付けたらと思つて、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否やと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事おびただしい。此度は仕方がないからにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉に物が痞えて思うような声が出ない。やつとの思いで洩りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心の主人は覚める気色もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチリミチリと椽側を伝つて近づいて来る。いよいよ来たな、こうなつてはもう駄目だと諦らめて、襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺がう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てびたりと已む。吾輩は息を凝らして、この次は何をするだろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕る時は、こんな気分になれば訳はないのだ、魂が両方の眼から飛び出しそうな勢である。陰士の御蔭で二度とない悟を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧の三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それを透

して薄紅うすくれないなものがだんだん濃く写つたと思うと、紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間に暗い中に消える。入れ代つて何だか恐しく光るものが一つ、破れた孔の向側にあらわれる。疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李うしろの後に隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあつたが、こう睨にらまれては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を有する訳わけであるが、その前ちよつと卑見かいけんを開陳かいちんしてご高慮こうりょを煩わづらわしたい事がある。古代の神は全智全能と崇あがめられている。ことに耶蘇教ヤソキョウの神は二十世紀の今日こんにちまでもこの全智全能の面めんを被かぶつている。しかし俗人の考かんがうる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。しかるにこのパラドックスを道破どうはした者は天地開闢てんちかいびやく以来吾輩のみであろうと考えると、自分ながら満更まんざらな猫でもないと言いう虚栄心きよえいしんも出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言いう事を、高慢なる人間諸君の脳裏のうりに叩たたき込みたいと考える。天地万有は神が作つたそうな、して見れば人間も神の御製作であろう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間について、人間自身が数千年来の觀察を積んで、大おおいに玄妙えんめう不思議がると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外ほかでもない、人間もかようにうじやうじやいるが同じ顔かほをしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は無論極きまつている、

おおき
大きさも大概は似たり寄つたりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関らず一人も同じ結果に出来上つておらん。よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つと、製造家の伎倆ぎりょうに感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来ないのである。一代の画工が精力を消耗しょうこうして変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んのもつて推せば、人間の製造を一手いってで受負うけおつた神の手際は格別な者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会において目撃し得ざる底ていの伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差し支えつかないだろう。人間はこの点において大おおに神に恐れ入つていようである、なるほど人間の観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえつて神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思ふ。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示したのか、または猫も杓子しゃくしも同じ顔に造ろうと思つてやりかけて見たが、とうてい旨うまく行かなくて出来るのも出来るのも作り損そねてこの乱雑な状態おちいに陥つたものか、分らんでもないか。彼等顔面の構造は神の成功の紀念と見らるると同時に失敗の痕迹こんせきとも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と評したつて差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいるので左右を一時いちじに見る事が出来んから事物の半面だけしか視線内に這入はいらんのは気の毒な次第である。立場を換かえて見ればこのくらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本人逆のぼせ上がつて、神に吞のまれてゐるから悟りようがない。製作の上に変化をあらわすのが困難であるならば、

その上に徹頭徹尾の模倣を示すのも同様に困難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せろと逼ると同じく、ラファエルにとっては迷惑であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書体を換えてと注文されるよりも苦しいかも知らん。人間の用うる国語は全然模倣主義で伝習するものである。彼等人間が母から、乳母から、他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣の能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣はかくのごとく至難なものである。従つて神が彼等人間を区別の出来ぬよう、悉皆焼印の御かめのごとく作り得たならばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今日のごとく勝手次第な顔を天日に曝らさして、目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえつてその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れてしまった。本を忘却するのは人間にさえありがちの事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあげて敷居の上にぬつと現われた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならぬ。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——平常神の製作についてその

出来栄できばえをあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の眉目びもくがわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜うり二つであると言ふ事実である。吾輩は無論泥棒に多くの知己ちぎは持たぬが、その行為の乱暴なところから平常想像ふだんして私ひそかに胸中に描えがいていた顔はないでもない。小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、毬栗頭いかりあたまにきまつていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えると天地の相違、想像は決して違たぐまくするものではない。この陰士は背せいのすらりとした、色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際てぎわがあるとすれば、決して無能をもつて目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変かになつて深夜に飛び出して来たものではあるまいかと、はつと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒く髯ひげの芽生めばえが植うえ付けてないのでさては別人だと気が付いた。寒月君は苦味にがみばしつた好男子で、活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどの念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相から觀察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷つたのなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚ほれ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質ただからこのくらいの事は人から聞かなくてもきつと分るのであろう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧たげて琴瑟調和きんじつの実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるう

ちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やつと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人が書斎へ放り込んだ古毛布である。唐棧の半纏に、御納戸の博多の帯を尻の上にむすんで、生白い脛は膝から下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ入れる。先刻から赤い本に指を噛まれた夢を見ていた、主人はこの時寝返りを堂と打ちながら「寒月だ」と大きな声を出す。陰士は毛布を落して、出した足を急に引き込みます。障子の影に細長い向脛が二本立ったまま微かに動くのが見える。主人はうーん、むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕を皮癬病みのようにぼりぼり搔く。そのあとは静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまふ。寒月だと云ったのは全く我知らずの寝言と見える。陰士はしばらく椽側に立ったまま室内の動静をうかがっていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済してまた片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穗の春灯で豊かに照らされていた六畳の間は、陰士の影に鋭どく二分せられて柳行李の辺から吾輩の頭の上を越えて壁の半ばが真黒になる。振り向いて見ると陰士の顔の影がちようど壁の高さの三分の二の所に漠然と動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭の化け物のごとくまことに妙な恰好である。陰士は細君の寝顔を上から覗き込んで見たが何のためかにやにやと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付けにした箱が大事そうに置いてある。こ

れは肥前の国は唐津の住人多々良三平君が先日帰省した時御土産に持つて来た山の芋である。山の芋を枕元へ飾つて寝るのはあまり例のない話しではあるがこの細君は煮物に使う三盆を用箆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寢室に在つても平氣かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうはずがない。かくまで鄭重に肌身に近く置いてある以上は大切な品物であろうと鑑定するのにも無理はない。陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうなのですこぶる満足の体である。いよいよ山の芋を盗むなと思つたら、しかもこの好男子にして山の芋を盗むなと思つたら急におかしくなつた。しかし滅多に声を立てると危険であるからじつと忪えている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしつかり括つて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好く体裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて青大将が蛙を飲んだような——あるいは青大将の臨月と云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な恰好になつた。嘘だと思ふなら試しにやつて見るがよろしい。陰士はめり安をぐるぐる首つ環へ捲ぎつけた。その次はどうするかと思ふと主人の紬の上着を大風呂敷のように拡げてこれに細君の帯と主人の羽織と繻絆とその他あらゆる雑物を奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちよつと感心した。それから細君の帯上げとしごきとを結び合わせてこの包みを括つて片手にさげる。まだ頂戴するものは無いかたと、あ

たりを見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋があるのを見付けて、ちよつと袂へ投げ込む。またその袋の中から一本出してランプに翳して火を点ける。旨まそうに深く吸って吐き出した煙りが、乳色のホヤを繞つてまだ消えぬ間に、陰士の足音は椽側を次第に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡している。人間も存外迂濶なものである。

吾輩はまた暫時の休養を要する。のべつに喋舌つていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めた時は弥生の空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入つて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中で一向気がつかなくなつたのですな」

「ええ」と主人は少し極りがわるそうである。

「それで盗難に罹つたのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何にも盗まれる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思つていららしい。

「あなたは夕べ何時に御休みになつたんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私しの伏せつたのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だつたかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の這入はいったのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中よなかは分りきつているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。

巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入はいったところが一向痛痒いっこうつうようを感じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜よいと思つているのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦じれたくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせずに

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外はずしてどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行つたから右告訴及候也みぎこくそにおよびそうらうなりという書面をお出しな

さい。届ではない告訴です。名宛なあてはない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです。——いや這入はいつて見たつて仕方がない。盗とられたあとなんだから」と平気な事を云つて帰つて行く。

主人は筆硯ふですずりを座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗とられたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云う。

「あら厭いやだ、さあ云えだなんて、そんな権柄けんべいづくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けた

ままどつかと腰を据^すえる。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損^{できそこな}い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりや仕方がないじやありませんか」

「帯までとつて行つたのか、苛^{ひど}い奴だ。それじや帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯つて、そんなに何本もあるもんですか、黒^{くろ}緇^{じゆす}子と縮^{ちりめん}緇の腹合せの帯です」

「黒^{くろ}緇^{じゆす}子と縮^{ちりめん}緇の腹合せの帯一筋——価^{あたい}はいくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意氣に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房などは、どんな汚ない風をしていても、自分さい宜^よけりや、構^{かま}わらないでしょう」

「まあいいや、それから何だ」

「糸^{いと}織^{おり}の羽織^{かたみ}です、あれは河野^{こうの}の叔母^{かたみ}さんの形身^{かたみ}にもらつたんで、同じ糸織^{いとおり}でも今の糸織^{いとおり}とは、
たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじやありませんか、あなたに買っていただきやあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持つて行つたのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行つて聞いていらつしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら唐津からつから掘つて来たつて山の芋が十二円五十銭し

てたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですつて」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスつて云うのは」

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向出て来んじやないか」

「あとは何でも宜うござんす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴」

「意味も何にもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじゃありませんか、あなたはよつぽど私を馬鹿にしていらつしやるのね。きつと人が英語を知らないと思つて悪口をおつしやつたんだよ」

「愚な事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたつて間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

「頑愚だな。それでは勝手にするが好い。俺はもう盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数を教えて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いていただけかないでも困りません」

「それじゃ廃そう」と主人は例のごとくふいと立つて書齋へ這入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙つて障子を睨め付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平君が上つてくる。多々良三平君はもとこの家の書生であつたが今では法科大学を卒業してある会社の鉱山部に雇われている。これも実業家の芽生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前の関係から時々旧先生の草廬を訪問して日曜などには一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない間柄で

ある。

「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛りからつなまか何かで細君の前にズボンズボンのまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言つても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御お壽すし司しを持つて来て？」と姉のとん子は先日ひの約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を搔かきながら

「よう覚えてるやう、この次はきつと持つて来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直つて少々笑顔になる。

「壽司は持つて来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰くべなさつたか」

「山の芋つてなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋つてなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御お母かあさんに煮て御貰かい。唐津からつの山の芋は東京のとは違つてう

「まかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたらう」

「ところがせつかく下すつた山の芋を夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす盗が？ 馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大に感心している。

「御母あさま、夕べ泥棒が這入つたの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入つて——そうして——泥棒が這入つて——どんな顔をして這入つたの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんので

「恐い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔つて多々良さん見たような顔なの」と姉が氣の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですな。そんな失礼な事を」

「ハハハハ私の顔はそんなに恐いですか。困つたな」と頭を搔く。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの禿がある。一カ月前から出来だして医者に見て貰つたが、まだ容易に癒りそうもない。この禿を第一番に見付けたのは姉のとん子である。

「あら多々良さんの頭は御母さまのように光かつてよ」

「だまつていらつしゃいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わしくして話も何も出来ぬので「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりや鬻で釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですよ」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりや奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もつと長い名があるでしょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私はボールドより知りませんが。長かつて、どげんですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭なんですよ」

「そうかも知れませんか。今に先生の書齋へ行ってウェブスターを引いて調べて上げま

しょう。しかし先生もよほど変つていなさいますな。この天氣の好いのに、うちにじつとして——奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐めなさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだつて、先生こぼしていなさいました。どうも妻が俺のジャムの舐め方が烈しいと云つて困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違ひだろうと云いなさるから、そりや御嬢さんや奥さんがいつしよに舐めなさるに違ない——」

「いやな多々良さんだ、何だつてそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだつて舐めそうな顔をしていなさるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばつてんが——それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」

「そりや少しは舐めますさ。舐めたつて好いじゃありませんか。うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思つた——しかし本の事、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持つて行たのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしませんか、不断着をみんな取つて行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかつたに——惜しい事をしたなあ。奥さん犬の大か奴を是非一丁飼いなさい。——猫は駄目ですばい、飯を

食うばかりで——ちつとは鼠でも捕りますか」

「一匹もとつた事はありません。本当に横着な図々図々しい猫ですよ」

「いやそりゃ、どうもこうもならん。早々棄てなさい。私が貰つて行つて煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨うござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人がある由はかねて伝聞したが、吾輩が平生眷顧を辱うする多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今まで夢にも知らなかつた。いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日は浅きにも係わらず堂々たる一個の法学士で、六つ井物産会社の役員であるのだから吾輩の驚愕もまた一と通りではない。人を見たら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によつてすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思えとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得した真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなくなる。狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌なものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは今のうちに多々良君の鍋の中で玉葱と共に成仏する方が得策かも知れんと考へて隅の方に小さくなつていると、最前細君と喧嘩をして一反書齋へ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですな。なんちゆ愚な事です」と劈頭一番にやり込める。

「這入る奴が愚なんだ」と主人はどこまでも賢人をもつて自任している。

「這入る方も愚だばつてんが、取られた方もあまり賢くはなかごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢いんでしよう」と細君が此度は良人の肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う了見じゃろう。鼠は捕らず泥棒が来ても知らん顔をしている。——先生この猫を私にくんなさらんか。こうしておいたつちや何の役にも立ちませんばい」

「やつても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一言を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を洩らしたが、別段の返事もしないので、多々良君も是非食いたいとも云わなかつたのは吾輩にとつて望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大に銷沈の体である。なるほど寒いはずである。昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は袷に半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐したぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておつたちやとうていあかんですばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る——一丁今から考を換えて実業家にでもなんなさらんか」

「先生は実業家は嫌だから、そんな事を言つたつて駄目よ」

と細君が傍から多々良君に返事をする。細君は無論実業家になつて貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」

「今年で九年目でしょう」と細君は主人を顧みる。主人はそうだと、そうで無いとも云わな
い。

「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても人は褒めちやくれず、郎君独寂寞です
た」と中学時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちよつと分りかねたもの
だから返事をしない。

「教師は無論嫌だが、実業家はなお嫌いだ」と主人は何が好きだか心の裏で考えているらし
い。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけです」と多々良君柄に似合わぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細君は横を向いてちよつと澄したが再び主
人の方を見て、

「生きていらつしやるのも御嫌なんでしょう」と充分主人を凹ましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外呑気な返事をする。これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑に散歩でもしなさんと、からだを壊してしまいますばい。——そうして実
業家になんなさい。金なんか儲けるのは、ほんに造作もない事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やっと会社へ這入ったばかりですもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給ほどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛会社の方で預つて積んでおいて、いざと云う時にやります。——奥さん小遣錢で外濠線の株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢つたつて困りやしないわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法科でもやつて会社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知つてなさるか」

「うん昨日来た」

「そうでござんすか、せんだつてある宴会で逢いました時先生の御話をしたら、そうか君は苦沙弥君のところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔小石川の寺でいつしよに自炊をしておつた事がある、今度行つたら宜しく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云つていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京詰になりました。なかなか旨いです。」

わたし
私なぞにでも朋友のように話します。——先生あの男がいくら貰つてると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますはい。あげな男が、よかしこ取つておるのに、先生はリーダー専門で十年一狐裘いちこぎゆうじゃ馬鹿気ておりますなあ」

「實際馬鹿気ているな」と主人のような超然主義の人でも金銭の観念は普通の人間ことと異なるところはな。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴ふいちようしてもう云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人じんが来ますか」

「ええ、善くいらつしゃいます」

「どげんな人物ですか」

「大変学問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、私わたしくらいなものですか」と多々良君真面目である。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が聞く。

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」
多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、私わたしよりえらいですか」と笑いもせず怒りおこもせぬ。これが多々良君の特色である。

「近々博士になりますか」

「今論文を書いてるそうだ」

「やつぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思つたら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があるろうか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云つてやりました」

「だれに」

「私わたしに水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんは陰弁慶かげべんけいね。うちへなんぞ来ちゃ大変威張つても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつてるんでしよう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。先刻さつきから裕あわせ一枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。

行き当りばつたりの多々良君は無論、逡巡する訳がない。

「行きましよう。上野にしますか。芋坂へ行って団子を食いましようか。先生あすこの団子を食った事がありますか。奥さん一返行って食って御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩序のない駄弁を揮つてうちに主人はもう帽子を被つて沓脱へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食つたかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行する勇氣もないからずつと略してその間休養せんければならん。休養は万物の旻天から要求してしかるべき権利である。

この世に生息すべき義務を有して蠢動する者は、生息の義務を果すために休養を得ねばならぬ。もし神ありて汝は働かぬために生れたり寝るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答えて云わん、吾輩は仰せのごとく働かぬために生れたり故に働かぬために休養を乞うと。主人のごとく器械に不平を吹き込んだまでの木強漢ですら、時々は日曜以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして日夜心神を勞する吾輩ごとき者は仮令猫といえども主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もない贅物のごとくに罵つたのは少々氣掛りである。とかく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評価するのでも形骸以外に渉らぬのは厄介である。何でも尻でも端折つて、汗でも出さないと働かぬやうに考えている。達磨と云う坊さんは足の腐るまで座禅をして澄ましていたと云うが、仮令壁の隙から鳶が這い込んで大師の眼口を塞ぐまで動かないにしろ、寝ているんでも死んでいるんでもない。頭の中は常に活動して、廓然無聖などと乙な理窟を考え込んでゐる。儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそ

うだ。これだつて一室の中に閉居して安閑と覺の修行をするのではない。脳中の活力は人一倍熾に燃えている。ただ外見上は至極沈靜端肅の態であるから、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもつて昏睡仮死の庸人と見做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の声を立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、——しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を目して乾屎橛同等に心得るのもつともだが、恨むらくは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に一も二もなく同意して、猫鍋に故障を挟む景色のない事である。しかし一步退いて考えて見ると、かくまでに彼等が吾輩を輕蔑するのも、あながち無理ではない。大声は俚耳に入らず、陽春白雪の詩には和するもの少なしの喩も古い昔からある事だ。形体以外の活動を見る能わざる者に向つて己靈の光輝を見よと強ゆるは、坊主に髪を結えと逼るがごとく、鮪に演説をして見ろと云うがごとく、電鉄に脱線を要求するがごとく、主人に辭職を勧告するがごとく、三平に金の事を考えるなど云うがごときものである。必竟無理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的動物である。社会的動物である以上はいかに高く自ら標置するとも、或る程度までは社会と調和して行かねばならん。主人や細君や乃至御さん、三平連が吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上すような無分別をやられては由々しき大事である。吾輩は頭をもつて活動すべき天命を受けてこの娑婆に出現したほどの古今來の猫であれば、非常に大事な身体である。千金の子は堂陞に坐せずとの諺もある事なれば、好んで超邁を宗とし

て、徒らに吾身の危険を求むるのは単に自己の災なるのみならず、また大いに天意に背く訳である。猛虎も動物園に入れば糞豚の隣りに居を占め、鴻雁も鳥屋に生擒らるれば雛鶏と俎を同じゅうす。庸人と相互する以上は下つて庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事に極めた。

せんだつてじゅうから日本は露西亞と大戦争をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本鼠負である。出来得べくんば混成猫旅団を組織して露西亞兵を引つ掻いてやりたいと思ふくらいである。かくまでに元氣旺盛な吾輩の事であるから鼠の一疋や二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕れる。昔しある人当時有名な禪師に向つて、どうしたら悟れましょうと聞いたたら、猫が鼠を胡うようにさしやれと答えたそうだ。猫が鼠をとるようにとは、かくさえすれば外ずれつこはござらぬと云う意味である。女賢しゅうしてと云う諺はあるが猫賢しゅうして鼠捕り損うと云う格言はまだ無いはずだ。して見ればいかに賢い吾輩のごときものでも鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまいどころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんのは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのごとく暮れて、折々の風に誘わるる花吹雪が台所の腰障子の破れから飛び込んで手桶の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻つて地形を飲み込んでおく必要がある。戦闘線は勿論あまり広かろうはずがない。畳敷にしたら四畳敷もあろうか、その一畳を仕切つて半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつついには貧乏勝手に似合わぬ立派な者で赤の銅壺がぴかぴかして、後ろは羽目板の間を二尺遺して吾輩の鮑貝の所在

地である。茶の間に近き六尺は膳碗皿小鉢を入れる戸棚となつて狭き台所をいとど狭く仕切つて、横に差し出すむぎ出しの棚とすれすれの高さになつてゐる。その下に摺鉢が仰向けに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いてゐる。大根卸し、摺小木が並んで懸けてある傍らに火消壺だけが悄然と控えてゐる。真黒になつた樽木の交叉した真中から一本の自在を下ろして、先へは平たい大きな籠をかける。その籠が時々風に揺られて鷹揚に動いてゐる。この籠は何のために釣るすのか、この家へ来たてには一向要領を得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知つてから、人間の意地の悪い事をしてみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつちに便宜な地形だからと云つて一人で待ち構えてはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと台所の真中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻つて来ん。小供はとくに寝てゐる。主人は芋坂の団子を喰つて帰つて来て相変らず書斎に引き籠つてゐる。細君は——細君は何をしてゐるか知らない。大方居眠りをして山芋の夢でも見てゐるのだろう。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は一段と淋しい。わが決心と云い、わが意気と云い台所の光景と云い、四辺の寂寞と云い、全体の感じが悉く悲壮である。どうしても猫中の東郷大将としか思われぬ。こう云う境界に入ると物凄い内に一種の愉快を覚えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配が横わつてゐるのを発見した。鼠と戦争をするのは覚悟の前だから何足来ても恐くはないが、出てくる方面が明瞭でないの

は不都合である。周密なる觀察から得た材料を綜合して見ると鼠賊の逸出するには三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば土管を沿うて流しから、へつついの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶つてやる。あるいは溝へ湯を抜く漆喰の穴より風呂場を迂回して勝手へ不意に飛び出すかも知れない。そうしたら釜の蓋の上陣取つて眼の下に來た時上から飛び下りて一攫みにする。それからとまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が半月形に喰い破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻を付けて臭いで見ると少々鼠臭い。もしここから呐喊して出たら、柱を楯にやり過ごしておいて、横合からあつと爪をかける。もし天井から來たらと上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝やいて、地獄を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の手際では上る事も、下る事も出来ん。まさかあんな高い処から落ちてくる事もなからうからとこの方面だけは警戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうか、こうにかやつてのける自信がある。しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕るべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好かろう。どうしたら好かろうと考えて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと決めるのが一番安心を得る近道である。また法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。まず世間を見渡して見給え。きのう貰つた花嫁も今日死なんとも限らんでもないか、しかし智殿は玉椿千代も八千代もなど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したつて法が付かんからである。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず

起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分つた。三個の計略のうちいずれを選んだのがもつとも得策であるかの問題に対して、自ら明瞭なる答弁を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出るときには吾輩これに応ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに対する計がある、また流しから這い上るときはこれを迎うる成算もあるが、そのうちどれか一つに極めねばならぬとなると大に当惑する。東郷大將はバルチック艦隊が対馬海峡を通るか、津軽海峡へ出るか、あるいは遠く宗谷海峡を廻るかについて大に心配されたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像して見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩は全体の状況において東郷閣下に似ているのみならず、この格段なる地位においてもまた東郷閣下とよく苦心を同じゆうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開いて御三の顔がぬうと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分は夜目でよく見えんのに、顔だけが著るしく強い色をして判然眸底に落つるからである。御三はその平常より赤き頬をますます赤くして洗湯から帰つたついでに、昨夜に懲りてか、早くから勝手の戸締をする。書齋で主人が俺のステッキを枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のため枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。まさか易水の壮士を気取つて、竜鳴を聞こうと云う酔狂でもあるまい。きのうは山の芋、今日はステッキ、明日は何になるだろう。夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間らんまと云うような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る彼岸桜ひがんざくらを誘うて、颯さつと吹き込む風に驚ろいて眼を覚さますと、朧月おぼろづきさえいつの間まに差してか、竈かまどの影は斜めに揚板あげいたの上にかかる。寝過ねごしはせぬかと二三度耳を振つて家内の容ようす子を窺うかがうと、しんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだろう。

戸棚の中でことごと音ねがしだす。小皿の縁ふちを足で抑えて、中をあらしているらしい。ここから出るわいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て来る景色けしきはない。皿の音はやがてやんだが今度はどんぶりか何かなにかに掛かつたらしい、重い音が時々ごとごととする。しかも戸を隔へててすぐ向う側でやっている、吾輩の鼻はなづらと距離にしたら三寸も離れておらん。

時々はちよろちよろと穴の口まで足音が近寄ちかるが、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一枚向うに現在敵が暴行たふを逞たくましくしているのに、吾輩はじつと穴の出口で待つておらねばならん随分気の長い話だ。鼠は旅順りよじゆんわんの腕うでの中で盛に舞踏会を催もうしている。せめて吾輩の這入はいれるだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、気の利かぬ山出した。

今度はへつっいの影で吾輩の鮑貝あわびがいがごとりと鳴る。敵はこの方面へも来たなと、そーつと忍び足で近寄ると手桶ておけの間から尻尾しつぽがちらと見えたぎり流しの下へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場お風呂でうがい茶碗ちawanが金盥かなだらにかちりと当る。今度は後方うしろだと振りむく途端とたんに、五寸近くある大おほな奴やつがひらりと齒磨はの袋ふくろを落して椽えんの下へ馳かけ込む。逃がすものかと続ついて飛び降りたらもう影も姿も見えぬ。鼠ねずみを捕とるのは思ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕とる能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に頑張っている。と三方面共少々騒ぎ立てる。小癩と云おうか、卑怯と云おうかとうてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと気を疲らし心を勞らして奔走努力して見たがついに一度も成功しない。残念ではあるがかかる小人を敵にしてはいかなる東郷大将も施すべき策がない。始めは勇氣もあり敵愾心もあり悲壯と云う崇高な美感さえあつたがついには面倒と馬鹿氣ているのと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事になつた。しかし動かんでも八方睨みを極め込んでいれば敵は小人だから大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つた奴が、存外けちな野郎だと、戦争が名誉だと云う感じが消えて悪いと云う念だけ残る。悪いと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼーとする。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出来ないのだからと輕蔑の極眠たくなる。吾輩は以上の徑路をたどつて、ついに眠くなつた。吾輩は眠る。休養は敵中に在つても必要である。

横向に庇を向いて開いた引窓から、また花吹雪を一塊りなげ込んで、烈しき風の吾を捲ると思えば、戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避くる間もあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰いつく。これに続く黒い影は後ろに廻るかと思ふ間もなく吾輩の尻尾へぶら下がる。瞬く間の出来事である。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上る。満身の力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳に喰い下がったのは中心を失つてだらりと吾が横顔に懸る。護謨管のごとき柔かき尻尾の先が思い掛なく吾輩の口に這入る。屈竟の手懸りに、砕けよとばかり尾を啣えながら左右にふると、尾のみは前齒の間に残つて胴体は古新聞

で張った壁に当って、揚板の上に跳ね返る。起き上がるところを隙間なく乗し掛れば、毬を蹴たるごとく、吾輩の鼻づらを掠めて釣り段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は五尺。その中に月の光りが、大幅の帯を空に張るごとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やつとばかり棚の上に飛び上がるうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかかったが後足は宙にもがいている。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰い下っている。吾輩は危うい。前足を懸け易えて足懸りを深くしようとする。懸け易える度に尻尾の重みで浅くなる。二三分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔きむしる音ががりと聞える。これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻尾に喰いつくものの重みで吾輩のからだがりざりと廻わる。この時まで身動きもせずに覗いていた棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投げるがごとく飛び下りる。吾輩の爪は一縷のかかりを失う。三つの塊まりが一つとなつて月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段に乗せてあつた摺鉢と、摺鉢の中の小桶とジャムの空缶が同じく一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上へ転がり出す。すべてが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさええ寒からしめた。

「泥棒！」と主人は胸間声を張り上げて寢室から飛び出して来る。見ると片手にはランプを提げ、片手にはステッキを持って、寝ぼけ眼よりは身分相応の炯々たる光を放っている。吾輩は鮑貝の傍におとなしくして蹲踞る。二足の怪物は戸棚の中へ姿をかくす。主人は手持無

沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさせたのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いている。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切はんきりほどに細くなつた。

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ。と英吉利のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の毛衣だけはちよつと洗い張りでもするか、もしくは当分の中質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な無事な銭のかからない生涯を送つてゐるように思われるかも知れないが、いくら猫だつて相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は団扇でも使つて見ようと云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅沢なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、酔に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで余計な手数料を懸けて御互に恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものも皮膚の上へ載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になつたり、蚕の御世話になつたり、綿帛の御情けさえ受けるに至つては贅沢は無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大目に見て勘弁するところ、生存上直接の利害もないところまでこの調

子で押して行くのは毫も合点が行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然に生えるものだから、放つておく方がもつとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらえて得意である。坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くしている。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。これでは何のために青い物を出しているのか主意が立たんではないか。そうかと思うと櫛とか称する無意味な鋸様の道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人為的の区劃を立てる。中にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろまで食み出しているのがある。まるで贗造の芭蕉葉のようだ。その次には脳天を平らに刈つて左右は真直に切り落す。丸い頭へ四角な枠をはめているから、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに憂身を憂してどうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれだけほかも行かぬのに、いつでも二本ですまして、残る二本は到来の棒鱈のように手持無沙汰にぶら下げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほど猫より閑なもので退屈のあまりかようないたずらを考案して楽しんでいものと察せられる。ただおかしなのはこの閑人がよると障わると多忙だ多忙だと触れ廻るのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいかと思われるほどこせついている。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣楽でよかろうなどと云うが、氣楽でよければなるが好い。そんなにこせこせして

くれと誰も頼んだ訳でもなからう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかかんかん起して暑い暑いと云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こう気楽にしてはおられんさ。気楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣けいずもを着て通されるだけの修業をするがよろしい。——とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱あつ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の観察を怠おこたつたから、今日は久し振りで彼等が酔興あぐまに齷齪あぐまする様子を拝見しようかと考えて見たが、生憎主人はこの点に関してすこぶる猫に近い性分しやうぶんである。昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせんので、いくら観察をしても一向いっそう観察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるだるうに、先生もう来ても好い時だと思つていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中うちじゅうに響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大きな声と、こんな無作法ぶさほうな真似をやるものはほかにはない。迷亭に極きまつている。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰つぶせると思つていると、先生汗を拭ふいて肩を入れて例のごとく座敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はどうしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛ほうり出す。細君は隣座敷で針箱の側そばへ突つ伏して好い心持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響ひびがしたのではつと驚ろいて、醒さめぬ眼をわざと

睜みほつて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布さつまじょうふを着て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使あふぎをしてい
る。

「おやいらしゃいまし」と云つたが少々狼狽ろうばいの気味で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭
へ汗をかいたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなんです。今風呂場で御三おさんに水を掛
けて貰つてね。ようやく生き帰つたところで——どうも暑いじゃありませんか」「この両三日りょうさんちち
は、ただじつとしておりまして汗が出るくらいで、大変御暑うございます。——でも御変り
もございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとう。なに暑いくら
いでそんなに變りやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくつてね」
「私わたくししなども、ついに昼寝などを致した事がないのでございますが、こう暑いとつい——」
「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりゃ、こんな結構な事はないでさあ」と
あいかわらず呑気のんきな事を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「私わたしなんざ、寝たくない、
質たちでね。苦沙弥君などのように来るたんびに寝ている人を見ると羨うらやましいですよ。もつとも胃
弱じやくにこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも今日なんか首を肩の上に載のせてるのが退儀で
さあ。さればと云つて載つてる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処
置に窮きゆうしている。「奥おくさんなんざ首の上へまだ載つけておくものがあるんだから、坐つちやい
られないはずだ。鬚すげの重みだけでも横になりたくなくなりますよ」と云うと細君は今まで寝てい
たのが鬚すげの恰好かっこうから露見ろけんしたと思つて「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじつて見る。

迷亭はそんな事には頓着とんちやくなく「奥おくさん、昨日きのうはね、屋根の上で玉子のフライをして見ました
よ」と妙な事を云う。「フライをどうなさつたんでございます」「屋根の瓦があまり見事に焼け

ていましたから、ただ置くのも勿体ないと思つてね。バタを溶かして玉子を落したんでさあ「あらまあ」ところがやつぱり天日てんぴは思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつて急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見たらね」「どうなつておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございませよ。せんだつてじゆうは単衣ひとえでは寒いくらいでございましてのに、一昨日おとといから急に暑くなりましてね」「蟹かになら横に這はうところだが今年の気候はあとびさりをするんですよ。倒行とうこうして逆施げしすまた可ならずやと云うような事を言っているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないので。どうもこの気候の逆戻りをするところはまるでハーキュリスの牛ですよ」と凶に乗つていよいよ変ちきりんな事を言うつと、果せるかな細君は分らない。しかし最後の倒行して逆施すで少々懲こりているから、今度はただ「へえー」と云つたのみで問い返さなかつた。これを問い返されないと迷亭はせっかく持ち出した甲斐かひがない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じませせんわ」「御存じないですか、ちよつと講釈をしましょうか」と云うと細君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたものだから「ええ」と云つた。「昔むかしハーキュリスが牛を引つ張つて来たんです」「そのハーキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありませんよ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節ぎょうしゃは希臘ギリシャにまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘のお話なの？ そんなら、そうおつしやればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心得ている。「だつてハー

キュリスじゃありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで——」「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐう寝ている——」「あらいやだ」「寝ている間に、ヴァルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンは何です」「ヴァルカンは鍛冶屋ですよ。この鍛冶屋のせがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の尻尾しっぽを持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハーキュリスが眼を覚さまして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つたんじゃないやありませんもの、後ろうしろへ後ろうしろへと引きずつて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天氣の話は忘れてゐる。

「時に御主人はどうしました。相変らず午睡ひるねですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありますね。何の事もない毎日少しづつ死んで見るようなものですよ、奥さん御手数おてすうだがちよつと起していらつしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですがね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴ふいちょうする。「おやまあ、時分どきだのにちつとも気が付きませんで——それじゃ何もございませぬが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」「それでも、あなた、どうせ御口に合うようなものはございせんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟つたもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙あつるんです。今途中で御馳走を誂あつらえて来ましたから、

そいつを一つここでいただきますよ」ととうてい素人には出来そうもない事を述べる。細君はたつた一言「まあ！」と云つたがそのまあの中には驚ろいたまあと、気を悪くしたまあと、手数てすうが省けてありがたいと云うまあが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいので、寝つき掛つた眠をさかに扱こかれたよ
うな心持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかましい男だ。せつかく好い心持に
寝ようとしたところを」と欠伸あくび交りに仏頂面ぶつちやうめんをする。「いや御目覚おめざめかね。鳳眠ほうみんを驚かし奉つて
はなはだ相済まん。しかしたまには好かろう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だか分らぬ挨
拶あひをする。主人は無言のまま座に着いて寄木細工よせぎざいくの巻煙草まきたばこ入から「朝日」を一本出してすば
すば吸い始めたが、ふと向の隅すみに転がつている迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買つたね」
と云つた。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗
だ事。大変目が細かくつて柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で廻まわす。「奥さんこの帽
子は重宝ちやうほうですよ、どうしても言う事を聞きますからね」と拳骨げんこつをかためてパナマの横ッ腹よこはらをば
かりと張り付けると、なるほど意のごとく拳こぶしほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間まもな
く、この度は拳骨こぶしを裏側へ入れてうんと突ッ張ると釜かまの頭がぼかりと尖とんがる。次には帽子
を取つて鏢つばと鏢つばとを両側から庄おし潰つぶして見せる。潰れた帽子は麵棒めんぼうで延のした蕎麦そばのように平
たくなる。それを片端から蓆むしろでも巻くごとくぐるぐる畳たたむ。「どうですこの通り」と丸めた帽
子を懐中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」と細君は帰天齋きてんさい正しやういち一の手品でも見物している
ように感嘆すると、迷亭もその気になつたものと見えて、右から懐中に収めた帽子をわざと
左の袖口そでぐちから引つ張り出して「どこにも傷はありません」と元のごとくに直して、人さし指の

先へ釜の底を載せてくるくと廻す。もう休めるかと思つたら最後にぽんと後ろへ放つてその上へ堂つさりと尻餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸念らしい顔をする。細君は無論の事心配そうに「せつかく見事な帽子をもし壊わしでもしちやあ大変ですから、もう好い加減になすつたら宜うござんしょう」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊われないから妙でしょう」と、くちやくちやになつたのを尻の下から取り出してそのまま頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好にたちまち回復する。「実に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしょう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじゃありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被つたまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。「だつて苦沙弥君は立派な麦藁の奴を持つてるじゃありませんか」「ところがあなた、せんだつて小供があれを踏み潰してしまいました」「おやおやそりや惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたのような丈夫で奇麗なのを買つたら善かろうと思ひますんで」と細君はパナマの値段を知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂の中から赤いケース入りの鍬を取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそのくらいにしてこの鍬を御覧なさい。これがまたすこぶる重宝な奴で、これで十四通りに使えるんです」この鍬が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであったが、幸に細君が女として持つて生れた好奇心のために、この厄運を免かれたのは迷亭の機転と云わんよりむしろ僥倖の仕合せだと吾輩は看破した。「その鍬がどうして十四通りに使

えます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらつしやい。いいですか。ここに三日月形の欠け目がありましよう、ここへ葉巻を入れてぶつりと口を切るんです。それからこの根にちよと細工がありましよう、これで針金をぽつぽつやりますね。次には平たくして紙の上へ横に置く」と定規の用をする。また刃の裏には度盛がしてあるから物指の代用も出来る。こちらの表にはヤスリが付いているこれで爪を磨りまさあ。ようがすか。この先きを螺旋鋏の頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと金槌にも使える。うんと突き込んでこじ開けると大抵の釘付の箱なんざあ苦もなく蓋がとれる。まった、こちらの刃の先は錐に出来ている。ここん所は書き損いの字を削る場所で、ばらばらに離すと、ナイフとなる。一番しまいに——さあ奥さん、この一番しまいが大変面白いんです、ここに蠅の眼玉くらいな大きさの球がありましよう、ちよつと、覗いて御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだから」「そう信用がなくなつちや困つたね。だが欺されたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？ 厭ですか、ちよつとでいいから」と鋏を細君に渡す。細君は覚束なげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに覗をつけている。「どうです」「何だか真黒ですわ」「真黒じゃいけませんね。も少し障子の方へ向いて、そう鋏を寝かさずに——そうそうそれなら見えるでしよう」「おやまあ写真ですなえ。どうしてこんな小さな写真を張り付けたんでしよう」「そこが面白いところできあ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。前から黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見えて「おい俺にもちよつと覽せろ」と云うと細君は鋏を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですね」と云つてなかなか離さない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待つていらつ

しやいよ。美くしい髪ですね。腰までありますよ。少し仰向あおむいて恐ろしい背せいの高い女だ事、しかし美人ですな。「おい御見せと云つたら、大抵おほいにして見せるがいい」と主人は大に急せぎ込んで細君おさ君に食つて掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覽遊おあつらえばせ」と細君が鉄てつを主人に渡す時に、勝手から御三おさんが御客さまの御誂おあつらえが参りましたと、二個の箸ざる蕎麦そばを座敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自弁じべんの御馳走おちそうですよ。ちよつと御免蒙まがつて、ここでもばくつく事に致いたしますから」と叮嚀ていねいに御辞儀ごじぎをする。真面目まじめなような巫山戯ふざけたような動作だから細君も応対おうたいに窮きゆうしたと見えて「さあどうぞ」と軽く返事へんじをしたぎり拝見はいけんしている。主人はようやく写真しやしんから眼まなこを放はなして「君この暑いのに蕎麦そばは毒どくだぜ」と云つた。「なあに大丈夫だいじゆう、好きなものは滅多めつたに中あたるもんじやない」と蒸籠せいろうの蓋ふたをとる。「打ち立てはありがたいな。蕎麦そばの延のびびたのと、人間まの間まが抜ぬけたのは由来ゆらいたのもしくないもんだよ」と薬味やくみをツユの中へ入れて無茶苦茶むちかくちに掻かき廻まわす。「君そんなに山葵わさびを入れると辛からいぜ」と主人は心配しんぱいそうに注意ちゆういした。「蕎麦そばはツユと山葵わさびで食くうもんだあね。君は蕎麦そばが嫌きらいなんだろう」「僕は饅頭うどんが好きだ」「饅頭うどんは馬子まじが食くうもんだ。蕎麦そばの味あじを解とけない人ひとほど氣きの毒どくな事ことはない」と云いながら杉箸すぎばしをむぎと突き込んで出来るだけ多くの分量りやうりやうを二寸にすんばかりの高たかさにしゃくい上げた。「奥さん蕎麦そばを食くうにもいろいろ流儀りゅうぎがありますね。初心しよしんの者ものに限かぎつて、無暗むやみにツユを着きけて、そうして口の内でくちやくちやくやっていますね。あれじゃ蕎麦そばの味あじはないですよ。何でも、こう、一ひととしゃくに引ひつ掛けてね」と云いつつ箸はしを上げると、長い奴やつが勢揃せいぞろいをして一尺いちせきばかり空中くうちゆうに釣つるし上げられる。迷亭先生めいていせんせいもう善ぜんかろうと思おもつて下したを見ると、まだ十二三本の尾おが蒸籠せいろうの底そこを離はなれないで簀す垂だれの上に纏綿てんめんしている。「こいつは長いな、どうです奥さん、この長さ加減かへん

は」とまた奥さんに相の手を要求する。奥さんは「長いものでございますね」とさも感心したらしい返事をする。「この長い奴へツ、ユを三分一つけて、一口に飲んでしまうんだね。噛んじやいけない。噛んじや蕎麦の味がなくなる。つるつると咽喉を滑り込むところがねうちだよ」と思い切つて箸を高く上げると蕎麦はようやくの事で地を離れた。左手に受ける茶碗の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先からだんだんに浸すと、アーキミジスの理論によつて、蕎麦の浸つた分量だけツ、ユの嵩が増してくる。ところが茶碗の中には元からツ、ユが八分目這入っているから、迷亭の箸にかかった蕎麦の四半分も浸らない先に茶碗はツ、ユで一杯になつてしまつた。迷亭の箸は茶碗を去る五寸の上に至つてぴたりと留まつたきりしばらく動かない。動かないのも無理はない。少しでも卸せばツ、ユが溢れるばかりである。迷亭もここに至つて少し蹶蹶の体であつたが、たちまち脱兎の勢を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思ふ間もなく、つるつるちゅうと音がして咽喉笛が一二度上下へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消えてなくなつておつた。見ると迷亭君の両眼から涙のようなものが一二滴尻から頬へ流れ出した。山葵が利いたものか、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいまだに判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一どきに飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事です事ねえ」と細君も迷亭の手際を激賞した。迷亭は何にも云わないで箸を置いて胸を二度敲いたが「奥さん箸は大抵三口半か四口で食うんですね。それより手数を掛けちゃ旨く食えませんよ」とハンケチで口を拭いてちよつと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う了見かこの暑いのに御苦労にも冬帽を被つて両足を埃だらけにしてやつてくる。「いや好男子の御入来だが、喰い掛けたものだからちよつと失敬します

よ」と迷亭君は衆人環座の裏にあつて臆面もなく残った蒸籠を平げる。今度は先刻のように目覚しい食方もしなかつた代りに、ハンケチを使って、途中で息を入れると云う不体裁もなく、蒸籠二つを安々とやつてのけたのは結構だつた。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が聞くと迷亭もその後から「金田令嬢がお待ちかねだから早々呈出したまえ」と云う。寒月君は例のごとく薄気味の悪い笑を洩らして「罪ですからなるべく早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問題が問題で、よほど労力の入る研究を要するのですから」と本気の沙汰とも思われぬ事を本気の沙汰らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の言う通りにもならないね。もつともあの鼻なら充分鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比較的に真面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云つたつけない」「蛙の眼球の電動作用に対する紫外光線の影響と云うのです」「そりや奇だね。さすがは寒月先生だ、蛙の眼球は振つてるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿前にその問題だけでも金田家へ報知しておいては」主人は迷亭の云う事には取り合わないで「君そんな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「ええ、なかなか複雑な問題です、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな単簡なものでありませんからね。それでいろいろ実験もしなくちやなりません。丸い硝子の球をこしらえてそれからやろうと思つています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳ないじゃないか」「どうして——どうして」と寒月先生少々反身になる。「元来円とか直線とか云うのは幾何学的のもので、あの定義に合つたような理想的な円や直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、廃したらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでまず実験上差し支えないくらいな球を作つて見

ようと思ひましてね。せんだつてからやり始めたのです」「出来たかい」と主人が訳のないようにきく。「出来るものですか」と寒月君が云つたが、これでは少々矛盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしいです。だんだん磨すつて少しこつち側の半径が長過ぎるからと思つてそつちを心持落すと、さあ大変今度は向側むこうがわが長くなる。そいつを骨を折つてようやく磨すり潰つぶしたかと思うと全体の形がいびつになるんです。やつとの思いでこのいびつを取るとまた直径に狂いが出来ます。始めは林檎りんごほどな大きさのものがだんだん小さくなつて苳いちじほどになります。それでも根気よくやつていると大豆だいずほどになります。大豆ほどになつてもまだ完全な円は出来ませんよ。私も随分熱心に磨すりましたが——この正月からガラス玉を大小六個磨すり潰つぶしましたよ」と嘘うそだか本当だか見当のつかぬところを喋ちやうちやう々と述べる。「どこでそんなに磨すているんだい」「やつぱり学校の実験室です、朝磨すり始めて、昼飯のときちよつと休んでそれから暗くなるまで磨するんですが、なかなか楽じゃありません」「それじゃ君が近頃忙いそがしい忙いそがしいと云つて毎日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨すりに行くんだね」「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨すつています」「珠作りの博士となつて入り込みしは——と云うところだね。しかしその熱心を聞かせたら、いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕がある用事があつて図書館へ行つて帰りに門を出ようとしたら偶然老梅君らうばいに出逢つたのさ。あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんじゃやない、今門前を通り掛つたらちよつと小用こようがしたくなつたから拝借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑をしたが、老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求しんせんもうぎゅうに是非入れたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈をつける。

主人は少し真面目になつて「君そう毎日毎日珠ばかり磨つてるのもよからうが、元来いつ頃出来上るつもりかね」と聞く。「まあこの容子じゃ十年くらいかかりそうです」と寒月君は主人より呑氣に見受けられる。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたらよからう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ、それじゃ容易に博士になれないじゃないか」「ええ一日も早くなつて安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つてる事はよく承知しています。実は二三日前行つた時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行つていらつしやるじゃありませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易の体であつたが「そりや妙ですな、どうしたんだらう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話の途切れた時、極りの悪い時、眠くなつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出して来る。「先月大磯へ行つたものに両三日前東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる靈の交換だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋の何物たるを御解しにならん方には、御不審ももつともだが……」「あら何を証拠にそんな事をおつしやるの。随分軽蔑なざるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩いなんかした事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太刀をす

る。「そりや僕の艶聞えんぶんなどは、いくら有つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方きみかたの記憶には残っていないかも知れないが——実はこれでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻わす。「ホホホ面白い事」と云つたのは細君で、「馬鹿にしていらあ」と庭の方を向いたのは主人である。ただ寒月君だけは「どうかその懐旧談こうかくを後学こうがくのために伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕だいぶのも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないんだが、せつかくだから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴きんしやうしなくっちゃいけないよ」と念を押してよいよ本文に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——何年前だったかな——面倒だからほぼ十五年前としておこう」「冗談じやうだんじゃない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが御悪いのね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守つて一言も云わずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡かんばらごりたけのこくだに 筍谷たこぼとうげを通つて、これからいよいよ会津領あいつづりやうへ出ようとするとところだ」「妙なところだな」と主人がまた邪魔をする。「だまつて聴いていらつしやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がないから峠の真中にある一軒屋を敲たたいて、これこれかようかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれと云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさいと裸蝋燭はだかろうそくを僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶるぶると慄ふるえたがね。僕はその時から恋と云う曲者くせものの魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山の中にも美しい人があるんでしようか」「山だつて海だつて、奥さん、その娘を一目あなたに見せたいと思うくらいで

すよ、文金ぶんきんの高島田たかしまだに髪を結いいましてね」「へえー」と細君はあつけに取られてゐる。「這入はいつて見ると八畳の真中に大きな囲炉裏いろりが切つてあつて、その周りに娘と娘の爺さんじいと婆さんばあと僕と四人坐つたんですがね。さぞ御腹おなかが御減おへりでしょうと云いますから、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。すると爺さんがせつかくの御客さまだから蛇飯へびめしでも炊たいて上げようと云うんです。さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだからしつかりして聴きたまえ」「先生しつかりして聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だつて冬、蛇がいやしますまい」「うん、そりゃ一応もつともな質問だよ。しかしこんな詩的な話しになるとそう理窟りくつにばかり拘泥こうでいしてはられないからね。鏡花の小説にや雪の中から蟹かにが出てくるじゃないか」と云つたら寒月君は「なるほど」と云つたきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪あくもの食いの隊長で、蝗いなで、なめくじ、赤蛙などは食あい厭あきていたくらいなところだから、蛇飯は乙おつだ。早速御馳走になろうと爺さんに返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋なべをかけて、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。不思議な事にはその鍋の蓋ふたを見ると大小十個ばかりの穴があいてゐる。その穴から湯気がぼうぼう吹くから、旨うまい工夫をしたものだ、田舎いなかにしては感心だと見てゐると、爺さんふと立つて、どこかへ出て行つたがしばらくすると、大きな笹ざるを小脇こわきに抱かい込んで歸つて来た。何気なくこれを囲炉裏の傍そばへ置いたから、その中を覗のぞいて見ると——いたね。長い奴が、寒いもんだから御互ごごにとぐろの捲まきくらをやつて塊かたまつていましたね」「もうそんな御話ごわしは廃よしになさいよ。厭あらしい」と細君は眉に八の字を寄せる。「どうしてこれが失恋の大原因になるんだからなかなか廃むぞうせませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋をとつて、右手に例の塊かたまつた長い奴むぞうを無雑作むぞう

につかまえて、いきなり鍋の中へ放り込んで、すぐ上から蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははつと息の穴が塞ふさがったかと思つたよ」「もう御やめになさいよ。気味の悪きびい」と細君しきりに怖こわがつている。「もう少しで失恋になるからしばらく辛抱しんぼうしていらつしやい。すると一分立つか立たないうちに蓋の穴から鎌首かまくびがひよいと一つ出ましたのには驚ろきましたよ。やあ出たなと思つと、隣の穴からもまたひよいと顔を出した。また出たよと云ううち、あちらからも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中なべじゅう蛇つちの面だらけになつてしまつた」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよかろう、引つ張らつしとか何とか云うと、婆さんははあーと答える、娘はあいと挨拶をして、名々に蛇の頭を持つてぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですわ」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用な事をやるじゃないか。それから蓋を取つて、杓子しゃくしでもつて飯と肉を矢鱈やたらに掻き交まぜて、さあ召し上がれと来た」「食つたのかい」と主人が冷淡に尋ねると、細君は苦い顔をして「もう廃よしになさいよ、胸が悪わるくつて御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおつしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりは生涯しょうがい忘れられませぬぜ」「おお、いやだ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御饌ごぜんも頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅つかの勞つれもある事だから、仰おほせに従つて、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまつた」「それからどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「それから明朝あくるあさになつ

て眼を覺してからが失恋でさあ」「どうかなさったんですか」「いえ別にどうもしやしませんかね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓から見ていると、向うの笥の傍で、葉缶頭が顔を洗っているんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかつたから、しばらく拝見していて、その葉缶がこちらを向く段になつて驚ろいたね。それが僕の初恋をした昨夜の娘なんだもの」「だつて娘は島田に結つているときつき云つたじやないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸葉缶さ」「人を馬鹿にしていらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線をそらす。「僕も不思議の極内心少々怖くなつたら、なお余所ながら容子を窺つてみると、葉缶はようやく顔を洗ひ了つて、傍えの石の上に置いてあつた高島田の鬘を無雑作に被つて、すましてうちへ這入つたんでなるほどと思つた。なるほどとは思つたやうなものその時から、とうとう失恋の果敢なき運命をかこつ身となつてしまつた」「くだらない失恋もあつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「しかしその娘が丸葉缶でなくつてめでたく東京へでも連れて御歸りになつたら、先生はなお元気かも知れませんが、とにかくせつかくの娘が禿であつたのは千秋の恨事ですねえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまつたんでしよう」「僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせいに相違ないと思う。蛇飯てえ奴はのぼせるからね」「しかしあなたは、どこも何ともなくて結構でございましたね」「僕は禿にはならずにすんだが、その代りにこの通りその時から近眼になりました」と金縁の眼鏡をとつてハシケチで叮嚀に拭いてゐる。しばらくして主人は思い出したように「全体どこが神秘的なん

「だい」と念のために聞いて見る。「あの鬘はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても未だに分らないからそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「まるで噺し家の話を聞くようでござんすね」とは細君の批評であった。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうやめるかと思いのほか、先生は猿轡でも嵌められないうちはとうてい黙っている事が出来ぬ性と見えて、また次のような事をしゃべり出した。

「僕の失恋も苦い経験だが、あの時あの葉缶を知らずに貰ったが最後生涯の目障りになるんだから、よく考えないと険呑だよ。結婚なんかは、いざと云う間際になって、飛んだところに傷口が隠れているのを見出す事がある者だから。寒月君などもそんなに憧憬したり恟忪したり独りでむずかしがらないで、篤と気を落ちつけて珠を磨るがいいよ」といやに異見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠ばかり磨っていたんですけど、向うでそうさせないんだから弱り切ります」とわざと辟易したような顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるんだが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書館へ小便をしに来た老梅君などになるとすこぶる奇だからね」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承わる。「なあに、こう云う訳さ。先生その昔静岡の東西館へ泊った事があるのさ。——たつた一と晩だぜ——それでその晩すぐにその下女に結婚を申し込んだのさ。僕も随分呑気だが、まだあれほどには進化しない。もつともその時分には、あの宿屋に御夏さんと云う有名な別嬪がいて老梅君の座敷へ出たのがちようどその御夏さんなのだから無理はないがね」「無理がないどころか君の何とか峠とまるで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅とはそんなに差異

はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜すいかが食いたくなつたんだがね」「何だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねつてちよつと考えて見る。迷亭は構わずどんだん話を進行させる。「御夏さんと呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だつて水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持つてくる。そこで老梅君食つたそうだ。山盛りの水瓜をことごとく平らげて、御夏さんの返事を待つていると、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーんうーんと唸うなつたが少しも利目きめがないからまた御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞いたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だつて医者くらいはありますよと云つて、天地玄黄てんちげんこうとかいう千字文せんじもんを盗んだような名前のドクトルを連れて来た。翌朝あくるあさになつて、腹の痛みも御蔭かげでとれてありがたいと、出立する十五分前に御夏さんと呼んで、昨日きのう申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いながら静岡には水瓜もあります、御医者もありますが一夜作りの御嫁はありませんですよと出て行つたきり顔を見せなかつたそうだ。それから老梅君も僕同様失恋になつて、図書館へは小便をするほか来なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだつてミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬ローマの詩人を引用してこんな事を云つていた。——羽より軽い者は塵ちりである。塵より軽いものは風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは無むである。——よく穿うがつてるだろう。女なんか仕方がない」と妙なところで力味りきんで見せる。これを承うけたまわつた細君は承知しない。「女の軽いのがいけないとおつしやるけれども、男の重いんだつて好い事はないでしょう」「重いた、

どんな事だ」「重いと云うな重い事ですわ、あなたのようなのです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだつたに違いない」とひやかすのだから賞めるのだから曖昧な事を言ったが、それでやめておいても好い事をまた例の調子で敷衍して、下のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだつて云うが、それなら唾を女房にしていると同じ事で僕などは一向ありがたくない。やつぱり奥さんのようにあなたは重いじゃないませんかとか何とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしょうがないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ出てはいとへいで持ち切つていたものだ。そうして二十年もいつしよになつているうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじゃないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名はことごとく暗記している。男女間の交際だつてそうさ、僕の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、霊の交換をやって朦朧体で出合つて見たりする事はどうい出来なかつた」「御氣の毒様で」と寒月君が頭を下げる。「実に御氣の毒さ。しかもその時分の女が必ずしも今の女より品行がいいと限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何だのとやかましく云いますがね。なに昔はこれより烈しかったんですよ」「そうでしょうか」と細君は真面目である。「そうですね、出鱈目じゃない、ちゃんと証拠があるから仕方がありませんや。苦沙弥君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の時までには女の子を

唐茄子のように籠へ入れて天秤棒で担いで売つてあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそんな事は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知らないが、静岡じゃたしかにそうだった」「まさか」と細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが価を付けた事がある。その時僕は何でも六つくらいだったろう。おやじといっしょに油町から通町へ散歩に出ると、向うから大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよしかなと怒鳴つてくる。僕等がちようど二丁目の角へ来ると、伊勢源と云う呉服屋の前でその男に出つ食わした。伊勢源と云うのは間口が十間で蔵が五つ戸前あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来給え。今でも歴然と残つている。立派なうちだ。その番頭が甚兵衛と云つてね。いつでも御袋が三日前に亡くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ控えている。甚兵衛君の隣りには初さんという二十四五の若い衆が坐つているが、この初さんがまた雲照律師に帰依して三七二十一日の間蕎麦湯だけで通したと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが長どんでこれは昨日火事で焚き出されたかのごとく愁然と算盤に身を凭している。長どんと併んで……」「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をするのか」「そうそう人売りの話しをやつていたんだっけ。実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚があるんだが、それは割愛して今日は人売りだけにしておこう」「人売りもついでにやめるがいい」「どうしてこれが二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品性の比較について大なる参考になる材料だから、そんなに容易くやめられるものか——それで僕がおやじと伊勢源の前までくると、例の人売りがおやじを見て旦那女の子の仕舞物はどうです、安く負けておくから買つておくんさいと云いながら天秤棒をおろして汗を拭いているのさ。見ると籠の中

には前に一人後ろに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れている。おやじはこの男に向つて安ければ買つてもいいが、もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎今日はみんな売り尽してたつた二つになつちました。どつちでも好いから取つとくんさいなと女の子を両手で持つて唐茄子か何ぞのようにおやじの鼻の先へ出すと、おやじはぼんぼんと頭を叩いて見て、ははあかなりな音だと云つた。それからいよいよ談判が始まつて散々価値切つた末おやじが、買つても好いが品はたしかだろうなと聞くと、ええ前の奴は始終見ているから間違はありませんがね後ろに担いでる方は、何しろ眼がないんですから、ことによるとひびが入つてるかも知れません。こいつの方なら受け合えない代りに値段を引いておきますと云つた。僕はこの問答を未だに記憶しているんだがその時小供心に女と云うものはなるほど油断のならないものだと思つたよ。——しかし明治三十八年の今日こんな馬鹿な真似をして女の子を売つてあるくものもなし、眼を放して後ろへ担いだ方は險呑だなどと云う事も聞かないようだ。だから、僕の考ではやはり泰西文明の御蔭で女の品行もよほど進歩したものだろうと断定するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つして見せたが、それからわざと落ちついた低い声で、こんな観察を述べられた。「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや？ などと自分で自分を売りにあるいていますから、そんな八百屋のお余りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依託販売をやる必要はないですよ。人間に独立心が発達してくると自然こんな風になるものです。老人なんぞはいらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、實際を云うとこれが文明の趨勢ですから、

私などは大に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表しているのです。買う方だつて頭を敲たたいて品物は確かかなんて聞くような野暮やぼは一人もいないんですからその辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に、そんな手数てすうをする日にやあ、際限がありませんからね。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持つ事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十世紀の青年だけあつて、大に当世流おおいの考を開陳かいちんしておいて、敷島しきしまの煙をふうーと迷亭先生ほうちんの顔の方へ吹き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易へきえきする男ではない。「仰せの通り方今ほうこんの女生徒、令嬢などは自尊自信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえらいものだけ。筒袖つつそでを穿はいて鉄棒かねぼうへぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の体操を目撃するたんびに古代希臘ギリシヤの婦人を追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希臘とはとうてい離れられないやね。——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に関心したね。当時亜典アチンの法律で女が産婆を営業する事を禁じてあつた。不便な事さ。Agnodice だつてその不便を感じるだらうじゃないか」「何だい、その——何とか云うのは」「女さ、女の名前だよ。この女がつつらつつら考えるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱こまぬいて考え込んだね。ちようど三日目の暁方あけがたに、隣の家で赤ん坊がおぎやあと

泣いた声を聞いて、うんそうだと豁然大悟して、それから早速長い髪を切つて男の着物をきつて Hierophilus の講義をききに行つた。首尾よく講義をきき終せて、もう大丈夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を開業した。ところが、奥さん流行りましたね。あちらでもおぎやあと生れるこちらでもおぎやあと生れる。それがみんな Agnodice の世話なんだから大変儲かつた。ところが人間万事塞翁の馬、七転び八起き、弱り目に祟り目で、ついこの秘密が露見に及んでついに御上の御法度を破つたと云うところで、重き御仕置に仰せつけられそうになりました。「まるで講釈見たようです事」「なかなか旨いでしよう。ところが亞典の女連が一同連署して嘆願に及んだから、時の御奉行もそう木で鼻を括つたような挨拶も出来ず、ついに当人は無罪放免、これからはたとい女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令さえ出でめでたく落着を告げました」「よくいろいろな事を知つていらつしやるのね、感心ねえ」「ええ大概の事は知つていますよ。知らないのは自分の馬鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知つてます」「ホホホ面白い事ばかり……」と細君相形を崩して笑つていと、格子戸のベルが相変らず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ這入つて来たものは誰かと思つたらご存じの越智東風君であつた。

ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入する変人はことごとく網羅し尽したとまで行かずとも、少なくとも吾輩の無聊を慰むるに足るほどの頭数は御揃になつたと云わねばならぬ。これで不足を云つては勿体ない。運悪るくほかの家へ飼われたが最後、生涯人間中にかかる先生方が一人でもあろうとさえ気が付かずに死んでしまうかも知れない。幸にして苦沙弥先

生門下の猫児びようじとなつて朝夕虎皮ちようせきこひの前に侍はんべるので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風などと云う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連の拳止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとつて千載一遇の光榮である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせこれだけ集まれば只事ただごとではすまない。何か持ち上がるだろうと襖ふすまの陰から謹つつしんで拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者のようにも見えるが、白い小倉こくらの袴はかまのゴワゴワするのを御苦勞にも鹿爪しかつめらしく穿はいているところは榊原健吉の内弟子さかきばらけんきちとしか思えない。従つて東風君の身体で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけである。

「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあずつと、こつちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家らしい挨拶をする。「先生には大分だいぶん久しく御目にかかりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会かいぎりだったね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛おごかね。その後御宮ごおみやにやなりませんか。あれは旨うまかつたよ。僕は大に拍手おおいしたぜ、君氣が付いてたかい」「ええ御蔭で大きに勇氣がออกมาして、とうとうしまいまで漕こぎつけました」「今度はいつ御催ごしがありますか」と主人が口を出す。「七八ふたつき兩月は休んで九月には何か賑にぎやかにやりたいと思つております。何か面白い趣向きゆうはございますまいか」「さよう」と主人が氣のない返事をする。「東風君僕の創作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら面白いものだろうが、一体何かね」「脚本けん本ほん」と寒月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちよつと毒氣をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進め

ると、寒月先生なお澄し返って「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新劇とか大部やかましいから、僕も一つ新機軸を出して俳劇と云うのを作つて見たのさ」「俳劇たどんなものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙に捲かれて控えている。「それでその趣向と云うのは？」と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくつて、毒悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも極簡単な方がいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌツと出させて、その枝へ鳥を一羽とまらせる」「鳥がじつとしていれればいいが」と主人が独り言のように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を糸で枝へ縛り付けておくんです。その下へ行水盥を出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使つてゐるんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇つてくるんです」「そりゃ警視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だつて興行さえしなければ構わんじゃありませんか。そんな事をとやかく云つた日にや学校で裸体画の写生なんざ出来つこありません」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのとは少し違ふよ」「先生方がそんな事を云つた日には日本もまだ駄目です。絵画だつて、演劇だつて、おんなじ芸術です」と寒月君大いに気焔を吹く。「まあ議論はいいが、それからどうするのだい」と東風君、ことによると、やる了見と見えて筋を聞きながら。「ところへ花道から俳人高浜虚子がステッキを持つて、白い灯心入りの帽子を被つて、透綾の羽織に、薩摩飛白の尻端折りの半靴と云うこしらえて出てくる。着付けは陸軍の

御用達見たようだけれども俳人だからなるべく悠々として腹の中では句案に余念のない体であるかなくつちやいけな。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本舞台に懸つた時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びている、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚子先生大に俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ばかりあつて、行水の女に惚れる鳥かなと大きな声で一句朗吟するのを合図に、拍子木を入れて幕を引く。——どうだろう、こう云う趣向は。御氣に入りませんか。君御宮になるより虚子になる方がよほどいいぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あんまり、あつけないようだ。もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今まで比較のおとなしくしていた迷亭はそういつまでもだまつているような男ではない。「たつたそれだけで俳劇はすさまじいね。上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云うものは消極的で亡国の音だそうだが、敏君だけあつてうまい事を云つたよ。そんなつまらない物をやつて見給え。それこそ上田君から笑われるばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はやはり実験室で珠を磨いてる方がいい。俳劇なんぞ百作つたつて二百作つたつて、亡国の音じゃ駄目だ」寒月君は少々憤として、「そんなに消極的でしょうか。私はなかなか積極的なつもりなんですが」どつちでも構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。虚子先生が女に惚れる鳥かなと鳥を描いて女に惚れさせたところが大に積極的だろうと思います」「こりや新説だね。是非御講釈を伺がいきましょう」「理学士として考えて見ると鳥が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「ごもつとも」「その不合理な事を無雑作に言い放つて少しも無理に聞えませ

ん」「そうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で鳥とは没交渉の沙汰であります。しかるところあの鳥は惚れてるなと感じるのは、つまり鳥がどうのこうのと云う訳じゃない、必竟自分が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の行水ぎょうずいしているところを見てはつと思ふ途端にずつと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で鳥が枝の上で動きもしないで下を見つめてゐるのを見たものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参つてるなと癩違かぢがいをしたのです。癩違かぢがいには相違ないですがそこが文学的にかつ積極的なところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく鳥の上に拡張して知らん顔をしてすましているところなんぞは、よほど積極主義じゃありませんか。どうです先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。説明だけは積極だが、實際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるよように思います」と真面目な顔をして答へた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして——稿本こうほんを幸い持つて参りましたから御批評を願ひましょう」と懐から紫の袱紗包ふくさうづみを出して、その中から五六十枚ほどの原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一頁に

世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺めていたので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切つて富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞める。主人はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人のですか」と聞く。「へえ、この前迷亭先生とごいっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよつと寄つて参りましたが、生憎先月から大磯へ避暑に行つて留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この捧げ方は少しまずかつたね。このあえかにと云う雅言は全体何と言う意味だと思つてるかね」「蚊弱かよわいとかたよわくと云う字だと思ひます」「なるほどそうも取れん事はないが本来の字義を云うと危う氣にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」「どう書いたらもつと詩的になりましょう」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのでは大変感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は解しかねたところを無理に納得した体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていよいよ巻頭第一章を読み出す。

倦うんじて薰くんずる香裏かうりに君の

靈か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛からきこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎて
る」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならないのはごもつともで、十年前の詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達
しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではとうてい分りようが
ないので、作つた本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピ
レーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や訓義は学究のやる
事で私共の方では頓と構いません。せんだつても私の友人で送籍と云う男が一夜という短篇
をかきました、誰が読んでも朦朧として取り留めがつかないので、当人に逢つて篤と主意
のあるところを糺して見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云つて取り合わないの
です。全くその辺が詩人の特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」と主
人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」と単簡に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけではまだ弁
じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取除けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読ん
でいただきたいので。ことに御注意を願ひたいのはからき、この世と、あまき口づけと対を
とつたところが私の苦心です」「よほど苦心をなすつた痕迹が見えます」「あまいとからいと反
照するところなんか十七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で敬々服々の至り
だ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでゐる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書齋の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てく
る。「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といさ

さか本気の沙汰である。「天然居士てんねんこじの墓碑銘ぼひめいならもう二三遍拜聴したよ」「まあ、だまつていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「大和魂やまんとまし！」と叫んで日本人が肺病やみのような咳せきをした」

「起し得て突兀とつじつですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！ と新聞屋が云う。大和魂！ と掏摸すりが云う。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂の演説をする。独逸ドイツで大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士てんねんこじ以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返つて見せる。

「東郷大將が大和魂もを有っている。肴屋さかなやの銀さんも大和魂を有っている。詐偽師さぎし、山師やまし、人殺しも大和魂を有っている」

「先生そこへ寒月も有っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だい面白いございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。

「賛成」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か」

主人は一結杳然と云うつもりで読み終つたが、さすがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事と思つて待つてゐる。いくら待つていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞く

と主人は軽く「うん」と答えた。うんは少し気楽過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかつたが、やがて向き直つて、「君も短篇を集めて一卷として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は「真平だ」と答えたぎり、先刻細君に見せびらかした鉢をちよきちよき云わして爪をとつてゐる。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令嬢を知つてるのかい」と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意になつてそれから始終交際をしている。僕はある令嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、自分のうちは詩を作つても歌を詠んでも愉快に興が乗つて出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友からインスピレーションを受けるからだろうと思う。それで僕はある令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならんからこの機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔しから婦人に親友のないもので立派な詩をかけたものはないそうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談話の火の手は大分下火になつた。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務もないから、失敬して庭へ蟻螂を探しに出た。梧桐の緑を綴る

間から西に傾く日が斑まだらに洩もれて、幹にはつくつく法師ほうしが懸命けんめいにないている。晩はことによ
ると一雨かかるかも知れない。

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合にちよつと申し聞けるが、そう云う人間だつてつい近年までは運動の何者たるを解せず、食つて寝るのを天職のように心得ていたではないか。無事は貴人とか称えて、懐手をして座布団から腐れかかった尻を離さざるをもつて旦那の名誉と脂下つて暮したのは覚えておらずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になったら山の中へ籠つて当分霞を食えのとくだらぬ注文を連発するようになったのは、西洋から神国へ伝染した輓近の病気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていくらいだ。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とつて一歳だから人間がこんな病気に罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその砌りは浮世の風中にふわついておらんかったに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合うと云つてもよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに係らず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分仕るところをもつて推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき誤謬である。第一、一歳何カ月に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有しているのも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を憤る吾輩などに較べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療

養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって毫も驚くに足りない。これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない野呂間に極つている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の機能を吹聴したり、海水浴の利益を喋々として大発明のように考えるのである。吾輩などは生れない前からそのくらいな事はちやんと心得ている。第一海水がなぜ薬になるかと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じやないか。あんな広い所に魚が何疋おるか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかつた試しがない。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、からだが利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去を、落ちると唱え、人間の寂滅をこねると号している。洋行をして印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと答えるに極つている。それはそう答える訳だ。いくら往復したつて一匹も波の上に今呼吸を引き取つた——呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取つたと云わなければならん——潮を引き取つて浮いているのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる、大海を日となく夜となく続けざまに石炭を焚いて探がしてあるいても古往今来一匹も魚が上がつておらんところをもつて推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待つてしかる後に知らざるなりで、訳はない。すぐ分る。全く潮水を呑んで始終海水浴をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取つて顕著である。魚に取つて顕著である以上は人間に取つても顕著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な広告を出し

たのは遅い遅いと笑つてもよろしい。猫といえども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでいる。但し今はいけない。物には時機がある。御維新前の日本人が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだごとく、今日の猫はいまだ裸体で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇しておらん。せいては事を仕損んずる、今日のように築地へ打つちやられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗に飛び込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは——換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは——容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。どうも二十世紀の今日運動せんのはいかにも貧民のようで人間きがわるい。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出来ないのである、運動をする時間がないのである、余裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折助と笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と見做されている。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さくなつたり大きくなつたりするばかりだが、人間の品階とくると真逆かさまにひっくり返る。ひっくり返つても差し支えはない。物には両面がある、両端を叩いて黒白の変化を同一物の上起こすとところが人間の融通のきくところである。方寸を逆かさまにして見ると寸方となるところに愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見るとまた格別な趣が出る。セクスピヤも千古万古セクスピヤではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわるく云つた連中が急に運動がしたくなつて、女までがラケットを持って往來をあるき廻つたつて

一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利いた風などと笑いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一応説明しようと思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱ひ方に困窮する。次には金がないから買う訳に行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文いらず器械なしと名づくべき種類に属する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、あるいは鮪の切身を啣えて馳け出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動させて、地球の引力に順つて、大地を横行するのは、あまり単簡で興味が無い。いくら運動と名がついても、主人の時々実行するような、読んで字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚がす者だろうと思う。勿論ただの運動でもある刺激の下にはやらんとは限らん。鯉節競争、鮭探しなどは結構だがこれは肝心の対象物があつての上の事で、この刺激を取り去ると索然として没趣味なものになつてしまふ。懸賞的興奮剤がないとすれば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろいろ考へた。台所の廂から家根に飛び上がる方、家根の天辺にある梅花形の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事——これはとうてい成功しない、竹がつるつる滑べつて爪が立たない。後ろから不意に小供に飛びつく事、——これはすこぶる興味のある運動の一だが滅多にやるとひどい目に逢うから、高々月に三度くらいしか試みない。紙袋を頭へかぶせらるる事——これは苦しいばかりではなはだ興味の乏しい方法である。ことに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き掻く事、——これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新式のうちに

はなかなか興味の深いのがある。第一に蠋螂狩り。——蠋螂狩りは鼠狩りほどの大運動でない代りにそれほどの危険がない。夏の半から秋の始めへかけてやる遊戯としてはもつとも上乘のものだ。その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蠋螂をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは雑作もない。さて見付け出した蠋螂君の傍へはつと風を切つて馳けて行く。するとすわこそと云う身構をして鎌首をふり上げる。蠋螂でもなかなか健気なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちよつと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。この時の蠋螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云う思い入れが充分ある。ところを一足飛びに君の後ろへ廻つて今度は背面から君の羽根を軽く引き搔く。あの羽根は平生大事に畳んであるが、引き搔き方が烈しいと、ぱつと乱れて中から吉野紙のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦労千万に二枚重ねで乙に極まつている。この時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向つてくるが、大概の場合には首だけぬつと立てて立っている。こつちから手出しをするのを待ち構えて見える。先方がいつまでもこの態度では運動にならんから、あまり長くならんとまたちよいと一本参る。これだけ参ると眼識のある蠋螂なら必ず逃げ出す。それを我無洒落に向つてくるのはよほど無教育な野蛮的蠋螂である。もし相手がこの野蛮な振舞をやる時、向つて来たところを覗いて、いやと云うほど張り付けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である。しかし敵がおとなしく背面に前進すると、こつちは気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻つてくる。蠋螂君はまだ五六寸しか逃げ延びておらん。もう吾輩の力量を知ったから手向いをする勇氣はない。ただ右往左往へ逃げ惑うのみである。しか

し吾輩も右往左往へ追っかけるから、君はしまいには苦しがつて羽根を振つて一大活躍を試みる事がある。元来蠓螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細長く出来上がったものだが、聞いて見ると全く装飾用だそうで、人間の英語、仏語、独逸語のごとく毫も実用にはならんだから無用の長物を利用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云うに過ぎん。こうなると少々気の毒な感はあるが運動のためだから仕方がない。御免蒙つてたちまち前面へ馳け抜ける。君は惰性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。その鼻をなぐりつける。この時蠓螂君は必ず羽根を広げたまま仆れる。その上をうんと前足で抑えて少しく休息する。それからまた放す。放しておいてまた抑える。七擒七縦孔明の軍略で攻めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなつたところを見すましてちよつと口へ啣えて振つて見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たぎり動かないから、こつちの手で突っ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいやになつてから、最後の手段としてむしやむしや食つてしまふ。ついでだから蠓螂を食つた事のない人に話しておくが、蠓螂はあまり旨い物ではない。そうして滋養分も存外少ないようである。蠓螂狩りに次いで蟬取りと云う運動をやる。単に蟬と云つたところが同じ物ばかりではない。人間にも油野郎、みんみん野郎、おしいつくつく野郎があるごとく、蟬にも油蟬、みんみんおしいつくつくがある。油蟬はしつこくて行かん。みんみんは横風で困る。ただ取つて面白いのはおしいつくつくである。これは夏の末にならないと出て来ない。八つ口の綻びから秋風が断わりなしに膚を撫でてはつくしよ風邪を引いたと云う頃熾に尾を掉り立ててなく。

善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われくら
いだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蟬取り運動と云う。ちよつと諸君に話しておく
がいやしくも蟬と名のつく以上は、地面の上に転がってはおらん。地面の上に落ちてい
るのには必ず蟻ありがついている。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んでいる奴ではない。高
木の枝にとまって、おしいつくつくと鳴いている連中を捕とらえるのである。これもついでだ
から博学なる人間に聞きたいがあればおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、
その解釈次第によつては蟬の研究上少なからざる関係があると思う。人間の猫に優まさるところ
はこんなところに存するので、人間の自ら誇みずかる点もまたかような点にあるのだから、今即答
が出来ないならよく考えておいたらよからう。もつとも蟬取り運動上はどつちにしても差さし
支つかえはない。ただ声をするべに木を上のぼつて行つて、先方が夢中になつて鳴いているところを
うんと捕えるばかりだ。これはもつとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。
吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事においてはあえて他の動物には劣るとは思わ
ない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には負けないつもりである。
しかし木登りに至つては大分吾輩だいぶんより巧者たねな奴がいる。本職の猿は別物として、猿の末孫ぼつそんた
る人間にもなかなか侮あなどるべからざる手合てあひがいる。元來が引力に逆らつての無理な事業だから
出来なくても別段の恥辱ちじよくとは思わんけれども、蟬取り運動上には少なからざる不便を与える。
幸に爪と云う利器があるので、どうかこうか登りはするものの、はたで見ると楽ではござ
らん。のみならず蟬は飛ぶものである。螳螂君かまろくんと違つて一たび飛んでしまつたが最後、せつ
かくの木登りも、木登らずと何の択えらむところなしと云う悲運に際会する事がないとも限らん。

最後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便がややともすると眼を覗つてしまぐつてくるようだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。飛ぶ間に溺りを仕るのは一体どう云う心理的状态の生理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさのあまりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、ちよつと逃げ出す余裕を作るための方便か知らん。そうすると烏賊の墨を吐き、ベランメーの刺物を見せ、主人が羅甸語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項となる。これも蟬学上忽かせにすべからざる問題である。充分研究すればこれだけでたしかに博士論文の価値はある。それは余事だから、そのくらいにしてまた本題に帰る。蟬のもつとも集注するのは——集注がおかしければ集合だが、集合は陳腐だからやはり集注にする。——蟬のもつとも集注するのは青桐である。漢名を梧桐と号するそうだ。ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかもその葉は皆団扇くらいな大きさであるから、彼等が生い重なると枝がまるで見えないくらい茂っている。これがはなはだ蟬取り運動の妨害になる。声はすれども姿は見えずと云う俗謡はとくに吾輩のために作つた者ではなからうかと怪しまれるくらいである。吾輩は仕方がないからただ声を知るべに行く。下から一間ばかりのところ、梧桐は注文通り二又になつてゐるから、ここで一休息して葉裏から蟬の所在地を探偵する。もつともここまで来るうちに、がさがたと音を立てて、飛び出す気早な連中がいる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点において蟬は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。漸々二又に到着する時分には満樹寂として片声をとどめざる事がある。かつてここまで登つて来て、どこをどう見廻わしても、耳をどう振つても蟬気がないので、出直すのも面倒だからしばらく休息しようと、又の上に陣取つて第二の

機会を待ち合せていたら、いつの間にか眠くなつて、つい黒甜郷裡こくてんきやうりに遊んだ。おやと思つて
 眼が醒めたら、二又の黒甜郷裡こくてんきやうりから庭の敷石の上へどたりと落ちていた。しかし大概は登る
 度に一つは取つて来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に啣くわえてしまわなくてはならん。
 だから下へ持つて来て吐き出す時は大方死んでゐる。いくらじやらしても引つ搔かいても確然
 たる手筈がない。蟬取りの妙味はじつと忍んで行つておしい君が一生懸命に尻尾しっぽを延ばした
 り縮ちぢましたりしてゐるところを、わつと前足で抑おさえる時にある。この時つくつく君くんは悲鳴を
 揚げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は言語道断、実に蟬世
 界の一偉観である。余はつくつく君を抑おさえる度たびにいつでも、つくつく君に請求してこの美術
 的演芸を見せてもらう。それがいやになるとご免ごめんを蒙こうむつて口の内へ頬張ほおばつてしまふ。蟬に
 よると口の内へ這入はいつてまで演芸をつづけてゐるのがある。蟬取りの次にやる運動は松滑り
 である。これは長くかく必要もないから、ちよつと述べておく。松滑りと云うと松を滑るよ
 うに思ふかも知れんが、そうではないやはり木登りの一種である。ただ蟬取りは蟬を取るた
 めに登り、松滑りは、登る事を目的として登る。これが両者の差である。元来松は常磐とぎわにて
 最明寺さいみやうじの御馳走ごちそうをしてから以来今日こんにちに至るまで、いやにごつごつしている。従つて松の幹ほ
 ど滑らないものはない。手懸りのいいものはない。足懸りのいいものはない。——換言すれ
 ば爪懸つまがかりのいいものはない。その爪懸りのいい幹へ一氣呵成いっきかせいに馳かけ上る。馳かけ上つておいて
 馳かけ下がる。馳かけ下がるには二法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下りてくる。
 一は上のぼつたままの姿勢をくずさず尾を下にして降りる。人間に問うがどつちがむずかしい
 か知つてるか。人間のあさはかな了見りやうけんでは、どうせ降りるのだから下向したむきに馳かけ下りる方が楽

だと思ふだろう。それが間違つてる。君等は義経が鶯越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下た向きでたくさんだと思ふのだろう。そう軽蔑するものではない。猫の爪はどっちへ向いて生えていると思う。みんな後ろへ折れている。それだから鶯口のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登つたとする。すると吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔に留まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。しかし手放して落ちては、あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもつてこの自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。これ即ち降りるのである。落ちるのと降りるのは大変な違ひようだが、その実思つたほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。即ちあるものをもつて落ちる速度に抵抗しなければならん。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆つて利用出来る訳である。従つて落ちるが変じて降りるになる。実に見易き道理である。しかるにまた身を逆にして義経流に松の木越をやつて見給え。爪はあつても役には立たん。ずるずる滑つて、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいてかせつかく降りようと企てた者が変化して落ちる事になる。この通り鶯越はむずかしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。それだから吾輩はこの運動を称して松滑りと云うのである。最後に垣巡りについて一言する。主人の庭は竹垣をもつて四角にしきられている。椽側と平行している一片は

八九間もあろう。左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云った垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないよう一周するのである。これはやり損う事そしなもままあるが、首尾よく行くとお慰なぐさになる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちよつと休息べんぎに便宜がある。今日は出来がよかつたので朝から昼までに三返べんやつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなる度に面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分ほど巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに列を正してとまつた。これは推参な奴だ。人の運動うごの妨さまたげをする、ことにどこの鳥だか籍せきもない分在ぶんざいで、人の塀へとまるといふ法があるもんかと思つたから、通るんだおい除のぞきたまえと声をかけた。真先の鳥はこつちを見てにやにや笑っている。次のは主人の庭を眺ながめている。三羽目は嘴くちばしを垣根の竹で拭ふいている。何か食つて来たに違ちがひない。吾輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶予ゆうよを与えて、垣の上うへに立つていた。鳥は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなど思つたら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！地面の上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といつてまた立留まつて三羽が立ち退のくのを待つのもいやだ。第一そう待つては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従つて気に入ればいつまでも逗留とらうゆうするだろう。こつちはこれで四返目だたださえ大分だいぶん労らうれている。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは

保証が出来んのに、こんな黒装束が、三個も前途を遮さやみつては容易ならざる不都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れぬ人体にんていである。口くちばしが乙おつに尖とんがつて何だか天狗てんぐの啓もつし子のようだ。どうせ質たちのいい奴でないには極きまつている。退却が安全だろう、あまり深入りをして万一落ちでもしたらなおさら恥辱だ。と思つているとひだりむけ左向ひだりむけをした鳥が阿呆あほうと云つた。次のも真似をして阿呆と云つた。最後の奴は御鄭寧ごていねいにも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに温厚なる吾輩でもこれは看過かんか出来ない。第一自己の邸内からすまいで鳥輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わりようがなからうと云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。諺ことわざにも鳥合うじうの衆と云うから三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据すえて、のそのそ歩き出す。鳥は知らん顔をして何か御互に話をしてる様子だ。いよいよ肝癩かんしやくに障さわる。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残念な事にはいくら怒おこつても、のそのそしかあるかれない。ようやくの事先鋒せんぽうを去る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思つと、勘左衛門は申し合せたように、いきなり羽搏はばたきをして一二尺飛び上がった。その風が突然余の顔を吹いた時はつと思つたら、つい踏み外はずして、すんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまって上から嘴くちばしを揃そろえて吾輩の顔を見下している。凶太い奴だ。睨にらめつけてやったが一向利いっしうきかない。背を丸くして、少々唸うなつたが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向つて示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。考えて見ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱つていた。

それが悪るい。猫ならこのくらいやればたしかに応えるのだが生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦沙弥先生を圧倒しようとおせるごとく、西行に銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞をひるようなものである。機を見るに敏なる吾輩はどうてい駄目と見て取ったから、奇麗さつぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいいが度を過ぎすと行かぬ者で、からだ全体が何となく緊りがない、ぐたぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。毛穴から染み出す汗が、流れればと思うのに毛の根に膏のようにねばり付く。背中がむずむずする。汗でむずむずするのは蚤が這つてむずむずするのは判然と区別が出来る。口の届く所なら噛む事も出来る、足の達する領分は引き搔く事も心得にあるが、脊髓の縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限でない。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行うか、二者その一を扱ばんと不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は愚なものであるから、猫で声で——猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安にして考えれば猫なで声ではない、なでられ声である——よろしい、とにかく人間は愚なものであるから撫でられ声で膝の傍へ寄つて行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、わが為すままに任せるのみか折々は頭さえ撫でてくれるものだ。しかるに近来吾輩の毛中にのみと号する一種の寄生虫が繁殖したので滅多に寄り添うと、必ず頸筋を持つて向うへ抛り出される。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ虫のために愛想をつかしたと見える。手を翻せば雨、手を覆せば雲とはこの事だ。高がのみの千疋や二千疋でよくまあこんな現金な真似

が出来たものだ。人間世界を通じて行われる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。——自
 己の利益になる間は、すべからく人を愛すべし。——人間の取り扱が俄然豹変したので、いく
 ら痒ゆくても人力を利用する事は出来ん。だから第二の方法によつて松皮摩擦法をやるより
 ほかに分別はない。しからばちよつとこすつて参ろうかとまた橡側から降りかけたが、いや
 これも利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には脂がある。この脂
 たるすこぶる執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくつ付けようものなら、雷が鳴つて
 もバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しかのみならず五本の毛へこびりつくが早
 いか、十本に蔓延する。十本やられたなと気が付くと、もう三十本引つ懸つている。吾輩は
 淡泊を愛する茶人的猫である。こんな、しつこい、毒悪な、ねちねちした、執念深い奴は大嫌
 だ。たとい天下の美猫といえどもご免蒙る。いわんや松脂においてをやだ。車屋の黒の両眼
 から北風に乗じて流れる目糞と扱ぶところなき身分をもつて、この淡灰色の毛衣を大なしに
 するとは怪しからん。少しは考えて見るがいい。といったところできやつなかなか考える
 気遣はない。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いか必ずべたりとおいでになるに
 極つている。こんな無分別な頓痴奇を相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず、引いて吾
 輩の毛並に関する訳だ。いくら、むずむずしたつて我慢するよりほかに致し方はあるまい。
 しかしこの二方法共実行出来んとなるとはなはだ心細い。今において一工夫しておかんとし
 まいにはむずむず、ねちねちの結果病気に罹るかも知れない。何か分別はあるまいかなと、
 後と足を折つて思案したが、ふと思ひ出した事がある。うちの主人は時々手拭と石鹼をもつ
 て飄然といずれへか出て行く事がある、三四十分して帰つたところを見ると彼の朦朧たる

顔色が少しは活気を帯びて、晴れやかに見える。主人のような汚苦しい男にこのくらいな影響を与えるなら吾輩にはもう少し利目があるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これより色男になる必要はないようなものの、万一病気に罹つて一歳何が月で天折するような事があつては天下の蒼生に対して申し訳がない。聞いて見るとこれも人間のひま潰しに案出した洗湯なるものだそうだ。どうせ人間の作つたものだから碌なものではないに極つているがこの際の事だから試しに這入つて見るのもよからう。やつて見て功験がなければよすまでの事だ。しかし人間が自己のために設備した浴場へ異類の猫を入れるだけの洪量があるだろうか。これが疑問である。主人がすまして這入るくらいのところだから、よもや吾輩を断わる事もなからうけれども万一お気の毒様を食うような事があつては外聞がわるい。これは一先ず容子を見に行くに越した事はない。見た上でこれならよいと当りが付いたら、手拭を啣えて飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなものが屹立して先から薄い煙を吐いている。これ即ち洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏口から忍び込むのを卑怯とか未練とか云うが、あれは表からでなくては訪問する事が出来ぬものが嫉妬半分に囃し立てる練り言である。昔から利口な人は裏口から不意を襲う事にきまつている。紳士養成方の第二章の第一章の五ページにそう出ているそうだ。その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑してはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割つて八寸くらいにした

のが山のように積んであつて、その隣りには石炭が岡のように盛つてある。なぜ松薪が山のようで、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も米を食つたり、鳥を食つたり、肴を食つたり、獸を食つたりいろいろの悪もの食いをしつくしたあげくついに石炭まで食うように墮落したのは不憫である。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しになつて、中を覗くとがんながらがんのがあんと物静かである。その向側で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗湯はこの声の発する辺に相違ないと断定したから、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜けて左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓があつて、そのそとに丸い小桶が三角形即ちピラミッドのごとく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を諒とした。小桶の南側は四五尺の間板が余つて、あたかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御詵えの上等である。よろしいと云いながらひらりと身を躍らすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。天下に何が面白いと云つて、未だ食わざるものを食ひ、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。諸君もうちの主人のごとく一週三度くらい、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮すならいいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がないなら、早く見るがいい。親の死目に逢わなくてもいいから、これだけは是非見物するがいい。世界広しといえどもこんな奇観はまたとあるまい。

何が奇観だ？ 何が奇観だつて吾輩はこれを口にするを憚かるほどの奇観だ。この硝子窓の中にうじゃうじゃ、があが騒いでいる人間はことごとく裸体である。台湾の生蕃である。

二十世紀のアダムである。そもそも衣装いしやうの歴史を繙ひもとけば——長い事だからこれはトイフェルスドレック君に譲って、繙ひもとくだけはやめてやるが、——人間は全く服装で持つてるのだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてポー・ナツシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいである。今を去る事六十年前ぜんこれも英国の去る都で图案学校を設立した事がある。图案学校の事であるから、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、かしこに陳列したのはよかつたが、いざ開校式を挙行する一段になつて当局者を初め学校の職員が大困却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思つていた。人間として着物をつけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇氣なきがごとく全くその本体を失しつしている。いやしくも本体を失している以上は人間としては通用しない、獸類である。假令たし模写模型にせよ獸類の人間と伍するのは貴女の品位を害する訳である。でありますから妾等しやうらは出席御断わり申すと云われた。そこで職員共は話せない連中だとは思つたが、何しろ女は東西両国を通じて一種の裝飾品である。米春こめつきにもなれん志願兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる化粧道具けしやうどうぐである。と云うところから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布くろぬのを三十五反八分七買つて来て例の獸類の人間にことごとく着物をきせた。失礼があつてはならんと念に念を入れて顔まで着物をきせた。かようにしようやくの事こと滞りおなく式をすましたと云う話がある。そのくらい衣服は人間にとつて大切なものである。近頃は裸体画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生もあるがあれはあやまつている。生れてから今日こんにちに至るまで一日も裸

体になった事がない吾輩から見ると、どうしても間違っている。裸体は希臘、羅馬の遺風が
 文芸復興時代の淫靡の風に誘われてから流行りだしたもので、希臘人や、羅馬人は平常から
 裸体を見做れていたのだから、これをもって風教上の利害の関係があるなどは毫も思い及
 ばなかつたのだらうが北歐は寒い所だ。日本でさえ裸で道中がなるものかと云うくらいだか
 ら安逸や英吉利で裸になつておれば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらないから着物を
 着る。みんなが着物をきれば人間は服装の動物になる。一たび服装の動物となつた後に、突
 然裸体動物に出逢えば人間とは認めない、獣と思う。それだから歐洲人ことに北方の歐洲人
 は裸体画、裸体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいの
 である。美しい？ 美しくても構わんから、美しい獣と見做せばいいのである。こう云うと
 西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼服を
 拝見した事はない。聞くところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわし
 てこれを礼服と称しているそうだ。怪しからん事だ。十四世紀頃までは彼等の出で立ちはし
 かく滑稽ではなかつた、やはり普通の人間の着るものを着ておつた。それがなぜこんな下等
 な軽術師流に転化してきたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顔
 をしておればよろしからう。歴史はとにかく彼等はかかる異様な風態をして夜間だけは得々
 たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、
 胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまうのみならず、足の爪
 一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼服なるものは一
 種の頓珍漢的作用によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言ふ事が分る。それが

く惜しければ日中にっちゅうでも肩と胸と腕を出して見て見るがいい。裸体信者だつてその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、できない？ 出来ないのでは、西洋人がやらないから、自分もやらないのだろう。現にこの不合理極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸でかけるではないか。その因縁いんねんを尋ねると何にもない。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。西洋人は強いから無理でも馬鹿氣ばかきていても真似なければやり切れないのだろう。長いものには捲まかれろ、強いものには折れろ、重いものには圧おさされろと、そうれろ、尽しでは氣が利きかんではないか。氣が利きかんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。学問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物ばけものに邂逅かいこうしたようだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構わんが、それでは人間自身が大おおに困却する事になるばかりだ。その昔むかし自然は人間を平等なるものに製造して世の中に抛ほうり出した。だからどんな人間でも生れるときは必ず赤裸あかはだかである。もし人間の本性ほんせいが平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のまま生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐かひがない。骨を折つた結果が見えぬ。どうかして、おれはおれ

だ誰が見てもおれだと云うところが目につくようにしたい。それについては何か人が見てあつと魂消る物をからだにつけて見たい。何か工夫はあるまいかと十年間考えてようやく猿股を發明してすぐさまこれを穿いて、どうだ恐れ入つたらうと威張つてそこいらを歩いた。これが今日の車夫の先祖である。単簡なる猿股を發明するのに十年の長日月を費やしたのはいささか異なる感もあるが、それは今日から古代に溯つて身を蒙昧の世界に置いて断定した結論と云うもので、その当時にこれくらいの大發明はなかつたのである。デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」という三つ子にでも分るような真理を考え出すのに十何年か懸つたそうだ。すべて考え出す時には骨の折れるものであるから猿股の發明に十年を費やしたつて車夫の智慧には出来過ぎると云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて天下の大道を我物顔に横行濶歩するのはらしいと思つて負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云う無用の長物を發明した。すると猿股の勢力は頓に衰えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生葉屋、呉服屋は皆この大發明家の末流である。猿股期、羽織期の後に来るのが袴期である。これは、何だ羽織の癖にと癩癩を起した化物の考案になつたもので、昔の武士今の官員などは皆この種属である。かように化物共がわれもわれもと異を銜い新を競つて、ついには燕の尾にかたどつた畸形まで出現したが、退いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝つてさまざまの新形となつたもので、おれは手前じゃないぞと振れてあるく代りに被つているのである。して見るとこの心理からして一大発見が出来る。それはほかでもない。自然は真空を忌むごとく、人間は平

等を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌つてやむを得ず衣服を骨肉のごとくかようにつけ纏う今日において、この本質の一部分たる、これ等を打ちやつて、元の李阿弥の公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名称を甘んじても帰る事は到底出来ない。帰つた連中を開明人の目から見れば化物である。仮令世界何億万の人口を挙げて化物の域に引ずりおろしてこれなら平等だろう、みんなが化物だから恥ずかしい事はないと安心してもやつぱり駄目である。世界が化物になつた翌日からまた化物の競争が始まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争をやる。赤裸は赤裸でどこまでも差別を立ててくる。この点から見ても衣服はとうてい脱ぐ事は出来ないものになつてゐる。

しかるに今吾輩が眼下に見下した人間の一団体は、この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴もことごとく棚の上にかけて、無遠慮にも本来の狂態を衆目環視の裡に露出して平々然と談笑を縦まにしている。吾輩が先刻一大奇観と云つたのはこの事である。吾輩は文明の諸君子のためにここに謹んでその一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちやごちやして何にから記述していいか分らない。化物のやる事には規律がないから秩序立つた証明をするのに骨が折れる。まず湯槽から述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽というものだろうと思うばかりである。幅が三尺くらい、長は一間半もあるか、それを二つに仕切つて一つには白い湯が這入つてゐる。何でも薬湯とか号するのだ。それで、石灰を溶かし込んだような色に濁つてゐる。もつともただ濁つてゐるのではない。膏ぎつて、重た気に濁つてゐる。よく聞くと腐つて見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を易えないのだ。その隣りは普通一般の湯の由だがこれまたもつて透明、瑩徹

などとは誓つて申されない。天水桶を攪き混ぜたくらいの価値はその色の上において充分あらわれている。これからが化物の記述だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突つ立っている若造が二人いる。立つたまま、向い合つて湯をざぶざぶ腹の上へかけている。いい慰みだ。双方共色の黒い点において間然するとところなきまでに発達している。この化物は大分逞ましいなと見ていると、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫で廻しながら「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろう」と聞くと金さんは「そりゃ胃さ、胃て云う奴は命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心に忠告を加える。「だつてこの左の方だぜ」た左肺の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺だよ」「そうかな、おらあまた胃はここいらかと思つた」と今度は腰の辺を叩いて見せると、金さんは「そりゃ疝気だあね」と云つた。ところへ二十五六の薄い髻を生やした男がどぶんと飛び込んだ。すると、からだに付いていた石鹼が垢と共に浮きあがる。鉄気のある水を透かして見た時のようにきらきらと光る。その隣りに頭の禿げた爺さんが五分刈を捕えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているのみだ。「いやこう年をとつては駄目さね。人間もやきが廻つちや若い者には叶わないよ。しかし湯だけは今でも熱いのでないと心持が悪くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。そのくらい元気がありや結構だ」「元気もないのさ。ただ病気をしないだけさ。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百二十までは受け合う。御維新前牛込に曲淵と云う旗本があつて、そこにいた下男は百三十だつたよ」「そいつは、よく生きたもんですね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘れてね。百までは覚えていましたがそれから忘れてしまいましたと云つてたよ。それでわしの知つて

いたのが百三十の時だった、それで死んだんじゃない。それからどうなったか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽ふねから上る。髻ひげを生はやしている男は雲母きららのようなものを自分の廻りに蒔まき散らしながら独りひとでにやにや笑っていた。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違つて背中せなかに模様画をほり付けている。岩見重太郎が大刀だいたうを振り翳かざして蟒うわみを退治たいじるところのようだが、惜しい事に未だ竣功しゅんこうの期に達せんので、蟒はどこにも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜けの気味に見える。飛び込みながら「篋べらぼう棒ぼうに温ぬるいや」と云つた。するとまた一人続いて乗り込んだのが「こりやどうも……もう少し熱くなくつちやあ」と顔をしかめながら熱いのを我慢する気色けしきとも見えたが、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶あいさつをする。重太郎は「やあ」と云つたが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃんじゃんが好きだからね」「じゃんじゃんばかりじゃねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。——どう云うもんか人に好かれねえ、——どう云うものだから、——どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ。民さんなんざあ腰が低いんじゃねえ、頭ずが高たげえんだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれで一いっぱし腕うでがあるつもりだから、——つまり自分の損しんだあな」「白銀町しろがねちやうにも古い人が亡なくなつてね、今じゃ桶屋おけやの元さんと煉瓦屋れんがやの大将と親方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけになったよ」「うん。どう云うもんか人に好かれねえ。人が交際つぎあわねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見るとこれはまた非常な大入おおいりで、湯の中に人が

這入つてると云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適當である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々たる物で、先刻から這入るものはあるが出る物は一人もない。こう這入つた上に、一週間もとめておいたら湯もよごれるはずだと感心してなおよく槽の中を見渡すと、左の隅に圧しつけられて苦沙弥先生が真赤になつてすくんでいる。可哀そうに誰か路をあけて出してやればいいのと思うのに誰も動きそうにもしなければ、主人も出ようとする気色も見せない。ただじつとして赤くなつてゐるばかりである。これはご苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯銭を活用しようと言ふ精神からして、かように赤くなるのだろうか、早く上がらんと湯氣にあがるがと主思ひの吾輩は窓の棚から少なからず心配した。すると主人の一軒置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「これはちと利き過ぎるようだ、どうも背中の方から熱い奴がじりじり湧いてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。「なあにこれがちょうどいい加減です。薬湯はこのくらいでないと利きません。わたしの国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんでしょう」と手拭を畳んで凸凹頭をかくした男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。何でもいいってえんだからね。豪氣だあね」と云つたのは瘡せた黄瓜のような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少しは丈夫そうになれそうなのだ。

「薬を入れ立てより、三日目か四日目がちょうどいいようです。今日等は這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見ると、膨れ返つた男である。これは多分垢肥りだろう。「飲んでも利きましようか」とどこからか知らないが黄色い声を出す者がある。「冷えた後などは一杯飲んで寝ると、奇体に小便に起きないから、まあやつて御覽なさい」と答えたのは、どの顔から出

た声か分らない。

湯槽ゆぶねの方はこれぐらいにして板間いたまを見渡すと、いるわいるわ絵にもならないアダムがずらりと並んで各勝手次第な姿勢で、勝手次第なところを洗っている。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けあおむに寝て、高い明かり取とりを眺めているのと、腹這はらばいになつて、溝みぞの中を覗のぞき込んでいる両アダムである。これはよほど閑なアダムと見える。坊主が石壁を向いてしやがんでいると後ろから、小坊主がしきりに肩を叩たたいている。これは師弟の關係上三介さんすけの代理を務めるのであらう。本当の三介もいる。風邪かぜを引いたと見えて、このあついのにちやんちやんを着て、小判形の桶おけからざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股こに呉紹ごせうの垢擦あかすりを挟はさんでいる。こちらの方では小桶こおけを慾張つて三つ抱え込んだ男が、隣りの人に石鹼シヤボンを使え使えと云いながらしきりに長談議ちんたんぎをしている。何だろうと聞いて見るとこんな事を言つていた。「鉄砲は外国から渡つたもんだね。昔は斬り合あいばかりさ。外国は卑怯ひせつだからね、それであんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえようだ、やつぱり外国のようだよ。和唐内わとうないの時にや無かつたね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が蝦夷えぞから満洲へ渡つた時に、蝦夷の男で大変学がくのできる人がくつ付いて行つたてえ話わしだね。それでその義経のむすこが大明たいみんを攻めたんだが大明じゃ困るから、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借かしてくれろと云うと、三代様さんだいさまがそいつを留めておいて帰さねえ。——何とか云つたつけ。——何でも何とか云う使だ。——それでその使を二年とめておいてしまいに長崎で女郎じやうろうを見せたんだがね。その女郎に出来た子が和唐内さ。それから国へ帰つて見ると大明は国賊に亡ぼされていた。……」何を云うのかさつぱり分らない。その後ろうしろに二五六の陰気な顔をし

た男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりにたでている。腫物はれものか何かで苦しんでいると見える。その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋舌しゃべつてるのはこの近所の書生だろう。そのまた次に妙な背中せなかが見える。尻の中から寒竹かんちくを押し込んだように背骨せぼねの節が歴々ありありと出ている。そうしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行儀よく並んでいる。その十六むさしが赤く爛ただれて周圍まわりに膿うみをもっているものもある。こう順々に書いてくると、書く事が多過ぎて到底吾輩てざわの手際にはその一斑いっぺんさえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をやり始めた者だと少々辟易へきえきしていると入口の方に浅黄木綿あさぎもめんの着物をきた七十ばかりの坊主がぬつと見あらわれた。坊主は恭うやうやしくこれらの裸体の化物に一礼して「へい、どなた様も、毎日相変らずありますがとう存じます。今日は少々御寒うございますから、どうぞ御ご緩ゆつくり——どうぞ白い湯へ出たり這入はいつたりして、ゆるりと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立てた。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「愛嬌あいぎょうものだね。あれでなくては商賈しょうぎゃいは出来ないよ」と大おおに爺さんを激賞した。吾輩は突然この異いな爺さんに逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専門に觀察する事にした。爺さんはやがて今上あがり立たての四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大変だと思つたか、わーつと悲鳴を揚あげてなき出す。爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣きか、なに？ 爺さんが恐こわい？ いや、これはこれは」と感嘆した。仕方がないものだからたちまち機鋒きほうを転じて、小供の親に向つた。「や、これは源さん。今日は少し寒いな。ゆうべ、近おうみや江屋へ這入はいつた泥棒は何と云う馬鹿な奴じやの。あの戸の潜くぐりの所を四角に切り

破つての。そうしてお前の。何も取らずに行んだげな。御巡りさんか夜番でも見えたものであろう」と大に泥棒の無謀を憫笑したがまた一人を捉らまえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がつている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦しうにすくんでいた主人さえ記憶の中から消え去った時突然流しと板の間の中間で大きな声を出すものがある。見ると紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜けて大いなるのと、その濁つて聴き苦しいのは今日に始まつた事ではないが場所が場所だけに吾輩は少からず驚ろいた。これは正しく熱湯の中に長時間のあいだ我慢をして浸つておつたため逆上したに相違ないと咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病気の所為なら咎むる事もないが、彼は逆上しながらも充分本心を有しているに相違ない事は、何のためにこの法外の胸間声を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも足らぬ生意氣書生を相手に大人気もない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれの小桶に湯が這入つていかん」と怒鳴るのは無論主人である。物は見ようでもなるものだから、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。万人のうち一人くらいは高山彦九郎が山賊を叱したようにだくりに解釈してくれるかも知れん。当人自身もそのつもりでやった芝居かも分らんが、相手が山賊をもつて自らおらん以上は予期する結果は出て来ないに極つている。書生は後ろを振り返つて「僕はもとからここにいたのです」とおとなしく答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならるので、その態度と云い言語と云い、山賊として罵り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分つてはいるはずだ。しかし

主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻からこの両人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり併べていたので、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶へ汚ない水をびちやびちや跳ねかす奴があるか」と喝し去った。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていたから、この時心中にはちよつと快哉と呼んだが、学校教員たる主人の言動としては穏かならぬ事と思うた。元来主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻見たようにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニバルがアルプス山を超える時に、路の真中に当って大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな岩へ醋をかけて火を焚いて、柔かにしておいて、それから鋸でこの大岩を蒲鋒のように切つて滞りなく通行をしたさうだ。主人のごとくこんな利目のある薬湯へ煮だるほど這入つても少しも功能のない男はやはり醋をかけて火炙りにするに限ると思う。しからずんば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かかつたつて主人の頑固は癒りつこない。この湯槽に浮いているもの、この流しにごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論常規常道をもつて律する訳にはいかん。何をしたつて構わない。肺の所に胃が陣取つて、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない。普通の人類の生息する娑婆へ出たのだ、文明に必要な着物をきるのだ。従つて人間らしい行動をとらなければならんはずである。今主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であつて、当人はこれから歡言愉色、円転滑脱の

世界に逆戻りをしようとする間際である。その間際ですらかくのごとく頑固であるなら、この頑固は本人にとつて牢として抜くべからざる病気に相違ない。病気なら容易に矯正する事は出来まい。この病気を癒す方法は愚考によるとただ一つある。校長に依頼して免職して貰う事即ちこれなり。免職になれば融通の利かぬ主人の事だからきつと路頭に迷うに極つてゐる。路頭に迷う結果はのたれ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主人にとつて死の遠因になるのである。主人は好んで病気をして喜こんでいるけれど、死ぬのは大嫌である。死なない程度において病気と云う一種の贅沢がしていたのである。それだからそんなに病気をしていると殺すぞと嚇かせば臆病なる主人の事だからびりびりと慄え上がるに相違ない。この慄え上がる時に病気は奇麗に落ちるだろうと思う。それでも落ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病気でも主人に变りはない。一飯君恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だつて主人の身の上を思わない事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になつたため、ついそちらに気が取られて、流しの方の觀察を怠つてゐると、突然白い湯槽の方面に向つて口々に罵る声が聞える。ここにも喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口に一寸の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のある脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折から初秋の日は暮るるになんなんとして流しの上は天井まで一面の湯気が立て籠める。かの化物の犇く様とその間から朦朧と見える。熱い熱いと云う声が吾輩の耳を貫ぬいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。その声には黄なもの、青いもの、赤いもの、黒いものもあるが互に畳なりかかつて一種名状すべからざる音響を浴場内に漲らす。ただ混雑と迷乱とを形

容するに適した声と云うのみで、ほかには何の役にも立たない声である。吾輩は茫然としてこの光景に魅入られたばかり立ちすくんでいた。やがてわーわーと云う声が混乱の極度に達して、これよりはもう一步も進めぬと云う点まで張り詰められた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群の中から一大長漢がぬつと立ち上がった。彼の身の丈を見ると他の先生方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみならず顔から髯が生えているのか髯の中に顔が同居しているのか分らない赤つらを反り返して、日盛りに破れ鐘をつくような声を出して「うめろうめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの紛々と纏れ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間には浴場全体がこの男一人になったと思わるるほどである。超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁だ。と思つて見ていると湯槽の後ろでおーいと答えたものがある。おやとまたもそちらに眸をそらすと、暗憺として物色も出来ぬ中に、例のちゃんちゃん姿の三介が砕けよと一塊りの石炭を竈の中に投げ入れるのが見えた。竈の蓋をくぐつて、この塊りがぱちぱちと鳴るときに、三介の半面がぱつと明るくなる。同時に三介の後ろにある煉瓦の壁が暗を通して燃えるごとく光つた。吾輩は少々物凄くなつたから早々窓から飛び下りて家に帰る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、猿股を脱ぎ、袴を脱いで平等になろうと力める赤裸々の中には、また赤裸々の豪傑が出て来て他の群小を圧倒してしまふ。平等はいくらはだかになつたつて得られるものではない。

帰つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上がり顔の顔をテラテラ光らして晚餐を食っている。吾輩が椽側から上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今頃どこをあるいているんだらうと云つた。膳の上を見ると、銭のない癖に二三品御菜をならべている。そのうちに肴の焼

いたのが一疋ある。これは何と称する肴か知らんが、何でも昨日あたり御台場近辺でやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明しておいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られたりしてはたまらん。多病にして残喘を保つ方がよほど結構だ。こう考えて膳の傍に坐つて、隙があつたら何か頂戴しようとして、見るごとく見ざるごとく装つていた。こんな装い方を知らないものはとうていうまい肴は食えないと諦めなければいけない。主人は肴をちよつと突つついたが、うまくないと云う顔付をして箸を置いた。正面に控えたる妻君はこれまた無言のまま箸の上下に運動する様子、主人の両顎の離合開闔の具合を熱心に研究している。

「おい、その猫の頭をちよつと撲つて見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲つて見ろ」

「こうですかと細君は平手で吾輩の頭をちよつと敲く。痛くも何ともない。

「鳴かんじゃないか」

「ええ」

「もう一返やつて見ろ」

「何返やつたつて同じ事じゃありませんか」と細君また平手でぽかと参る。やはり何ともないから、じつとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深き吾輩には頓と了解し難い。

これが了解出来れば、どうかこうか方法もあるうがただ撲つて見ろだから、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は二度まで思い通りにならんので、少々焦れ気味で「おい、ちよつと鳴くようにぶつて見ろ」と云つた。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんですか」と問いながら、またぴしゃりとおいでになった。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえやれば主人を満足させる事は出来るのだ。主人はかくのごとく愚物だから厭になる。鳴かせるためなら、ためと早く云えば二返も三返も余計な手数(てすう)はしなくてもすむし、吾輩も一度で放免になる事を二度も三度も繰り返えされる必要はないのだ。ただ打つて見ると云う命令は、打つ事それ自身を目的とする場合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事、鳴くのはこつちの事だ。鳴く事を始めから予期して懸つて、ただ打つと云う命令のうちに、こつちの随意たるべき鳴く事さえ含まつてるように考えるのは失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ。猫を馬鹿にしている。主人の蛇蝎(だかつ)のごとく嫌う金田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもつて誇る主人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ主人はこれほどけちな男ではないのである。だから主人のこの命令は狡猾(こうかつ)の極に出でたのではない。つまり智慧(ちえ)の足りないところから湧いた子(こ)子(ご)のようなものと思惟(し)する。飯を食べれば腹が張るに極(き)まつている。切れば血が出るに極(き)まつている。殺せば死ぬに極(き)まつている。それだから打(ぶ)てば鳴くに極(き)まつていると速断をやつたんだらう。しかしそれはお気の毒だが少し論理に合わない。その格で行くと川へ落ちれば必ず死ぬ事になる。天麩羅(てんぷら)を食べれば必ず下痢(げり)する事になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書物を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなつては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかなければならんとすると吾輩は迷惑である。目白の時の鐘と同一に見倣(みな)されては猫と生れた甲斐(かい)がない。まず腹の中でこれだけ主人を凹(へこ)ましておいて、しかる後にやゝと注文通り鳴いてやつた。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、に、や、あと云う声は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上がまださめなためだろうと思つたくらいだ。元来この主人は近所合壁有名な変人で現にある人はたしかに神経病だとまで断言したくらいである。ところが主人の自信はえらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴が神経病だと頑張つている。近辺のものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか号して彼等を豚々と呼ぶ。実際主人はどこまでも公平を維持するつもりらしい。困つたものだ。こう云う男だからこんな奇問を細君に對つて呈出するのも、主人に取つては朝食前の小事件かも知れないが、聞く方から云わせるとちよつと神経病に近い人の云いそうな事だ。だから細君は煙に捲かれた気味で何とも云わな。吾輩は無論何とも答えようがない。すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚して「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どつちだ」

「どつちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいいじゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配している大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分つたんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の肴さかなをむしやむしや食う。ついでにその隣にある豚と芋いものころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚でござんす」「ふん」と大軽蔑だいけいべつの調子をもつて飲み込んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯さかずきを出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分だいぶん赤くなつていらつしやいますよ」

「飲むとも——御前世で一番長い字を知ってるか」

「ええ、前の関白さき太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字つて横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaimelesidonophrunicherata と云う字だ」

「出鱈目でたらめでしょう」

「出鱈目なものか、希臘語ギリシヤ語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴りつづだけ知ってるんだ。長く書くと六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云つているところがすこぶる奇観である。もつとも今夜に限つて酒を無暗むやみにのむ。平生なら猪口ちやくこに二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。

二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が焼火箸やけひばしのようにほてつて、さも苦しうだ。それでもまだやめない。「もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになつたら、いいでしょう。苦しいばかりですわ」と苦々にくがしい顔をする。

「なに苦しくつてもこれから少し稽古するんだ。大町桂月おおまちげいげつが飲めと云つた」

「桂月つて何です」さすがの桂月も細君に逢つては一文いちもんの価値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極きまつています」

「馬鹿をおつしやい。桂月だつて、梅月だつて、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじゃありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくつて仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちゃあ大変ですよ」

「大変だと云うならよしてやるから、その代りもう少し夫おつとを大事にして、そうして晩に、もつと御馳走を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追つて金が這入り次第はいやる事にして、今夜はこれでやめよ

「う」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩はその夜豚肉三斤と塩焼の頭を頂戴した。

垣巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結い繞らしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣の次郎ちゃんと思つては誤解である。家賃は安いがそこは苦沙弥先生である。与つちやんや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちやん付きの連中と、薄っ片な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五六間の空地であつて、その尽くるところに檜が鬱然と五六本併んでいる。椽側から拝見すると、向うは茂つた森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を送る江湖の処士であるかのごとき感がある。但し檜の枝は吹聴するごとく密生しておらぬので、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな価値はある。名前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち鉤の手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側を包んでいるのだが、臥竜窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に檜が幅を利かしているごとく、北側には桐の木が七八本行列している。もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい価値になるんだ

が、借家の悲しさには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。

せんだつて学校の小使が来て枝を一本切つて行つたが、そのつぎに来た時は新らしい桐の

俎下駄まないたげたを穿はいて、この間の枝でこしらえましたと、聞きもせんに吹聴ふいちやうしていた。ずるい奴

だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いだいて罪あり

と云う古語があるそうだが、これは桐を生はやして銭ぜになしと云つてもしかるべきもので、いわ

ゆる宝の持ち腐ぐされである。愚ぐなるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主やぬしの伝兵衛である。

いないかな、いないかな、下駄屋はいないかなと桐の方で催促しているのに知らん面かおをして

屋賃やちんばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に恨うらみもないから彼の悪口あつこうをこのくらいにして、

本題に戻つてこの空地あきちが騒動の種であると云う珍譚ちんだんを紹介つかまつ仕るが、決して主人にいつては

いけない。これぎりの話である。そもそもこの空地に關して第一の不都合なる事は垣根の

ない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云

うと嘘をつくようによろしくない。実を云うとあつたのである。しかし話しは過去さかのぼへ溯さかのぼらんと

原因が分からない。原因が分からないと、医者でも処方しよほうに迷惑する。だからここへ引き越

して来た当時からゆつくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、

不用心だつて金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる塀へい、垣、

乃至なほは乱杭らんぐい、逆茂木さかもぎの類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向うに住居すまいする人間

もしくは動物の種類いかに如何によつて決せらるる問題であろうと思う。従つてこの問題を決する

ためには勢い向う側に陣取つている君子の性質を明かにせんければならん。人間だか動物だ

か分らない先に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君子で間違はない。

梁上りょうじょうの君子などと云つて泥棒さえ君子と云う世の中である。但しただこの場合における君子は決して警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこなした者と見えて沢山いる。うじゃうじゃいる。落雲館らくうんかんと称する私立の中学校——八百の君子をいやが上に君子に養成するために毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思うと、それがそもその間違になる。その信用すべからざる事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざるごとく、臥竜窟ふりりゅうくつに猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき気違のある事を知つた以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないと言ふ事がわかる訳だ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿りに来て見るがいい。

前申ぜんますごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空地あきちに垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと桐畠きりばなけに這入り込んできて、話をする、弁当を食う、笹ささの上に寝転ねころぶ——いろいろの事をやったものだ。それから弁当の死骸すなわ即ち竹の皮、古新聞、あるいは古草履ふるぞうり、古下駄、ふると云う名のつくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外平氣に構えて、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎたのは、知らなかったのか、知つても咎とがめんつもりであつたのか分らない。ところが彼等諸君子は学校で教育を受くるに従つて、だんだん君子らしくなったものと見えて、次第に北側から南側の方面へ向けて蚕食さんしよくを企だてて来た。蚕食と云う語が君子に不似合ならやめてもよろしい。但しただほかに言葉がないのである。彼等は水草すいそうを追うて居を變ずる沙漠さばくの住民のごとく、桐きりの木を去つて檜ひのきの方に進んで来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君子でなければこれほどの行動は取れんは

ずである。一兩日の後(のち)彼等の大胆はさらに一層の大を加えて大々胆(だいだいたん)となつた。教育の結果ほど恐(おそ)しいものはない。彼等は単に座敷の正面に逼(せま)るのみならず、この正面において歌をうたいだした。何と云う歌か忘れてしまつたが、決して三十一文字の類(たぐひ)ではない、もつと活潑(かつぱう)で、もつと俗耳(ぞくじ)に入り易(やす)い歌であつた。驚(おど)ろいたのは主人ばかりではない、吾輩(わがはい)までも彼等君子の才芸(さいげい)に嘆服(たんぷく)して覚え耳を傾けたくらいである。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と邪魔と云う事は時として両立する場合がある。この両者がこの際(はか)図(ず)らずも合して一となつたのは、今から考えて見ても返す返す残念である。主人も残念であつたろうが、やむを得ず書斎から飛び出して行つて、ここは君等の這入(はい)る所ではない、出給(いで)えと云つて、二三度追(お)い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。追(お)い出されればすぐ這入(はい)る。這入(はい)れば活潑(かつぱう)なる歌をうたう。高聲(こうせい)に談話(だんわ)をする。しかも君子の談話(だんわ)だから一風(いっぽう)違(ちが)つて、おめえだの知らねえのと云う。そんな言葉は御維新(ごいっしん)前は折助(おりすけ)と雲助(くもすけ)と三助(さんすけ)の専門的知識(せんもんてきしじき)に属(ぞく)していたさうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の学(まな)ぶ唯一(ゆい)の言語(ごんご)であるさうだ。一般(いぱん)から輕蔑(けいべつ)せられたる運動(うんどう)が、かくのごとく今日(こんにち)歡迎(げんぎ)せらるるようになったのと同じの現象(げんしょう)だと説明(せつめい)した人がある。主人はまた書斎(しよさい)から飛び出してこの君子流(くんしりゆう)の言葉(ことば)にもつとも堪能(かんのう)なる一人(ひとり)を捉(つか)まえて、なぜここへ這入(はい)るかと詰問(せつもん)したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品(じやうひん)な言葉(ことば)を忘れて「ここは学校の植物園(じふつうえん)かと思(おも)いました」とすこぶる下品(げひん)な言葉(ことば)で答(こた)えた。主人は将来(しやうらい)を戒(いまし)めて放(はな)してやつた。放(はな)してやるのは亀の子(かめこ)のようでおかしいが、實際(じつじ)彼は君子(くんし)の袖(そで)を捉(つか)まえて談判(だんぱん)したのである。このくらいやかましく云(い)つたらもうよかろうと主人(しゆじん)は思(おも)つていたさうだ。ところが實際(じつじ)は女媧(じよが)氏の時代(じだい)から

予期と違ふもので、主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客かと思うと桐島の方で笑う声がある。形勢はますます不穩である。教育の功果はいよいよ顕著になつてくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書斎へ立て籠つて、恭しく一書を落雲館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した。校長も鄭重なる返書を主人に送つて、垣をするから待つてくれと云つた。しばらくすると二三人の職人が来て半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣が出来上がった。これでようよう安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である。このくらいの事で君子の挙動の変化する訳がない。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢にかかつて遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、気の利かない苦沙弥先生にからかうのは至極もつともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけであろう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましていてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くないか。この間主人が動物園から帰つて来てしきりに感心して話した事がある。聞いて見ると駱駝と小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転して吠え立てると、駱駝は何の気もつかずに、依然として背中へ瘤をこしらえて突つ立つたままであるそうだ。いくら吠えても狂つても相手にせんので、しまいには犬も愛想をつかしてやめる、実に駱駝は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例である。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝と来ては成立しない。さればと云つて獅子や虎のように先方が強過ぎても者にならん。

からかいかけるや否や八つ裂きにされてしまう。からかうと齒をむき出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする事も出来ないと言ふ安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんな事が面白いと言ふとその理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。退屈な時には髻ひげの数さえ勘定して見たくなる者だ。昔むかし獄に投ぜられた囚人の一人は無聊ぶりようのあまり、房へやの壁に三角形を重ねて画かいてその日をくらしたと云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。からかうと言ふのもつまりこの刺激を作つて遊ぶ一種の娯樂である。但ただし多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしくはなくては刺激にならんから、昔むかしからからかうと云う娯樂に耽ふけるものは人の氣を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考ふるに暇いとまなきほど頭の発達が幼稚で、しかも活氣の使い道に窮する少年かに限つている。次には自己の優勢な事を実地に証明するものにはもつとも簡便な方法である。人を殺したり、人を傷きずけたり、または人を陥おとしれたりしても自己の優勢な事は証明出来る訳であるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり、陥れたりするのが目的のときによるべき手段で、自己の優勢なる事はこの手段を遂行すいこうした後に必然の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくつて、しかもそんなに人に害を与えたくないと云う場合には、からかうのが一番御恰好おかつこうである。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の上に証拠だてられない。事実になつて出て来ないと、頭のうちで安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃たかむものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して實地に応用して見ない

と気がすまない。しかも理窟りくつのわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返ぺんでいいから出逢つて見たい、素人しらうとでも構わないから抛なげて見たいと至極危険な見方を抱いだいて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致す。聞きたければ鯉節かつぶしの一折ひとわりも持つて習いにくるがいい、いつでも教えてやる。以上に説くところを参考して推論して見ると、吾輩わが輩の考かんがえでは奥山おくやまの猿さると、学校の教師がからかうには一番手頃である。学校の教師をもつて、奥山の猿に比較しては勿体もったいない。——猿に対して勿体ないのではない、教師に対して勿体ないのである。しかしよく似ているから仕方がない、御承知の通り奥山の猿は鎖くさりで繋がつながれている。いくら歯をむき出しても、きやつきやつ騒いでも引き搔かかれる氣遣きづかいはない。教師は鎖で繋がれておらない代りに月給で縛ばられている。いくらからかつたつて大丈夫、辞職して生徒をぶんなぐる事はない。辞職をする勇氣のあるようなものなら最初から教師などをして生徒の御守おもりは勤めないはずである。主人は教師である。落雲館の教師ではないが、やはり教師に相違ない。からかうには至極しじく適当で、至極安直あんちよくで、至極無事な男である。落雲館の生徒は少年である。からかう事は自己の鼻を高くする所以ゆえんで、教育の功果として至当に要求してしかるべき権利とまで心得ている。のみならずからかいでもしなければ、活氣きに充みちた五体と頭腦を、いかに使用してしかるべきか十分じゅうぶんの休暇中持もてあまして困っている連中である。これらの条件が備われば主人は自おのずからからかわれ、生徒は自おのずからからかう、誰から云わしても毫ちようも無理のないところである。そ

れを怒る主人は野暮の極、間拔の骨頂でしよう。これから落雲館の生徒がいかに主人にからかったか、これに対して主人がいかに野暮を極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知であろう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたつて、こしらえなくたつて同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が潜られんために、わざわざ職人を入れて結い繞らせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜れそうにない。この竹をもつて組み合せたる四寸角の穴をぬける事は、清国の奇術師張世尊その人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能をつくしているに相違ない。主人がその出来上つたのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない。しかし主人の論理には大なる穴がある。この垣よりも大いなる穴がある。呑舟の魚をも洩らすべき大穴がある。彼は垣は踰ゆべきものにあらずとの仮定から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上はいかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界線の区域さえ判然すれば決して乱入される氣遣はないと仮定したのである。次に彼はその仮定をしばらく打ち崩して、よし乱入する者があつても大丈夫と論断したのである。四つ目垣の穴を潜り得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はないから乱入の虞は決してないと速定してしまつたのである。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目をぬけてくる事はしまい、したくても出来まいが、乗り踰える事、飛び越える事は何の事もない。かえつて運動になつて面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等は北側の空地へばかりばかりと飛び込む。

但し座敷の正面までは深入りをしない。もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひまがいるから、予め逃げる時間を勘定に入れて、捕えらるる危険のない所で遊弋をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる主人には無論目に入らない。北側の空地に彼等が遊弋している状態は、木戸をあけて反対の方角から鉤の手に曲つて見るか、または後架の窓から垣根越しに眺めるよりほかに仕方がない。窓から眺める時はどこに何がいるか、一目明瞭に見渡す事が出来るが、よしや敵を幾人見出したからと云つて捕える訳には行かぬ。ただ窓の格子の中から叱りつけるばかりである。もし木戸から迂回して敵地を突こうとすれば、足音を聞きつけて、ぽかりぽかりと捉まる前に向う側へ下りてしまふ。膂膂がひなたぼっこをしているところへ密猟船が向つたような者だ。主人は無論後架で張り番をしている訳ではない。と云つて木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。もしそんな事をやる日には教師を辞職して、その方専門にならなければ追つかない。主人方の不利を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。この不利を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主人が書斎に立て籠つていと探偵した時には、なるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちよつと聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ――吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光榮とも思つておらん、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必要であるからやむを得ない。――

すなわ
 即ち主人が後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の附近を徘徊してわざと主人の眼につくようにする。主人がもし後架から四隣に響く大音を揚げて怒鳴りつければ敵は周章てる気色もなく悠然と根拠地へ引きあげる。この軍略を用いられると主人ははなはだ困却する。たしかに這入っているなど思つてステッキを持つて出懸けると寂然として誰もいない。いないかと思つて窓からのぞくと必ず一二人這入っている。主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗いて見たり、後架から覗いて見たり、裏へ廻つて見たり、何度言つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰り返している。奔命に疲れるとはこの事である。教師が職業であるか、戦争が本務であるかちよつと分らないくらい逆上して来た。この逆上の頂点に達した時に下の事件が起つたのである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字のごとく逆かさに上るのである、この点に關してはゲールンもパラセルサスも旧弊なる扁鵲も異議を唱うる者は一人もない。ただどこへ逆かさに上るのが問題である。また何が逆かさに上るかが議論のあるところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の体内には四種の液が循環しておつたそうだ。第一に怒液と云う奴がある。これが逆かさに上ると怒り出す。第二に鈍液と名づくるのがある。これが逆かさに上ると神経が鈍くなる。次には憂液、これは人間を陰氣にする。最後が血液、これは四肢を壯んにする。その後人文が進むに従つて鈍液、怒液、憂液はいつの間にかなくなつて、現今に至つては血液だけが昔のように循環していると云う話だ。だからもし逆上する者があらば血液よりほかにはあるまいと思われる。しかるにこの血液の分量は個人によつてちやんと極まつている。性分によつて多少の増減はあるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合

である。だによつて、この五升五合が逆かさに上ると、上つたところだけは熾んに活動するが、その他の局部は欠乏を感じて冷たくなる。ちようど交番焼打の当時巡査がことごとく警察署へ集つて、町内には一人もなくなつたやうなものだ。あれも医学上から診断をすると警察の逆上と云う者である。でこの逆上を癒やすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に分配しなければならん。そうするには逆かさに上つた奴を下へ降さなくてはならん。その方にはいろいろある。今は故人となられたが主人の先君などは濡れ手拭を頭にあてて炬燵にあつておられたそうだ。頭寒足熱は延命息災の徴と傷寒論にも出ている通り、濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者である。それでなければ坊主の慣用する手段を試みるがよい。一所不住の沙門雲水行脚の衲僧は必ず樹下石上を宿とすとある。樹下石上とは難行苦行のためではない。全くのぼせを下げるために六祖が米を舂きながら考え出した秘法である。試みに石の上に坐つてご覧、尻が冷えるのは当り前だろう。尻が冷える、のぼせが下がる、これまた自然の順序にして毫も疑を挟むべき余地はない。かようにいろいろな方法を用いてのぼせを下げる工夫は大分發明されたが、まだのぼせを引き起す良方が案出されないのは残念である。一概に考えるとのぼせは損あつて益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で、逆上せんと何にも出来ない事がある。その中でもっとも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上が必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるやうな者で、この供給が一日でも途切れると彼れ等は手を拱いて飯を食うよりほかに何等の能もない凡人になつてしまふ。もつとも逆上は氣違の異名で、氣違にならないと家業が立ち行かんとあつては世間体が悪いから、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆

上の名をもつてしない。申し合せてインスピレーション、インスピレーションとさも勿体（もったい）
 うに称（と）えている。これは彼等が世間（よ）を瞞（まん）着（ちゃく）するために製造した名でその実は正に逆上である。
 プレートーは彼等の肩を持つてこの種の逆上を神聖なる狂気と号したが、いくら神聖でも狂
 気では人が相手にしない。やはりインスピレーションと云う新發明の売葉（うりば）のような名を付け
 ておく方が彼等のためによからうと思う。しかし蒲鉾（かまぼこ）の種（たね）が山芋（やまいも）であるごとく、観音（かんのん）の像が
 一寸八分の朽木（くちぎ）であるごとく、鴨南蛮（かもなんばん）の材料が鳥であるごとく、下宿屋（げしゆくや）の牛鍋（ぎゅうなべ）が馬肉（うまにく）である
 ごとくインスピレーションも実は逆上である。逆上であつて見れば臨時の氣違である。巢鴨
 へ入院せずに済むのは単に臨時氣違であるからだ。ところがこの臨時の氣違を製造する事が
 困難なのである。一生涯（いっしょうがいの）の狂人はかえつて出来安いが、筆（ふで）を執（と）つて紙（かみ）に向（む）う間（あいだ）だけ氣違にす
 るのは、いかに巧者（こうしや）な神様でもよほど骨（ほね）が折れると見えて、なかなか拵（こしら）えて見せない。神が
 作つてくれん以上は自力で拵（こしら）えなければならん。そこで昔から今日（こんにち）まで逆上術もまた逆上と
 りのけ術と同じく大（おおい）に学者の頭腦（おおい）を悩ました。ある人はインスピレーションを得るために毎
 日渋柿（しぶがき）を十二個ずつ食つた。これは渋柿を食えば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起るとい
 う理論から来たものだ。またある人はかん徳利を持つて鉄砲（てつぱう）風呂（ふろ）へ飛び込んだ。湯の中で酒
 を飲んだら逆上するに極（きま）つていると考えたのである。その人の説によるとこれで成功しなけ
 れば葡萄酒（ぶどうしゆ）の湯をわかつて這（はい）入れば一返（ぺん）で功能があると信じ切つてゐる。しかし金がないの
 でついに実行する事が出来なくて死んでしまったのは氣の毒である。最後に古人の真似をし
 たらインスピレーションが起るだろうと思いついた者がある。これはある人の態度動作を真
 似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔（よ）つぱらいのように管（くだ）

を捲まいてみると、いつの間にか酒飲みのような心持になる、坐禪をして線香一本の間我慢しているところなく坊主らしい気分になれる。だから昔からインスピレーションを受けた有名しよきの大家の所作を真似れば必ず逆上するに相違ない。聞くところによればユーゴーは快走船ヨットの上へ寝転ねころんで文章の趣向を考えたそうだから、船へ乗って青空を見つめていれば必ず逆上受合うけあひである。スチーヴンソンは腹這はらばいに寝て小説を書いたそうだから、打うつ伏ぶしになつて筆を持てばきつと血が逆さかさになつてくる。かようにいろいろな事を考え出したが、まだ誰も成功しない。まず今日こんにちのところでは人為的逆上は不可能の事となつている。残念だが致し方がない。早晩随意にインスピレーションを起し得る時機の到来するは疑うたがひもない事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常に陥おちいる弊竇へいとうである。主人の逆上も小事件に逢う度に一層の劇甚げきじんを加えて、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその發達を順序立てて述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれほどでもなからうと見くびられるかも知れない。せつかく逆上しても人から天晴あつぱれな逆上と謡うたわれなくては張り合がないだろう。これから述べる事件は大小に係かかわらず主人に取つて名譽な者ではない。事件その物が不名譽であるならば、責せめて逆上なりとも、正銘しょうめいの逆上であつて、決して人に劣るものでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに

骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、十分の休暇、もしくは放課後に至つて熾さかんに北側の空地あきちに向つて砲火を浴びせかける。このダムダム弾は通称をボールと称とくえて、播粉すりこぎ木の大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発射するのだから、書齋しよさいに立て籠こもつてる主人に中あたる氣遣きづかいはない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを自覺せん事はないのだけれど、そこが軍略である。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つるボールといえども相当の効果を収め得ぬ事はない。いわんや一発を送る度に総軍力を合せてわーと威嚇いかく性大音声せいでいおんじようを出いだすにおいてをやである。主人は恐縮の結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない。煩悶はんもんの極きよくそこいらを迷付まじついている血が逆さかさに上のぼるはずである。敵の計はかりごとはなかなか巧妙と云うてよろしい。昔むかし希臘ギリシヤにイスキラスと云う作家があつたそうだ。この男は学者作家に共通なる頭を有していたと云う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿はげと云う意味である。なぜ頭が禿はげげるかと云えば頭の營養不足で毛が生長するほど活氣がないからに相違ない。学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて大抵は貧乏に極きまつている。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿はげげている。さてイスキラスも作家であるから自然の勢いきおい禿はげげなくてはならん。彼はつるつる然たる金柑頭きんかんあたまを有しておつた。ところがある日の事、先生例の頭——頭に外行よそゆきも普段ふだんぎ着もないから例の頭に極つてるが——その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往來をあるいていた。これが間違いのものである。禿はげげ頭を日にあてて遠方から見ると、大變よく光るものだ。高い木

には風があたる、光かる頭にも何かあたらなくてはならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺が舞っていたが、見るとどこかで生捕つた一疋の亀を爪の先に攫んだままである。亀、スポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけている。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくらいだから、当時は無論なかつたに極つている。さすがの鷺も少々持て余した折柄、遙かの下界にぴかと光つた者がある。その時鷺はしめたと思つた。あの光つたものの上へ亀の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極わまつた。砕けたあとから舞い下りて中味を頂戴すれば訳はない。そうだそうだと覗を定めて、かの亀の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落した。生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちやめちやに砕けて有名なるイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。それはそうと、解しかねるのは鷺の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落したのか、または禿岩と間違えて落したのか、解決しよう次第で、落雲館の敵とこの鷺とを比較する事も出来るし、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそれのごとく、また御歴々の学者のごとくぴかぴか光つてはおらん。しかし六畳敷にせよいやしくも書齋と号する一室を控えて、居眠りをしながらも、むずかしい書物の上へ顔を翳す以上は、学者作家の同類と見倣さなければならん。そうすると主人の頭の禿げておらんのは、まだ禿げるべき資格がないからで、その内に禿げるだろうとは近々この頭の上に落ちかかるべき運命であろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目懸けて例のダム丸を集注するのは策のもつとも時宜に適したものと云わねばならん。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、主人の頭は畏怖と煩悶のため必ず營養の不足を訴えて、金柑と

も薬缶とも銅壺とも変化するだろう。なお二週間の砲撃を食えば金柑は潰れるに相違ない。薬缶は洩るに相違ない。銅壺ならひびが入るにきまつている。この容易き結果を予想せんで、あくまでも敵と戦闘を継続しようとするのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡をして虎になつた夢を見ていた。主人に鶏肉を持つて来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持つて出る。迷亭が来たから、迷亭に雁が食いたい、雁鍋へ行つて誂らえて来いと云うと、蕪の香の物と、塩煎餅といつしよに召し上がりますと雁の味が致しますと例のごとく茶羅ッ鉢を云うから、大きな口をあいてうーと喰つて嚇してやつたら、迷亭は蒼くなつて山下の雁鍋は廃業致しましたがいかが取り計いましょうかと云つた。それなら牛肉で勘弁するから早く西川へ行つてロースを一斤取つて来い、早くせんと貴様から食ひ殺すぞと云つたら、迷亭は尻を端折つて馳け出した。吾輩は急からだが大きくなつたので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の帰るのを待ち受けていると、たちまち家中に響く大きな声がしてせつかくの牛も食わぬ間に夢がさめて吾に帰つた。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していたと思ひのほかの主人が、いきなり後架から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴たから、おやと思つうち、たちまち庭下駄をつつかけて木戸から廻つて、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから何となく極りが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまつた。同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白いといわいと、痛いのを我慢して、後を慕つて裏口へ出た。同時に主人がぬすつと、と怒鳴る声が聞える、見ると制帽をつけた十八九になる倔強な奴が一人、四ツ目垣を向うへ乗り越えつ

つある。やあ遅かったと思ううち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとって根拠地の方へ韋駄天のごとく逃げて行く。主人はぬすつとうが大に成功したので、またもぬすつとうと高く叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追いつくためには主人の方で垣を越さなければならぬ。深入りをすれば主人自らみづかが泥棒になるはずである。前申ぜんす通り主人は立派なる逆上家である。こう勢いきおいに乗じてぬすつとうを追い懸ける以上は、夫子ふうし自身がぬすつとうに成つても追いつ懸けるつもりと見えて、引き返す気色けしきもなく垣の根元まで進んだ。今一步で彼はぬすつとうの領分へいに入らなければならぬと云う間際に、敵軍の中から、薄い髻ひげを勢なく生はやした将官がこのこと出馬して来た。兩人ふたりは垣を境に何か談判している。聞いて見るとこんなつまらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですか」

「なぜ断つて、取りに来ないのですか」

「これから善よく注意します」

「そんなら、よろしい」

竜騰虎闘りゅうとうことうの壮観があるだろうと予期した交渉はかくのごとく散文的なる談判をもつて無事に迅速に結了した。主人の壮さかなるはただ意気込みだけである。いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたかも吾輩が虎の夢から急に猫に返つたような観がある。吾輩の小事件と云うのは即ちすなわこれである。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなけ

ればならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這になつて、何か思案している。恐らく敵に対して防禦策を講じているのだらう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をしているのが手に取るように聞える。朗々たる音声でなかなかうまく述べて立てているのを聴くと、全く昨日敵中から出馬して談判の衝に当つた將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行つて見ると、仏蘭西でも独逸でも英吉利でも、どこへ行つても、この公德の行われておらん国はない。またどんな下等な者でもこの公德を重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に在つては、未だこの点において外国と拮抗する事が出来ないのである。で公德と申すと何か新しく外国から輸入して来たように考える諸君もあるかも知れんが、そう思うのは大なる誤りで、昔人も夫子の道一以て之を貫く、忠恕のみ矣と云われた事がある。この恕と申すのが取りも直さず公德の出所である。私も人間であるから時には大きな声をして歌などうたつて見たくなる事がある。しかし私が勉強している時に隣室のものなどが放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬのが私の性分である。であるからして自分が唐詩選でも高声に吟じたら気分が晴々してよかろうと思う時ですら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んでおつて、知らず知らずその人の邪魔をするような事があつてはすまんと思つて、そう云う時はいつでも控えるのである。こう云う訳だから諸君もなるべく公德を守つて、いやしくも人の妨害になると思う事は決してやつてはならぬのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、ここに至つてにやりと笑つた。ちよつと

このにやりの意味を説明する必要がある。皮肉家がこれをよんだらこのにやりの裏には冷評的分子が交つていと思うだろう。しかし主人は決して、そんな人の悪い男ではない。悪いと云うよりそんなに智慧の発達した男ではない。主人はなぜ笑つたかと云うと全く嬉しくつて笑つたのである。倫理の教師たる者がかように痛切なる訓戒を与えるからはこの後は永久ダムダム弾の乱射を免がれるに相違ない。自分のうち頭も禿げずにすむ、逆上は一時に直らんでも時機さえくれば漸次回復するだろう、濡れ手拭を頂いて、炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑つたのである。借金は必ず返す者と二十世紀の今日にもやはり正直に考えるほどの主人がこの講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやんだ。他の教室の課業も皆一度に終つた。すると今まで室内に密封された八百の同勢は鬨の声をあげて、建物を飛び出した。その勢と云うものは、一尺ほどの蜂の巢を敲き落したごとくである。ぶんぶん、わんわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやしくも穴の開いている所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立ても何もあるものかと云うのは間違つてゐる。普通の人は戦争とさえ云えば沙河とか奉天とかまた旅順とかそのほかに戦争はないものごとくに考えてゐる。少し詩がかつた野蛮人になると、アキリスがヘクトーの死骸を引きずつて、トロイの城壁を三匝したとか、燕びと張飛が長坂橋に丈八の蛇矛を横えて、曹操の軍百万人を睨め返したとか大袈裟な事ばかり連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の

戦争はないものと心得るのは不都合だ。太古蒙昧の時代に在つてこそ、そんな馬鹿氣た戦争も行われたかも知れん、しかし太平の今日、大日本国帝都の中心においてかくのごとき野蠻的行動はあり得べからざる奇蹟に属している。いかに騒動が持ち上がったても交番の焼打以上に出る氣遣はない。して見ると臥竜窟主人の苦沙弥先生と落雲館裏八百の健児との戦争は、まず東京市あつて以来の大戦争の一として数えてもしかるべきものだ。左氏が鄴陵の戦を記するに当つてもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になつてゐる。だによつて吾輩が蜂の陣立てを話すのも仔細なかるう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てみると、四つ目垣の外側に縦列を形づくつた一隊がある。これは主人を戦鬪線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわん」「わんわん」「わんわんわんわん」これから先は縦隊総がかりとなつて呐喊の声を揚げる。縦隊を少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を布いている。臥竜窟に面して一人の将官が播粉木の大きな奴を持つて控える。これと相對して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、播粉木のあとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突つ立っている。かくのごとく一直線にならんで向い合つてゐるのが砲手である。ある人の説によるとこれはベースボールの練習であつて、決して戦鬪準備ではないそうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文盲漢である。しかし聞くところによればこれは米国から輸入された遊戯で、今日中学程度以上の学校に行わゆる運動のうちでもつとも流行するものだそうだ。米国は突飛な事ばかり考え出す国柄であるから、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を

日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたかも知れない。また米国人はこれをもつて真に一種の運動遊戯と心得ているのだろう。しかし純粹の遊戯でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼をもつて観察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われない。物は云いようでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽を働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボールなる遊戯の下に戦争をなさんとも限らない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であらう。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボール即ち攻城的砲術である。これからダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線に布かれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の手に握つて播粉木の所有者に抛りつける。ダムダム弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の団子のようなものを御鄭寧に皮でくるんで縫い合せたものである。前申す通りこの弾丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切つて飛んで行くと、向うに立つた一人が例の播粉木をやつと振り上げて、これを敲き返す。たまには敲き損なつた弾丸が流れてしまう事もあるが、大概はポカンと大きな音を立てて弾ね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神経性胃弱なる主人の頭を潰すくらいは容易に出来る。砲手はこれだけで事足りるのだが、その周囲附近には弥次馬兼援兵が雲霞のごとく付き添うている。ポカンと播粉木が団子に中るや否やわー、ぱちぱちぱちと、わめく、手を拍つ、やれやれと云う。中つたらうと云う。これでも利かねえかと云う。恐れ入らねえかと云う。降参かと云う。これだけならまだしもであるが、敲き返された弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込

まなければ攻撃の目的は達せられないのである。ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かん。そこで彼等はたまひろいと称する一部隊を設けて落弾おちたまを拾つてくる。落ち場所がよければ拾うのに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそう容易たやすくは戻つて来ない。だから平生ならなるべく労力を避けるため、拾い易やすい所へ打ち落すはずであるが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入はいつて拾わなければならん。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。四つ目垣のうちで騒動すれば主人が怒おこり出さなければならん。しからずんば兜かぶとを脱いで降参しなければならん。苦心のあまり頭がだんだん禿げて来なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、照準しょうじゆん誤あやまたず、四つ目垣を通り越して桐きりの下葉を振り落して、第二の城壁すなわ即ち竹垣に命中した。随分大きな音である。ニュートンの運動律第一に曰くもし他の力を加うるにあらざれば、一度ひとたび動き出したる物体は均一の速度をもつて直線いっに動くものとす。もしこの律のみによつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭はこの時にイスキラスと運命を同じくしたのである。幸さいわいにしてニュートンは第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線ちくせんの方向において起るものとす。これは何の事だか少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突き通して、

障子を裂き破つて主人の頭を破壊しなかつたところをもつて見ると、ニュートンの御蔭に相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に乗り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もつと左の方か」などと棒でもつて笹の葉を敲き廻る音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こつそり這入つて、こつそり拾つては肝心の目的が達せられん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾以上に大事である。この時のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹垣に中つた音も知っている。中つた場所も分つている、しかしてその落ちた地面も心得ている。だからおとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾える。ライブニツツの定義によると空間は出来得べき同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ順にあらわれてくる。柳の下には必ず鱒がいる。蝙蝠に夕月はつきものである。垣根にボールは不似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に抛り込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの排列に慣れている。一眼見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒ぎ立てるのは必竟するに主人に戦争を挑む策略である。

こうなつてはいかに消極的な主人といえども応戦しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳け出した。驀然として敵の一人を生捕つた。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。髻の生えている主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで沢山だと思つたのだらう。詫び入るのを無理に引張つて椽側の前まで連れて来た。ここにちよつと敵の策略について一言する必要がある、敵は主人が昨日の権幕を見てこ

の様子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時万一逃げ損じて大僧がつかまつては事面倒になる。ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやつて危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供をつらまえて愚図愚図理窟を捏ね廻したつて、落雲館の名譽には関係しない、こんなものを大人気もなく相手にする主人の恥辱になるばかりだ。敵の考はこうであつた。これが普通の人間の考で至極もつともなところである。ただ敵は相手が普通の人間でないと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらいの常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境いのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のごとく相手にならぬ中学一年生を生捕つて戦争の人質とするほどの見でなくては逆上家の仲間入りは出来ないのである。可哀そうなのは捕虜である。単に上級生の命令によつて玉拾いなる雑兵の役を勤めたるどころ、運わるく非常識の敵将、逆上の天才に追い詰められて、垣越える間もあらばこそ、庭前に引き据えられた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣もちよつ着もつけておらん。白シャツの腕をまくつて、腕組をしたのがある。綿ネルの洗いざらしを申し訳に背中だけへ乗せているのがある。そうかと思うと白の帆布綿に黒い縁をとつて胸の真中に花文字を、同じ色に縫いつけた洒落者もある。いずれも一騎当千の猛将と見えて、丹波の国は笹山から昨夜着し立てでござると云わぬばかりに、黒く逞しく筋肉が発達している。中学などへ入れ

て学問をさせるのは惜しいものだ。漁師か船頭にしたら定めし国家のためになるだろうと思われらくらいである。彼等は申し合せたごとく、素足に股引を高くまくつて、近火の手伝にでも行きそうな風体に見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然として一言も発しない。主人も口を開かない。しばらくの間双方共睨めくらをしていゝるなかにちよつと殺気がある。「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大気燄である。奥歯で嚙み潰した癩癩玉が炎となつて鼻の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく怒つて見える。越後獅子の鼻は人間が怒つた時の恰好を形どつて作つたものであろう。それでなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章のついている帽子を被つています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入するのを、そう容易く許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違ないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を顧みながら、おいこらこらと云う。

埼玉生れの御三が襖をあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行つて誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さつきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りもせずにやにや笑っている。主人はこれでも大戦争をしているつもりである。逆上の敏腕を大に振っているつもりである。しかるところ自分の召し使たる当然こつちの肩を持つべきものが、真面目な態度をもつて事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」
 「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか、「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲み込めのである。小使でも引張つて来はせんかと心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使ったが「本当は御校の生徒でしようか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前にならんでいる勇士を一通り見廻わした上、もとのごとく瞳を主人の方にかえして、下のごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事のないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困つたもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もないと見えて何とも云うものはない。おとなしく庭の隅にかたまつて羊の群が雪に逢つたように控えている。

「丸が這入るのも仕方がないでしょう。こうして学校の隣りに住んでいる以上は、時々はボールも飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな。仮令垣を乗り越えるにしても知れないないように、そつと拾つて行くなら、まだ勘弁のしようもあります……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数の事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御断りをして取らなければいかん。いいか。

——広い学校の事ですからどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育上必要な

ものでありますから、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるので。これを許すといひ御迷惑になるような事が出来ませんが、これは是非御容赦を願いたいと思ひます。その代り向後はきつと表門から廻つて御断りを致した上で取らせませすから」

「いや、そう事が分かれればよろしいです。球はいくら御投げになつても差支えはないです。表からきてちよつと断わつて下されば構いません。ではこの生徒はあなたに御引き渡し申しますからお連れ帰りを願ひます。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾の挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれで一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑うなら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。吾輩は主人の大事件を写したので、そんな人の大事件を記したのではない。尻が切れて強弩の末勢などと悪口するものがあるなら、これが主人の特色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまえて未だ稚氣を免がれずと云うている。

吾輩はすでに小事件を叙し了り、今また大事件を述べ了つたから、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。すべて吾輩のかく事は、口から出任せのいい加減と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざ

る法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出して五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むごとに薔薇の水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買って来て、友人の御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはない事に致したい。これから述べるのは、吾輩自ら余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極まっている、読まんでもよかろうなどと思うと飛んだ後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がろうと云う角で金田の旦那と鈴木藤さんがしきりに立ちながら話をしている。金田君は車で自宅へ帰るところ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で両人がぼつたりと出逢つたのである。近来は金田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて見ると、何となく御懐かしい。鈴木にも久々だから余所ながら拝顔の榮を得ておこう。こう決心してのそのそ御両君の佇立しておらるる傍近く歩み寄つて見ると、自然両君の談話が耳に入る。これは吾輩の罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺がうくらいの程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の談話を拝聴したつて怒らるる氣遣はあるまい。もし怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちょうどよい所で御目にかかりました」と藤さんは鄭寧に

頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかつた」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」
「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考へている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。いつが宜しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。——それじゃせつかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞がわるくつてね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。こないだから大分弱らしているんだが、やっぱり頑張がんばっているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う観念とぼの乏しい奴ですから無暗むやみに瘦我慢を張るんでしよう。昔からああ云

う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんですから度し難いです」

「あはははほんとうに度し難い。いろいろ手を易え品を易えてやって見るんだがね。とうとうしまいに学校の生徒にやらしした」

「そいつは妙案ですな。利目がございましたか」

「これにやあ、奴も大分困ったようだ。もう遠からず落城するに極まっている」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢に無勢ですからな」

「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大分弱ったようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらおうと云うのさ」

「はあ、そうですね。なに訳はありません。すぐ行つて見ましよう。容子は帰りがけに御報知を致す事にして。面白いでしょう、あの頑固なのが意気銷沈しているところは、きつと見物ですよ」

「ああ、それじゃ帰りに御寄り、待つているから」

「それでは御免蒙ります」

おや今度もまた魂胆だ、なるほど実業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻のような主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥るのも皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものはたしかに金である。この金の功力を心得て、この金の威光を自由に發揮するものは実業家諸君をおいてほかに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今まではわからずやの窮措大の家に養なわれて

実業家の御利益ごりやくを知らなかったのは、我ながら不覚である。それにしても冥頑不靈めいがんふれいの主人も今度は少し悟らあぶずばなるまい。これでも冥頑不靈で押し通す見だと危ない。主人のもつとも貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。その模様で彼の悟り具合おのずも自から分明ぶんみょうになる。愚凶愚凶してはおられん、猫だつて主人の事だから大おおに心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当り障りさわのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼あおいぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配つて、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑つて面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事があるぜ」

「冗談じやうだん云つちやいけない。笑う門かどには福来るきたさ」

「昔むかし希臘ギリシヤにクリシツパスと云う哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりゃ昔の事だから……」

「昔しだって今だって変りがあるものか。驢馬ろばが銀の井どんぶりから無花果いちじゆくを食うのを見て、おかしくつてたまらなくなつて無暗むやみに笑つたんだ。ところがどうしても笑いがとまらない。とうとう笑い死にに死んだんだあね」

「はははしかしそんなに留とめ度どもなく笑わなくつてもいいさ。少し笑う——適宜てきぎに、——そうするといいい心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらがらとあく、客来きやくらいかと思うとそうでない。

「ちよつとボールが這はい入りましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？ 裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のつて。碌々ろくろく勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒だいぶんおこつたね。何か癩しかくに障さわる事でも有るのかい」

「あるのないので、朝から晩まで癩しかくに障さわり続けだ」

「そんなに癩しかくに障さわるなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、打ちやっておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また門口をあけて「ちよつとボールが這入りましたから取らして下さい」と云う声がする。

「いや大分来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうーか、分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするつたつて、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固にしていなくてもよからう。人間は角がある」と世の中を転がって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろごろどこへでも苦なしに行けるが四角なものはころがるに骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じゃなし、そう自分の思うように人はならないさ。まあ何だ

ね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐つて人を使いさえすればすむんだから。多勢に無勢どうせ、叶わないのは知れているさ。頑固もいいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障つたり、毎日の業務に煩を及ぼしたり、とどのつまりが骨折り損の草臥儲けだからね」

「ご免なさい。今ちよつとボールが飛びましたから、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」
「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑つていいる。

「失敬な」と主人は真赤になつていいる。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから、それじゃ失敬ちと来たまえと帰つて行く。

入れ代つてやつて来たのが甘木先生である。逆上家が自分で逆上家だと名乗る者は昔しか
ら例が少ない、これは少々変だなと覺つた時は逆上の峠はもう越していいる。主人の逆上は
昨日の大事の際に最高度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たるに係らず、どうかこう
か始末がついたのでその晩書齋でつくづく考えて見ると少し変だと気が付いた。もつとも落
雲館が変なのか、自分が変なのか疑を存する余地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら
中学校の隣に居を構えたつて、かくのごとく年が年中肝癪を起しつづけはちと変だと気が付
いた。変であつて見ればどうかしななければならん。どうするつたつて仕方がない、やはり医
者の薬でも飲んで肝癪の源に賄賂でも使つて慰撫するよりほかに道はない。こう覺つたから

平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上に気が付いただけは殊勝しゆしやうの志、奇特きびてくの心得と云わなければならん。甘木先生は例のごとくにここにこと落ちつき払って、「どうです」と云う。医者は大抵どうですと云うに極きまつてる。吾輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者いの薬は利きくものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚ちやうじやの長者だから、別段激おした様子もなく、

「利きかん事こともないです」と穏おだやかに答えた。

「私わたしの胃病いびなんか、いくら薬を飲んでも同じ事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善よくなりますか」と自分の胃いの事を人に聞いて見る。

「そう急いそには、癒なほりません、だんだん利ききます。今でももとより大分だいぶよくなっています」

「そうですか」

「やはり肝かん癩しやくが起おりますか」

「起おりますとも、夢にまで肝かん癩しやくを起おします」

「運動うんどうでも、少しなざつたらいいでしょう」

「運動うんどうすると、なお肝かん癩しやくが起おります」

甘木先生もあきれ返つたものと見えて、

「どれ一つ拝見しましうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだつて催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあつたですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、私わたしなどもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやつて見ましようか。誰でも懸かからなければならん理窟りくつのものです。あなたさえ善よければ懸けて見ましよう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私わたしもとうから懸かつて見たいと思つたんです。しかし懸かりきりで眼が覚さめない困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましよう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらるる事となつた。吾輩は今までこんな事を見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ始めた。その方法を見てみると、両眼りょうがんの上脛うわまぶたを上から下へと撫なでて、

主人がすでに眼を眠っているにも係らず、しきりに同じ方向へくせを付けたがっている。しばらくすると先生は主人に向つて「こうやつて、臉を撫でていると、だんだん眼が重たくなるでしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなお同じように撫でおろし、撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその氣になつたものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませぬ」と云われた。可哀想に主人の眼はとうとう潰れてしまった。「もう開かんですか」「ええもうあきませぬ」主人は黙然として目を眠っている。吾輩は主人がもう盲目になつたものと思ひ込んでしまった。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覽なさい。とうていあけないから」と云われる。「そうですか」と云うが早いか主人は普通の通り両眼を開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりませぬ」と云うと甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りませぬ」と云う。催眠術はついに不成功に了る。甘木先生も帰る。

その次に来たのが——主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘のようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言でも記述するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先刻申す通り大事件の余瀾を描きつつある。しかしてこの珍客はこの余瀾を描くに方つて逸すべからざる材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、山羊のような髻を生やしている四十前後の男と云えばよからう。迷亭の美学者たるに対して、吾輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と

対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われるからである。これも昔し
の同窓と見えて兩人共応対振りは至極打ち解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚麩のようにふわふわしているね。せんだつて友人を
連れて一面識もない華族の門前を通行した時、ちよつと寄つて茶でも飲んで行こうと云つて
引つ張り込んだそうだが随分呑氣だね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかつたが、——そうさ、まあ天稟の奇人だろう、その代り考も何も
ない全く金魚麩だ。鈴木か、——あれがくるのかい、へえー、あれは理窟はわからんが世間的
には利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがないから落ちつきがなくつて
駄目だ。円滑円滑と云うが、円滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚麩ならあれは藁
で括つた菟弱だね。ただわるく滑かでぶるぶる振えているばかりだ」

主人はこの奇警な比喻を聞いて、大に感心したものらしく、久し振りでハハハと笑つた。
「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ自然薯くらいなところだろう。長くなつて泥の中に
埋つてるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨ましいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。別に羨まれるに足るほどの事もない。た
だありがたい事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うているから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癢が起つてたまらん。どつちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、そう自分のように人にもなれと勧めたつて、なれるものではない。箸は人と同じように持たんと飯が食いにくいだが、自分の麵麩は自分の勝手に切るのが一番都合がいいようだ。上手な仕立屋で着物をこしらえれば、着たてから、からだに合ったのを持つてくるが、へた下手の裁縫屋に逃えたら当分は我慢しないと駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着ているうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてくるから。今の世に合うように上等な両親が手際よく生んでくれれば、それが幸福なさ。しかし出来損できそなつたら世の中に合わないで我慢するか、または世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はなかるう」

「しかし僕なんか、いつまで立つても合いません、心細いね」

「あまり合わない背広を無理にきると綻ほころびる。喧嘩けんかをしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だつてやった事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくつても怒つておれば喧嘩だろう」

「なるほど一人喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになつた」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今戸焼の狸から、びん助、きしやごそのほかあらゆる不平を挙げて滔々と哲学者の前に述べ立てた。哲学者先生はだまって聞いていたが、ようやく口を開いて、かように主人に説き出した。

「びん助やきしやごが何を云つたつて知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だつて談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西洋人より昔の日本人の方がよほどえらいと思う。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃大分流行るが、あれは大なる欠点を持つているよ。第一積極的と云つたつて際限がない話した。いつまで積極的にやり通したつて、満足と云う域とか完全と云う境にいけるものじゃない。向に檜があるだろう。あれが目障りになるから取り払う。とその向うの下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その次の家が癩に触る。どこまで行つても際限のない話しさ。西洋人の遣り口はみんなこれさ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ。人が気に喰わん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法庭へ訴える、法庭で勝つ、それで落着と思うのは間違さ。心の落着は死ぬまで焦つたつて片付く事があるものか。寡人政治がいかんから、代議政体にする。代議政体がいかんから、また何かにしたくなる。川が生意気だつて橋をかける、山が気に喰わんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鉄道を布く。それで永久満足が出来るものじゃない。さればと云つて人間だものどこまで積極に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不

満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と大に違ふところは、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云う一大仮定の下に発達しているのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人のようにこの關係を改良して落ちつきをとろうとするのではない。親子の關係は在来のままでどうい動かす事が出来んものとして、その關係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の區別もその通り、自然その物を観るのもその通り。——山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。禪家でも儒家でもきつと根本的にこの問題をつらまえる。いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日を回らす事も、加茂川を逆に流す事も出来ない。ただ出来るものは自分の心だけだからね。心さえ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なものではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。びん助なんか愚な事を云つたらこの馬鹿野郎とすましておれば仔細なかう。何でも昔しの坊主は人に斬り付けられた時電光影裏に春風を斬るとか、何とか洒落れた事を云つたと云う話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいと思ふのは少々誤まつているようだ。現に君がいくら積極主義に働いたつて、生徒が君をひやかしくるのをどうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積

極的に出たつたて勝てつこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢たぜいに無勢ぶぜいの問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆たのを恃む小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようと言うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰つたあとで書齋へ這入はいつて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木とらの藤とうさんは金と衆とに従えと主人に教えたのである。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと助言じょごんしたのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ろと説法したのである。主人しゅじんがいずれを択えらぶかは主人の随意である。ただこのままでは通とされないうに極きまつている。

九

主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行つたものだそうだが日英同盟の今日から見ると、こんな顔はいささか時候後れの感がある。あばたの衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くその迹を絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫といえども毫も疑を挟む余地のないほどの名論である。現今地球上にあばたつ面を有して生息している人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が實際の区域内において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたつた一人ある。しかしてその一人が即ち主人である。はなはだ氣の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空氣を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて頑として動かないのは自慢にならんのみか、かえつてあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のうち取り払つたらよさそうなものだ。あばた自身だつて心細いに違ひない。それとも党勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せずんばやまずと云う意氣込みで、あんなに横風に顔一面を占領しているのか知らん。そうするとこのあばたは決して輕蔑の意をもつて視るべきものでない。滔々たる流俗に抗する万古不磨の穴の集合体であつて、大に吾人の尊敬に値する凸凹と云つて宜しい。ただきたならしいのが欠点である。

主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯あさだそうはくと云う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞うときには必ずかごに乗つてそろりそろりと参られたそうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の代になつたら、かごがたちまち人力車に變じた。だから養子が死んでそのまた養子が跡を続ついだら葛根湯かこんとうがアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですらあまり見つともいいものでは無かつた。こんな真似をして澄すましていたものは旧弊な亡者もうじやと、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると気の毒なくらいだが、漢法医にも劣らざる頑固がんこな主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露ばくろしつつ毎日登校してリードルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に刻こして教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大なる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばたの顔面に及ぼす影響」と云う大問題を造作ぞうさもなく解釈して、不言ふげんの間にその答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間が教師として存在しなくなつた暁あかつきには彼等生徒はこの問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳けつけて、吾人がミイラによつて埃及人を髻髻ほうふつすると同程度の労力を費つやさねばならぬ。この点てんから見ると主人の痘痕あばたも冥々めいめいの裡うちに妙な功德くどくを施こしている。

もつとも主人はこの功德を施こすために顔一面に疱瘡ほうそうを種うえ付けたのではない。これでも実は種うえ疱瘡ほうそうをしたのである。不幸にして腕に種うえたと思つたのが、いつの間まにか顔へ伝染

していたのである。その頃は小供の事で今のように色気いろけもなにもなかったものだから、痒かゆいと云いながら無暗むやみに顔中引き搔かいたのだそうだ。ちようど噴火山が破裂してラヴァが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向つて瘡瘡かさをせぬうちは玉のような男子であつたと云つてゐる。浅草の観音様かんのんさまで西洋人が振り反かえつて見たくらい奇麗きれいだつたなどと自慢する事さえある。なるほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない者はやつぱりきたないものだから、物心ものこころがついて以来と云うもの主人は大おおにあばたについて心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態みにくいさまを揉もみ潰つぶそうとした。ところが宗伯老のかごと違つて、いやになつたからと云うてその急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残つてゐる。この歴然が多少気にかかると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばた面づらを勘定してあるくそうだ。今日何人あばたに出逢つて、その主ぬしは男か女か、その場所は小川町の勸工場かんこうばであるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあばたに関する智識ちしきにおいては決して誰にも譲るまいと確信してゐる。せんだつてある洋行帰りの友人が来た折なぞは、「君西洋人にはあばたがあるかな」と聞いたくらいだ。するとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多めつたにないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返した。友人は気のない顔で「あつても乞食たちか立ん坊ぼうだよ。教育のある人にはないようだ」と答へたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違うね」と云つた。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つた主人はその後書斎ごしょさいに立て籠こもつてしきり

に何か考えている。彼の忠告を容れて静坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が気の小さな人間の癖に、ああ陰氣な懷手ばかりしては碌な結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者から喇叭節でも習った方が遙かにましだともでは気が付いたが、あんな偏屈な男はどうてい猫の忠告などを聴く氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずに暮した。

今日はあれからちようど七日目である。禪家などでは一七日を限つて大悟して見せるなどと凄じい勢で結跏する連中もある事だから、うちの主人もどうかなたらう、死ぬか生きるか何とか片付いたらうと、のそのそ椽側から書齋の入口まで来て室内の動静を偵察に及んだ。書齋は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな机が据えてある。ただ大きな机ではわからない。長さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな机である。無論出来合のものではない。近所の建具屋に談判して寢台兼机として製造せしめたる稀代の品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、また何の故にその上に寝て見ようなどという了見を起したのか、本人に聞いて見ない事だから頓とわからない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を担ぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種の精神病者において吾人がしばしば見出すごとく、縁もゆかりもない二個の觀念を連想して、机と寢台を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寝をして寝返りをする拍子に椽側へ転げ落ちたのを見た事がある。それ以來この机は決して寢台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの座布団があつて、煙草の火で焼けた穴が三つほどかた

まつてる。中から見える綿は薄黒い。この座布団の上に後ろ向きにかしこまつているのが主人である。鼠色によごれた兵児帯をこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏へ垂れかかっている。この帯へじやれ付いて、いきなり頭を張られたのはこないだの事である。滅多に寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手の考と云う喩もあるのにと後ろから覗き込んで見ると、机の上でいやにぴかぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に二三度瞬をしたが、こいつは変だとまぶしいのを我慢してじつと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと云う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡などを振り舞わしているのであるろう。鏡と云えば風呂場にあるに極まつている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。——主人のよくな男が髪を分けるとか聞くと聞く人もあるかも知れぬが、実際彼は他の事に無精なるだけそれだけ頭を丁寧にする。吾輩が当家に参つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日といえども五分刈に刈り込んだ事はない。必ず二寸くらいの長さにして、それを御大そうに左の方で分けるのみか、右の端をちよつと跳ね返して澄している。これも精神病の徴候かも知れない。こんな気取った分け方はこの机と一向調和しないと思うが、あえて他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと思つたら実はこう云う訳である。彼のあばたは単に彼の顔を侵蝕せるのみならず、とくの昔に脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だから

もし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら撫でも、さすつてもぼつぼつがとれない。枯野に虫を放つたようなもので風流かも知れないが、細君の御意に入らんのは勿論の事である。髪さえ長くしておけば露見しないですむところを、好んで自己の非を曝くにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生やして、こつちのあばたも内済にしたいくらいなところだから、ただで生える毛を銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよと吹聴する必要はあるまい。——これが主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわける原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風呂場にある所以で、しこうしてその鏡が一つしかないと言ふ事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に來ている以上は鏡が離魂病に罹つたのかまたは主人が風呂場から持つて來たに相違ない。持つて來たとすれば何のために持つて來たのだろう。あるいは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔し或る学者が何とかいう智識を訪うたら、和尚面肌を抜いで軀を磨しておられた。何をこしらえなさると質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思うて一生懸命にやつておるところじやと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも軀を磨して鏡とする事は出來まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじややめよ、いくら書物を読んで道はわからぬのもそんなものじやると罵つたと云うから、主人もそんな事を聞き啣つて風呂場から鏡でも持つて來て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。大分物騒になつて來たなと、そつと窺つている。かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子をもつて一張來の鏡を見つめている。元來鏡

というものは気味の悪いものである。深夜蠟燭を立てて、広い部屋のなかで一人鏡を覗き込むにはよほどの勇氣がいるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢から鏡を顔の前へ押し付けられた時に、はつと仰天して屋敷のまわりを三度駆け回ったくらいである。いかに白昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめている以上は自分で自分の顔が怖くなるに相違ない。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。ややあつて主人は「なるほどきたない顔だ」と独り言を云つた。自己の醜を自白するのはなかなか見上げたものだ。様子から云うとたしかに気違の所作だが言うことは真理である。これがもう一步進むと、己れの醜悪な事が怖くなる。人間は吾身が怖ろしい悪党であると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でないと苦勞人とは云えない。苦勞人でないとどうてい解脱は出来ない。主人もここまで来たらついでに「おお怖い」とでも云いそうなものであるがなかなか云わない。「なるほどきたない顔だ」と云つたあとで、何を考え出したか、ぶうつと頬つぺたを膨らました。そうしてふくれた頬つぺたを平手で二三度叩いて見る。何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこの顔に似たものがあるらしいと云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは御三の顔である。ついでだから御三の顔をちよつと紹介するが、それはそれはふくれたものである。この間さる人が穴守稻荷から河豚の提灯をみやげに持つて来てくれたが、ちよつどあの河豚提灯のようにくれている。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失している。もつとも河豚のふくれるのは万遍なく真丸にくれるのだが、お三とくると、元来の骨格が多角性であつて、その骨格通りにふくれ上がるのだから、まるで水気になやんでいる六角時計のようなものだ。御三が聞いたらさぞ怒るだろうから、御三はこのくらいにしてまた主人の方に帰るが、かく

のごとくあらん限りの空気をもつて頬つぺたをふくらませたる彼は前申す通り手のひらで頬ぺたを叩きながら「このくらい皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」とまた独り語をいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目立つ。やつぱりまともに日の向いてる方が平に見える。奇体な物だなあ」と大分感心した様子であつた。それから右の手をうんと伸して、出来るだけ鏡を遠距離に持つて行つて静かに熟視している。「このくらい離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかん。——顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟つたようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そうして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度にこの中心に向つてくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な容貌が出来上つたと思つたら「いやこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々やめてしまつた。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不審の体で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫でて、撫でた指の頭を机の上にあつた吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸い取られた鼻の膏が丸く紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を転じてぐいと右眼の下脛を裏返して、俗に云うべつかんこうを見事にやつて退けた。あばたを研究しているのか、鏡と睨め競をしていいのかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だから見ているうちにいろいろになると見える。それどころではない。もし善意をもつて蒟蒻問答的に解釈してやれば主人は見性自覚の方便としてかように鏡を相手にいろいろな仕草を演じているのかも知れない。すべて人間の研究と云うものは自己を研究するのである。天地と云い

山川さんせんと云い日月じつげつと云い星辰せいしんと云うも皆自己いみまの異名いみょうに過ぎぬ。自己おを措おいて他に研究けんきゅうすべき事項たれびとは誰人たれびとにも見出し得ぬ訳だ。もし人間にんげんが自己お以外いに飛び出す事が出来たら、飛び出す途端みいだに自己おはなくなつてしまふ。しかも自己おの研究けんきゅうは自己お以外いに誰もしてくる者はない。いくら仕てやりたくても、貰もらいたくても、出来ない相談さうだんである。それだから古来の豪傑ごうかくはみんな自力じりきで豪傑ごうかくになつた。人のお蔭かげで自己おが分るくらいなら、自分の代理だいりに牛肉ごうにくを喰くわして、堅かたいか柔なかいか判断はんぱんの出来る訳だ。朝あしたに法はふを聴きき、夕ゆうべに道みちを聴きき、梧前ごぜん灯下とうかに書卷しよけんを手てにするのは皆この自証じしやうを挑撥てうはつするの方便ほうべんの具ぐに過ぎぬ。人の説せつく法はふのうち、他の弁べんずる道みちのうち、乃至乃至は五車ごしゃにあまる蠹紙としたいり堆裏たいりに自己おが存在ゆえんする所以ゆえんがない。あれば自己おの幽霊ゆうれいである。もつともある場合ばあひにおいて幽霊ゆうれいは無霊むれいより優まるかも知れない。影かげを追おえば本体ほんたいに逢着ほうちやくする時ときがないとも限かぎらぬ。多くの影かげは大抵たいだい本体ほんたいを離はなれぬものだ。この意味いみで主人しゆじんが鏡かがみをひねくつているなら大分たいぶん話わせる男おとこだ。エピックテタスなどを鵜呑うのみにして学者がくしやぶるよりも遙はるかにまじだと思おもう。

鏡かがみは己惚うぬぼれの醸造器じやうぞうきであるごとく、同時に自慢じまんの消毒器しゆじうきである。もし浮華うきわ虚栄きよえいの念ねんをもつてこれに対する時ときはこれほど愚物ぐぶつを煽動せんどうする道具どうぐはない。昔むかしから増上ぞうじやう慢まんをもつて己おのれを害がいし他たを戕せううた事蹟じせきの三分さんぶんの二にはたしかに鏡かがみの所作しよさくである。仏国ぶつこく革命かくめいの当時たうじ物好きものずきな御医ごい者しやさんが改良かいりやう首くびきり器械きかちを發明はつめいして飛とんだ罪つみをつくつたように、始めて鏡かがみをこしらえた人も定めし寢覚ねざめのわるい事ことだろう。しかし自分に愛想あいせうの尽つきかけた時とき、自我じがの萎縮ゐしゆくした折せは鏡かがみを見るほど葉はになる事ことはない。妍醜けんしゆ瞭然りやうぜんだ。こんな顔かほでよくまあ人ひとで候さうろうと反そりかえつて今日こんにちまで暮くらされたい期節きせつである。自分おのれで自分の馬鹿ばかを承知じやうちしているほど尊たつとく見みえる事ことはない。この

自覚性馬鹿の前にはあらゆるえらがり、屋がことごとく頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然として吾を輕侮嘲笑しているつもりでも、こちらから見るとその昂然たるところが恐れ入って頭を下げていている事になる。主人は鏡を見て己れの愚を悟るほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられる痘痕の銘くらいは公平に読み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の賤しきを会得する楷梯にもなろう。たのもしい男だ。これも哲学者からやり込められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思う存分あかべえをしたあとで「大分充血しているようだ。やつぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、人さし指の横つらでぐいぐい充血した脛をこすり始めた。大方痒いのだろうけれども、たださえあんなに赤くなっているものを、こう擦つてはたまるまい。遠からぬうちに塩鯛の眼玉のごとく腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて鏡に向つたところを見ると、果せるかなどんよりとして北国の冬空のように曇つていた。もつとも平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞を用いると混沌として黒眼と白眼が割判しないくらい漠然としている。彼の精神が朦朧として不得要領底に一貫しているごとく、彼の眼も曖々然味々然として長えに眼窩の奥に漂うている。これは胎毒のためだとも云うし、あるいは疱瘡の余波だとも解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になつた事もあるそうだが、せつかく母親の丹精もあるにその甲斐あらばこそ、今日まで生れた当時のままでぼんやりしている。吾輩ひそかに思うにこの状態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼玉がかように晦澁溷濁の悲境に彷徨しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透明の実質から構成されていて、その作用

が暗愴溟濛の極に達しているから、自然とこれが形体の上にあらわれて、知らぬ母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たつて火あるを知り、まなこ濁つて愚なるを証す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。

今度は髻をねじり始めた。元来から行儀のよくない髻でみんな思い思いの姿勢をとつて生えている。いくら個人主義が流行る世の中だつて、こう町々に我儘を尽くされては持主の迷惑はさこそと思ひやられる、主人もここに鑑みるところあつて近頃は大に訓練を与えて、出来る限り系統的に按排するように尽力している。その熱心の効果は空しからずして昨今ようやく歩調が少しとこのうようになつて来た。今までは髻が生えておつたのであるが、この頃は髻を生やしているのだと自慢するくらいになつた。熱心は成効の度に応じて鼓舞せられるものであるから、吾が髻の前途有望なりと見てとつて主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髻に向つて鞭撻を加える。彼のアムビションは独逸皇帝陛下のように、向上の念の熾な髻を蓄えるにある。それだから毛孔が横向であろうとも、下向であろうとも聊か頓着なく十把一とからげに握つては、上の方へ引つ張り上げる。髻もさぞかし難儀であろう、所有主たる主人すら時々は痛い事もある。がそこが訓練である。否でも応でもさかに扱き上げる。門外漢から見ると気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の本性を撓めて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので毫も非難すべき理由はない。

主人が満腔の熱誠をもつて髻を訓練していると、台所から多角性の御三が郵便が参りまし

たと、例のごとく赤い手をぬつと書斎の中へ出した。右手に髻をつかみ、左手に鏡を持った主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字の尾に逆か立ちを命じたような髻を見るや否や御多角はいきなり台所へ引き戻して、ハハハハと御釜の蓋へ身をもたして笑った。主人は平気なものである。悠々と鏡をおろして郵便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめしい文字が並べてある。読んで見ると

拜啓 愈御多祥奉 賀 候 回顧すれば日露の戦役は連戦連勝の勢に乗じて平和克復を告

げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裡に凱歌を奏し国民の歡喜何ものか之に若かん曩に宣戦の大詔煥発せらるるや義勇公に奉じたる将士は久しく万里の異境に在りて克く

寒暑の苦難を忍び一意戦闘に従事し命を国家に捧げたるの至誠は永く銘して忘るべから

ざる所なり而して軍隊の凱旋は本月を以て殆んど終了を告げんとす依つて本会は来る二

十五日を期し本区内一千有余の出征将校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱旋

祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉せんが為め熱誠之を迎え聊 感謝の微衷を表し度就

ては各位の御協賛を仰ぎ此盛典を挙行するの幸を得ば本会の面目不遇之と存候間何卒御

賛成奮つて義捐あらんことを只管希望の至に堪えず候敬具

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん

顔をしている。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東北凶作の義捐金を二円とか三

円とか出してから、逢う人毎に義捐をとられた、とられたと吹聴しているくらいである。義

捐とある以上は差し出すもので、とられるものでないには極つている。泥棒にあつたのでは

あるまいし、とられたとは不穩当である。しかるにも関せず、盗難にでも罹つたかのごとく

に思つてゐるらしい主人がいかに軍隊の歓迎だと云つて、いかに華族様の勧誘だと云つて、強談ごうだんで持ちかけたらいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すような人間とは思われない。主人から云えば軍隊を歓迎する前にまず自分を歓迎したのである。自分を歓迎した後なら大抵のものは歓迎しそうであるが、自分が朝夕ちやうせきに差し支つかえる間は、歓迎は華族様に任せておく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「や、これも活版だ」と云つた。

時下秋冷の候こうに候処そう貴家益々御隆盛の段奉賀がしあげたてまつりそうのぶ上候陳ちんれば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家のために妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖針作ふしょうしんさくが足らざる所に起因すと存じ深く自ら警みづかむる所あり臥薪嘗胆がしんしやうたん其の苦辛の結果漸ようやく茲ここに独力以て我が理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候其は別義にも御座なく別冊裁縫さいほう秘術綱要と命名せる書冊出版の義に御座候本書は不肖針作ふしょうしんさくが多年苦心研究せる工芸上の原理原則に法のつとり真に肉を裂き血を絞るの思を為なして著述せるものに御座候因よつて本書を普あまねく一般の家庭へ製本実費に些少さしやうの利潤を附して御購求ごこうきゆうを願ひ一面斯道しどう発達の一助となすと同時に又一面には僅少きんしやうの利潤を蓄積して校舎建築費に当つる心算しんざんに御座候依よつては近頃何共恐縮なんどもの至りに存じ候えども本校建築費中へ御寄附被成下なしくだされと御思召し茲ここに呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分与被成下候なしくだされて御賛同の意を御表章被成下度伏して懇願仕候こんがんしこう匆匆々敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長

縫田針作ぬいだしんさく

九拜

とある。主人はこの鄭重ていじちゆうなる書面を、冷淡に丸めてぼんと屑籠くすかごの中へ抛り込んだ。せつかく

の針作君の九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変りの光彩を放っている。状袋が紅白のんだらで、飴ん棒の看板のごとくはなやかなる真中に珍野苦沙弥先生虎皮下と八分体で肉太に認めてある。中からお太さんが出るかどうか受け合われないが表だけはすこぶる立派なものだ。

若し我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸いつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什麼の交渉がある。

……始めて海鼠を食い出せる人は其胆力に於て敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其勇氣に於て重んずべし。海鼠を食えるものは親鸞の再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。苦沙弥先生の如きに至つては只干瓢の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を食つて天下の士たるものは、われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。父母も汝に私あるべし。愛人も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には黴が生えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神？ 神は人間の苦しき。汝何を捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃んで安しと云う。咄々、醉漢漫りに胡亂の言辞を弄して、蹣跚として墓に向う。油尽きて灯自ら滅す。業尽きて何物をか遺す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上げられ。……

人を人と思わざれば畏るる所なし。人を人と思わざるものが、吾を吾と思わざる世を憤るは如何。権貴榮達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。只他の吾を吾と思わぬ時に於て佛然として色を作す。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他の吾を吾と思わぬ時、不平家は発作的ほつさてきに天降あまくたる。此発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為せいにあらず。権貴栄達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人参多にんじんし先生何なんが故に服せざる。

在巢鳴

天道公平てんどうこうへい

再拜

針作君は九拜であつたが、この男は単に再拜だけである。寄附金の依頼でないだけに七拜ほど横風おうふうに構かまえている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる分りにくいものだ。この雑誌へ出しても没書ぼくしょになる価値は充分あるのだから、頭腦の不透明をもつて鳴る主人は必ず寸断すんざん寸断すんざんに引き裂ひきちぎいてしまふだろうと思おもひのほか、打ち返し打ち返し読み直よみなおしている。こんな手紙に意味があると考かんえて、あくまでその意味を究きわめようという決心かも知れない。およそ天地の間かんにわからんものは沢山あるが意味をつけてつかないものは一つもない。どんなむずかしい文章でも解釈しようとすれば容易に解釈の出来るものだ。人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。それどころではない。人間は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つても構かまわん、宇宙は狭いと云つても差さし支つかえはない。鳥が白くて小町が醜婦しゆうふで苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊かとか理窟りくつさえつけられればどうとも意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ附けて説明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるのである。天氣の悪るいになぜグード・モーニングですかと生徒に問われて七日間なぬかかん考かんえたり、コロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日三晩かかって答を工夫するくらいな男には、干瓢かんびょうの酢味すみ噌そが天下の士であらうと、朝鮮

の仁参にんじんを食つて革命を起そうと随意的な意味は随処ずいしょに湧き出る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこの難解な言句ごんくを呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ちがない。天晴あつぱれな見識だ」と大變賞賛した。この一言いちごんでも主人の愚ぐなところはよく分るが、翻ひるがえつて考えて見るといささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限つた事でもなからう。分らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべからざる辺には何だか気高けだかい心持が起るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかつたように吹聴ふいちやうするにも係かかわらず、学者はわかつた事をわからぬように講釈する。大学の講義でもわからぬ事を喋舌しゃべる人は評判がよくつてわかる事を説明する者は人望がないのでもよく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。その主旨なへんが那邊なへんに存するかほとんど捕とらえ難いからである。急に海鼠なまこが出て来たり、せつな糞ふそが出てくるからである。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家どうけで道德経を尊敬し、儒家じゆかで易经えいきやうを尊敬し、禪家ぜんけで臨濟録りんざいろくを尊敬すると一般で全く分らんからである。但し全然分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかつた顔だけはする。わからんものをわかつたつもりで尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は恭うやうやしく八分はつぶん体の名筆を巻き納めて、これを机上ふじょうに置いたまま懐手ふじょうをして冥想めいさうに沈しづんでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合にあわずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書齋のうちでその声を聞いているのだが懐手ふじょうのまま毫せうも動うごこうとしない。取次とりごに出るのは主人の役目でないという主義か、この

主人は決して書斎から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹼きつせんたくシヤボンを買ひに出た。細君は憚りはばかである。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人は沓脱くつぬぎから敷台へ飛び上がつて障子を開け放つてつかつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行つたなと思ふと襖ふすまを二三度あけたり閉たてたりして、今度は書斎の方へやつてくる。

「おい冗談じやうだんじゃない。何をしているんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこにいるなら何とか云えばいいのに、まるで空家あきやのようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたつて通れくらは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだつてから精神の修養を力つとめているんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなつた日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじゃないよ。大変な御客さん連れて来たんだよ。ちよつと出て逢つてくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て逢つてくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懐手のままぬつと立ちながら「また人を担ぐつもりだろう」と椽側へ出て何の気もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然と端坐して控えている。主人は思わず懐から両手を出してぺたりと唐紙の傍へ尻を片つけてしまった。これでは老人と同じく西向きであるから双方共挨拶のしようがない。昔堅氣の人は礼義はやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を促がす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐つても構わんものと心得ていたのだが、その後ある人から床の間の講釈を聞いて、あれは上段の間の变化したもので、上使が坐わる所だと悟つて以来決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が頑と構えているのだから上座どころではない。挨拶さえ碌には出来ない。一応頭をさげて

「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜では恐れ入る。かえつて手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は真赤になつて口をもごもご云わせている。精神修養もあまり効果がないようである。迷亭君は襖の影から笑いながら立見をしていたが、

もういい時分だと思つて、後ろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつついては僕が坐る所がない。遠慮せず前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い今日は御近所を通行致したもので、御礼かたがた旁伺つた訳で、どうぞ御見知りおかれまして今後共宜しく」と昔むかし風な口上を淀よどみなく述べた。主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺じいさんとはほとんど出会つた事がないのだから、最初から多少場ばうての気味で辟易へきえきしていたところへ、滔々とうとうと浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参ちようせんじんじんも飴あめ棒の状袋もすっかり忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちよつと伺がうはずでありましたところ……何分よろしく」と云い終つて頭を少々畳から上げて見ると老人は未だいまに平伏しているので、はつと恐縮してまた頭をひたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷あも在つて、永らく御膝元でくらしただけですが、瓦解がかいの折にあちらへ参つてからとんと出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らんくらいで、——迷亭にでも伴つれてあるいてもらわんと、とても用達ようたしも出来ません。滄桑そうそうの変へんとは申しながら、御入国ごにゅうこく以来三百年も、あの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なんでもものもなかつたでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御代みよでなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日の総会こんにちにも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けたんだが今その帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしもからだに合わない。袖そでが長過ぎて、襟えりがおつ開ひらいて、背中せなかへ池が出来て、腋わきの下が釣るし上がっている。いくら不恰好ぶかっこうに作ろうと云つたつて、こうまで念を入れて形を崩くずす訳にはゆかないだろう。その上白シャツと白襟しろえりが離れ離れになつて、仰あおむくと間まから咽喉のどぼとけ仏が見える。第一黒い襟飾りが襟に属しているのか、シャツに属しているのか判然はんぜんしない。フロックはまだ我慢が出来るが白髪しらがのチョン鬚まげははなはだ奇観である。評判の鉄扇てつせんはどうかと目を注つけると膝の横にちゃんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返つて、精神修養の結果を存分に老人の服装に應用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではなからうと思つていたが、逢つて見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的研究の材料になるならば、この老人のチョン鬚まげや鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云つ

て話を途切らすのも礼に欠けると思つて

「だいぶ人が出ましたろう」と極めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物見高くなつたようだがすな。昔しはあんなではなかつたが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかつたですな」と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知つ高振りをした訳ではない。ただ朦朧たる頭脳から好い加減に流れ出す言語と見れば差し支えない。

「それにな。皆この甲割りへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちよつと持つて見たまえ。なかなか重いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と主人に渡す。京都の黒谷で参詣人が蓮生坊の太刀を戴くようになかたで、苦沙弥先生しばらく持つていたが「なるほど」と云つたまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割と称えて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、——敵の目がくらむ所を撃ちとつたものですが。楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていましたぜ。苦沙弥君、今日帰りにちようどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄つて、物理の実験室を見せて貰つたところがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂つて大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、性のいい鉄だから決してそんな虞おそれはない」

「いくら性のいい鉄だつてそうはいきませんよ。現に寒月がそう云つたから仕方がないです」
「寒月というのは、あのガラス球だまを磨すつている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

「可愛想かわいそうに、あれだつて研究できあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨すりあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土かんどでは玉人ぎやうじんと称したもので至つて身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求めぬ。

「なるほど」と主人はかしまつてゐる。

「すべて今の世の学問は皆形けいじか而下の学でちよつと結構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちませんな。昔はそれと違つて侍ざむらいは皆命懸けいのちがの商買しょうばいだから、いざと云う時に狼狽ろうばいせぬように心の修業を致したもので、御承知でもあらつしやろうがなかなか玉を磨つたり針金を縋よつたりするような容易たやすいものではなかつたのがすよ」

「なるほど」とやはりかしまつてゐる。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懐手ふところをして坐り込んでるんでしよう」

「それだから困る。決してそんな造作ぞうさのないものではない。孟子もうしは求放心きゅうほうしんと云われたくらいだ。邵康節しやうこうせつは心要放しんようほうと説いた事もある。また仏家ぶつかでは中峯和尚ちゆうほうおしやうと云うのが具不退転ぐふたいてんと云う事を教えている。なかなか容易には分らん」

「とうてい分りつこありませんね。全体どうすればいいんです」

「御前は沢菴たくあんぜんじ禅師ぜんじの不動智神妙録ふどうちしんみょうろくというものを讀んだ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の働はたらきに心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀たちに心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと思うところに心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我太刀に心を取らるるなり。われ切られじと思うところに心を取らるるなり。切られじと思うところに心を取らるるなり。人の構かまえに心を置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに暗誦あんしやうしたものですな。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじゃありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養

ばかりしているんですから。客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇特な事で——御前などもちとごいっしよにやつたらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思つていらつしやるんでしよう」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中かんちゆう自おのずかから忙まじありでね」

「そう、粗忽そこつだから修業をせんといかないと云うのよ、忙中おのずか自かんら閑ありと云う成句せいぐはあるが、閑中自かんちゆうら忙ありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなつちやあ敵かなわない。時に伯父さんどうです。久し振りで東京の鰻うなぎでも食つちやあ。竹葉ちくようでも奢おごりましょう。これから電車で行くとすぐです」

「鰻も結構だが、今日はこれからすい原はらへ行く約束があるから、わしはこれで御免ごうめんを蒙こうむろう」

「ああ杉原すぎはらですか、あの爺じいさんも達者たつしやですね」

「杉原すぎはらではない、すい原はらさ。御前はよく間違ばかり云つて困る。他人の姓名を取り違えるのは失礼だ。よく気をつけんといけない」

「だつて杉原すぎはらとかいてあるじゃありませんか」

「杉原すぎはらと書いてすい原はらと読むのさ」

「妙ですな」

「なに妙な事があるものか。名目読みと云つて昔からある事さ。蚯蚓を和名でみみずと云う。あれは目見ずの名目よみで。蝦蟆の事をかいると云うのと同じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟆を打ち殺すと仰向きにかえる。それを名目読みにかいると云う。透垣をすい垣、莖立をくく立、皆同じ事だ。杉原をすぎ原などと云うのは田舎ものの言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい原へこれから行くんですか。困つたな」

「なに厭なら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇つて頂いて、ここから乗つて行こう」

主人は畏まつて直ちに御三を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチョン鬚頭へ山高帽をいただいて帰つて行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団の上に坐つたなり懐手をして考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持つて仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで大に喜んでゐる。

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据つたもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神の修養を主張するところなどは大に敬服していい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやつぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しつかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利かないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際は限はありやしない。とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に味がある。心そのものの修業をするのだから」とせんだつて哲学者から承わつた通りを自説のように述べ立てる。

「えらい事になつて来たぜ。何だか八木独仙君のような事を云つてるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははつと驚ろいた。実はせんだつて臥竜窟を訪問して主人を説服に及んで悠然と立ち帰つた哲学者と云うのが取も直さずこの八木独仙君であつて、今主人が鹿爪らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのであるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を間不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻を挫いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのつて、あの男の説ときたら、十年前学校にいた時分と今日と少しも変

りやしなない」

「真理はそう変わるものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

「まあそんな鼻負ひいきがあるから独仙どくせんもあれで立ち行くんだね。第一八木と云う名からして、よく出来てるよ。あの髯ひげが君全く山羊やぎだからね。そうしてあれも寄宿舎時代からあの通りの恰好かっこうで生えていたんだ。名前の独仙どくせんなども振ふるったものさ。昔むかし僕のところへ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立つても同じ事を繰り返してやめないから、僕が君もう寝ねようじやないかと云うと、先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切つて、やつぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなかうけれど、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むようにして寝かしたまではよかつたが——その晩鼠ねずみが出て独仙君の鼻のあたまを嚙かじつてね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟つたような事を云うけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が総身そうしんにまわると大変だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行つて紙片かみきれへ飯粒を貼はつてごまかしてやつたあね」

「どうして」

「これは舶来こくやぐの膏藥ごうやくで、近来独逸ドイツの名医が発明したので、印度人インドじんなどの毒蛇どくさに噛かまれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼つておけば大丈夫だと云つてね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまつたのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑いとくずがぶらさがつて例の山羊髯やぎひげに引つかかつて

いたのは滑稽こっけいだったよ」

「しかしあの時分だいぶんより大分だいぶんえらくなつたようだよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時わおい大に感心してしまつたから、僕も大に奮発して修養をやるうと思つてる所
なんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真まに受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う
事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとな
ると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知つてるだろう。あの時寄宿の二階から飛び
降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人大分説だいぶんがあるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいものさ。禅の機鋒きほうは峻峭しゅんしやうなもので、いわゆる
石火せつかの機きとなると怖こわいくらい早く物に応ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云つて狼狽ろうた
えているところを自分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効があらわれて嬉しい
と云つて、跛びつこを引きながらうれしがつていた。負惜みの強い男だ。一体禅ぜんとか仏ぶつとか云つて
騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寢言ねごと見たような事を何か云つてつたろう」

「うん電光影裏に春風をきるとか云う句を教えて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱おほこなんだからおかしいよ。無覚むかくぜんじ禪師の電光ときたら寄宿舎中誰も知らないものはないくらいだった。それに先生時々せき込むと間違えて電光影裏を逆さかさまに春風影裏に電光をきると云うから面白い。今度ためして見たまえ。向むこで落ちつき払つて述べたてているところを、こつちでいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛倒てんととうして妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢つちや叶かなわない」

「どつちがいたずら者だか分りやしない。僕は禅坊主だの、悟つたのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院なんざういんと云う寺があるが、あすこに八十ばかりの隠居がいる。それでこの間の白雨ゆうだちの時寺内へ雷らいが落ちて隠居のいる庭先の松の木を割きいてしまった。ところが和尚おしょう泰然として平気だと言いうから、よく聞き合せて見るとから聾つんぼなんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そんなものさ。独仙も一人で悟つていればいいのだが、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかり気狂きりがいにされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然りのとうぜんさ。独仙の御蔭で大おおに禅学ぜんがくに凝こり固まつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうとう出先で気狂きりになつてしまった。円覚寺えんがくじの前に汽車の踏切りがあるだろう、あの踏切り内うちへ飛び込んでレールの上で座禅をするんだね。それで向うから来る汽車をとめて見せると云う大気焰だいきえんさ。もつとも汽車の方で留とどめてくれたから一命だけはとりとめたが、その代り今度は火に入いつて焼いけず、水に入いつて溺おぼれぬ金剛不壞こんごうふえのからだだと号なして寺内じないの蓮池はすいけへ

這入はいつてぶくぶくあるき廻まわつたもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸さいわい、道場の坊主が通りかかつて助けてくれたが、その後東京へ帰かえつてから、とうとう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になった原因は僧堂で麦飯や万年漬まんねんひけを食たつたせいだから、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するのも善よし悪あししだね」と主人はちよつと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものももう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰たれだい」

「立町老梅君たちまちろうばいくんさ。あの男も全く独仙にそそのかさされて鰻うなぎが天上するような事ばかり言つていたが、とうとう君本物になつてしまった」

「本物たあ何なにだい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事ことだい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚仙ぶたせんさ、あのくらい食い意地のきたない男はなかつたが、あの食意地と禅坊主のわる意地が併発へいはつしたのでから助からない。始めは僕らも気がつかなくつたが今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国では蒲鉾かまぼこが板へ乗つて泳いでいますのつて、しきりに警句を吐いたものさ。ただ吐ついているうちはよかつたが君表のどぶへ金きんとんとんを掘りに行きましようと促うなががすに至いたつては僕も降参かみまがしたね。それから二三日にさんちするついに豚仙になつて巢鴨へ収容

されてしまった。元来豚なんぞが気狂になる資格はないんだが、全く独仙の御蔭ですこま
で漕ぎ付けたんだね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいろのかい」

「いるだんじやない。自大狂じだいきやうで大気焰だいきえんを吐ついている。近頃は立町老梅なんて名はつまらない
と云うので、自ら天道公平てんどうこうへいと号して、天道の権化ごんげをもつて任じている。すさまじいものだよ。
まあちよつと行つて見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。気狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々は孔平こうへいとも書く事がある。そ
れで何でも世人が迷つてゐるからせひ救つてやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙
を出すんだね。僕も四五通貫つたが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりと
られたよ」

「それじゃ僕の所ところへ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やつぱり赤い状袋じやうたいだろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変つた状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、
人は中間あに在あつて赤しと云う豚仙の格言を示したんだつて……」

「なかなか因縁いんねんのある状袋だね」

「気狂だけに大おに凝こつたものさ。そうして気狂になつても食意地ごういだけは依然として存してい
るものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて来た

ろう」

「うん、海鼠なまこの事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」

「それから河豚ふぐと朝鮮仁参ちようせんじんじんか何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨うまいね。おおかた河豚を食つて中あたつたら朝鮮仁参を煎せんじて飲めとでも云うつもりなんだらう」

「それでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ気狂だもの。それつきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それで大おおに君をやり込めたつもりに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がつて、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆どくしよう読誦しよかんした書翰の差出人が金箔きんぱくつきの狂人であると知つてから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹立たしくもあり、また癡癲病ふうてんびやう者の文章をさほど心勞して翫味がんみしたかと思うと恥はずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧ざんきと、心配の合併した状態たいで何だか落ちつかない顔付をして控ひかえている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が二た足ほど沓脱くつぬぎに響いたと思つたら「ちよつと頼みます、ちよつと頼みます」と大きな声がする。主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男であるから、御三おさんの取次に出るのも待たず、通れと云いながら隔ての

中の間を二た足ばかりに飛び越えて玄関に躍り出した。人のうちへ案内も乞わずにつかつか這入り込むところは迷惑のようだが、人のうちへ這入った以上は書生同様取次を務めるからはなはだ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ちつけている。但し落ちつけているのと、落ちついていていゝのは、その趣は大分似ているが、その実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくつちや、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ず懐手のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましゃがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警視庁刑事巡查吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立っているのは二十五六の背の高い、いなせな唐棧とうげんずくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐手をしたまま、無言で突立っている。何だか見たような顔だと思つてよくよく観察すると、見たようなところじやない。この間深夜御来訪になつて山の芋やまいもを持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄関からおいでになつたな。

「おいこの方は刑事巡查でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいでになつたんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて

鄭寧に御辞儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こつちが刑事だと早合点をしたのだから。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私が泥棒ですよと断わる訳にも行かなかったと見えて、すまして立っている。やはり懐手のままである。もつとも手錠をはめているのだから、出そうと云つても出る氣遣はない。通例のものならこの様子でたいはいはわかるはずだが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上の御威光となると非常に恐しいものと心得ている。もつとも理論上から云うと、巡查などは自分達が金を出して番人に雇つておくのだからの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にぴよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬つたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡查はおかしかったと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時までに日本堤の分署まで来て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れている。ただ覚えているのは多々良三平の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わんと思つたが、盗難品は……と云いかけてあとが出ないのはいかにも与太郎のようで体裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない証拠だと、思い切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟へあごを入れた。迷亭はアハハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云つた。巡查だけは存外

真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。——まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡したら請書うけしよが入るから、印形いんぎようを忘れずに持つておいでなさい。——九時までに来なくつてはいかん。日本堤分署にほんづつみぶんしよです。——浅草警察署の管轄内かんかつないの日本堤分署です。——それじゃ、さようなら」と独りひとで弁じて帰つて行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないので、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行つてしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらして、ぴしやりと立て切つた。

「アハハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにああ云う恭謙きやうけんな態度を持つてるといい男だが、君は巡査だけに鄭寧ていねいなんだから困る」

「だつてせつかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るつたつて、先は商売だよ。当り前にあしらつてりや沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」
「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口わるぐちはやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今平身低頭したじゃないか」

「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんじゃないか」

「頑固がんこだな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懐手かところなんかして、突立つたっているものかね」

「刑事だつて懐手をしないととは限るまい」

「そう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのままで立っていたのだけ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云つてるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思つて独りひとで強情を張つてるんだ」

「迷亭もここにおいてどうてい濟度さいどすべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙つてしまった。主人は久し振りで迷亭を凹へこましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張つただけ迷亭

よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢な事はままある。強情さえ張り通せば勝った気でいるうちに、当人の人物としての相場は遙かに下落してしまふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬまで自分は面目を施こしたつもりかなにかで、その時以後人が輕蔑して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲きつけるように云つたのは壮なものだった。

「えらい勢だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる氣遣はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまつた。ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とふんぷんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行つて見る気かい」と迷亭君またからかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々逡巡しゆんじゆんの体であつたが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行く」と入らざるところに力味りきんで見せた。愚人は得てこんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と云つたのみである。一波瀾ひとばらんを生じた刑事事件はこれで一先ず落着らくちやくを告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁ろふを弄して日暮れ方、あまり遅くなるなると伯父おぢに怒られると云つて帰つて行つた。

迷亭が帰つてから、そこそこに晩飯をすまして、また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手きようしゆして下しものように考え始めた。

「自分が感服して、大に見習おおいおうとした八木独仙君も迷亭の話しによつて見ると、別段見習うにも及ばない人間のようである。のみならず彼の唱道するところの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋癲ふうてん的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は歴乎れつきとした二人の氣狂きかぎの子分を有している。はなはだ危険である。滅多めったに近寄ると同系統内に引き摺ずり込まれそうである。自分が文章の上において驚嘆おどろの余、これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事実名立町老梅は純然たる狂人であつて、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院ふうてんいん中に盛名を擅ほままして天道の主宰をもつて自ら任ずるは恐らく事実であろう。こう云う自分もことによると少々ござっているか

も知れない。同気相求め、同類相集まると云うから、氣狂の説に感服する以上は——少なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自分もまた氣狂に縁の近い者であるだろう。よし同型中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せに居をトするとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見るとこのほどじゆうから自分の腦の作用は我ながら驚くくらい奇上に妙を点じ変傍に珍を添えている。腦漿一勺の化学的变化はとにかく意志の動いて行為となるところ、発して言辞と化する辺には不思議にも中庸を失した点が多い。舌上に竜泉なく、腋下に清風を生ぜざるも、齒根に狂臭あり、筋頭に瘋味あるをいかんせん。いよいよ大変だ。ことによるともうすでに立派な患者になつていのではないかしらん。まだ幸に人を傷けたり、世間の邪魔になる事をし出かさんからやはり町内を追払われずに、東京市民として存在しているのではなからうか。こいつは消極の積極のと云う段じやない。まず脈搏からして検査しなくてはならん。しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の氣味でもない。しかしどうも心配だ。」

「こう自分と氣狂ばかりを比較して類似の点ばかり勘定しては、どうしても氣狂の領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわるかった。氣狂を標準にして自分をそつちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にしてその傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手近から始めなくてはいいかん。第一に今日来たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁当持参で球ばかり

磨いている。これも棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の気狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒悪な根性は全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに極つてる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に懸つた事はないが、まずあの細君を恭しくおつ立てて、琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と見立てて差支えあるまい。非凡は気狂の異名であるから、まずこれも同類にしておいて構わない。それからと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年齢から云うとまだ芽生えだが、躁狂の点においては一世を空しゆうするに足る天晴な豪のものである。こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になつて来た。ことによると社会はみんな気狂の寄り合かも知れない。気狂が集合して鎬を削つてつかみ合い、いがみ合い、罵り合い、奪い合つて、その全体が団体として細胞のように崩れたり、持ち上つたり、持ち下がらなかつたり、崩れたりして暮して行くのを社会と云うのではないか知らん。その中で多少理窟がわかつて、分別のある奴はかえつて邪魔になるから、瘋癲院というものを作つて、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえつて気狂である。気狂も孤立している間はどこまでも気狂にされてしまうが、団体となつて勢力が出ると、健全の人間になつてしまうのかも知れない。大きな気狂が金力や威力を濫用して多くの小気狂を使役して乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少なくない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜繁々たる孤灯の下で沈思熟慮した時の心的作用をありのままに描き出したものである。彼の頭脳の不透明なる事はここにも著るしくあらわれている。彼はカイゼル

に似た八字髭を蓄うるにもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬくらいほんくらの凡倉である。のみならず彼はせっかくこの問題を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず彼は徹底的に考える脳力のない男である。彼の結論の茫漠ぼうぼくとして、彼の鼻孔から迸出ほうしゅつする朝日の煙のごとく、捕捉ほそくしがたきは、彼の議論における唯一の特色として記憶すべき事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとつて何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝ひざの上へ乗つて眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣けころもをそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。するととつてなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫なで廻しながら、突然この猫の皮を剥はいでちやんちやんにしたらさぞあたたかであろうと飛んでもない見りようけんをむらむらと起したのを即座に気取けとつて覚えさずひやつとした事さえある。怖い事だ。当夜主人の頭のなかに起つた以上の思想もそんな訳合わけあいで幸さいわいにも諸君にご報道する事が出来るように相成つたのは吾輩の大おおいに榮譽とするところである。但し主人は「何が何だか分らなくなつた」まで考えてそのあととはぐうぐう寝てしまったのである、あすになれば何をどこまで考えたかまるで忘れてしまふに違ない。向後こうごもし主人が氣狂きまがひについて考える事があるとすれば、もう一返ぺん出直して頭から考え始めなければならぬ。そうすると果してこんな径路けいろを取つて、こんな風に「何が何だか分らなくなる」かどうか保証出来ない。しかし何返考なんしきうえ直しても、何条の径路をとつて進むうと

も、ついに「何が何だか分からなくなる」だけはたしかである。

十

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しふすまこに細君が声を掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝ているのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はない時はないと云う。このうんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい無精になると、どことなく趣おもむきがあるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、その他は推おして知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城けいせいに、可愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露ばくろする必要もないのだが、本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれないのだからなどと理窟をつけていると、迷まよの種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、向むこうをむいてうんさえ発せざる以上は、その曲まがは夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云う姿勢ほうぎで箒ほうきとはたきを担かついで書齋しよさいの方へ行つてしまつた。やがてばたばた書齋中を叩たたき散らす音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたのである。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところ

でないから、知らん顔をしていれば差し支えないようなもの、この細君の掃除法のごと
きに至ってはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云うと、こ
の細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を
一応畳の上へ滑らせる。それで掃除は完成した者と解釈している。掃除の源因及び結果に
至っては微塵の責任だに背負っておらん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある
所、ほこりの積っている所はいつでもごみが溜つてほこりが積っている。告朔の餼羊と云う
故事もある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやつても別段主人の
ためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦労にもやるところが細君のえらいところ
である。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑として結びつけら
れているにもかかわらず、掃除の実に至っては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はた
きと箒が発明せられざる昔のごとく、毫も挙つておらん。思うにこの両者の関係は形式論理
学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものであろう。
吾輩は主人と違つて、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になつて参つた。とうて
いうちのものさえ膳に向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めしに有りつける訳のものでは
ないが、そこが猫の浅ましきで、もしや煙の立つた汁の香が鮑貝の中から、うまそうに立ち
上つておりはすまいかと思うと、じつとしていられなくなつた。はかない事を、はかないと
知りながら頼みにするときには、ただその頼みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついてい
る方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、合うか合わぬか是非とも試
験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事ですら、最後の失望を自ら

事実の上に受取るまでは承知出来んものである。吾輩はたまらなくなつて台所へ這出した。まずへつつい影にある鮑貝あわびがいの中を覗のぞいて見ると案たんに違ちがわず、夕ゆうべ舐なめ尽じんしたまま、闐然げんぜんとして、怪あやしき光ひかりが引窓しりんを洩もる初秋はつあきの日影ひかげにかがやいてゐる。御三おさんはすでに炊たき立たての飯いを、御櫃おほちに移うつして、今いまや七輪しちりんにかけた鍋なべの中なかをかきまぜつつある。釜かまの周囲まわりには沸わき上あがつて流れだした米こめの汁じゆが、かさかさに幾いく条じょうとなくこびりついて、あるものは吉野紙きちよじを貼はりつけたごとくに見える。もう飯いも汁じゆも出来いてゐるのだから食くわせてもよさそうなものだと思おもつた。こんな時に遠慮えんりょするのはつまらない話わだ、よしんば自分の望のぞ通とりにならなくなつたつて元々もともとで損そんは行いかないのだから、思おもひ切きつて朝飯あさめしの催もよほしをしてやろう、いくら居候いそうろうの身分身分だつてひもじいに変かりはない。と考かんえ定さだめた吾輩わが輩はにやあにやあと甘あまえるごとく、訴いうるがごとく、あるいはまた怨えんずるがごとく泣ないて見た。御三おさんはいつこゝろ顧かへみる景色けしきがない。生なれついでのお多角たかくだから人情にんじやうに疎うといのはとうから承知の上うへだが、そこをうまく泣なき立たてて同情どうじやうを起おこさせるのが、こつちの手際てぎわである。今度はにやごにやごとやつて見た。その泣なき声こゑは吾わがながら悲壯ひさうの音おんを帯おびて天涯てんがの遊ゆう子しをして断腸だんぢやうの思おもひあらしむるに足たりると信まずる。御三おさんは恬てんとして顧かへみない。この女おんなは聾ぶんぼなのかも知れない。聾ぶんぼでは下女げにようが勤まる訳わけがないが、ことによると猫ねこの声こゑだけには聾ぶんぼなのだろう。世よの中には色盲しきもうというのがあつて、当人とうじんは完全ぜんぜんな視力しりきを具もつてゐるつもりでも、医者いしやから云いわせると片輪かたわだそうだが、この御三おさんは声盲せいもうなのだろう。声盲せいもうだつて片輪かたわに違ちがいない。片輪かたわのくせにいやに横風おうふうなものだ。夜中よなかなぞでも、いくらこつちが用もちがあるから開ひらけてくれると云いつても決して開ひらけてくれた事ことがない。たまに出でしてくれたいと思おもうと今度いまどはどうしても入れてくれない。夏なつだつて夜露よるうは毒どくだ。いわんや霜しもにおいてをやで、軒下のきげに

立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに辛いかとうてい想像が出来るものではない。この間しめ出しを食った時などは野良犬の襲撃を蒙って、すでに危うく見えたところを、ようやくの事で物置の家根へかけ上つて、終夜顫えつづけた事さえある。これ等は皆御三の不人情から胚胎した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感応のあるはずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起するためにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音と確信しているのだが御三には何等の影響も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除けて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪の角でぼんぼんと敲いたら、長いのが三つほどに碎けて近所は炭の粉で真黒くなつた。少々は汁の中へも這入つたらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにもない。仕方がないから悄然と茶の間の方へ引きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここは今女の子が三人で顔を洗つてる最中で、なかなか繁昌している。

顔を洗うと云つたところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾を引きずり出してしきりに顔中撫で廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわるからうけられども、地震がゆるたびに、おもちろいわと云う子だからこのくらいの事はあつても驚ろくに足らん。ことによると八木独仙君より悟つて

いるかも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をもつて自ら任じているから、うがい茶碗をからからかんと拋出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかかる。坊やちゃんもなかなか自信家だから容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引つ張り返した。このばぶなる語はいかなる意義で、いかなる語源を有しているか、誰も知つてゐるものがない。ただこの坊やちゃんが癩癩を起した時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾はこの姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引つ張られるから、水を含んだ真中からぼたぼた雫が垂れて、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。坊やはこれでも元禄を着ているのである。元禄とは何の事だとかんだん聞いて見ると、中形の模様なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わつて来たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云う。その癖この姉はついこの間まで元禄と双六とを間違えていた物識りである。

元禄で思い出したからついでに喋舌つてしまふが、この子供の言葉ちがいをやる事は夥しいもので、折々人を馬鹿にしたような間違を云つてゐる。火事で茸が飛んで来たり、御茶の味噌の女学校へ行つたり、恵比寿、台所と並べたり、或る時などは「わたしや菓店の子じやないわ」と云うから、よくよく聞き糺して見ると裏店と菓店を混同していたりする。主人はこんな間違を聞くたびに笑つてゐるが、自分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な誤謬を真面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊ぼと云う——元禄が濡れたのを見て「元どこがべたい」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所から飛び出

して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。この騒動中比較的静かであったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向うむきになつて柵の上からころがり落ちた、お白粉の瓶をあけて、しきりに御化粧を施している。第一に突つ込んだ指をもつて鼻の頭をキューと撫でたから堅に一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分明になつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたまりが出来上つた。これだけ裝飾がととのつたところへ、下女がはいつて来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寢室まで来てもう起きたかとひそかに様子をおうかがつて見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾から一本食み出している。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのである。亀の子のような男である。ところへ書斎の掃除をしてしまった妻君がまた箒とはたきを担いでやつてくる。最前のように襖の入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立つて、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚めている。覚めているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠つたのである。首さえ出さなければ、見逃してくれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まず安心と腹のうちで思つていると、とんと突いた箒が何でも三尺く

らしいの距離に追っていたにはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。

「九時までにはいらつしやるのでしよう。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着の袖口から答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食つて、起きるかと思つて安心していると、また寝込まれつけているから、油断は出来ない。「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、なお起きると責めるのは気に食わんものだ。主人のごとき我儘者にはなお気に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭から被つていた夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも開いている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおつしやつてもお起きなさらんじゃありませんか」

「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どつちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぶんとして箒を突いて枕元に立つているところは勇ましかった。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八っちゃんは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんを泣かして小遣になるかも知れんが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋を持ったが最後まで泣き通しに泣いていな

くてはならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少々怒るのを差し控えてやつたら、八つちゃんの寿命が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれたつて、こんな愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよからう。怒るたんびに泣かせられるだけなら、まだ余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを備つて今戸焼をきめ込むたびに、八つちゃんは泣かねばならのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、早手廻しに八つちゃんは泣いているのである。こうなると主人が八つちゃんだか、八つちゃんが主人だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数は掛らない、ちよつと八つちゃんに剣突を食わせれば何の苦もなく、主人の横つ面を張つた訳になる。昔し西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡して、捕えられん時は、偶像をつくつて人間の代りに火あぶりにしたと云うが、彼等のうちにも西洋の故事に通曉する軍師があると見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館と云い、八つちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし苦手であろう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八つちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝つばらからよほど癩癩が起つたと見えて、たちまちがばと布団の上に起き直つた。こうなると精神修養も八木独仙も何もあつたものじゃない。起き直りながら両方の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き掻き廻す。一カ月も溜つているフケは遠慮なく、頸筋やら、寝巻の襟へ飛んでくる。非常な壯観である。髻はどうだと見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん然とおつ立つている。持主が怒つているのに髻だ

け落ちついてはすまないとしても心得たものか、一本一本に癩癩かんしやくを起して、勝手次第の方角へ猛烈なる勢をもつて突進している。これとてもなかなかの見物みものである。昨日は鏡の手前もある事だから、おとなしく独乙ドイッ皇帝陛下の真似をして整列したのであるが、一晚寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに本来の面目に帰つて思い思いの出いで立たちに戻るのである。あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる日になると拭ぬうがごとく奇麗に消え去つて、生れついでやちよてきの野猪的本領が直ちに全面を暴露し来るのと一般である。こんな乱暴な髻をもっている、こんな乱暴な男が、よくまあ今まで免職にもならず教師が勤まつたものだと思つたと、始めて日本の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのでもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信しているらしい。いざとなれば巢鴨へ端書はがきを飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日紹介した混沌こんたんたる太古の眼を精一杯に見張つて、向うの戸棚をきつと見た。これは高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をはめたものである。下の方の戸棚は、布団ふとんの裾すそとすれすれの距離にあるから、起き直つた主人が眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れて妙な腸はらわたがあらさまに見える。腸にはいろいろながある。あるものは活版摺かつばんずりで、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕つかまえて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまで怒おこつていた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで見たくなるの

は不思議のようであるが、こう云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くとき
 に最中の一つもあてがえはすぐ笑うと一般である。主人が昔し去る所の御寺に下宿していた
 時、襖一と重を隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは元来意地のわるい女のうちで
 もつとも意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋
 をたたきながら、今泣いた鳥がもう笑った、今泣いた鳥がもう笑ったと拍子を取って歌った
 そうだ、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌にせよ全くそれに違な
 い。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつたり、悲しがつたり人一倍もする代りにいづれも
 長く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機がむやみに転ずるのだらうが、これを
 俗語に翻訳してやさしく云えば奥行のない、薄っ片の、鼻っ張だけ強いだつ子である。す
 でにだだっ子である以上は、喧嘩をする勢で、むつくと勿ね起きた主人が急に気をかえて
 袋戸の腸を読みにかかるのもつともと云わねばなるまい。第一に眼にとまつたのが伊藤博
 文の逆か立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓国統監もこの時代から
 御布令の尻尾を追つ懸けてあるいていたと見える。大将この時分は何をしていたんだらうと
 読めそうにないところを無理によむと大蔵卿とある。なるほどえらいものだ、いくら逆か立
 ちしても大蔵卿である。少し左の方を見ると今度は大蔵卿横になつて昼寝をしている。もつ
 ともだ。逆か立ちではそう長く続く氣遣はない。下の方に大きな木板で汝はと二字だけ見え
 る、あとが見たいがあいにく露出しておらん。次の行には早くの二字だけ出ている。こいつ
 も読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも
 構わずに引つpegがすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから

事実を挙げるためには何でもする。あれは始末に行かないものだ。願くばもう少し遠慮をしてもらいたい。遠慮をしなければ事実は決して挙げさせない事にしたらよからう。聞くところによると彼等は羅織虚構をもつて良民を罪に陥れる事さえあるそうだ。良民が金を出して雇つておく者が、雇主を罪にするなどときはこれまた立派な気狂である。次に眼を転じて真中を見ると真中には大分県が宙返りをしている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから、大分県が宙返りをするのは当然である。主人はここまで読んで来て、双方へ握り拳をこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた鯨の遠吠のようにすこぶる変調を極めた者であったが、それが一段落を告げると、主人はそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり布団をまくつて夜着を畳んで、例の通り掃除をはじめた。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をしたごとく依然としてがーがー、げーげーを持續している。やがて頭を分け終つて、西洋手拭を肩へかけて、茶の間へ出御になると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云うと櫛の如輪木か、銅の総落しで、洗髪あらいがみの姉御が立膝で、長煙管を黒柿の縁へ叩きつける様を見する諸君もないとも限らないが、わが苦沙弥先生の長火鉢に至つては決して、そんな意気なものではない、何で造つたものか素人には見当のつかんくらい古雅なものである。長火鉢は拭き込んでらてら光るところが身上なのだが、この代物は櫛か桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど布巾をかけた事がないのだから陰気で引き立たざる事夥しい。こんなものをどこから買つて来たかと云うと、決して買った覚はない。そんなら貰つたかと聞くと、誰もくれ

た人はないそうだ。しからば盗んだのかと糺ただして見ると、何だかその辺が曖昧あいまいである。昔し親類に隠居がおつて、その隠居が死んだ時、当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のもののように使っていた火鉢を何の気もなく、つい持つて来てしまつたのださうだ。少々たちが悪いようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家などは毎日本人の金をあつかいつけているうちに人の金が、自分の金のように見えてくるさうだ。役人は人民の召使である。用事を弁じさせるために、ある権限を委託した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠かさに着て毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力で、人民などはこれについて何らの喙くちばしを容るる理由がないものなどと狂つてくる。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもつて主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍そばに陣取つて、食卓を前に控ひかえたる主人の三面には、先刻雑巾で顔を洗つた坊ぼくばと御茶おちやの味噌の学校へ行くといふ子と、お白粉しろいびんに指を突き込んだすん子が、すでに勢揃せいぞろいをして朝飯を食つている。主人は一応この三女子の顔を公平に見渡した。とん子の顔は南蛮鉄なんばんてつの刀の鍔つばのような輪廓りんかくを有している。すん子も妹だけに多少姉の面影おもかげを存して琉球塗りゅうきゅうぬりの朱盆しゆぼんくらしいな資格はある。ただ坊ぼくばに至つては独ひとり異彩を放つて、面長おもながに出来上つている。但しただ豎たてに長いのなら世間にその例もすくなくないが、この子のは横に長いのである。いかに流行が変化し易やすくつたつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つくづく考える事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するどころではない、その生長の

速^{すみや}かなる事は禪寺^{ぜんじ}の筍^{たけのこ}が若竹^{わかしよ}に変化する勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思つた。たんびに、後ろ^{うしろ}から追手^{おつて}にせまられるような気がしてひやひやする。いかに空漠^{くうぼく}なる主人でもこの三令嬢^{さんれいぢやう}が女であるくらいは心得ている。女である以上はどうにか片付けなくてはならぬくらいも承知^{しやうち}している。承知^{しやうち}しているだけで片付ける手腕^{てくわん}のない事も自覚^{じかく}している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造^{せいぞう}しなければいいのだが、そこが人間である。人間の定義^{ていぎ}を云うとほかに何にもない。ただ入^いらざる事を捏造^{ねつぞう}して自ら苦^{みずか}しんでいる者だと云えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置^{しよじ}に窮^{きゆう}しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯^{いひ}をたべる。ところが始末^{しやうまつ}におえないのは坊ばである。坊ばは当年^{ねんねん}とつて三歳^{さんさい}であるから、細君^{こぎみ}が氣を利^きかして、食事^{じし}のときには、三歳^{さんさい}然^{ぜん}たる小形^{せうがた}の箸^{はし}と茶碗^{ちawan}をあてがうのだが、坊ばは決して承知^{しやうち}しない。必ず姉^{あね}の茶碗^{ちawan}を奪^{うば}い、姉^{あね}の箸^{はし}を引^ひつたくつて、持ちあつかい悪い^{にく}奴^{やつ}を無理^{むり}に持ちあつかつている。世の中を見渡^{みわた}すと無能^{むねい}無才^{むさい}の小人^{せうじん}ほど、いやにのさばり出^でて柄^{がら}にもない官職^{くわんしやく}に登^{のぼ}りたがるものだが、あの性質^{せいかう}は全くこの坊ば時代^{ばうば}から萌芽^{ぼうが}しているのである。その因^よつて来^{きた}るところはかくのごとく深い^{ふかい}のだから、決して教育^{きよく}や薰陶^{くんとう}で癒^{なほ}せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣^{りん}りから分捕^{ぶんと}つた偉大^{ゐだい}なる茶碗^{ちawan}と、長大^{ちやうだい}なる箸^{はし}を専有^{せんゆう}して、しきりに暴威^{ぼうゐ}を擅^{しん}にししている。使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、勢^{いきおい}暴威^{ぼうゐ}を逞^{たくま}しくせざるを得ない。坊ばはまず箸^{はし}の根元^{ねもと}を二本^{ふたぽん}いっしょに握^{にぎ}つたままうんと茶碗^{ちawan}の底^{そこ}へ突^つ込んだ。茶碗^{ちawan}の中は飯^{いひ}が八分^{はちぶん}通り盛^もり込まれて、その上に味噌汁^{みそぢゆ}が一面^{いっぺん}に漲^{みなぎ}っている。箸^{はし}の力が茶碗^{ちawan}へ伝わ

るやいなや、今までどうか、こうか、平均を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあたりへこぼれだす。坊ばはそのくらいな事で辟易する訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から匆ね上げた。同時に小さな口を縁まで持つて行って、匆ね上げられた米粒を這入るだけ口の中へ受納した。打ち洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬つぺたと顎とへ、やつと掛声をして飛びついた。飛びつき損じて畳の上へこぼれたものは打算の限りでない。随分無分別な飯の食い方である。吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等の他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとくんば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて僅少のものである。必然の勢をもつて飛び込むにあらず、戸迷をして飛び込むのである。どうか御再考を煩わしたい。世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪されて、不相応に小さな奴をもつてさつきから我慢していたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口ほどで食つてしまう。したがって頻繁に御はちの方へ手が出る。もう四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺めていた。これは食おうか、よそうかと迷っていたものらしいが、ついに決心したものと見えて、焦げのなきそうなところを見計つて一掬いしやもじの上へ乗せたまでは無難であったが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入りきらん飯は塊まったまま畳の上へ転がり出した。とん子は驚ろく景色もなく、こぼれた飯を鄭寧に拾い始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を匆ね上げた時は、ちようどとん子が飯をよそい了った時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御ぜん粒だらけよ」と云いながら、早速坊ばの顔の掃除にとりかかる。第一に鼻のあたりに寄寓していたのを取払う。取払って捨てると思のほか、すぐ自分の口のなかへ入れてしまったのには驚ろいた。それから頬つぺたにかかる。ここには大分群をなして数にしたら、両方を合せて約二十粒もあつたらう。姉は丹念に一粒ずつ取つては食い、取つては食い、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまった。この時ただ今まではおとなしく沢庵をかじつていたすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくずれたのをしゃくい出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱したのほど口中にこたえる者はない。大人ですら注意しないと火傷をしたような心持ちがする。ましてすん子のごとき、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽する訳である。すん子はワツと云いながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片がどう云う拍子か、坊ばの前まですべつて来て、ちようどいい加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしゃむしゃ食つてしまった。

先刻からこの体たらくを目撃していた主人は、一言も云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲んで、この時はすでに楊枝を使っている最中であつた。主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執るつもりと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合せたように情夫をこしらえて出奔しても、やはり自分の飯を食つて、自分の汁を飲

んで澄まして見ているだろう。働きのない事だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を陥れる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが見様見真似に、こうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本来なら赤面してしかるべきのを得々と履行して未来の紳士だと思つてゐる。これは働き手と云うのではない。ごろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲つてやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば国家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う。日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情ない事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙かに上等な人間と云わなくてはならん。意気地のないところが上等なのである。無能なところが上等なのである。猪口才でないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ乗つて、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子をあけた時、車夫に日本堤という所を知つてるかと思ひたら、車夫はへへへと笑つた。あの遊廓のある吉原の近辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽であつた。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なもので「あら、でも今日は御休みよ」と支度をする景色がない。「御休みなんですか、早くなさい」と叱るように言つて聞か

せると「それでも昨日、先生が御休だつて、おつしやつてよ」と姉はなかなか動じない。妻君もここに至つて多少変に思つたものか、戸棚から曆こよみを出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛り込んだのだらう。ただし迷亭に至つては實際知らなかつたのか、知つて知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊いづもびなさいと平生の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。踵かかとのまがつた靴を履はいて、紫色の袴はかまを引きずつて、髪を算盤珠そろばんたまのようにふくらまして勝手口から案内も乞こわずに上あがつて來た。これは主人の姪めいである。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をして歸つて行く雪江ゆきえとか云う奇麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入はいつて來て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちよつと上がろうと思つて、八時半頃から家うちを出て急いで來たの」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がったの」

「ちよつとでなくつていいから、緩ゆっくり遊んでいらつしやい。今に叔父さんが歸つて來ます

から」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行ったのよ。……警察へ行ったの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「この春這入はいった泥棒がつまつたんだって」

「それで引き合に出されるの？ いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに來いつて、昨日きのう巡査がわざわざ來

たもんですから」

「おや、そう、それでなくつちや、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらつしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうして起こすとぶん怒おこるのよ。今朝なんかも七時までには是非おこせと云うから、起こしたんでしよう。すると夜具の中へ潜もぐつて返事もしないんですもの。こつちは心配だから二度目にまたおこすと、夜着よぎの袖そでから何か云うのよ。本当にあきれ返つてしまふの」

「なぜそんなに眠いんでしょう。きつと神経衰弱なんでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒かたる方ね。あれでよく学校が勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですつて」

「じゃなお悪こんいわ。まるで蒟蒻閻魔やくせんまね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だつて蒟蒻閻魔のようじゃありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりゃ強情ですよ」

「天探女あまのじやくでしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思つたら、うら云うと、こつちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘こうもりを買つてもらう時にも、いらぬい、いらぬいって、わざと云つたら、いらぬい事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」

「ホホホホ旨うまいのね。わたしもこれからそうしよう」

「そうなさいよ。それでなくつちや損あやだわ」

「こないだ保険会社の人が来て、是非御這入おほいんなさいって、勧めているんでしよう、——いろいろ訳わけを言つて、こう云う利益があるの、ああ云う利益があるのつて、何でも一時間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだつて貯蓄はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入つてくれるとよつぽど心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構かまわないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しあいからん世帯染しよたいいじみたことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだろう。しかし死なない以上は保険に這入はいる必要はないじゃないかつて強情を張はっているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うものは丈夫なようで脆いもので、知らないうちに、いつ危険が逼っているか分りませんと云うとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているって、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第するつもりだったけれども、とうとう落第してしまつたわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長が生きが出来るものなら、誰も死ぬものはございせんって」

「保険会社の方が至当ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓つて死なないって威張るの」
「妙ね」

「妙ですとも、大妙ですわ。保険の掛金を出すくらいなら銀行へ貯金する方が遙かにましだつてすまし切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考なんかありませんよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらつしやる方だつて、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云う穩やかな人だとよつほど楽ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判がわるいのよ」

「みんな逆なのね。それじゃ、あの方がいいでしょう——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分閉口しているんですがね。昨日迷亭さんが来て悪口をいったものだから、思つたほど利かないかも知れない」

「だつていいじゃありませんか。あんな風に鷹揚に落ちついていれば、——こないだ学校で演説をなすつたわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、淑徳婦人会のときに招待して、演説をして頂いたの」

「面白かつて？」

「そうね、そんなに面白くもなかつたわ。けども、あの先生が、あんな長い顔なんですしょう。そうして天神様のような髻を生やしているもんだから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話して、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると椽側の方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の空地へ

出て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云つたのはとん子で「やつぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云い出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。ただしこれは御話を承^{うけたま}わると云うのではない、坊ばもまた御話を仕^{つかま}ると云う意味である。「あら、また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話しがすんでから」と賺^すかして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「おお、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？」と雪江さんは謙遜^{けんそん}した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」

「面白いのね。それから？」

「わたちは田圃^{たんぼ}へ稲刈^{いかり}いに」

「そう、よく知ってる事」

「御前^{ごまへ}がくうと邪魔^{だま}になる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝^{いっかつ}して直ちに姉を辟易^{へきえき}させる。しかし中途で口を出されたものだから、続きを忘れてしまつて、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

『と云いながら牡丹餅を見せびらかしたんだって、地蔵だって食意地が張ってるから牡丹餅で釣れるだろうと思つたら、少しも動かないんだって。利口な男はこれではいけないと思つてね。今度は瓢箪へお酒を入れて、その瓢箪を片手へぶら下げて、片手へ猪口を持つてまた地蔵さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければここまでおいでと三時間ばかり、からかつて見たがやはり動かないんですって』

「雪江さん、地蔵様は御腹が減らないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云つた。

「利口な人は二度共しくじつたから、その次には鷹札を沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、欲しければ取りにおいでと札を出したり引つ込ましたりしたがこれもまるで益に立たないんですって。よつぽど頑固な地蔵様なのよ』

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ』

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想をつかしてやめてしまつたんですとき。それでそのあとからね、大きな法螺を吹く人が出て、私ならきつと片づけて見せますからご安心なさいときも容易い事のように受合つたそうです』

「その法螺を吹く人は何をしたんです』

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、付け髯をして、地蔵様の前へきて、こちらから、動かんとその方のためにならんぞ、警察で棄てておかんぞと威張つて見せたんですとき。今の世に警察の仮声なんか使つたつて誰も聞きやしないわね』

「本当ね、それで地蔵様は動いたの?』

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ」

「あらそう、あんな顔をして？ それじゃ、そんなに怖い事はないわね。けれども地藏様は動かないんですって、平気でいるんですとき。それで法螺吹は大変怒って、巡査の服を脱いで、付け髻を紙屑籠へ抛り込んで、今度は大金持ちの服装をして出て来たそうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をするんですとき。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしないで、また何も云わないで地藏の周りを、大きな巻煙草をふかしながら歩行しているんですとき」

「それが何になるの？」

「地藏様を煙に捲くんです」

「まるで嘶し家の洒落のようね。首尾よく煙に捲いたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしてもたいにいにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃってよ。たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だが化けて来たって——第一不敬じゃありませんか、法螺吹きの分際で」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬ですわ」

「そうね」

「殿下さまでも利かないでしょう。法螺吹きもしようがないから、とても私の手際では、あの地蔵はどうする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに懲役にやればいいのに。——でも町内のものは大層気を揉んで、また相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱ったそうです」

「それでおしまい?」

「まだあるのよ。一番しみに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の周りをわいわい騒いであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないようにすればいいと云って、夜昼交替で騒ぐんだって」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとき。地蔵様の方も随分強情ね」

「それから、どうして?」と、とん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも験が見えないので、大分みんなが厭になつて来たんですが、車夫やゴロツキは幾日でも日当になる事だから喜んで騒いでいましたとき」

「雪江さん、日当ってなに?」と、とん子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらつて何にするの?」

「御金を貰つてね。……ホホホホいやなすん子さんだ。——それで叔母さん、毎日毎晩から騒

ぎをしていますとね。その時町内に馬鹿竹と云つて、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿がいたんですつてね。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方は何でそんなに騒ぐんだ、何年かかつてても地蔵一つ動かす事が出来ないのか、可哀想なものだ、と云つたそうですつて——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引き込まして飄然と地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心なところで奇問を放つたので、細君と雪江さんはどつと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」

「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「そら多々良三平さんを知つてるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地蔵様の前へ来て懐手ふところをして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云つたら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日は御婦人の会であります、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとかく物をするのに正面から近道を通つて行かないで、かえつて遠方から廻りくどい手段をとる弊へいがある。もつともこれは御婦人に限つた事でない。明治の代は男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になつてゐるから、よくいらざる手数てすうと労力を費つひやして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解してゐるものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸形児きけいじである。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に在あつてはなるべくただいま申した昔話を御記憶になつて、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑よめじゆうとの間に起る忌わしき葛藤かつとうの三分さんぶいち一いちはたしかに減ぜられるに相違ない。人間は魂胆こんたんがあればあるほど、その魂胆が祟たつて不幸みまの源もとをなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたくはないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大変怒つてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町の？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だつて云うじゃありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじゃありませんよ。あんなに御化粧をすればたいいの人はよく見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、あの方は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があつたつて——」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありませんか」

「それもそうだけれども——あの方こそ、少し馬鹿竹になつた方がいいでしょう。無暗に威張るんですもの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げたつて、みんなに吹聴していらんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よつぽど物数奇ね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じゃ、あんな事をするのが当前だとまで思つてゐるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——それからまだ面白い事があるの。此間だれか、あの方の所へ艶書を送つたものがあるんだつて」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだつて」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけれども聞いた事もない人だつて、そうしてそれが長い長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとき。私があなを恋つてゐるのは、ちようど宗教家が神にあこがれてゐるようなものなの、あなたのためならば祭壇に供える小羊となつて屠られるのが無上の名誉であるの、心臓の形ちが三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立つて、吹き矢なら大当りであるの……」

「そりや真面目なの？」

「真面目なんですとき。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのところへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るところですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らして上げたらいいでしょう。」

寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行って球ばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでしょう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫おもらいになる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があつて、いぎつて時に力になつて、いいじゃありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品ひんがわるいのね。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もないんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論たぐまを逞しくしていると、さつきから、分らないなりに謹聴していると、ん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。この無鉄砲な希望には、さすが青春の気に満ちて、大に同情おおいを寄すべき雪江さんもちよつと毒気を抜かれた体ていであつたが、細君の方は比較的平気に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、招魂社しょうこんしゃへ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思つてるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇氣もなく、どつと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向つてかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？ わたしも大すき。いつしよに招魂社へ御嫁に行きましよう。」

ね？ いや？ いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗ってきつきと行つちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であろう。

ところへ車の音ががらと門前に留つたと思つたら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声が出た。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入つて来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢の傍へ、ばかりと手に携えた徳利様のものを抛り出した。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云つて花活けとも思われぬ、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰つていらつたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好だろう」と自慢する。

「いい恰好なの？ それが？ あんまりよかあないわ？ 油壺なんか何で持つていらつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活け」

「花活き」

「花活にしちや、口が小さい過ぎて、いやに胸が張つてるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔母さんと拵ぶところなした。困つたもの

「だ」^{ひと}と独りで油壺を取り上げて、障子^{しょうじ}の方へ向けて眺^{なが}めている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰^{もら}ってくるような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」
叔母さんはそれどころではない、風呂敷包^とを解^といて皿眼^{さらまなこ}になつて、盗難品^{しち}を検^{しら}べている。「おや驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張^あをしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰^{もら}ってくるものか。待^{まち}つてるのが退屈だから、あすこいらを散歩して
いるうちに堀^ほり出して来たんだ。御前^{ごぜん}なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父^{おじ}さんはどこを散歩したの」

「どこつて日本堤^{にほんづつみ}界隈^{かいわい}さ。吉原へも這^{はい}入^いつて見た。なかなか盛^{さか}んな所^{ところ}だ。あの鉄の門^{かど}を觀^みた事があるかい。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業^{せんぎょう}婦^ふのいる所へ行く因縁^{いんねん}がありませんわ。叔父さんは教師の身で、よくまあ、あんな所へ行^いかれたものねえ。本当に驚ろいてしま^まうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数^{しなかず}が足りないようだ事。これでみんな戻^{かえ}つたんでしようか」

「戻^{かえ}らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭^{しゅとう}しろと云いながら十一時まで待^{まち}たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないつて、吉原を散歩しちやなおいけないわ。そんな事が知れると免職^{めんしやく}になつてよ。ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯^{おび}の片側^{かたがわ}がないんです。何だか足りないと思^{おも}つたら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こつちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰してしまつた」と日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺めている。細君も仕方がないと諦めて、戻つた品をそのまま戸棚へしまい込んで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとき。きたないじゃありませんか」

「それを吉原で買っていらつたの？ まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだつてあるじゃありませんか」

「ところがないんだよ。滅多に有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地藏ね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くつていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌でしょう。女学生と保険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這入る。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入つてもいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸金で何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さ

ん」叔母さんはにやにや笑っている。主人は真面目になつて

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑気のんきな事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ、保険の必要を感じるに至るのは当前あたりまえだ。ぜひ来月から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのように蝙蝠傘こうちもりを買つて下さる御金があるなら、保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理に買つて下さるんですもの」

「そんなにいらなかつたのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還かえすがいい。ちようどとん子が欲しがつてるから、あれをこつちへ廻してやろう。今日持つて来たか」

「あら、そりゃ、あんまりだわ。だつて苛ひどいじゃありませんか、せつかく買つて下さつておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらぬ事はいらぬんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらぬいと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だつて」

「だつて、どうしたんだ」

「だつて苛いわ」

「愚ぐだな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだつて同じ事ばかり繰り返しているじゃありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらないと云つたじゃないか」

「そりや云いましたわ。いらぬ事はいらぬんですけれども、還すのは厭ですもの」

「驚ろいたな。没分曉で強情なんだから仕方がない。御前の学校じゃ論理学を教えないのか」

「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおつしやい。人のものを還せだなんて、他人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹の真似でもなさい」

「何の真似をしろ?」

「ちと正直に淡泊になさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したつて叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言ここに至つて感に堪えざるものごとく、澹然として一掬の涙を紫の袴の上に落した。主人は茫乎として、その涙がいかなる心理作用に起因するかを研究するものごとく、袴の上と、俯つ向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御三が台所から赤い手を敷居越に揃えて「お客さまがいらつしやいました」と云う。「誰が来たんだ」と主人が聞く。「学校の生徒さんでございます」と御三は雪江さんの泣顔を横目に睨めながら答えた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人間研究のため、主人に尾して忍びやかに椽へ廻つた。人間を研究するには何か波瀾がある時を扱ばないと一向結果が出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。しかしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作用のためにむくむくと持ち上がつて奇なもの、変なもの、

妙なものの、異なもの、一と口に云えば吾輩猫共から見てすこぶる後学になるような事件が至るところに横風おうふうにあらわれてくる。雪江さんの紅涙こうなみのごときはまさしくその現象の一つである。かくのごとく不可思議、不可測ふかそくの心を有している雪江さんも、細君と話をしているうちはさほどとも思わなかつたが、主人が帰つてきて油壺ぼちゅうを抛り出すやいなや、たちまち死竜しりゅうに蒸気唧筒じようきポンプを注ぎかけたるとく、勃然ぼつぜんとしてその深奥しんおうにして窺知きちすべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜気もなく発揚はつやうし了つた。しかしてその麗質は天下の女性にょしやうに共通なる麗質である。ただ惜しい事には容易にあらわれて来ない。否いやあらわれる事は二六時中間断なくあらわれているが、かくのごとく顯著しやくせんに灼然しゃくぜん炳乎へんことして遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫なでたがる旋毛曲つむじまがりの奇特家きどくかがおつたから、かかる狂言も拝見が出来たのであろう。主人のあとさえついてあげば、どこへ行つても舞台の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を旦那様に戴いたいて、短かい猫の命のうちにも、大分だいぶん多くの経験が出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追おつ、返かつつの書生である。大きな頭を地じの隙すいて見えるほど刈り込んで団子だんごつ鼻ばなを顔の真中にかためて、座敷の隅の方に控ひかえている。別にこれと云う特徴もないが頭蓋骨ずがいこつだけはすこぶる大きい。青坊主に刈つてさえ、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を惹ひく事だろう。こんな顔にかぎつて学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事実はそうかも知れないがちょっと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。着物は通例の書生のごとく、

薩摩さつま緋ひか、久留米くわいめがすりかまた伊予いよ緋ひか分らないが、ともかくも緋かすりと名づけられたる衿あわせを袖短さくぢかに着きこなして、下には襯衣シャツも襦袢じゆばんもないようだ。素衿すあわせや素足すあしは意気いきなものだそうだが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで印いんしているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちやんと坐まつて、さも窮屈きうくつそうに畏かしこまつている。一体かしまるべきものがおとなしく控ひかえるのは別段気にするにも及およばんが、毬栗頭いがりあたまのつんつるてんの乱暴者が恐縮きんしゆくしているところは何となく不調和なものだ。途中で先生に逢あつてさえ礼をしないのを自慢まにするくらいの連中が、たとい三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ちがない。ところを生れ得きて恭謙きやうけんの君子、盛徳ちやうしやの長者ちやうしやであるかのごとく構かまえるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍はたから見ると大分だいぶんおかしいのである。教場きやうじやうもしくは運動場であんなに騒々さわさわしいものが、どうしてかように自己じこを箝束かんそくする力ちからを具そなえているかと思うと、憐れにもあるが滑稽こっけいでもある。こうやって一人ずつ相対あいたいになると、いかに愚騷ぐがなる主人しゆじんといえども生徒せいとに対して幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし得意ていぎであろう。塵積ちりつて山やまをなすと云うから、微々ゑいゑいたる一生徒いせいとも多勢たぜいが聚合しゆうごうすると侮あなどるべからざる団体だんたいとなつて、排斥はいせき運動うんどうやストライキをしでかすかも知れない。これはちやうど臆病おくびやう者が酒を飲んで大胆だいたんになるような現象げんじやうであろう。衆しゆを頼たのんで騒さわぎ出すのは、人の氣に酔よつ払はらつた結果けつこ、正氣せいぎを取り落おしたるものと認まめて差支さしつかえあるまい。それでなければかように恐れ入ると云わんよりむしろ悄然しやうぜんとして、自ら襖みずかにふすま押し付けおし付けつけられているくらいな薩摩緋さつまひが、いかに老朽らうきうだと云つて、苟かりそめにも先生せんせいと名のつく主人しゆじんを輕蔑けいべつしようがない。馬鹿ばかに出来る訳がない。

主人は座布団ざぶとんを押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが毬栗先生はかたくなつたまま「へえ」と云つて動かない。鼻の先に剥はげかかった更紗さらざの座布団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席している後ろうしろに、生きた大頭がつくねんと着席しているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるために細君が勸工場から仕入れて来たのではない。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉を毀損きそんせられたるもので、これを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰つぶしてまで、布団と睨にらめくらをしている毬栗君は決して布団その物が嫌きらいではない。実を云うと、正式に坐つた事は祖父じいさんの法事の時のほかは生れてから滅多めったにないので、先まつきからすでにしびれが切れかかつて少々足の先は困難を訴えているのである。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰ひかに控えているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷きと云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら多人数集たにんずまつた時もう少し遠慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきところへ気兼きがねをして、すべき時には謙遜けんそんしない、否大に狼藉ろうぜきを働はたらく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろうしろの襖ふすまをすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭うやうやしく坊主に供した。平生なら、そらサヴェジ・チーが出たと冷ひやかすのだが、主人一人に対してすら痛み入いっている上へ、妙齢によしやうの女性が学校で覚え立ての小笠原流おがさわらりゆうで、乙おつに気取つた手つきをして茶碗を突きつけたのだから、坊主は大おおに苦悶くもんの体ていに見える。雪江さんは襖ふすまをしめる時に後ろからにやと笑つた。して見ると女は同年輩どうねいでもなかなかえらいものだ。坊主に比ひすれば遙はるかに度胸どくちゆうが据すわつてい。ことに先刻さつきの無念むねんにはらはらと流した一滴いっせきの紅涙こうなみのあとだから、このにやにやがさらに

目立って見えた。

雪江さんの引き込んだあととは、双方無言のまま、しばらくの間は辛防しんぼうしていたが、これでは業わざをするようなものだど気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

「古井……」

「古井？ 古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々は夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気のんきな主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかつたのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそ、う、かと心の裏うちで手を拍うつ

たのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やつて来たのか頓と推諒出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門君をもつて嚙矢とするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人も大に閉口しているらしい。こんな面白くない人の家へただ遊びにくる訳もなからうし、また辞職勧告ならもう少し昂然と構え込みそうだし、と云つて武右衛門君などが一身上の用事相談があるはずがないし、どつちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参つたのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと武右衛門君下を向いたぎり何にも言わない。元来武右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁ずる方で、頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋舌る事においては乙組中鏘々たるものである。現にせんだつてコロンバスの日本訳を教えろと云つて大に主人を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その鏘々たる

先生が、最前さいぜんから吃どもりの御姫様のようにもじもじしているのは、何か云いわくのある事ではなくてはならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。主人も少々不審に思った。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話にくい事で……」

「話にくい？」と云いながら主人は武右衛門君の顔を見たが、先方は依然として俯向うつむきになつてゐるから、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も聞いていやしない。わたしも他言たごんはしないから」と穏おだやかにつけ加えた。「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷つてゐる。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、毬栗頭いがりあたまをむくりと持ち上げて主人の方をちよつとまぼしうに見た。その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困つた事になつちまつて……」

「何が？」

「何がつて、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかつたんですけれども、浜田はまだが借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田平助へいすけかい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃よして、投函役とうかんやくになると云ったんです」

「何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じやないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だつて、何の事だかちつとも分らんじゃないか。もつと条理を立てて話すがいい。元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田つて向横丁むしうちやうぢやうにいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。——浜田が名前がなくちゃいけないつて云いますから、君の名前をかけて云つたら、僕のじゃつまらない。古井武右衛門の方がいいつて——それで、とうとう僕の名を借してしまつたんです」

「で、君はあすこの娘を知つてるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありやしません。顔なんか見た事ありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張つてるて云うから、からかつてやつたんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送つたんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行つて投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやつたんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか茫ぼんやりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名譽に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母つかさんが継母まははですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困めつちまうです。本当に退校になるでしょうか」

「だから滅多めったな真似をしないがいい」

「する気でもなかつたんですが、ついやつてしまつたんです。退校にならないように出来ないでしょいか」と武右衛門君は泣き出しそうな声をしてしきりに哀願あいつまに及んでいる。襖ふすまの蔭かげでは最前さいぜんから細君と雪江さんがくすくす笑っている。主人は飽あくまでもつたいぶつて「そうさな」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人間にせよ、動物にせよ、己おのれを知るのは生涯しょうがいの大事である。己おのれを知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこんないたずらを書

くのは気の毒だからすぐさまやめてしまうつもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見当がつき悪くいと見えて、平生から軽蔑している猫に向つてさえかような質問をかけるのであろう。人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けている。万物の霊だなどどこへでも万物の霊を担いであるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない。しかも恬として平然たるに至つてはちと一噓を催したくなる。彼は万物の霊を背中へ担いで、おれの鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと、どう致して死んでも放しそうにしない。このくらい公然と矛盾をして平気でいられれば愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘じなくてはならん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。実はその鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一主人はこの事件に対してむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかにやかましくつて、おつかさんがいかに君を継子あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのとは大に趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になったら、教師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう変化しようも、主人の朝夕にはほとんど関係がない。関係の薄いところには同情も自から薄い訳である。見ず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物であるとははなはだ受け取りにくい。ただ

世の中に生れて来た賦税ふぜいとして、時々交際のために涙を流して見たり、気の毒な顔を作つて見せたりするばかりである。云わばごまかし性表情せいひょうじょうで、実を云うと大分骨たいぶんほねが折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙せつな部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門君に對して「そうさな」を繰り返しているのも這裏しやりの消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、けつして主人のような善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力ちからめないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買い被かぶつたと云わなければならぬ。正直ですら払底はらていな世にそれ以上を予期するのは、馬琴ばきんの小説から志乃しのや小文吾こぶんごが抜けだして、向う三軒両隣へ八犬伝はつけんでんが引き越した時でなくては、あてにならない無理な注文である。主人はまずこのくらいにして、次には茶の間で笑つてる女連おんなれんに取りかかるが、これは主人の冷淡を一步向むこうへ跨またいで、滑稽こっけいの領分りやうぶんに躍おどり込んで嬉しがっている。この女連には武右衛門君が頭痛に病んでいる艶書事件が、仏陀ぶつだの福音ふくいんのごとくありがたく思われる。理由はないただありがたい。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがたいのである。諸君女に向つて聞いて御覽、「あなたは人が困るのを面白がつて笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思うのは事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実である。であるとすれば、これから私わたしの

品性を侮辱するような事を自分でしてお目にかけますから、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけつして不道德と云つてはならん。もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮辱したものである。と主張するようなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり、蹴たり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたはずみから、とんだ間違をして大に恐れ入つてはいるよくなものの、かように恐れ入つてるものを蔭で笑うのは失敬だとくらいは思ふかも知れないが、それは年が行かない稚氣ちぎというもので、人が失礼をした時に怒るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちよつと紹介する。君は心配の権化ごんげである。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもつて充滿せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとしている。時々その団子つ鼻がぴくぴく動くのは心配が顔面神経つたわに伝つて、反射作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きな鉄砲丸てつぱうだまを飲み下したくだごとく、腹の中にいかんともすべからざる塊かたまりを抱いて、この両三日りょうさんじつ処置に窮している。その切なさの余り、別に分別ぶんべつの出所でしよもないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思つて、いやな人の家うちへ大きな頭を下げにまかり越したのである。彼は平生学校で主人にからかつたり、同級生を煽動せんどうして、主人を困らしたりした事はまるで忘れてゐる。いかにからかおうとも困

らせようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと信じているらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつてやむを得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我儘わがままなるのみならず、他人は己おのれに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被かぶつた仮定から出立している。笑われるなどは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は監督の家うちへ来て、きつと人間について、一の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもつて充みたされるであろう。金田君及び金田令夫人をもつて充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も早く自覚して真人間まにんげんになられん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであろう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つてみると、格子こうしががらがらとあいて、玄関しやうじの障子の蔭から顔が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返していたところへ、先生と玄関から呼ばれたので、誰だろうとそつちを見ると半分ほど筋違すじかいに障子から食はみ出している顔はまさしく寒月君であ

る。「おい、御這入り」と云つたぎり坐っている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御上がり」

「実はちよつと先生を誘いに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無闇にあるかせられて、足が棒のようになつた」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行つて虎の鳴き声を聞こうと思つてんです」

「つまらんじゃないか、それよりちよつと御上り」

寒月君はどうてい遠方では談判不調と思つたものか、靴を脱いでそのそ上がつて來た。

例のごとく鼠色の、尻につぎの中つたずぼんを穿ているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもって矚目された本人へ文をつけた恋の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右衛門君に軽く会釈をして椽側へ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたつて詰らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々として物凄いでしょう」

「そうさな、昼間より少しは淋しいだろう」

「それで何でもなるべく樹の茂った、昼でも人の通らない所を択つてあるしていると、いつの間にか紅塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらく佇んでみるとたちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「そう旨く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんですから、深夜闐寂として、四望人なく、鬼氣肌に逼つて、魑魅鼻を衝く際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじゃありませんか、怖い時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉の葉をことごとく振り落すような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」
「そりや物凄いだらう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きつと愉快だろうと思ふんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくつちや、聞いたとはいわれないだらうと思ふんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であるごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで黙然として虎の話を羨ましそうに聞いていた武右衛門君は主人の「そうさな」

で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんです、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た。吾輩は思う仔細あつてちよつと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々と注いで、アンチモニーの茶托の上へ載せて、

「雪江さん、憚りさま、これを出して来て下さい」

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた体で笑いをはたと留める。

「どうしてでも」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍にあつた読売新聞の上のしかかるように眼を落した。細君はもう一応協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちつとも恥かしい事はないじゃありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托に引きかかつて、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳け出して行つた。雑巾でも持つてくる了見だろう。吾輩にはこの狂言がちよつと面白かつた。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話している。

「先生障子を張り易えましたね。誰が張ったんです」

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝ったのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云って威張つてるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こつちの方は平ですが、右の端は紙が余つて波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もつとも経験の乏しい時に出来上つたところさ」

「なるほど、少し御手際が落ちますね。あの表面は超絶的曲線でどうてい普通のファンクションではあらわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とうてい見込がないと思ひ切つた武右衛門君は突然かの偉大なる頭蓋骨を畳の上に圧しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「帰るか」と云つた。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可愛想に。

打ちやって置くと巖頭の吟でも書いて華巖滝から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令嬢のハイカラと生意気から起つた事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだコロンバスを訳して下さいって大おおに弱おおいった」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしよう。先生何とおつしやいました」

「ええ？ なあに好いい加減な事を云つて訳してやった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりやえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくつて、先生を困らせるようには見えないじやありませんか」

「今日は少し弱つつてるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非常に可かわい哀そう想なになりました。全体どうしたんです」

「なに愚ぐな事ささ。金田の娘えんしよに艶書えんしよを送つたんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚おどろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえつて面白いです。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいつこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。冗談じょうだんにしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかつてやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやっただんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函とうかんする、一人が名前を借す。で今来たのが名前を借した奴なんだがね。これが一番愚ぐだね。しかも金田の娘の顔も見た事がないうって云うんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりゃ、近來の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文ふみをやるなんて面白いじゃありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だつて君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、金田なんか、構やしません」

「君は構わなくつても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになつて、急に良心に責められて、恐ろしくなつた

ものだから、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」

「へえ、それであんなに悄悄しおしおとしていらっしゃるんですか、氣の小さい子と見えますね。先生何とか云つておやんなすつたんでしよう」

「本人は退校になるでしょうかつて、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道徳な事をしたから」

「何、不道徳と云うほどでもありませんやね。構やしません。金田じや名誉に思つてきつと吹聴ふいちようしていますよ」

「まさか」

「とにかく可愛想かわいそうですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちゃ、若い男を一人殺してしまいますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかぴくぴくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭見たように呑気のんきな事を云うね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔し風ふうだから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚ぐじゃないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書えんしよを送るなんて、まるで常識をかいでるじゃないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいでいますさあ。救つておやんなさい。功德くどくになりますよ。あの容ようす子すじや華嚴けげんの滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなきい。もつと大きな、もつと分別のある大僧共おおぞうがそれどころじゃない、わるいいたずらをして知らん面かおをしていますよ。あんな子を退校させるくらいなら、そんな奴らを片かたつ端はしから放逐でもしなくっちゃ不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にちよつと帰国しなければならぬ事が出来ましたから、当分どこへも御伴おともは出来ませんから、今日は是非いつしよに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。——ともかくも出ようじやありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

「さあ行きましょう。今日は私が晚餐ばんさんを奢おごりますから、——それから運動をして上野へ行くとちよつど好い刻限くげんです」としきりに促うながすものだから、主人もその気になつて、いつしよに出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけらけらからからと笑つていた。

床の間の前に碁盤を中に据えて迷亭君と独仙君が対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごとく山羊髯を引つ張りながら、こう云った。

「そんな事をするよ、せつかくの清戯を俗了してしまう。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない。成敗を度外において、白雲の自然に岫を出でて冉冉たるごとき心持ちで一局を了してこそ、個中の味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が折れ過ぎる。宛然たる列仙伝中の人物だ

ね」

「無絃の素琴を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば謙遜して、定石にここいらから行く。」

「定石にそんなのはないよ。」

「なくつても構わない。新奇発明の定石だ。」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩むほどごたごたと黒白の石をならべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の庵にて、解くればもとの野原なりけり。入らざる位たずらだ。懐手をして盤を眺めている方が遙かに気楽である。それも最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う間際に覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて、御互にギューギュー云つている。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんでいるよりほかに、どうする事も出来ない。碁を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表していると云つても差支えない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海澗の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬように、小刀細工で自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑気のんきなる迷亭君と、禅機ぜんきある独仙君とは、どう云う了見か、今日に限って戸棚から古碁盤を引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである。さすがに御兩人御揃おそろいの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあつて、横豎よこたての目盛りは一手ひとてごとに埋うまって行くのだから、いかに呑気でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入はいつてくる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊ほんいんぼうの流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんや屍肩ていけんをやと、一つ、こう行くかな」

「そうおいでになつたと、よろしい。薰風みんかみ南より来つて、殿閣びりよう微涼を生ず。こう、ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つぐ気遣きづかいはなかりうと思つた。ついで、くりやるな八幡鐘はちまんかねをと、こうやつたら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一剣天に倚よつて寒し——ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしまう。おい冗談じようだんじゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてるところへは這入はいれるものじゃないんだ」

「這入つて失敬 仕り候。ちよつとこの白をとつてくれたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。——なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくつて花道から馳け出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返待つたをしたじやないか」

「記憶のいい男だな。向後は旧に倍し待つたを仕り候。だからちよつとどけたまえと云うのだあね。君もよッぽど強情だね。座禅なんかしたら、もう少し捌けそうなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じやないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない」

「飛んだ悟道だ。相変らず春風影裏に電光をきつてるね」

「春風影裏じやない、電光影裏だよ。君のは逆だ」

「ハハハハもうたいてい逆かになつていい時分だと思つたら、やはりたしかなところがあるね。それじゃ仕方がないあきらめるかな」

「生死事大、無常迅速、あきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へびしやりと一石を下した。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に輸贏を争っている、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんでその傍に主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に鰹節が三本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の出処は寒月君の懐で、取り出した時は暖たかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日ばかり前に国から帰つて来たのですが、いろいろ用事があつて、方々馳けあるいていたものですから、つい上がられなかつたのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく無愛嬌な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く献上しないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭いをかいで見ろ。

「かいだつて、鰹節の善悪はわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以かね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持つて来ないと心配だと云うのです」

「なぜ？」

「なぜって、そりゃ鼠ねずみが食ったのです」

「そいつは危険だ。滅多めったに食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったつて害はありません」

「全体どこで噛かったんだい」

「船の中です」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしょに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、そ

の晩にやられました。鯉節かつがしだけなら、いいのですけれども、大切なヴァイオリンの胴を鯉節

と間違えてやはり少々噛かりました」

「そそつかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう見境みさかいがなくなるものかな」と主人は誰にも

分らん事を云つて依然として鯉節を眺ながめている。

「なに鼠だから、どこに住んでもそそつかしいのでしよう。だから下宿へ持つて来てもま

たやられそうだね。剣呑けんおんだから夜よるは寢床の中へ入れて寝ました」

「少しきたくないようだぜ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじゃ奇麗にやなりそうもない」

「それじゃ灰汁あじでもつけて、ごしごし磨いたらいいでしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると「なんだって？ ヴァイオリンを抱いて寝たって？ それは風流だ。行く春や重たき琵琶びわのだき心と云う句もあるが、それは遠きその上かみの事だ。明治の秀才はヴァイオリンを抱いて寝なくつちや古人を凌しのぐ訳には行かないよ。かい巻まきに長き夜守よもるやヴァイオリンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこつちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違つてそう急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し生霊せいれいの機微きびに触れた妙音が出ます」

「そうかね、生霊しやうりやうはおがらを焚たいて迎え奉るものと思つてたが、やつぱり新体詩の力でも御来臨からかひになるかい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戯たうぎている。

「そんな無駄口たたを叩くとまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中かちゆうの章魚たこ同然手も足も出せないのだから、僕も無聊ぶりやうでやむを得ずヴァイオリンの御仲間つかまつを仕るのさ」と云うと、相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こつちで待つてるんだ」と云い放つた。

「え？ もう打つたのかい」

「打つたとも、とうに打つたさ」

「どうへ」

「この白をはずに延ばした」

「なるほど。この白をはずに延ばして負けにけりか、そんならこつちはと——こつちは——こつちはこつちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——それじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置かな。——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして嘯るんだよ、もう少しいいのを奮発して買うさ、僕が以太利亜から三百年前の古物を取り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は一喝にして迷亭君を極めつけた。

「君は人間の古物とヴァイオリンの古物と同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。——さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじやないが秋の日は暮れやすからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありません。仕方がないから、ここへ一目入れて目にしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと

思つて、いささか駄弁を振つて肝胆を砕いていたが、ヤツぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——おい苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年漬を食つただけあつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。暮はまずいが、度胸は据つてる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が後ろ向のままに答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君は毫も関せざるものごとく、「さあ君の番だ」とまた相手を促した。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思ふのだが、よつぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌の趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃むところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。——先生私しのヴァイオリンを習い出した顛末をお話した事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい」

「なあに先生も何もありません。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限った事もなからう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりや、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などをあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかったのです。ことに私のおつた学校は田舎いなかの田舎で麻裏草履あさうらぞうりさえないと云うくらいな質朴な所でしたから、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾ひくものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話に向うで始まつたようだ。独仙君いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あつてもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云つたつて、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わん几帳面きちようめんな男だ。それじゃ一氣呵成いっきかせいにやつちまおう。——寒月君何だか

よつぽど面白そうだね。——あの高等学校だろう、生徒が裸足で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆なはだして兵式体操をして、廻れ右をやるんで足の皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り飯を一個、夏蜜柑のように腰へぶら下げ来て、それを食うんだつて云うじゃないか。食うと云うよりむしろ食いつくんだね。すると中心から梅干が一個出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩気のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと云うが、なるほど元氣旺盛なものだね。独仙君、君の気に入るような話だぜ」

「質朴剛健でたのもしい氣風だ」

「まだたのもしい事がある。あすこには灰吹きがないそうだ。僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐月峰の印のある灰吹きを買に出たところが、吐月峰どころか、灰吹と名づくべきものが一個もない。不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の藪へ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、売る必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴剛健の氣風をあらわす美譚だろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちゃいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。——僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。惇独にして不羣なりと

楚辞そしにあるが寒月君は全く明治の屈原くつげんだよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウエルテルさ。——なに石を上げて勘定をしる？ やに物堅ものがたい性質たちだね。勘定しなくつても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし極きまりがつかないから……」

「それじゃ君やつてくれたまえ。僕は勘定所じやない。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくつちや、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取つては白の穴を埋め、黒石を取つては黒の穴を埋めて、しきりに口の内で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固がんこなので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来何だつて、紺こんの無地の袴はかまなんぞ穿はくんさい。第一だいちあれからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけているせいか、どうも、色が黒いね。男だからあれで済むが女があればじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が一人這入はいると肝心かんじんの話はどっかへ飛んで行ってしまふ。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貫い手があるね」

「だつて一國中いっくわうちうことごとく黒いのですから仕方がありません」

「因果だね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたんびに己おのぼれ惚ぼが出ていけない。女と云うものは始末におえない物件だからなあ」と主人は喟きげん然ぜんとして大息たいそくを洩もらした。

「だって一國中ことごとく黒ければ、黒い方で己うぬぼ惚ぼはしませんか」と東風君がもつともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思つた。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰つてくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。迷亭君は

「妻さいを持つとみんなそう云う気になるのさ。ねえ独仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？ ちよつと待つた。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狭いと思つたら、四十六目もくあるか。もう少し勝つたつもりだったが、こしらえて見ると、たつた十八目の差か。――

何だつて？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の妻は元來僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代つてちよつと弁護の勞を取つた。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の域に入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸福を完うしなければ天意に背く訳だと思ふんだ。——がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直つた。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の境に這入れそうもない」

「妻を貰えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云つた。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思つて寒月君にさつきから経験譚をきいているのです」

「そうそう、ウエルテル君のヴァイオリン物語を拝聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔はしないから」と迷亭君がようやく鋒鈍を収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯三昧で宇宙の真理が知れては大変だ。這裡の消息を知ろうと思えばやはり懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える底の氣魄がなければ駄目だ」と独仙君はもつたい振つて、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよ

かったが、東風君は禪宗のぜの字も知らない男だから頓と感心したようすもなく「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰の極致を表わしたものだと思ひますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめるまでには大分苦心をしたよ。第一買うのに困りましたよ先生」

「そうだろう麻裏草履がない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支えないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加えられます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と東風君は大に同情を表した。

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは御免蒙りたいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれを手に抱えた心持ちはどんなだろう、ああ欲しい、ああ欲しいと思わない日は一日もなかつたのです」

「もつともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝つたものだね」と解しかねたのが主人で、「やはり君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙君ばかりは超然として髯を撚している。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一ご不審かも知れないですが、これは考えと見ると当り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校があつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのですから、あるはずです。無論いいのはありません。ただヴァイオリンと云う名が辛うじてつくくらいのものであります。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ吊るしておくのです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、小僧の手が障つたりして、そら音を出す事があります。その音を聞くと急に心臓が破裂しそうな心持で、いても立つてもいられなくなるんです」

「危険だね。水癩癩、人癩癩と癩癩にもいろいろ種類があるが君のはウエルテルだけあつて、ヴァイオリン癩癩だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ實際癩癩かも知れませんが、しかしあの音色だけは奇体ですよ。その後今日まで随分ひきましたがあのかのくらしい美しい音が出た事ありません。そうさ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわせないです」

「琳琅瑤鏘として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出したのは独仙君であつたが、誰も取り合わなかつたのは気の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの靈異な音を三度ききました。三度目にどうあつてもこれは買わなければならぬと決心しました。仮令国のものから譴責されて

も、他県のものから輕蔑けいべつされても——よし鉄拳制裁てつけんざいのために絶息ぜつそくしても——まかり間違つて退校の処分を受けても——、こればかりは買わずにいられないと思ひました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思ひ込める訳のものじゃない。羨うらやましい。僕もどうかして、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けているが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに感興が乗らない」と東風君はしきりに羨うらやまやましがっている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すようなものその時の苦しみはどうてい想像が出来るような種類のものではなかつた。——それから先生とうとう奮発して買ひました」
「ふむ、どうして」

「ちようど十一月の天長節の前の晩でした。国のものは揃そろつて泊りがけに温泉に行きましたから、一人もいません。私は病氣だと云つて、その日は学校も休んで寝ていました。今晚こそ一つ出て行つて兼かねて望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でその事ばかり考えていました」

「偽病けいびょうをつかつて学校まで休んだのかい」
「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりや」と迷亭君も少々恐れ入つた様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠まちどおでたまりません。仕方がないから頭からめぐり込んで、眼を眠ねむつて待つて見ましたが、やはり駄目です。首を出すと烈しい秋の日が、六尺の障子しょうじへ一面にあたつて、かんかんするには癩癩かんしゃくが起りました。上の方に細長い影がか

たまって、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を剥いて、軒へ吊るしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床を出て障子をあけて椽側へ出て、渋柿の甘干しを一つ取って食いました」

「うまかつたかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮ればいいかと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立つたと思う頃、もうよかろうと、首を出すとあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまって、ふわする」

「そりや、聞いたよ」

「何返もあるんだよ。それから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食って、また寢床へ這入って、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦かずに聞いて下さい。それから約三四時間夜具の中で辛抱して、今度こそもうよかろうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあ

たつて、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわしている」

「いつまで行つても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、椽側へ出て甘干しの柿を一つ食つて……」

「また柿を食つたのかい。どうもいつまで行つても柿ばかり食つてて際限がないね」

「私もじれつたくてね」

「君より聞いている方がよっぽどじれつたいぜ」

「先生はどうも性急だから、話がしにくくつて困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗に不平を洩らした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たいていにして切り上げましょう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食ひ、とうとう軒端に吊るした奴をみんな食つてしまいました」

「みんな食つたら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食つて、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて……」

「僕あ、もう御免だ。いつまで行つても果てしない」

「話す私も飽き飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいいの事業は成就するよ。だまつたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだらう。全体いつ頃にヴァイオリンを買う気なんだい」とさすのが迷亭君も少し辛抱し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然として、あしたの

朝まででも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色はさらにな
い。寒月君も落ちつき払ったもので

「いつ買う気だとおつしやるが、晩になりさえすれば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。
ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものですから——いえ
その時の私わたくの苦しみと云つたら、とうてい今あなた方の御じれになるどころの騒ぎじゃな
いです。私は最後の甘干を食つても、まだ日が暮れないのを見て、泣然げんぜんとして思わず泣きま
した。東風君、僕は実に情なさけなくつて泣いたよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話をもつと早く進行
させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽こっけいな挨拶をしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちゃ聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなく
なったと見えて云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境に入るところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよからう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、枉まげて、ここは日が暮れた事に致し
ましよう」

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと嘖き出した。

「いよいよ夜よに入ったので、まず安心とほつと一息ついて鞍懸村くらかけむらの下宿を出ました。私は
性来騒々しょうらいそうぞうしい所が嫌きらいですから、わざと便利な市内を避けて、人迹稀じんせきまれな寒村の百姓家にしぼら

く蝸牛かぎゅうの庵いおりを結んでいたのです……」

「人迹ひとあとの稀まばらなはんまり大袈裟おおげさだね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛かぎゅうの庵いおりも仰山ぎやうざんだよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでは学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとつてるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰わせる。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。……で当夜の服装と云うと、手織木綿ておりもめんの綿入わたいりの上へ金釦きんボタンの制服外套がいのうを着て、外套の頭巾ずきんをすぼりと被かぶつてなるべく人の目につかないような注意をしました。折柄おりから柿落葉かきふちの時節で宿から南郷街道なんきやうかいどうへ出るまでは木の葉こで路ぢが一杯です。ひとあしひとあし一步運ひとぶりごとごとににががささがさするするのがの気きにかかかりかります。誰かあとをつけて来そうでもありません。振り向いて見ると東嶺寺とうれいじの森もりががこんもりと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺寺と云うのは松平家まつだいらけの菩提所ぼだいじよで、庚申山こうしんやまの麓ふもとにあつて、私の宿とは一丁くらいしか隔へだたっていない、すこぶる幽邃ゆうすいな梵刹ぼんざつです。森から上はのべつ幕なしの星月夜で、例の天の河が長瀬川ながせがわを筋違すじかいに横切つて末は——末は、そうですね、まず布哇ハワイの方へ流れています……」

「布哇は突飛とつぱいだね」と迷亭君が云つた。

「南郷街道をついに二丁来て、鷹台町たかのだいまちから市内に這入つて、古城町こじやうまちを通つて、仙石町せんじくまちを曲つて、

喰代町を横に見て、通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に通り返して、それから尾張町、名古屋町、鯨鉾町、蒲鉾町……」

「そんないろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と主人がじれったそうに聞く。

「楽器のある店は金善即ち金子善兵衛方ですから、まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、店にはランプがかんかんともつて……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだから難渋するよ」と今度は迷亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。……灯影にすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った琴線の一部だけがきらきらと白く眼に映ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に動悸がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず駆け込んで、隠袋から蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中から五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、まてしばし、ここが肝心のところだ。滅多な事をしては失敗する。」

まあよそうと、際きわどいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか人を引つ張るじゃないか」

「引つ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方がありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ宵よいの口で人が大勢通るんですもの」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通つたつて、君はよつほど妙な男だ」と主人はぶんぶんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊はいかいしているんだから容易に手を出せませんよ。中には沈澱ちんでん党などと号して、いつでもクラスの底に溜まって喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多めったにヴァイオリンなどに手出しは出来ません。どんな目に逢あうかわかりません。私だつてヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾ひいて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いやならいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうなものだ」

「えへへへ、世の中の事はそう、こつちの思うように埒らちがあくもんじゃありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になつたと見えて、ついと立つて書齋へ這入つたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと腹這になつて読み始めた。独仙君はいつの間にか、床の間の前へ退去して、独りで碁石を並べて一人相撲をとっている。せつかくの逸話もあまり長くかかるので聴手が一人減り二人減つて、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い事にかつて辟易した事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて前同様の速度をもつて談話をつづける。

「東風君、僕はその時こう思つたね。とうていこりや宵の口は駄目だ、と云つて真夜中に来れば金善は寝てしまうからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らつて来なければ、せつかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむずかしい」

「なるほどこりやむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積つたね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰つて出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が咎めるように面白くなし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間はぶらぶらあるいているうちに、いつの間にか経つてしまうのだがその夜に限つて、時間のたつのが遅いの何のつて、——千秋の思とはあんな事を云うのだろうと、しみじみ感じました」とさも感じたららしい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。「古人を待つ身につらき置炬燵と云われた事があるからね、また待たるる身より待つ身はつ

らいともあつて軒に吊られたヴァイオリンもつらかつたろうが、あてのない探偵のようにならうろ、まごついてゐる君はなおさらつらいだろう。累々として喪家の犬のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは実際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔しの芸術家の伝を読むような気持がして同情の念に堪えない。犬に比較したのは先生の冗談だから気に掛けずに話を進行したまえ」と東風君は慰藉した。慰藉されなくても寒月君は無論話をつづけるつもりである。

「それから徒町から百騎町を通つて、両替町から鷹匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の灯を計算して、紺屋橋の上で巻煙草を二本ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切つて川添に東へ上つて行くと、按摩に三人あつた。そうして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝居がかりだね。君は落人と云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと云うところさ」

「可哀相にヴァイオリンを買うのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をしても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶蘇もあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオ

リンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましよう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおっつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先を越されては降参するよりほかはありません。それじゃ一足飛びに十時にしてしましましょう。さて御約束の十時になつて金善の前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすが目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ淋しい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに潜り戸だけを障子にしています。私は何となく犬に尾けられたような心持で、障子をあけて這入るのに少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をはずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と聞いた。「これから買うところですよ」と東風君が答えると「まだ買わないのか、実に永いな」と独り言のように云つてまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半埋めてしまった。

「思い切つて飛び込んで、頭巾を被ったままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周囲に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれ

と二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を覗き込むようにしていた小僧がへえと覺束ない返事をして、立ち上がつて例の店先に吊るしてあつたのを三四挺一度に卸して来ました。いくらかと聞くと五円二十錢だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじゃないか」

「みんな同働かかると聞くと、へえ、どれでも変りはございません。みんな丈夫に念を入れて拵らえてございますと云いますから、蝦蟇口のなかから五円札と銀貨を二十錢出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この間、店のものは話を中止してじつと私の顔を見ています。顔は頭中にかくしてあるから分る氣遣はないのですけれども何だか氣がせいて一刻も早く往来へ出たくて堪りません。ようやくの事風呂敷包を外套の下へ入れて、店を出たら、番頭が声を揃えてありがとうございますと大きな声を出したのにはひやつとしました。往来へ出てちよつと見廻して見ると、幸誰もないようですが、一丁ばかり向から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて濠端を葉王師道へ出て、はんの木村から庚申山の裾へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰つて見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が氣の毒そうに云うと「やつと上がった。やれやれ長い道中双六だ」と迷亭君はほつと一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢つちや根氣負けをするね」

「根気はとにかく、ここでやめちゃ仏作って魂入れずと一般ですから、もう少し話します」
「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買つてしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくつてもいい」

「まだ売るどこじやありません」

「そんならなお聞かなくともいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざつと話してしまおう」

「ざつとでなくてもいいから緩くり話したまえ。大変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困つたのは置き所だね。僕のところへは大分人が遊びにくるから減多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘つて埋めちや掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家なもの」

「そりや困つたらう。どこへ入れたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家^{かくが}についてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だつて? Quid aliud est mulier nisi amicitiae inimica……」こりや君^{ラテンジ}羅旬語じゃないか

「羅旬語は分つてるが、何と読むのだい」

「だつて君は平生羅旬語が読めると云つてるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取つて、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だい」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅旬語などはあとにして、ちよつと寒月君のご高話を拝聴^{つかまつ}仕ろうじゃないか。今大変なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う安宅^{あたか}の関^{せき}へかかつてるんだ。

「ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乗気になつて、またヴァイオリンの仲間入りを

する。主人は情けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて来たものだそうです」

「そいつは古物だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だつて調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。秋淋しつづらにかくすヴァイオリンはどうだ
い、両君」

「先生今日は大分俳句が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣と云つたら、故子規も舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。

「なにつき合わなくても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を掠めて眺めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾かなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちようど木槿垣を一重隔てて南隣りは

沈澱組の頭領が下宿しているんだから剣呑だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりや困る。論より証拠音が出るんだから、小督こじゆうの局つぼねも全くこれでしくじつたんだからね。これがぬすみ食をするとか、贗札にせきつを造るとか云うなら、まだ始末がいいが、音曲おんきよくは人に隠しちや出来ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待った。音さえ出なけりやと云うが、音が出なくても隠かくし了おほせないのがあるよ。

昔むかし僕等が小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木とうの藤さんと云う人がいてね、この藤さんが大変味淋みりんがすぎで、ビールの徳利とくぐりへ味淋を買つて来ては一人で楽しみに飲んでいたのさ。ある日藤さんが散歩に出たあとで、よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲んだところが……」

「おれが鈴木とうの味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。「おや本を読んではから大丈夫かと思つたら、やはり聞いてるね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。——両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中真赤まっかにはれ上つてね。いやもう二目ふためとは見られないありさまさ……」

「黙もくつていろ。羅甸語ラテンビも読めない癖に」

「ハハハハ、それで藤とうさんが帰つて来てビールの徳利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅の方に朱泥しゅでいを練りかためた人形かたがたのようにかたくなつていらあね……」

三人は思わず哄然と笑い出した。主人も本をよみながら、くすくすと笑った。独り独仙君に至っては機外の機を弄し過ぎて、少々疲労したと見えて、碁盤の上へのしかかつて、いつの間^まにやら、ぐうぐう寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔し姥子の温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつた事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつたがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが、ただ困つた事が一つ出来てしまつた。と云うのは僕は姥子へ着いてから三日目に煙草を切らしてしまつたのさ。諸君も知つてるだろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ温泉に這入つて飯を食うよりほかにどうもこうも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がないなと思ふやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しづつ出しては、人の前で胡坐をかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、豎に吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢の枕と逆に吹いたり、または鼻から獅子の洞入り、洞返りに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰つたらいいでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで偷んだ」

「おやおや」

「奴さん手拭てぬぐいをぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだと思つて一心不乱立てつづけに呑んで、ああ愉快だと思つてもなく、障子しよじがかりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着きんちやくを忘れたのに気がついて、廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやしまいし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませぬね。煙草の御手際おてぎわじゃ」

「ハハハハじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあけると二日間の溜め呑みをやった煙草の煙りがむつとするほど室へやのなかに籠こもつてるじゃないか、悪事千里とはよく云つたものだね。たちまち露見してしまつた」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草まきたばこを五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉そはでよろしければどうぞお呑み下さいましと云つて、また湯壺ゆつぽへ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしょうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんと大に肝胆相照らして、二週間の間面白く逗留して帰つて来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になったんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちようどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちや、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちや毒だとき。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯を伝わって垂涎が一筋長々と流れて、蝸牛の這つた迹のように歴然と光っている。

「ああ、眠かつた。山上の白雲わが懶きに似たりか。ああ、いい心持ちに寝たよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちつと起きちやどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだつたかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当がつかない」

「これからいよいよ弾くところですよ」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こつちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃の素琴を弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きいきいぴいぴい近所合壁へ聞えるのだから大に困つてるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地の白牛を見ればすぐ分るはずだが」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだろうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちにて、つづらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいましたがいよいよ日が暮れて、つづらの底で蟬が鳴き出した時思い切つて例のヴァイオリンと弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取つて、切先から鏢元までしらべて見る……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した。

「實際これが自分の魂だと思つて、侍が研ぎ澄した名刀を、長夜の灯影で鞆払をする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持つたままぶるぶるとふるえましました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癩癩だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかろう」と云う。独仙君は困ったものだと言ふ顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの傍へ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この間約五分間、つづらの底では始終、蟬が鳴いていると思つて下さい。……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも疵がない。これなら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」

「どつかへ行くのかい」

「まあ少し黙つて聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとき。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、草履を突かけたまま二三歩草の戸を出したが、まてしばし……」

「それおいでなすつた。何でも、どつかで停電するに違ないと思つた」

「もう帰つたつて甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御ませ返しになつてははなはだ遺憾の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方がない。——いいかね東風君、二三歩出たがまた引き返して、国を出るとき三円二十

錢で買った赤毛布を頭から被つてね、ふつとランプを消すと君真暗闇になつて今度は草履の所在地が判然しなくなつた」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまひ。ようやくの事草履を見つけて、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリン。右へ右へと爪先上りに庚申山へ差しかかつてくると、東嶺寺の鐘がボーンと毛布を通して、耳を通して、頭の中へ響き渡つた。何時だと思ふ、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたつた一人、山道八丁を大平と云う所まで登るのだが、平生なら臆病な僕の事だから、恐しくつてたまらないところだけれども、一心不乱となると不思議なもので、怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になつてゐるんだから妙なものさ。この大平と云う所は庚申山の南側で天気の良い日に登つて見ると赤松の間から城下が一目に見下せる眺望佳絶の平地で——そうさ広さはまあ百坪もあるうかね、真中に八畳敷ほどな一枚岩があつて、北側は鶉の沼と云う池つづきで、池のまわりは三抱えもあるうと云う樟ばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟脳を採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でもあまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布を敷いて、ともかくもその上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第次第に腹の底へ沁み渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖いと云う感じばかりだか

ら、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々たる空靈の気だけになる。二十分ほど茫然としているうちに何だか水晶で造った御殿のなかに、たった一人住んでるような気になった。しかもその一人住んでる僕のからだが一——いやからだばかりじゃない、心も魂もことごとく寒天か何かで製造されたごとく、不思議に透き徹つてしまつて、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだから、わからなくなつて来た……」

「飛んだ事になつて来たね」と迷亭君が真面目にからかうあとに付いて、独仙君が「面白い境界だ」と少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝まで、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫やり一枚岩の上に坐つてたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きているか死んでいるか方角のつかない時に、突然後ろの古沼の奥でギヤーと云う声が出た。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢を、野分と共に渡つたと思つたら、はつと我に帰つた……」

「やつと安心した」と迷亭君が胸を撫でおろす真似をする。

「大死一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする。寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰つてあたりを見廻わすと、庚申山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。はてな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭すぎるし、鳥の声にしては大き

過ぎるし、猿の声にしては——この辺によもや猿はおるまい。何だろう？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これを解釈しようと言うので今まで静まり返っていたやからが、ふんぜんざつぜんじゅうぜん 紛然雑然粲然としてあたかもコンノート殿下歓迎の当時における都人士狂乱の態度を以てもつ 脳裏をかけ廻る。そのうちに総身そうしんの毛穴が急にあって、しょうちゆう 焼酎を吹きかけた毛脛けずねのように、勇氣、胆力、分別、沈着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が紙鳶たこのうなりのように震動をはじめ。これはたまらん。いきなり、毛布けつとを頭からかぶつて、ヴァイオリンを小脇に搔かい込んでひよろひよると一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁ふもとを麓ふもとの方へかけ下りて、宿へ帰つて布団ふとんへくるまつて寝てしまった。今考えてもあんな気味のわるかつた事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギヤードもの。君だつてきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くにはだいぶ苦心惨憺たるものがあつたのだから。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦くにに出現するところかと思つて、今が今まで真面目に拝聴していたんだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないので「サンドラ・ベロニが月下に豎琴たてこを弾いて、以太利亞風イタリアふうの

歌を森の中でうたつてるところは、君の庚申山こうしんやまへヴァイオリンをかかえて上のぼるところと同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中げつちゅうの嫦娥じやうがを驚ろかし、君は古沼ふるぬまの怪狸かいりにおどろかさされたので、際きわどいところで滑稽こつげいと崇高の大差を来たした。さぞ遺憾いかんだろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかさるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

「好漢こうかんこの鬼窟裏きくつりに向つて生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりゃ、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行つて珠たまばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんですから、暫時ざんじ中止の姿です。珠ももうあきましたから、実はよそうかと思つてるんです」

「だつて珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エへへへ。博士ならもうならなくつてもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚つて誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえつて、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありやしません、そんな事を言い触らすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡つてる。現に万朝まんちようなぞでは花智花嫁と云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの榮はいつだろう、いつだろうつて、うるさく僕のところへ聞きにくるくらいだ。東風君なぞはすでに鴛鴦えんおう歌と云う一大長篇を作つて、三箇月前ぜんから待つてるんだが、寒月君が博士にならないばかりで、せっかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないぞうだ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかつてはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししつかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然とした女房があるんです」

「いや、こりやえらい。いつの間に秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたないうちに子供が生れちゃ事できさあ」

「元来いっどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待つてたのです。今日先生の所へ持つて来た、この鯉節は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たつた三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持つて来たのです」

「じゃ御国の女だね、やつぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんでものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないで済むところをわざわざ鉢合せするんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦歌を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によつて、こちらへ向け易くてもよろしゅうございます。金田家の結婚

式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあつて自由自在なものだね」

「金田の方へ断わつたかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙つていれば沢山です。——なあに黙つても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかつて一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔をして

「ふん、そんなら黙つていろ」と申し渡したが、それでも飽き足らなかつたと見えて、なお探偵について下のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間に雨戸をはずして人の所有品を偷むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑らして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人の風上に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したつて怖くはありません。珠磨りの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあつて元氣旺盛なものだね。しかし苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金田君のごときものは何の同類

「だろう」

「熊坂長範くらいなものだろう」

「熊坂はよかつたね。一つと見えたる長範が二つになってぞ失せにけりと云うが、あんなからすがね鳥金で身代をつくつた向横丁の長範なんかは業つく張りの、欲張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣はないぜ。あんな奴につかまつたら因果だよ。生涯たたるよ、寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人よ。手並はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち入るかつて、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自若として宝生流に氣骸を吐いて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいい探偵のようになる傾向があるが、どう云う訳だろ」と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしよう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしよう」と東風君が答える。

「人間に文明の角が生えて、金米糖のようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもつたい振つた口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になつている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の類ではない。……」

「おや大分むずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する

以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがあつ。大にある。君なぞはせんだつては刑事巡査を神のごとく敬い、また今日は探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾の変怪だが、僕などは終始一貫父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせんだつてで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともになると可愛いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云う事を知り過ぎていと云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になって行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評して彼は鏡のかかった部屋に入つて、鏡の前を通る毎に自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬時も自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、よく今日の趨勢を言いあらわしている。寝てもおれ、覚めてもおれ、このおれが至るところにつけまつわっているから、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちようど見合をする若い男女の心持ちで朝から

晩までくらさなければならぬ。悠々とか従容とか云う字は劃があつて意味のない言葉になつてしまふ。この点において現代の人は探偵的である。泥棒的である。探偵は人の目を掠めて自分だけうまい事をしようと云う商売だから、勢自覚心が強くならなくては出来ん。泥棒も捕まるか、見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己れの利になるか、損になるかと寝ても醒めても考えつづけだから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして墓に入るまで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の咒詛だ。馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。こんな問題になると独仙君はなかなか引込んでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく我意を得ている。昔の人は己れを忘れると教えたものだ。今の人は己れを忘れるなど教えるからまるで違う。二六時中己れと云う意識をもつて充満している。それだから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な事はない。三更月下無我とはこの至境を咏じたものさ。今の人は親切をしても自然をかいている。英吉利のナイスなどと自慢する行為も存外自覚心が張り切れそうになつてゐる。英国の天子が印度へ遊びに行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、その王族が天子の前とも心づかずに、つい自国の我流を出して馬鈴薯を手攫みで皿へとつて、あとから真赤になつて愧じ入つたら、天子は知らん顔をしてやはり二本指で馬鈴薯を皿へとつたそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後をつける。「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を硝子鉢へ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな噺もあるよ」とだまつてる事の嫌な迷亭君が云った。「カーライルが始めて女皇に謁した時、宮廷の札に嫺わぬ変物の事だから、先生突然どうですと云いながら、どざりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の後ろに立っていた大勢の侍従や官女がみんなくすくす笑い出した——出したのではない、出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ちよつと何か相図をしたら、多勢の侍従官女がいつの間にかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失わなかつたと云うんだが随分御念の入った親切もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立つてても平氣だったかも知れませんが」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従つて殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くて、どうしておだやかになれるものか。なるほどちよつと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちよつと相撲が土俵の真中で四つに組んで動かないようなものだ

ろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじやないか」

「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえって罪はなかつたが、近頃じやなかなか巧妙になつてゐるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻つて来る。「ベーコンの言葉に自然の力に従つて始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上つてゐるから不思議だ。ちやうど柔術のようなものさ。敵の力を利用して敵を斃す事を考える……」

「または水力電気のようなものですね。水の力に逆らわないうでかえつてこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取つた。「だから貧時には貧に縛せられ、富時には富に縛せられ、憂時には憂に縛せられ、喜時には喜に縛せられるのさ。才人は才に斃れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩持ちは癩癩を利用してさすればすぐに飛び出して敵のぺてんに罹る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君はにやにや笑いながら「これでなかなかそう甘くは行かないのだよ」と答えたら、みんな一度に笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業で斃れ、自分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑んだくれの類だろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから応無所住而生其心と云うのは大事な言葉だ、そう云う境界に至らんと人間は苦しくてならん」と独仙君しきりに独り悟つたような事を云う。

「そう威張るもんじゃないよ。君などはことによると電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言下に道破する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦しむと見えませんね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦しむものは幸福さ」と独仙君は超然として出世間的である。

「君のように云うとつまり凶太いのが悟つたのだね」

「そうさ、禅語に鉄牛面の鉄牛心、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云う病気が発明された。」

てから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合かけあひをのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞くがいい。どうして借りた金を返さずに済ますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であった。鍊金術れんきんじゆつはこれである。すべての鍊金術は失敗した。人間はどうしても死ななければならん事が分明ぶんみやうになつた」

「鍊金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きていゝる事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭いやだから苦に

するのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。ただたいいのものは智慧ちえが足りないから自然のままに放擲ほうてきしておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間から崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずかならずや死に方に付いて種々考究の結果、斬新ざんしんな名案を呈出するに違ない。だからして世界向後こうごの趨勢すうせいは自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法をもつてこの世を去るに違ない」

「大分物騒だいぶんぶつそうな事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の後はのち死と云えば自殺よりほかに存在しないもののように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になつて、落雲館のよくな中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのものですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風ぼくしゆを墨守ぼくしゆしてはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺であ

る。しかして己れの好むところはこれを人に施こして可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もつとも昔と違つて今日は開明の時節であるから槍、薙刀もしくは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしてはなりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつて、からかい殺すのが本人のため功德にもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としてゐる。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒をもつて天下の公民を撲殺してあるく。……」

「なぜです」

「なぜつて今の人間は生命が大事だから警察で保護するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺してくれるのさ。もつとも少し気の利いたものは大概自殺してしまうから、巡査に打殺されるような奴はよくよく意気地なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。それで殺されたい人間は門口へ張札をしておくのだね。なにただ、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけておけば巡査が都合のいい時に巡つてきて、すぐ志望通り取計つてくれるのさ。死骸かね。死骸はやつぱり巡査が車を引いて拾つてあるくのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の冗談は際限がありませんね」と東風君は大に感心している。すると独仙君は

例の通り山羊髯を気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫の夢幻を永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまふ」

「燕雀焉んぞ大鵬の志を知らんやです」えんじやく、ゆずく、たいほう、こころざしと寒月君が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔付で話を進める。

「昔しスペインにコルドヴァと云う所があつた……」

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、その風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女がごとごとく出て来て河へ這入つて水泳をやる……」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若の別なく河へ飛び込む。但し男子は一人も交らない。ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮色蒼然たる波の上に、白い肌が模糊として動いている……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体が出さえすれば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といっしよに泳ぐ事も出来ず、さればと云つて遠くから判然その姿を見る事も許されないので残念に思つて、ちよつといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は大に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に賄賂わいろを使って、日没を合図に撞つく鐘を一時前に鳴らした。すると女などは浅墓あさかなものだから、そら鐘が鳴つたと云うので、めいめい河岸かしへあつまつて半襦袢はんじゆばん、半股引はんももひきの服装でざぶりとざぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものの、いつもと違って日が暮れない」

「烈はげしい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って眺ながめている。恥ずかしいがどうする事も出来ない。大に赤面したそうだ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだから気をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があつた。僕がまあここで書画骨董店こつとうてんを開くとする。で店頭に大家の幅ふくや、名人の道具類を並べておく。無論贗物にせものじゃない、正直正銘しやうじきしやうめい、うそいつわりのない上等品ばかり並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる。そこへ物数奇ものずきな御客さんが来て、この元信もとのぶの幅はいくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝居しばい気ぎのない事を云う。迷亭君はぬからぬ

顔で、

「まあ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで僕がなに代は構いませんから、お気に入つたら持つていらつしやいと云う。客はそうも行かないからと躊躇する。それじゃ月賦でいただきましよう、月賦も細く、長く、どうせこれから御鼻屑になるんですから——いえ、ちつとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらいじゃ。何なら月に五円でも構いませんと僕が極きさくに云うんだ。それから僕と客の間に二三の間答があつて、とど僕が狩野法眼元信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥だよ。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるのだけ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年で皆済になると思う、寒月君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かいと思うか、独仙君」

「一念万年、万年一念。短かくもあり、短かくもなしだ」

「何だそりや道歌か、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返していると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十二回にも十円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがつてどうしても期日がくれば十円払わなくては気が済まないようになる。人間は利口のようになる。習慣に迷つて、根本を忘れると云う

大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費たいひを毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向から断わられた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の先刻述さつきべた文明の未來記を聞いて冗談などと笑うものは、六十回でいい月賦を生涯しょうがい払って正当だと考える連中だ。ことに寒月君や、東風君のような経験とほの乏しい青年諸君は、よく僕らの云う事を聞いてだまされないようにしなくっちゃいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ、寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結婚したのが穩当おんとうでないから、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおなお御免蒙ごめんこうむります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもつて御免蒙ごめんこうむります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変つてる。昔は御上おかみの御威光なら、何でも出来た時代です。その次には御上の御威光でも、出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔むかしと違つて、御上の御威光だから、出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味あじわいがあるじゃないですか」

「そう云う知己ちぎが出てくると是非未来記の続きが述べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上の御威光を笠かさにきたり、竹槍の二三百本を恃たのみにして無理を押し通そうとするのは、ちようどカゴへ乗つて何でも蚊かでも汽車と競争しようとおせる、時代後れの頑物がんぶつ——まあわからずやの張本ちようほん、烏金からすがねの長範ちようはん先生せんせいくらいのもだから、黙つて御手際おてぎわを拝見していればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間全体の運命うんめいに関する社会的現象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して、遠き将来の趨勢すうせいを卜ぼくすると結婚が不可能の事になる。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申ぜんます通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかつた。あつても認められなかつた。それががらりと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよ

と云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中で喧嘩けんかを買ういながら行き違ちがう。それだけ個人が強くなつた。個人が平等に強くなつたから、個人が平等に弱くなつた訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくなつた点において、たしかに自分は強くなつたのだが、滅多めったに人の身の上に手出しがならなくなつた点においては、明かに昔より弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もありがたくないから、人から一毫いちごうも犯おされまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛はんもうでも人を侵おしてやろうと、弱いところは無理にも拈ひげたくなくなる。こうなると人と人の間に空間がなくなつて、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返つて苦しがつて生存している。苦しいから色々の方法で個人と個人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が自業自得で苦しんで、その苦し紛まぎれに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入つて見給え。一家一門いっけいちもんごとごとく一軒のうちにごろごろしている。主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間でもお互わがまに我儘を張はけるだけ張らなければ損いになるから勢いきおい両者の安全を保持するためには別居しなければならぬ。歐洲は文明が進んでい

るから日本より早くこの制度が行われている。たまたま親子同居するものがあつても、息子むすこがおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払つたりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晚日本へも是非輸入しなければならぬ。親類はとくに離れ、親子は今日こんにちに離れて、やつと我慢しているよ

うなもの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行くから、

まだ離れなくては楽が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいつしよにいるから夫婦だと思つてる。それが大きな見違いさ。いつしよにいるためにはいつしよにいるに充分なるだけ個性が合わなければならぬ。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云つて、目には夫婦二人に見えるが、内実は一人前いちじんまへなんだからね。それだから偕老同穴かいろうどうけつとか号して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蠻なものさ。今はそうは行かないやね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたつて妻だからね。その妻が女学校で行灯袴あんどんばかまを穿はいて牢乎ろうこたる個性を鍛きたえ上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら妻じゃない人形だからね。賢夫人になればなるほど個性は凄すどいほど発達する。発達すればするほど夫と合わなくなる。合わなければ自然しぜんの勢いきおい夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截然せつぜんたるしきりがあつて、それも落ちついて、しきりが水平線を保つていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のように上がつたり下がつたりする。ここにおいて夫婦雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分つてくる。……」

「それで夫婦がわかれるんですか。心配だな」と寒月君が云つた。

「わかれる。きつとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいつしよにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲どうせいしているものは夫婦の資格がないように世間よこから目めされてくる」

「すると私などは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は際どいところでのろけを云った。

「明治の御代みよに生れて幸き。僕などは未来記を作るだけあつて、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているからちゃんと言から独身でいるんだよ。人は失恋の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視みるところは実に憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記の続きを話すとこうさ。その時一人の哲学者が天降あまくだつて破天荒はてんこうの真理を唱道する。その説いわに曰くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に陥おちいる。いやしくも人間の意義を完まつたからしめんためには、いかなる価あたいも構あわなからこの個性を保持すると同時に発達せしめなければならん。かの陋習ろうじゆに縛あせられて、いやいやながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であつて、個性の発達せざる蒙昧もうまいの時代はいざ知らず、文明の今日こんにちなおこの弊竇へいとうに陥おちいつて恬てんとして顧かえみないのははなはだしき謬見びゆうけんである。開化の高潮度に達せる今代きんだいにおいて二個の個性が普通以上に親密の程度をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがない。この親易みやすき理由はあるにも関らず無教育の青年男女が一時の劣情に駆られて、漫みだりに合盃ごうぱんの式を挙ぐるは悖德没倫はいとくぼつりんのはなはだしき所為である。吾人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思おもひ切つた調子でびたりと平手ひらてで膝頭ひざがしらを叩いた。「私の考では世の中に何が尊たつといと云つて愛と美ほど尊たつといものはないと思おもいます。吾々を慰藉いしやし、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります。だ

から吾人はいつの世いづくに生れてもこの二つのものを忘れることが出来ないです。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になります。美は詩歌、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなからうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云つた通りちゃんと滅してしまふから仕方がないと、あきらめるさ。なに芸術だ？ 芸術だつて夫婦と同じ運命に帰着するのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。君がいくら新体詩家だつて踏張つても、君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくつちや、君の新体詩も御気の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろう。鴛鴦歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸いに明治の今日に生れたから、天下が挙つて愛読するのだろうが……」

「いえそれほどでもありません」

「今でさえそれほどでなければ、人文の発達した未来即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読まないのじゃない。人々個々のおおの特別な個性をもつてから、人の作つた詩文などは一向面白くないのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちやんとあらわれている。現今英国の小説家中でもつとも個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジスを見給え、ジェームスを見給え。読み手は極めて少ないじゃないか。少ない訳さ。あんな作品はあんな個性のある人でなければ読んで面白く

ないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道德になる時分には芸術も完く滅亡まつたさ。そうだろう君のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなった日にや、君と僕の間には芸術も糞もないじゃないか」

「そりやそうですけれども私はどうも直覚的にそう思われたいんです」

「君が直覚的にそう思われなければ、僕は曲覚きよつかくてき的にそう思うまでさ」

「曲覚きよつかくてき的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど御互の間が窮屈きうくつになるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか担かぎ出すのも全くこの窮屈きうくつのやりどころがなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちよつと見るとあれがああ男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平等。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多めつたに寝返りも打てないから、大将少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむしろ気の毒になる。あの声は勇猛精進ゆうもうしやうじんの声じゃない、どうしても怨恨痛憤えんこんつうふんの音だ。それもそのはず昔は一人えらい人があれば天下翕然きゆうぜんとしてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チエーズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違ちがうからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、苦味にがみはないはずだ。ニーチェの時代はそうは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰も英雄と立てやしない。昔は孔子こうしがたった一人だったから、孔子も幅きを利かしたのだが、今は孔子が幾人もいる。ことによると天下がことごとく孔子かも知

れない。だからおれは孔子だよと威張つても圧おしが利かない。利かないから不平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちよつといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなつた時、王者おうしやの民蕩々たみとうとうたりと云う句の価値を始めて発見するから。無為むゐにして化かすと云う語の馬鹿ばかに出来ない事を悟るから。しかし悟つたつてその時はもうしようがない。アルコール中毒かに罹かつて、ああ酒を飲まなければよかつたと考えるようなものさ」

「先生方は大分だいぶ厭世的な御説のようだが、私は妙ですね。いろいろ伺つても何とも感じません。どう云うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出した。

「妻さいを持つて、女はいいものだなどと思うと飛んだ間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前書齋さいぜんから持つて来た古い本を取り上げて「この本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分つてる」と云うと、寒月君が「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマス・ナツシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻さいの悪口を云つたものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻さいも這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いているかね」

「みんな聞いているよ。独身の僕まで聞いているよ」

「アリストートル曰く女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりや面白い本だ。さああとを読んだ」

「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。賢者答えて曰く、貞婦……」

「賢者つてだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻を娶るいずれの時にいてすべきか。ダイオジニス答えて曰く青年は未だし、老年はすでに遅し。とある」

「先生樽の中で考えたね」

「ピサゴラス曰く天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

「希臘の哲学者などは存外迂濶な事を云うものだね。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入って焼けず、水に入って溺れず……」だけで独仙君ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無学をもつて世界における二大厄とし、マーカス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅を飾るの性癖をもつてその天稟の醜を蔽うの陋策にもとづくものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某におくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし得ざるものあらず。願わくは皇天 憐を垂れて、君をして彼等の術中に陥らしむるなかれと。彼また曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責と云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんといるぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いなから「構うものか」と云つた。

「奥さん、奥さん。いつの間に御帰りですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハ」と迷亭君は遠慮なく笑つてると、門口をあらあらしくあけて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がしたと思つたら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、多々良三平君の顔がその間からあらわれた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸立てのフロックを着て、すでに幾分か相場を狂わせてる上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒を纏ぐるみ、鯉節の傍へ置くと同時に挨拶もせず、どつかと腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚しい武者振である。

「先生胃病は近來いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばつてんが、顔色はよかなかごたる。先生顔色が黄ですばい。近頃は釣がいいです。品川から舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくつても面白いのかい」

「浩然の氣を養うたい、あなた。どうですあなたがた。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるくのですからね」と誰彼の容赦なく話

しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、鯨か人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないですね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近來よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいると、傍が傍だから、おのずから、そうなつてしまふです」

「どうなつてしまふのだ」

「煙草でもですね、朝日や、敷島をふかしては幅が利かんです」と云いながら、吸口に

金箔のついた埃及煙草を出して、すばすば吸い出した、

「そんな贅沢をする金があるのかい」

「金はなかばつてんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸つてると、大變信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも楽な信用でいい、手数料がかからない。軽便信用だね」と迷亭が寒月

にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんのですか。あなたが博士にならんもの

だから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御氣の毒と思うたですたい。しかし先方で是非貰うて

くれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極めました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は

「貰いたければ貰つたら、いいだろう」と曖昧な返事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持つても心配するがものはないんだよ。だれか貰うと、さつき僕が云つた通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御智さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作つてくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃御入用ですか」

「いつでもいいです。今まで作つたうちでもいいです。その代りです。披露のとき呼んで御馳走するです。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲んだ事がありますか。シャンパンは旨いのです。——先生披露会のとときに楽隊を呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。しつかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらいじゃ承知しそうもない男だ」

「シャンパンもですね。一瓶ひとびん四円や五円のじゃよくないです。私の御馳走するのはそんな安いじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、こう云う御礼はどうです」と云いながら上着の隠袋かくしのなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立つてるのがある。坐つてるのがある。袴はかまを穿はいてるのがある。振袖ふりそでがある。高島田がある。ことごとく妙齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりやどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願いましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪めいです」

「そうか」

「この方は性質が極ごくいいです。年も若いです。これで十七です。——これなら持参金が千円あ

ります。——こつちのは知事の娘です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしょうか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたくない。君一夫多妻主義ですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者です」

「何でもいいから、そんなものは早くしまつたら、よかろう」と主人は叱りつけるように言い放つたので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。前祝まえいわいに角かどの酒屋で買うて来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を拍うつて下女を呼んで栓せんを抜かせる。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は恭しくコップを捧げて、三平君の艶福えんぷくを祝した。三平君は大に愉快な様子で

「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大札たいれいですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がいいですか。羽織はかまと袴はかまくらいどうでもしますたい。ちと人中ひとなかへも出るがよかたい先生。有名な人に紹介して上げます」

「真平まつびらご免だ」

「胃病ななおが癒なほりませう

「癒なほらんでも差支さしつかえはない」

「そげん頑固がんこ張りなさるならやむを得ません。あなたはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌ばいしやく人たるの榮を得たいくらいのもだ。シャンパンの

三々九度や春の宵。——なに仲人なこうどは鈴木すずきの藤とうさんだつて？ なるほどそこいらだろうと思つ

た。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、ただの人間としてま

さに出席するよ」

「あなたはどうです」

「僕いつかんのふうげつかんせいけいですか、一竿風月閑生計ひとほつりすはくひんこうりようのかん、人釣 白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですとも。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御兩人ごりょうにんの前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビール

を飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んで真赤まっかになつた。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸しがいが算を乱す火鉢まつかのなかを見れば火はとくの

昔に消えている。さすが呑氣のんきの連中も少しく興が尽きたと見えて、「大分遅だいぶんくなった。もう帰ろうか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄関に出る。寄席よせがはねたあとのように座敷は淋しみしくなった。

主人は夕飯ゆうはんをすまして書齋に入る。妻君は肌寒はださむの襦袢じゆばんの襟えりをかき合せて、洗い晒さらしの不
着ちやくを縫ぬいう。小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行つた。

呑氣のんきと見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つたようでも独仙君の足はやはり地面のほかは踏まぬ。氣楽きらくかも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨たますりをやめてとうとうお国から奥さんを連れて来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定めし退屈たいくつだろう。東風君も今十年したら、無暗むあんに新体詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至つては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい。生涯しょうがい三鞭酒さんぺんしよを御馳走ごちそうして得意得意と思う事が出来れば結構だ。鈴木とうの藤とうさんはどこまでも転ころがって行く。転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものよりも幅あきが利きく。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分ではこれほどの見識家けんしきかはまたとあるまいと思つていたが、先達せんだつてカーテル・ムルと云う見ず知らずの同族が突然とつぜん大氣だいき燄えんを揚あげたので、ちよつと吃驚びっくりした。よくよく聞いて見たら、実は百年前せんに死んだのだが、ふとした好奇心こうしんからわざと幽霊ゆうれいになつて吾輩わがはいを驚かせるために、遠い冥土めいどから出張しゆくわうしたのだそうだ。この猫は母と対面たいめんをするとき、挨拶あいさつのしるしとして、一匹いっぴきの肴さかなを啣くわえて出掛でかけけたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分で食つてしまつたと云うほどの不孝ふこうものだけあつて、才さい気きもなかなか人間にんげんに負けぬほどで、ある時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ。

こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌でなしはとうに御暇を頂戴して無何有郷に帰臥してもいいはずであつた。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでいる。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子の中のものは湯でも冷たい気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静かに火消壺とならんでいるこの液体の事だから、唇をつけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかしものは試した。三平などはあれを飲んでから、真赤になつて、熱苦しい息遣いをした。猫だつて飲めば陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死んでからああ残念だと墓場の影から悔やんでもおつつかない。思い切つて飲んで見ると、勢よく舌を入れてぴちやぴちややつて見ると驚いた。何だか舌の先を針でさされたようにぴりりとした。人間は何の酔興でこんな腐つたものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性が合わない。これは大変だと一度は出した舌を引込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のように良薬口に苦しと言つて風邪などをひくと、顔をしかめて変なもの

を飲む。飲むから癒なほるのか、癒なほるのに飲むのか、今まで疑問であったがちょうどいい幸さいわいだ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹の中までになくなつたらそれまでの事、もし三平のように前後を忘れるほど愉快になれば空前の儲もつけ者もので、近所の猫へ教えてやつてもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やつつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しっかりと眠つて、またぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールの飲み干した時、妙な現象が起つた。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従つてようやく楽らくになつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭ぬぐうがごとく腹内ふくないに収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうつとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を食くえと云う気になる。金田のじいさんを引搔ひっかいてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起たつたらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだろうと思ひながら、あてもなく、そこかしこ散歩するような、しないような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだから、あるいてるのだから判然しない。眼はあけるつもりだが重い事おびただ夥しい。こ
うなればそれまでだ。海だろうが、山だろうが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出

したと思う途端ばちゃんと言がして、はつと云ううち、——やられた。どうやられたのか考
える間がない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になつてしまつ
た。

我に帰つたときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもつて矢鱈に掻いたが、掻けるも
のは水ばかりで、掻くとすぐもぐつてしまう。仕方がないから後足で飛び上つておいて、前
足で掻いたら、がりと音がしてわずかに手応があつた。ようやく頭だけ浮くからどこだろ
うと見廻わすと、吾輩は大きな甕の中に落ちてゐる。この甕は夏まで水葵と称する水草が
茂つていたがその後鳥の勘公が来て葵を食い尽した上行水を使う。行水を使えば水が減る。
減れば来なくなる。近來は大分減つて鳥が見えないと先刻思つたが、吾輩自身が鳥の代り
にこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁までは四寸余もある。足をのぼしても届かない。飛び上つても出られない。呑氣
にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりと甕に爪があたるのみで、あつた時は、少
し浮く気味だが、すべればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりをや
る。そのうちからだが疲れてくる。氣は焦るが、足はさほど利かなくなる。ついにはもぐる
ために甕を掻くのか、掻くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責に逢うのはつまり甕から上へあがりたいば
かりの願である。あがりたいのは山々であるが上がれないのは知れ切つてゐる。吾輩の足は
三寸に足らぬ。よし水の面からだが浮いて、浮いた所から思う存分前足をのぼしたつて五
寸にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふちに爪のかかりようがなければいくらも

搔がいても、あせつても、百年の間身を粉こにしても出られっこない。出られないと分り切つて
いるものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自みずか
ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問ごうもんに罹かかつて居るのは馬鹿氣めんこうむている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙めんこうむるよ」と、前足も、後足も、頭
も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第しだいに楽になつてくる。苦しいのだからありがたいのだから見当まじつかない。水の中みづかにいるの
だから、座敷の上ざしきにいるのだから、判然はんぜんしない。どこにどうしても差支さしつかえはない。ただ楽で
ある。否楽いなそのものすらも感じ得ない。日月じつげつを切り落し、天地を粉壺ふんせいして不可思議ふかぎの太平たいへいに
入る。吾輩われらは死ぬ。死んでこの太平たいへいを得る。太平たいへいは死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ南
無阿弥陀仏なむあみだぶつ。ありがたいありがたい。



吾輩は猫である
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「夏目漱石全集 1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 9 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999 年 9 月 17 日公開

2009 年 10 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ